山形県埋蔵文化財センター調査報告書第241集

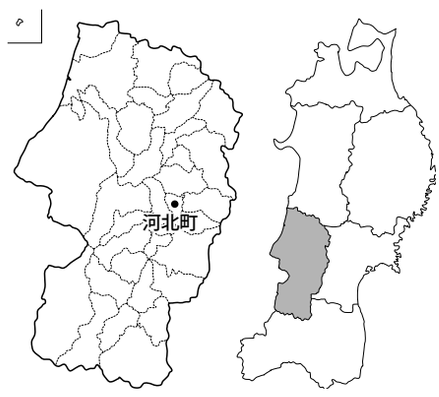
谷地城跡発掘調査報告書

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

谷地城跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 241 集



2020

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

谷地城跡（やちじょうあと）

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 241 集

令和 2 年

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

序

本書は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、谷地城跡の調査成果をまとめたものです。

谷地城跡は、山形県西村山郡に位置する河北町にあります。街の東には最上川が南から北へ流れています。近世では紅花を河川交通を利用したうえで酒田港まで運び、日本海交通により上方まで流通させ、街の経済を発展させました。これら河川交通の重要性は中世にまで遡り、谷地城を治めた白鳥十郎長久と山形城主最上義光との争いの遠因になったと考えられます。谷地城はその後、最上氏の所領となりますが 1600 年の関ヶ原合戦に紐づく慶長出羽合戦において一時上杉氏に奪われます。その後、最上氏の所領に戻り、最上氏の改易に伴って廃城になったとされております。

この度、河北町役場庁舎建替に伴い、事前に工事予定地内に包蔵される、谷地城跡の発掘調査を実施しました。調査の結果、区画溝と考えられる遺構が幾条も確認されました。そこから出土した遺物は白鳥十郎長久が谷地を治めた時期から谷地城が廃絶した時期に該当し、史実に基づく年代と考古学に基づく年代が合致しました。

調査の前段階では調査区内が二の丸跡に該当すると考えられており、二の丸の堀が検出されるとみられていましたが結果として堀は検出されませんでした。このことは谷地城全体の構造を考えていく中で重要な結果といえます。

谷地城は中世における村山地域の最上川以西を考える上で重要な要素を持っています。今回の成果はその一部を証す結果と考えられます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

令和２年３月

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　菅間　裕晃

凡　　例

1　本書は、河北町役場新庁舎建設に係る「谷地城跡」の発掘調査報告書である。

2　既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

3　調査は河北町の委託により、公益財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

4　本書の執筆は、天本昌希・渡辺和行が担当し、齋藤稔、黒坂雅人、荒木歩、伊藤邦弘、須賀井新人が監修した。

5　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ｘ系（世界測地系）により、高さは海抜高で表す。方位は座標北を表す。

6　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

SB…掘立柱建物跡　　SK…土坑　　SD…溝状遺構　　SP…ピット

7　遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示しているが、基本は以下の通り。

遺構＝ 1/20（ピット）　1/40（溝状遺構、溝状遺構断面、土坑など）　1/100（溝状遺構平面）

遺物＝ 1/3（陶磁器類）

遺構中の網掛けやドットが表すものは以下の通り。

遺構

…根石・礫

…枝材・柱材

…あたり痕（半透明）

遺物

○ …陶磁器類

□ …木製品

■ …石製品

● …金属製品

8　遺物実測図の断面黒塗りは須恵器を表す。また、拓影断面図及び平面を図化したものの配置は左から内面・断面・外面の順に掲載した。なお、外面のみを図化したものは断面の左に配置している。

9　基本層序および遺構覆土の色調記載については、2018 年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によった。

10　遺物の法量について、単位は基本的にミリとグラムである。口径、底径の残存率が 3/8 をこえないものの値は（　）で復元値として示す。欠損のための残存値は＜　＞で示す。

調 査 要 項

遺跡名	谷地城跡
遺跡番号	３２１－５１
所在地	山形県西村山郡河北町谷地字谷地
調査委託者	河北町教育委員会生涯学習課
調査受託者	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
受託期間	平成３１年４月１日～令和２年３月 27 日
現地調査	令和元年５月７日～８月 16 日
調査担当者	業務課長　伊藤邦弘
	課長補佐　須賀井新人
	主任調査研究員　天本昌希（調査主任）
	主任調査研究員　渡辺和行
調査指導	山形県教育庁文化財・生涯学習課
調査協力	河北町新庁舎建設課
	升川建設株式会社
	山形県教育庁村山教育事務所
業務委託	基準点測量業務　株式会社三和技術コンサルタント
	保存処理業務　株式会社吉田生物研究所
	理化学分析業務　山形大学高感度加速器質量分析センター
発掘作業員	穴久保貞男　石川政治　石附智規　伊藤史之　岩崎美穂　大藤千佳　近江悦子
	岡崎四郎　岡部秀雄　奥山洋子　奥山美幸　小野ゆう子　岸正　工藤美智子
	黒田利馬　小関成一　斎藤榮子　斯波久一郎　柴田剛　高橋克栄　武田正博
	丹野重晴　布施勝彦　前田春美　松田文男　松本榮　三浦忠　森谷美祈子
	矢口喜朗（五十音順）
整理作業員	飛鳥井史絵　岡部博　鏡幹彦　佐藤吉美　吉田由美（五十音順）

目　次

Ⅰ　調査の経緯と経過
　1　調査に至る経緯……1
　2　調査の経過……2
　3　発掘調査と整理作業の方法……3
Ⅱ　遺跡の位置と環境
　1　地理的環境……15
　2　歴史的環境……15
Ⅲ　検出した遺構
　1　調査の概要……23
　2　掘立柱建物跡とピット……23
　3　溝状遺構と土坑……31
Ⅳ　出土した遺物
　1　遺物の概要……85
　2　陶磁器、土器……85
　3　木製品、石製品、金属製品……89
Ⅴ　理化学分析
　1　放射性炭素年代測定……115
Ⅵ　まとめ
　1　遺構の年代について……125
　2　遺構の評価……126
　3　出土遺物について……127
報告書抄録……巻末
遺構配置図……付図

表

表1　掲載遺構一覧 …… 10
表2～6　掲載ピット一覧1～5 …… 10～14
表7　遺跡地名表 …… 19
表8　陶磁器・瓦質土器観察表 …… 108～110
表9　縄文土器・須恵器・土師器観察表 …… 110
表10　木製品観察表 …… 110～111
表11　石製品観察表 …… 112
表12　古銭観察表 …… 112～113
表13　鉄滓観察表 …… 113
表14　自然遺物観察表 …… 113
表15　SK21・58・45出土遺物観察表 …… 113～114
表16　中世陶磁器集計表 …… 114
表17～19　試料情報1～3 …… 116～118
表20～22　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果1～3 …… 118～120

図　版

第1図　大・中グリッド配置図 …… 5
第2図　小グリッド配置図 …… 6
第3図　全測図1・基本土層図 …… 7
第4図　全測図2 …… 8
第5図　全測図3 …… 9
第6図　山形盆地における中近世の主要な城館 …… 16
第7図　遺跡位置図 …… 18
第8図　山形盆地における鎌倉時代初期の荘園配置図 …… 20
第9図　最上義光家督相続期の領土範囲 …… 21
第10図　SB60掘立柱建物跡1 …… 41
第11図　SB60掘立柱建物跡2 …… 42
第12図　SB61・62掘立柱建物跡 …… 43
第13図　SB61掘立柱建物跡 …… 44
第14図　SB62掘立柱建物跡 …… 45
第15図　SB63・64掘立柱建物跡1 …… 46
第16図　SB63・64掘立柱建物跡2 …… 47
第17図　SB63・64掘立柱建物跡3 …… 48
第18図　個別掲載ピット1（SP1026-1058） …… 49
第19図　個別掲載ピット2（SP1060-1088） …… 50
第20図　個別掲載ピット3（SP1111-1143） …… 51
第21図　個別掲載ピット4（SP1150-1169） …… 52
第22図　個別掲載ピット5（SP1170-1178） …… 53
第23図　個別掲載ピット6（SP1179-1206） …… 54
第24図　個別掲載ピット7（SP1207-1272） …… 55
第25図　ピット集中区1（6772-6873） …… 56
第26図　ピット集中区2（6774-6775） …… 57
第27図　ピット集中区3（6181-6277） …… 58
第28図　ピット集中区4（6380-6381） …… 59
第29図　ピット集中区5（6580-6681） …… 60
第30図　ピット集中区6（6582-6683） …… 61
第31図　SD1溝状遺構 …… 62
第32図　SD2溝状遺構1（平面） …… 63
第33図　SD2溝状遺構2（平面） …… 64
第34図　SD2溝状遺構3（断面） …… 65
第35図　SD3溝状遺構1（平面） …… 66
第36図　SD3溝状遺構2（平面） …… 67
第37図　SD3溝状遺構3（平面） …… 68
第38図　SD3溝状遺構4（平面） …… 69
第39図　SD3溝状遺構5（断面） …… 70
第40図　SD3溝状遺構6（断面） …… 71
第41図　SD3溝状遺構7（断面） …… 72
第42図　SD4・5溝状遺構、SK6・9土坑 …… 73
第43図　土坑ほか1（SK7・8・16・17、SD43） …… 74
第44図　SD24溝状遺構1（平面） …… 75
第45図　SD24溝状遺構2（平面・断面） …… 76
第46図　SD26・29・30・35溝状遺構1（平面） …… 77
第47図　SD26・29・30・35溝状遺構2（断面） …… 78
第48図　SD31A・B・C溝状遺構 …… 79
第49図　土坑ほか2（SK32、SD33） …… 80
第50図　SD34溝状遺構 …… 81
第51図　SD46・55溝状遺構1（平面） …… 82
第52図　SD46・55溝状遺構2（断面） …… 83
第53図　土坑ほか3（SK49・51・57・59、SD52） …… 84
第54図　出土遺物1（輸入磁器、国産陶器） …… 92
第55図　出土遺物2（肥前陶磁器、瀬戸磁器、珠洲、越前） …… 93
第56図　出土遺物3（瓷器系陶器、擂鉢、瓦質土器、産地不明陶器） …… 94
第57図　出土遺物4（産地不明陶磁器、縄文土器、須恵器、土師器） …… 95
第58図　出土遺物5（漆器） …… 96
第59図　出土遺物6（木皿、曲物、笊） …… 97
第60図　出土遺物7（曲物、下駄、横櫛） …… 98

第 61 図　出土遺物８（木簡、木蓋、串、用途不明木製品）‥ 99
第 62 図　出土遺物９（柱材、杭、枠木、建築部材）‥‥‥‥100
第 63 図　出土遺物 10（枝材、石塔、硯、砥石）‥‥‥‥‥‥‥101
第 64 図　出土遺物 11（砥石、磨石、凹石）‥‥‥‥‥‥‥‥‥102
第 65 図　出土遺物 12（茶臼、石鉢）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥103
第 66 図　出土遺物 13（古銭）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥104
第 67 図　出土遺物 14（古銭、鉄滓）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥105
第 68 図　出土遺物 15（SK21、SK58）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥106
第 69 図　出土遺物 16（SK45）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥107
第 70 図　133 のウィグルマッチの結果　‥‥‥‥‥‥‥‥‥120
第 71 図　117 のウィグルマッチの結果　‥‥‥‥‥‥‥‥‥120
第 72 図　145 のウィグルマッチの結果　‥‥‥‥‥‥‥‥‥120
第 73 図　141 のウィグルマッチの結果　‥‥‥‥‥‥‥‥‥120
第 74 図　暦年較正年代グラフ１‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥121
第 75 図　暦年較正年代グラフ２‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥122
第 76 図　暦年較正年代グラフ３‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥123
第 77 図　暦年較正年代グラフ４‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥124
第 78 図　暦年較正年代の比較‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥124
第 79 図　遺構検出変遷図‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥129
第 80 図　谷地城の復元案‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥130

写真図版

写真図版１　調査区全景（空撮）
写真図版２　調査区全景（検出状況）
写真図版３　基本土層、調査区全景オルソ画像
写真図版４　調査区全景オルソ画像
写真図版５　遺構調査状況（SD １～ SD ２）
写真図版６　遺構調査状況（SD ２）
写真図版７～ 10　遺構調査状況（SD ３）
写真図版 11　遺構調査状況（SD ４～ SD24）
写真図版 12　遺構調査状況（SD29 ～ SD35）
写真図版 13　遺構調査状況（SD30 ～ SD33）
写真図版 14　遺構調査状況（SD46 ～ SD55）
写真図版 15　遺構調査状況（SK14 ～ SK59）
写真図版 16　遺構調査状況（SP1009 ～ SP1060）
写真図版 17　遺構調査状況（SP1064 ～ SP1111）
写真図版 18　遺構調査状況（SP1133 ～ SP1153）
写真図版 19　遺構調査状況（SP1156 ～ SP1173）
写真図版 20　遺構調査状況（SP1125 ～ SP1182）
写真図版 21　遺構調査状況（SP1186 ～ SP1201）
写真図版 22　遺構調査状況（SP1202 ～ SP1216）
写真図版 23　遺構調査状況（SP1216 ～ SP1227）
写真図版 24　遺構調査状況（SP1229 ～ SP1251）
写真図版 25　遺構調査状況（SP1252 ～ SP1272）
写真図版 26　出土遺物（輸入磁器）
写真図版 27　出土遺物（古瀬戸・瀬戸美濃）
写真図版 28　出土遺物（肥前陶磁器・瀬戸磁器）
写真図版 29　出土遺物（珠洲・越前・瓷器系陶器）
写真図版 30　出土遺物（瓦質土器・産地不明、縄文・土師器）
写真図版 31　出土遺物（土師器・須恵器）
写真図版 32・33　出土遺物（漆器椀・皿）
写真図版 34　出土遺物（漆器椀、木椀・曲物類）
写真図版 35　出土遺物（盆笊、SK49 出土遺物）
写真図版 36　出土遺物（下駄・横櫛）
写真図版 37　出土遺物（木簡・木蓋ほか、柱材・杭ほか）
写真図版 38　出土遺物（建築部材、礎盤に使用された枝材）
写真図版 39　出土遺物（石塔・硯・砥石・磨石・凹石）
写真図版 40　出土遺物（凹石・茶臼・石鉢、古銭）
写真図版 41　出土遺物（古銭・鉄滓、自然遺物）

Ⅰ　調査の経緯と経過

1　調査に至る経緯

河北町の中心地である谷地地区に所在する現在の役場庁舎は、1965 年の建設から 50 年以上が経過しており、経年劣化による老朽化が著しくなっていた。2010 年に実施された耐震診断によると、震度６強程度の大規模地震で倒壊し、又は倒壊する危険性が高いと判定された。庁舎には災害時に防災拠点としての役割が求められるが、震災時には行政機能そのものを喪失し、災害対策が機能不全に陥ることが想定され、早急な整備が求められた。河北町では耐震診断の結果を受けて、2011 年に庁舎建設基金を創設し、これまで９億円余を積み立ててきた。一方で、2016 年４月に発生した熊本地震の被害を受けて、耐震未実施の庁舎の建て替えに対して、借入金の一部を国が補填する「市町村役場機能緊急保全事業」が創設された。町ではこの財政支援の期限である 2020 年度までに、新しい役場庁舎の完成を目指して新築事業を進める運びとなった。

現在の谷地地区の街並みは、16 世紀後半頃に整備された谷地城跡を基礎にして形成されている。遺跡としての谷地城跡は、1996 年に刊行の『山形県中世城館遺跡調査報告書』第２集に掲載され、現在の中心市街地を内包する広大な遺跡として登録されている。遺跡内に位置する河北町役場の老朽化、耐震化のため、現役場の北側に隣接して建て替えることが計画され、建設予定地内の埋蔵文化財の取扱について、協議がもたれた。この新庁舎の建設予定地は、文書資料や古地図などから推定して谷地城本丸西側の二の丸とそれを区画する堀に該当する。協議の結果、計画変更は困難なため、記録保存とすることとし、2018 年 12 月４・５日に河北町教育委員会生涯学習課（以下町教委）が山形県教育委員会文化財・生涯学習課（以下県教委）の支援を受けて確認調査を行った。その結果、全面的に遺構の存在が確認されたため、本調査とすることで町教委が調整を進めた。本調査の実施に当たっては、町教委に専門職員の配置がないため、県教委を通じて山形県埋蔵文化財センター（以下センター）への全面委託とし、2019 年度内に報告書刊行までを完了する単年度契約とすることで調整が図られた。

４月１日に「谷地城二の丸跡発掘調査業務委託」として、発掘調査から報告書の刊行までをセンターが受託した。以後、４月４日と４月 12 日に庁舎建設工事側と町教委、センターとで協議をし、互いの工程等をすり合わせた結果、発掘調査は５月 21 日～８月 16 日までの期間で行うことが決められた。発掘調査を先行しながらも工事の準備を並行して進めることも申し合わせ、当初は表土除去を施工者側で深さ１ｍまでを先行掘削し、その後にセンター側が遺構確認面まで掘り下げる二段階の工程を予定していたが、センター職員立ち会いのもと１回の工程で実施する計画に変更した。調査区は、主体となる新庁舎の本体工事部分と西側に隣接するエネルギー棟の２か所である。

５月７日から重機による表土掘削がはじまり、同月 20 日まで行った。確認調査で把握された遺構確認面までセンター職員立会いの下で掘り下げた。事業地範囲に余裕がないことから表土掘削分の排土はすべて事業地外へ運び出された。表土掘削は、最初に西側の独立したエネルギー棟建設予定地の調査区を終了させ、次に本体工事部分は南東から北西方向へ表土を掘削して行った。アスファルト砕石の下には過去の建物の基礎があったが、大部分は遺構確認面まで達していなかった。重機等の進入路として、本体工事部分の北壁に掘り残す形で２か所のスロープを設けた。西側のスロープは、浄化槽が建設されていたため、大きく深く撹乱されている場所につなげるように設置している。

この段階で、当初に予想された方向に二の丸堀が検出されず、これまでの見識と合致しないことは明らかになった。表土掘削と並行して５月 14 日に河北町新庁舎建設課と町教委、県教委、センターとで事前打ち合わせを行い、発掘調査の方法や工程について確認した。結果、多くの作業量を要する堀跡は検出しなかったものの、それ以外の遺構が当初の想定よりもはるかに多く検出されているため、全体の作業量に変化はないものとし、予定通りの調査工程で行うことになった。

2　調査の経過

5月21日から作業員25名の雇用を開始した。5月24日までは機材の搬入、環境整備などの作業の後、重機で表土を剥ぎ終えた遺構確認面の乾燥を防ぐため、調査区全面をブルーシートで養生する作業を行った。以後、その日に行う作業範囲のみ、ブルーシートを剥がして作業を行う。

5月27日から5月31日は、本体工事部分の調査区東側を南から北に向けて遺構検出を行った。並行して（株）三和技術コンサルタントに委託して基準点を打設し、これを基にしてセンター側で調査区全面に4m間隔でグリッド杭を打設している。この段階でSD2溝とSD3溝が平行して東西に伸び、SD3溝は西側のエネルギー棟部分で直角に折れることなどが確認された。

6月3日から7日は、本体工事部分の調査区西側の遺構検出を行った。雨天が続き遺構検出など広範囲を掘削する作業が困難なときは、SD2溝やSD3溝の調査区東側を部分的に掘削した。この段階で両溝跡の床面を確認し、いくつかの遺物が出土することを確認した。

6月10日から14日は、検出状況の記録作業を中心に行った。また、調査区の隅に排水枡を兼ねた基本土層を確認するトレンチを設け、堆積状況も記録した。並行してSD3溝の西側エネルギー棟調査区部分を掘り下げたところ、漆器椀や不明木製品などが出土している。

6月17日から21日までは本体工事部分の東側の地区を中心に遺構精査を進めた。SD2溝やSK17土坑などを掘り進め、柱穴の底面に枝や割材を敷き詰める様子がSP1032で確認された。以降複数の柱穴で同様のものが検出される

6月24日から28日は、本体工事部東側の遺構精査を継続して行い、SD3溝などを中心に進める。割材を敷いた上に柱材が残存するSP1064の検出で、枝や割材を敷いた柱穴が確実に建物の沈下防止であるとの判断に至る。SK21土坑は近代明治期の土坑であることを確認し、底面を確認した後、特徴的な遺物のみ回収する。

7月1日から5日は、本体工事部北東と中央部の遺構精査を中心に進めた。7月より作業員を4名追加雇用し、29名体制で臨む。SD2溝やそれに直交するSD30溝を両者の前後関係を確認しながら掘削を進める。SD2溝に土橋状に掘り残している部分を確認。枝を敷いた柱穴の数は多いものの、それらは規格的に並ばず、建物が組み難い状況であった。

7月8日から12日は、本体工事中央部の遺構精査を継続する。SD3溝を中心に進め、西側は撹乱の下に残存している様子が明らかになった。柱穴は底面に枝だけでなく、拳大の礫を敷き詰めたものもあることを確認した。SD30溝で笊がほぼ完形で出土する。当初は上層で出土したため、新しい時期の可能性も考えていたが、同じ溝からは古手の陶磁器しか出土しないことから、城跡存続時期の所産と思われるため保存の方向を模索する。

7月16日から20日は、本体工事西側の遺構精査を中心に進める。この地区は撹乱が多いものの、複数の柱穴が見られる。これらの大部分が枝を敷いたものか、礫を敷き詰めるものであり、素掘りのものがほとんどみられない。SD3溝はSD30溝と直交する場所を埋め戻して塞いでいる様子が明らかになった。20日（土）には現地説明会を行い、約150名の参加者を得た。

7月22日から26日は本体工事西側とエネルギー棟部の遺構精査を中心に進めた。礫を敷き詰めたSP1250から木簡が出土。出土段階で明確に文字が確認できたため、すぐに赤外線データを取った。SP1211は柱穴として認識していたが、どんどん広がり井戸状になっていった。SD3溝では、撹乱部分と重複するため床面の検出が困難ではあったものの、土橋状に掘り残した部分であることを確認した。

7月29日から8月2日は、エネルギー棟部のSD3溝の遺構精査を継続し、並行して本体工事部南東側を記録のための全体清掃や遺構の断ち割り、掘り残しがないように再検出作業を進める。また、重機による排土整形を行い、調査区進入路として掘り残している2か所のスロープの東側は、周辺の遺構密度が高いため、スロープを小さく掘削し遺構検出、精査を行う。SK57や58土坑、SD34溝の続きなどを検出した。

8月5日～8月9日は、全体の記録作業を中心に行うための清掃や再検出作業を継続し、終了したところから記録して行った。SD30より出土していた笊を（株）吉田生物研究所に委託して現地で取り上げし、保存処理に出した。

8月12日から14日は、お盆期間中のため現場を閉

鎖し、調査員のみで記録類の整理を行う。

８月 15 日から 16 日は、SD2 溝や SD3 溝の通路として残していたベルト部の掘削を行い、遺物を取り上げる。並行して機材の清掃、整理、搬出等を行い、８月 16 日に町教委により現地確認を経て、作業員の雇用を終了。遅滞なく予定通り調査区を工事側へ引き渡した。

整理作業は、調査段階から一部並行して８月初頭より遺物の洗浄、注記作業を行う。調査終了後は記録類の整理作業も並行して行い、９月からは実測作業に着手する。同月には遺物の炭素年代の測定のため、すでに谷地城跡の遺物測定に実積のある山形大学高感度加速器質量分析センターに 20 点の分析を依頼した。10 月は遺物の実測と遺構図面の作成を行い、11 月まで続く。同月末に炭素年代測定の結果が提示され、遺物と合わせ遺構の年代観が整理された。12 月は写真撮影や原稿執筆、トレース作業を行い、翌年１月は報告書の印刷を田宮印刷に発注した。２、３月は報告書の校正作業と記録類や遺物の収納作業を行い、３月 27 日をもって報告書を刊行し、全作業を終了した。

３　発掘調査と整理作業の方法

グリッドと調査区

調査区を設定するグリッドは、山形県域全体を囲むように、南西端を原点に、南北をＸ軸、東西をＹ軸として、40 ㎞四方の大グリッドを設定した。原点は国土地理院の定める平面直角座標系の第Ｘ系：Ｘ＝－ 26000000、Ｙ＝－ 12000000 となり、Ｘ軸をＡ～Ｅ、Ｙ軸をＡ～Ｃと 15 区画に分割している。この大グリッドの中を更に 400m 単位のグリッドで 10000 分割したものを中グリッド、これを更に４m 単位で 10000 分割したものを小グリッドとする。中・小グリッドは、共に４桁の数字で表記し、南から北に 00 ～ 99、西から東へ 00 ～ 99 で表記する（第１・２図）。

（例）Ｃ Ｂ １ ３ ８ ６ － ６ ５ ７ ５
①②③④⑤⑥

①…大グリッド南北　（40km 単位）
②…大グリッド東西　（40km 単位）
③…中グリッド南北　（400m 単位）
④…中グリッド東西　（400m 単位）
⑤…小グリッド南北　（４m 単位）
⑥…小グリッド東西　（４m 単位）

本調査区をグリッドで覆うと、40km 単位の大グリッドでは「CB」に、400m 単位の中グリッドでも「1386」の中にすべて収まる。よってグリッド名を表記する際、大・中グリッドは省略し、小グリッド名のみを記す。

調査区へのグリッドの設置は、水準測量のなされた基準杭を測量業者に委託して数本打設し、それを基準とし、トータルステーションを用いて調査員が打設した。

遺　構

重機での表土除去後、確認した順に、通し番号をつけていった。当センターでは遺構の種別を２文字のアルファベットで表しており、今回の調査で主に用いられるものは、SD（溝状遺構）、SK（土坑）、SP（ピット）などである。この種別の後に遺構番号がつき、種別にかかわらず、通し番号でつけている。遺構番号は、調査の進展により撹乱と判断されたり、別遺構と同一のものと判断されたりするなど、欠番が出ているが、混乱を避けるため、そのまま利用している。また、ピットは数が多く、その後の混乱が予想されたため、他の遺構とは桁をかえて、1001 番から番号をつけている。

遺構の掘り下げは、半裁やベルト状に残すなど、埋没過程を確認しながら掘り進め、断面図の記録を取った後に完掘している。ピットに関しては調査日数の制約もあるため、アタリの検出のみに留意し掘り下げた。

多くのピットの礎盤構造に枝材を敷くものがみられた。しかし、本調査は当初より報告書の刊行までを年度内に行うこととされ、保存処理のための期間がとれない状況であった。そこで柱材や礎盤の枝材などは、いくつかのものを理化学分析用のサンプルとして採取し、残りは現地で記録を取るのみとした。

記録は測量図面と写真を主体としている。測量図面は、SfM（Structure from Motion）の技術を用い、測量ポイントと複数枚のデジタルカメラの撮影写真を用いて得られる３D モデルからオルソ画像をつくり、それをトレースしたものである。ソフトは Agisoft 社の Metashape を用い、QGIS でジオレファレンスを行っている。主たる写真はフルサイズのデジタル一眼レフで撮っている。調査状況など補助的な記録にはコンパクトデジカメを、SfM 用の写真には軽量なフォーサーズ規格のカメラを用いている。

出土遺物は、グリッドごと、遺構ごとに取り上げ、出

土位置情報を記録する必要のあるものには、登録番号（RP）を付し、トータルステーションで測った位置情報と対応するようにしている。図中では「○」が陶磁器類、「□」が漆器や木製品、「■」が石製品、「●」が金属製品などを示している。

整理作業

遺物の洗浄はブラシを用いて表面の泥土を落とし、漆器や木製品などは柔らかい絵筆などを用いた。乾燥させた後、１点１点の遺物に白のポスターカラーで遺跡名や出土地点を注記する。遺跡名は「ヤチジョウ」と片仮名で記し、小破片には「ヤチ」と省略した。更に小さいものは遺跡名を省略し、遺構名のみ記している。出土位置を記録したものには登録番号を記す。報告書に掲載した遺物には加えて図版番号と掲載番号を記している。なお、古銭などの金属製品や漆器、木製品には注記せず、出土地点などを明記した袋に入れている。

遺物の接合は溶剤形接着剤を用い、接合面が不安定な場所にはエポキシ樹脂系の接着剤を部分的に用いている。欠損面の充填にはセメント系の充填剤を用いた。石製品で表面の風化が激しいものは補強剤（ナチュラルコート）を塗布した。

接合後、遺物の種類や残存状況、出土地点を勘案して実測遺物を抽出した。主に陶磁器は残存率を８分率でとらえ、復元図化しているものは、基本的に口径ないし底径が 2/8 以上残存するもので行なった。口径や底径の残存が満たないものでも頸部や胴部の残存が同等かそれ以上あるものについては、そこから中心点を出して復元している。計測値について残存率が 3/8 以下のものは、推定測定値とし、(　) で記し、4/8 以上残存するものは、そのまま記している。ただし、4/8 以上の残存率であっても、歪みなどで計測可能な部分が 3/8 以下になる場合は、(　) を付けている。欠損資料の器高などの残存値は、＜　＞で記す。

染付、青花などの文様は、鉛筆トレースしたものを、底部の糸切り痕や古銭などは拓本を打ったものを、それぞれスキャンして配置している。一部の遺物の図化においても SfM で作成した画像を下図としている。近世、近代の遺物においては、等倍に撮った写真を実測図に貼り込んだものを使用している。陶磁器の分類や編年観については、貿易陶磁を『貿易陶磁研究』No.2 の森田、上田、小野各氏のものによる（森田 1982、上田 1982、小野 1982）。瀬戸美濃に関しては藤澤氏のもの（藤澤 2002、2008）、肥前は『九州陶磁の編年』（九州近世陶磁学会 2000）によった。

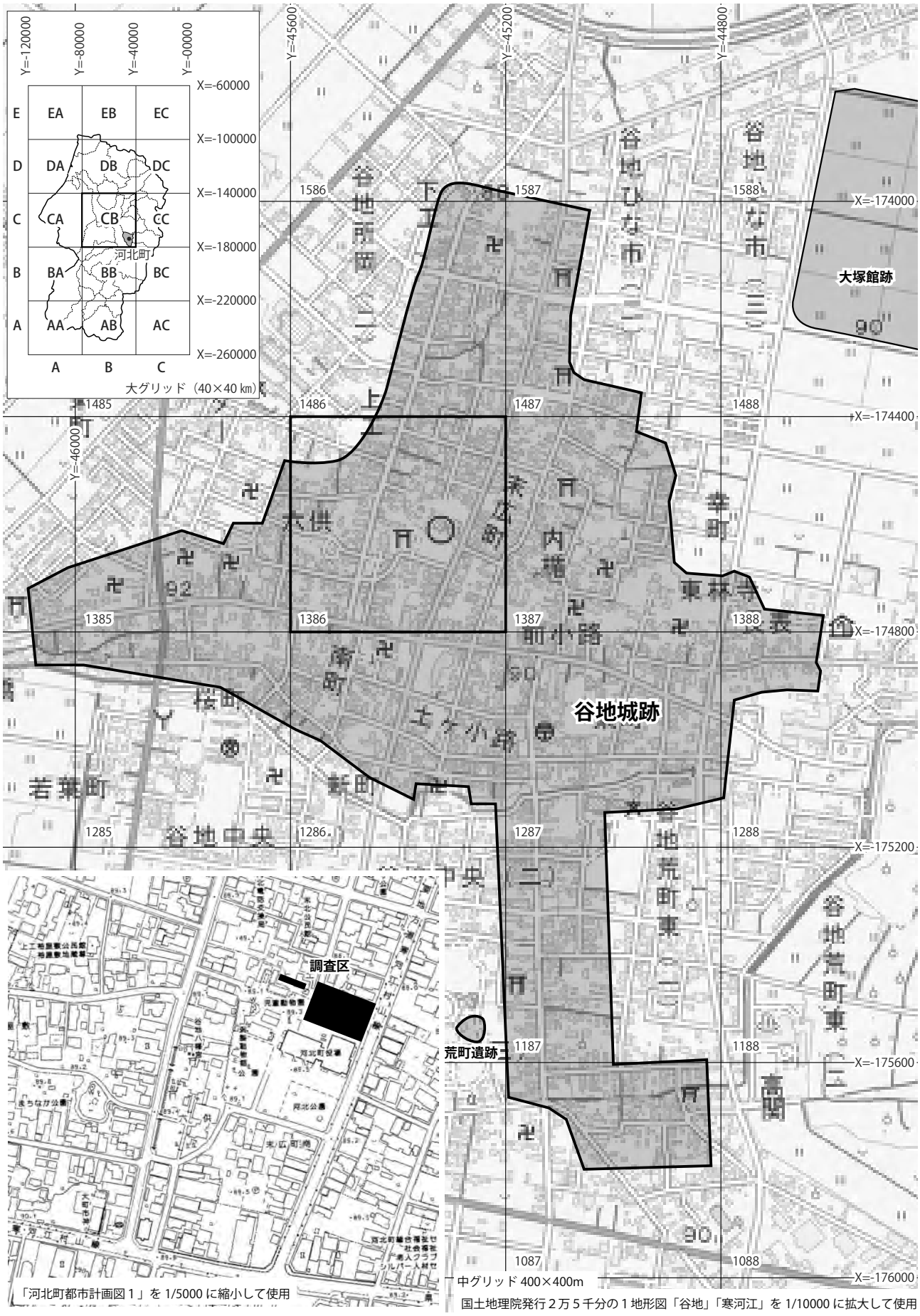
木製品や有機遺物の炭素年代測定は、山形大学高感度加速器質量分析センターに委託して行った。試料の選別は同センターと協議し、良好な分析結果の得られそうなものを 20 点抽出した。うち３点は炭素年代の暦年較正に年輪データのパターンマッチングを援用する、ウィグルマッチ分析を行っている。

木製品や漆器類の保存処理は、委託期間内に完了できないため、ほとんどのものは水漬けにし、水中保存としている。調査区内で発見された笊だけは、取り上げから保存処理を（株）吉田生物研究所に委託し、土ごと固め高級アルコール法で処理を行った。

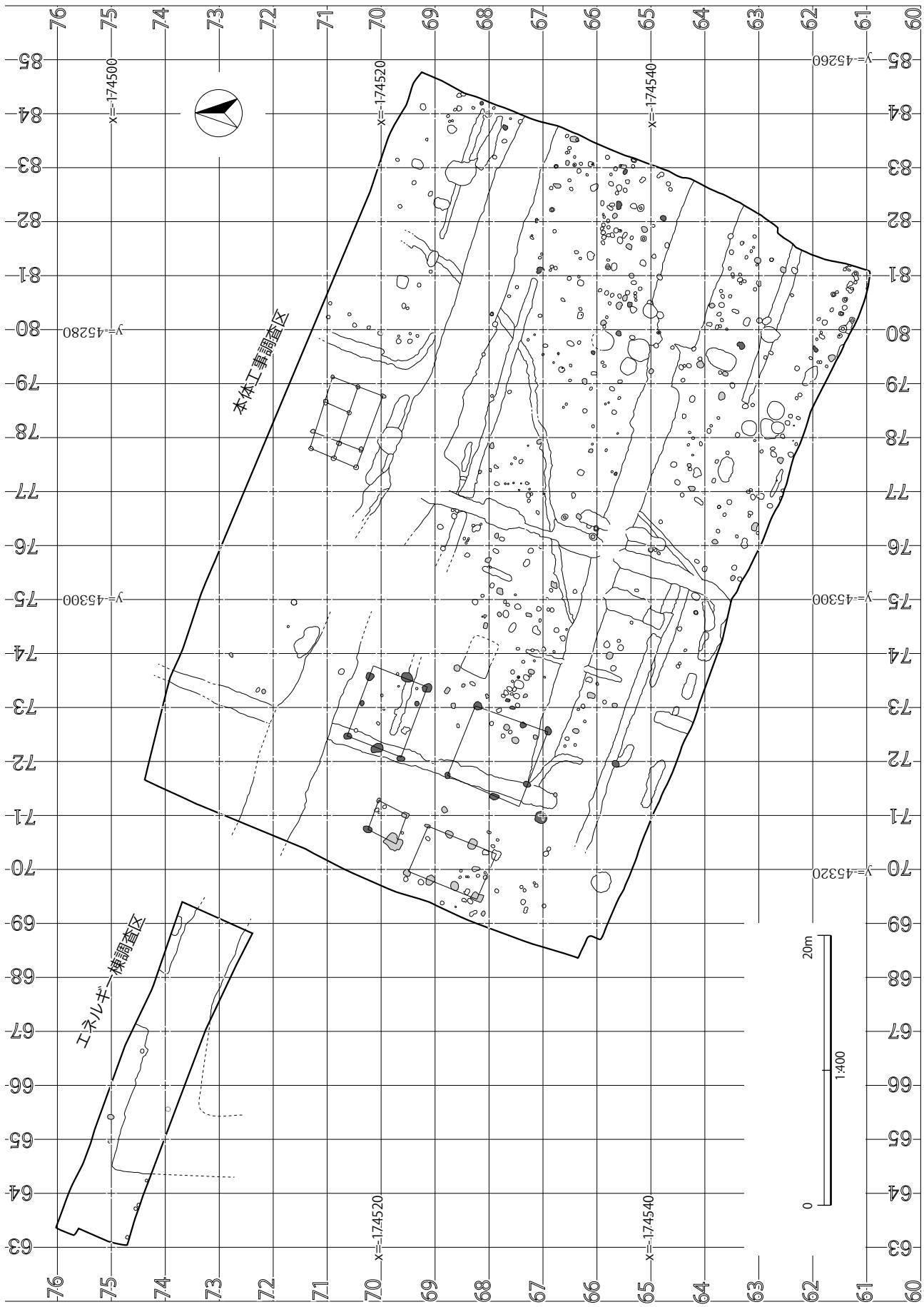
撮影したデジタル写真は、RAW データで記録し、グレーカード等を用いてホワイトバランスを調整したものを TIFF データに現像している。明るさや色味の調整、遺物写真においては背景の除去などをしているが、それ以上の加工、部分的な除去や追加、根本的な色の変更等はしていない。調査風景など一部の写真はコンパクトデジカメで撮った JPEG 画像を利用している。

図化した遺構や遺物は Illustrator 上でトレースし、拓本や鉛筆トレースのデータをあわせて版下を作っている。これに調査状況の写真を選別し、遺物写真を編集、原稿を加えたものを InDesign 上に配置したものを印刷データとして田宮印刷に渡している。

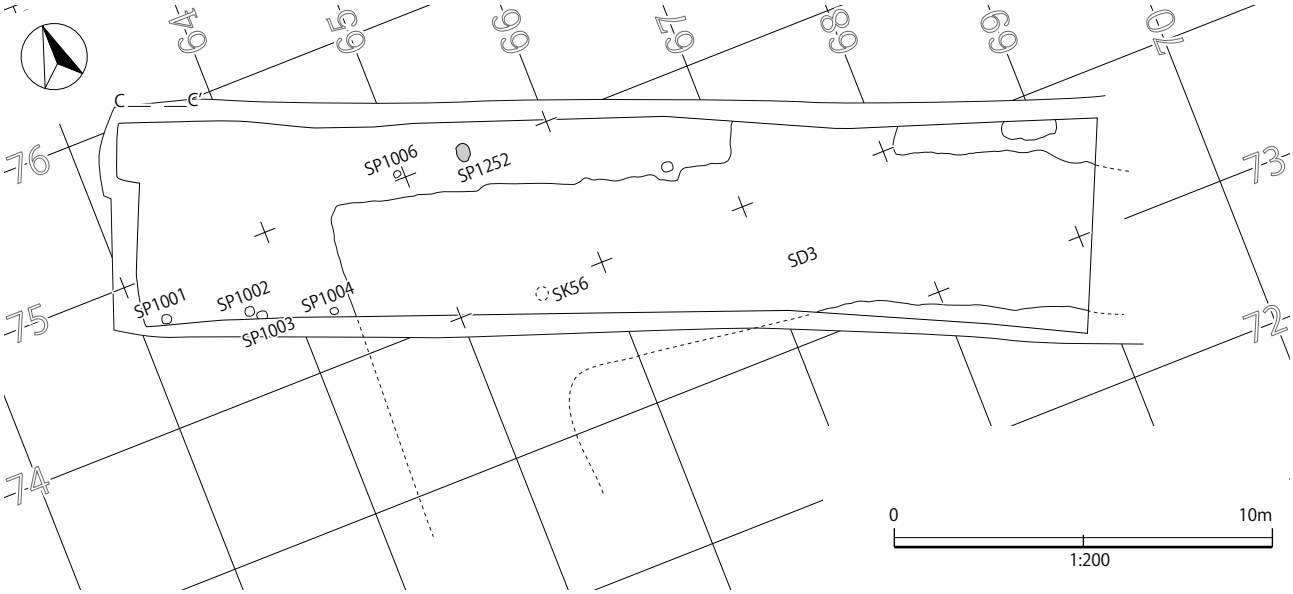
本報告刊行後、出土した遺物や記録類は、当センターの規定に則りコンテナに収納し、県教委に移管される。

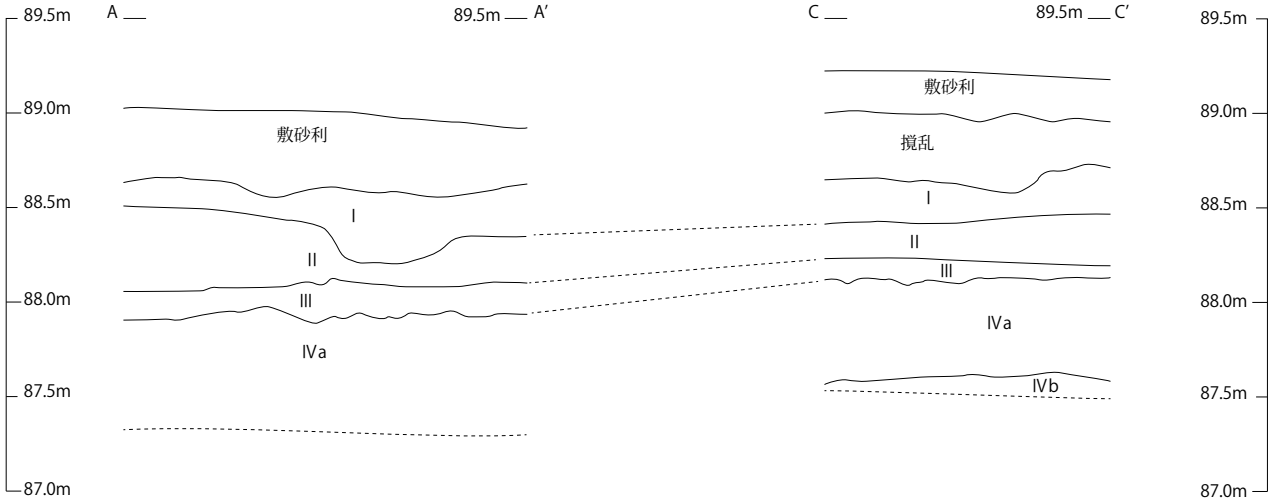


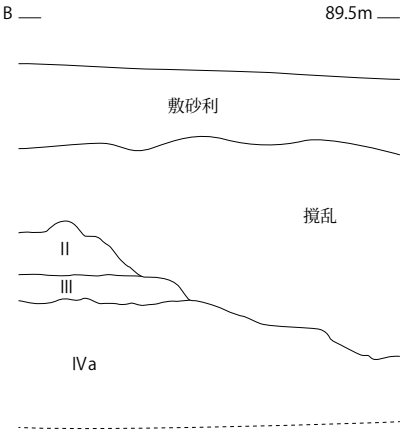
第１図　大・中グリッド配置図



第２図　小グリッド配置図





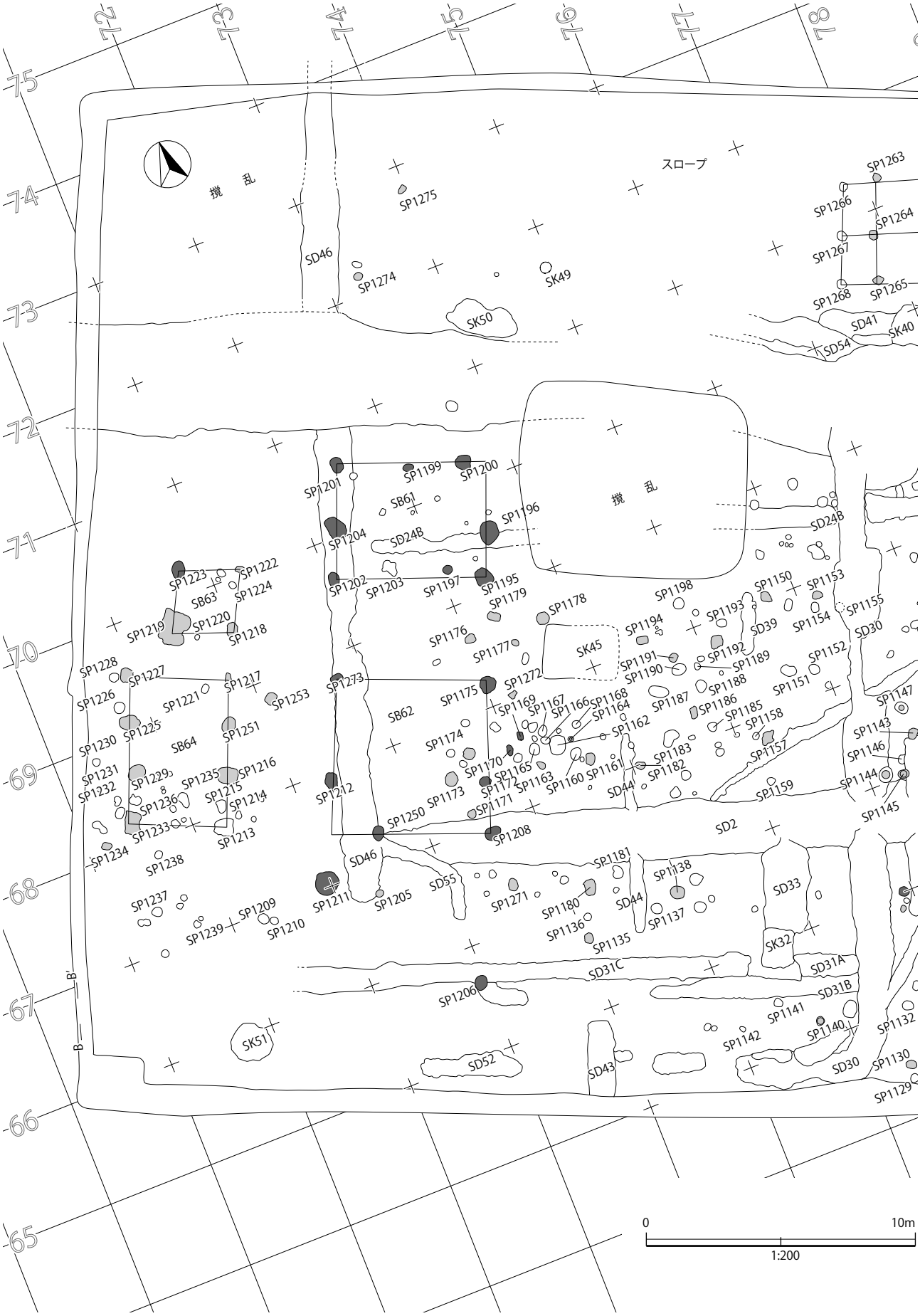


基本土層

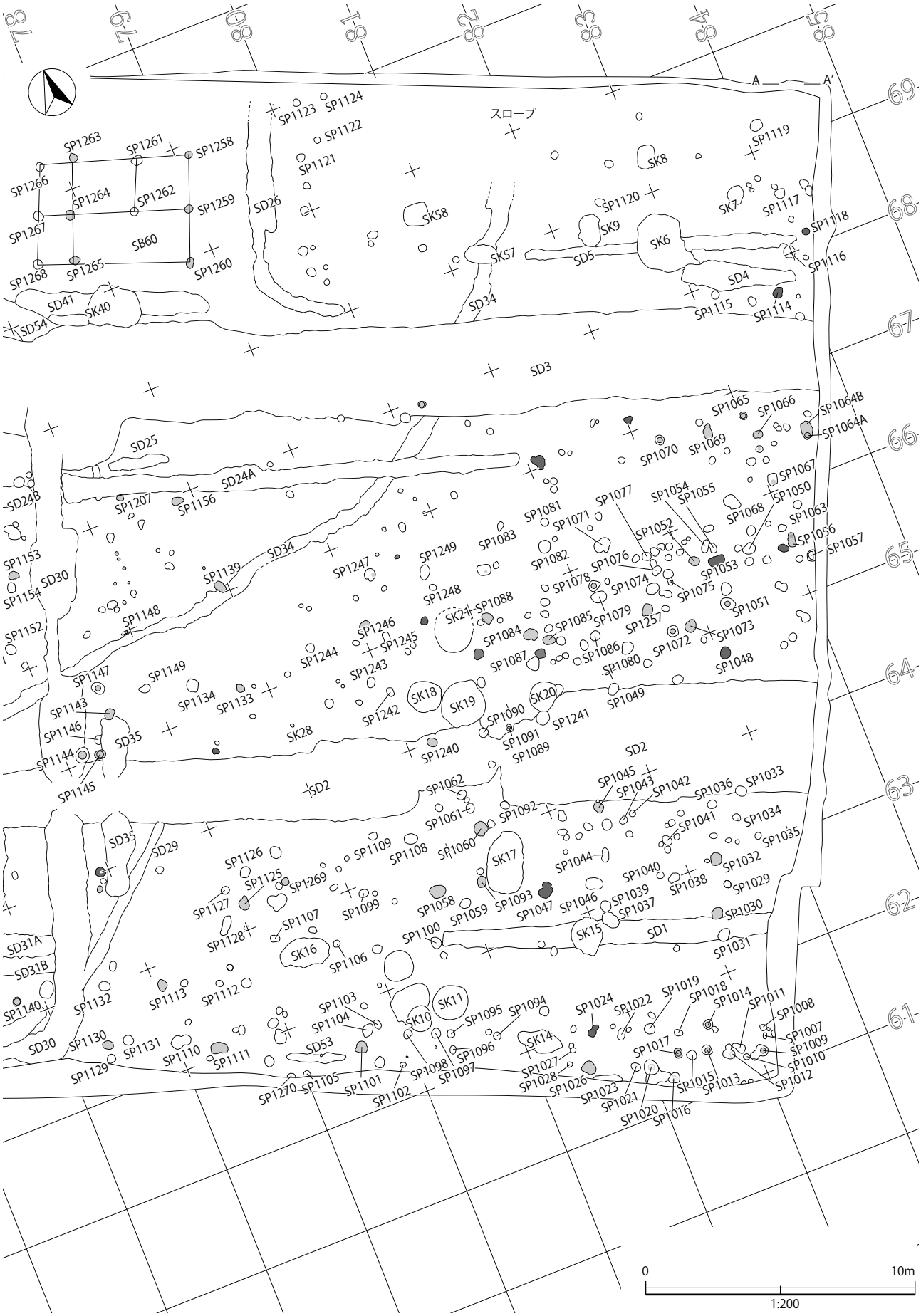
Ⅰ　赤褐色5YR4/8の砂質シルト層。現地表の敷砂利下の盛土層。
Ⅱ　黒褐色7.5YR3/1の粘土質シルト層。灰褐色土が混在。
　　Ⅲ層との境に灰褐色粘土が縞状に堆積。盛土と水田利用面。
Ⅲ　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層。近世以前の旧地表面。
Ⅳa　青灰色5BG5/1のシルト質粘土層。遺構確認面。
　　グライ化しており、時間の経過とともに灰黄色に変化する。
　　糸根状の斑紋あり。
Ⅳb　青灰色5BG5/1の砂層。場所により不連続。
　　Ⅳa層と互層状に堆積する場所も見られる。

0　2m
1:40

第３図　全測図１・基本土層図


撹　乱
スロープ
撹　乱
SP1275
SP1274
SD46
SK49
SK50
SP1263
SP1266
SP1264
SP1267
SP1268
SP1265
SD41
SK40
SD54
SP1199
SP1200
SP1201
SB61
SP1196
SP1204
SD24B
SD24B
SP1223
SP1222
SB63
SP1224
SP1202
SP1203
SP1197
SP1195
SP1179
SP1178
SP1198
SP1150
SP1153
SP1219
SP1220
SP1218
SP1176
SP1177
SP1194
SP1193
SD39
SP1154
SP1155
SD30
SK45
SP1191
SP1192
SP1189
SP1152
SP1228
SP1227
SP1217
SP1190
SP1188
SP1226
SP1221
SP1253
SP1273
SP1272
SP1175
SP1151
SP1147
SP1169
SP1167
SP1166
SP1168
SP1164
SP1187
SP1186
SP1185
SP1158
SP1143
SP1230
SP1225
SP1251
SB62
SB64
SP1174
SP1162
SP1157
SP1146
SP1231
SP1229
SP1235
SP1216
SP1170
SP1165
SP1183
SP1232
SP1236
SP1215
SP1214
SP1212
SP1172
SP1163
SP1160
SP1161
SP1182
SP1144
SP1173
SP1171
SD44
SP1159
SP1145
SP1250
SP1208
SD2
SP1233
SP1213
SP1234
SP1238
SD46
SP1181
SP1138
SD33
SP1237
SP1211
SP1205
SD55
SP1271
SP1180
SD44
SP1137
SP1239
SP1209
SP1210
SP1136
SP1135
SK32
SD31C
SD31A
SD31B
SP1206
SP1141
SP1140
SP1132
SP1142
SK51
SD52
SD43
SD30
SP1130
SP1129
B
B'
0
10m
1:200

第４図　全測図２


A
A′
スロープ
SD26
SK58
SK57
SD5
SK6
SK9
SK8
SK7
SD4
SD34
SD41
SK40
SD54
SD3
SD25
SD24A
SD24B
SD30
SD35
SD29
SD2
SD31A
SD31B
SD53
SD1
SK16
SK15
SK17
SK14
SK11
SK10
SK28
SK18
SK19
SK20
SK21
SB60
0
10m
1:200

第５図　全測図３

表１ 掲載遺構一覧

分類　番号	グリッド	掲載図面
SD 1	6281 ～ 6378	第 31 図
SD 2	6382 ～ 6771	第 32 ～ 34 図
SD 3	6783 ～ 7464	第 35 ～ 41 図
SD 4	6783 ～ 6883	第 42 図
SD 5	6881 ～ 6883	第 42 図
SK 6	6882	第 42 図
SK 7	6883	第 43 図
SK 8	6983	第 43 図
SK 9	6882	第 42 図
SK 10	6278	第 27 図
SK 11	6278	第 27 図
SK 14	6279	第 27 図
SK 15	6279	第 31 図
SK 16	6377	第 43 図
SK 17	6379	第 43 図
SK 18	6579	第 5 図
SK 19	6579	第 33 図
SK 20	6580	第 33 図
SK 21	6579	第 5 図
SD 24A	6780 ～ 6877	第 44 ～ 45 図
SD 24B	6876 ～ 6972	第 45 図
SD 25	6877	第 44 図
SD 26	6979 ～ 7079	第 46 ～ 47 図
SK 28	6578	第 5 図
SD 29	6475 ～ 6476	第 46 ～ 47 図
SD 30	6475 ～ 6876	第 46 ～ 47 図
SD 31	6475 ～ 6670	第 48 図

分類　番号	グリッド	掲載図面
SK 32	6474	第 49 図
SD 33	6574 ～ 6575	第 49 図
SD 34	6674 ～ 6981	第 50 図
SD 35	6476 ～ 6676	第 46 ～ 47 図
SD 39	6775 ～ 6875	第 26 図
SK 40	6977 ～ 6978	第 37 図
SD 41	6978 ～ 7077	第 37 図
SD 43	6472	第 43 図
SD 44	6573 ～ 6774	第 32 図
SK 45	6873	第 4 図
SD 46	6672 ～ 7373	第 51 ～ 52 図
SK 49	7174	第 53 図
SK 50	7174	第 36・40 図
SK 51	6569	第 53 図
SD 52	6471 ～ 6571	第 53 図
SD 53	6277	第 27 図
SD 54	6977 ～ 7076	第 37・40 図
SD 55	6672 ～ 6771	第 51 ～ 52 図
SK 56	7365	第 35・39 図
SK 57	6981	第 53 図
SK 58	6980	第 5 図
SK 59	6770	第 53 図
SB 60	7077 ～ 7178	第 10 ～ 11 図
SB 61	6972 ～ 7073	第 12 ～ 13 図
SB 62	6771 ～ 6872	第 12・14 図
SB 63	6970 ～ 7071	第 15 ～ 17 図
SB 64	6770 ～ 6970	第 15 ～ 17 図

表２　掲載ピット一覧１

分類 番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	掲載図面	備考
SP 1001	7463	27	24	22	87.89	第３図	染付片 2 点
SP 1002	7463	27	27	25	87.84	第３図	
SP 1003	7463	33	32	15	87.95	第３図	
SP 1004	7464	22	21	16	87.96	第３図	須恵器蓋片
SP 1006	7564	21	16	17	87.88	第３図	
SP 1007	6181	23	14	12	87.94	第 27 図	
SP 1008	6181	26	25	22	87.84	第 27 図	
SP 1009	6181	68	46	32	87.76	第 27 図	柱根あり
SP 1010	6180	25	22	14	87.9	第 27 図	
SP 1011	6180	51	32	34	87.7	第 27 図	柱根あり
SP 1012	6180	57	45	14	87.88	第 27 図	
SP 1013	6180	42	35	30	87.72	第 27 図	柱根あり
SP 1014	6180	38	36	34	87.7	第 27 図	柱根あり
SP 1015	6180	39	34	22	87.8	第 27 図	
SP 1016	6180	45	40	30	87.72	第 27 図	
SP 1017	6180	31	28	4	88.02	第 27 図	柱根あり
SP 1018	6180	33	24	22	87.84	第 27 図	
SP 1020	6180	59	52	56	87.48	第 27 図	土師器片（83）
SP 1021	6179	38	28	20	87.84	第 27 図	
SP 1022	6179	46	27	24	87.78	第 27 図	
SP 1023	6179	109	(26)	26	87.78	第 27 図	
SP 1024	6179	51	29	18	87.84	第 27 図	
SP 1026	6179	53	34	38	87.61	第 18 図	礎盤に建材を転用２点（145、146）
SP 1027	6179	22	19	26	87.78	第 27 図	
SP 1028	6179	22	18	16	87.86	第 27 図	
SP 1029	6281	30	26	10	87.96	第 28 図	
SP 1030	6281	48	41	26	87.8	第 28 図	枝材礎盤　SD1 ＜
SP 1031	6281	50	39	24	87.64	第 28 図	SD1 ＜
SP 1032	6381	48	40	27	87.76	第 18 図	炭素年代測定
SP 1033	6381	42	37	24	87.84	第 28 図	

表３　掲載ピット一覧２

分類	番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	掲載図面	備考
SP	1034	6381	32	25	14	87.94	第 28 図	
SP	1035	6381	26	25	10	88	第 28 図	底面に礫
SP	1036	6381	36	31	22	87.84	第 28 図	
SP	1037	6280	71	49	34	87.52	第 28 図	SD1 ＜
SP	1038	6380	45	33	30	87.74	第 28 図	
SP	1039	6280	44	39	26	87.72	第 28 図	
SP	1040	6380	27	26	24	87.82	第 28 図	
SP	1041	6380	41	31	24	87.8	第 28 図	
SP	1042	6380	25	24	14	87.92	第 28 図	
SP	1043	6380	42	37	30	87.74	第 28 図	
SP	1044	6380	54	27	16	87.86	第 28 図	青磁片（7）
SP	1045	6380	42	36	17	87.86	第 18 図	枝材礎盤
SP	1046	6380	63	43	32	87.72	第 28 図	
SP	1047	6379	60	52	22	87.82	第 28 図	底面に礫
SP	1048	6482	45	38	30	87.74	第 5 図	
SP	1049	6480	48	35	42	87.62	第 5 図	SD2 ＜
SP	1050	6582	50	42	38	87.68	第 30 図	
SP	1051	6582	57	45	16	87.88	第 30 図	柱根あり
SP	1052	6582	39	33	12	87.94	第 30 図	枝材礎盤
SP	1053	6582	61	42	16	87.9	第 18 図	染付片（39）、擂鉢（62）　柱根あり　壁面に礫
SP	1054	6582	49	25	12	87.96	第 30 図	
SP	1055	6582	40	26	16	87.92	第 30 図	
SP	1056A	6583	31	25	20	87.88	第 18 図	枝材礎盤
SP	1056B	6583	25	21	14	87.94	第 18 図	礎盤に瀬戸美濃皿（27）
SP	1057	6583	44	31	24	87.84	第 30 図	
SP	1058	6378	61	46	18	87.77	第 18 図	枝材礎盤
SP	1059	6378	43	35	28	87.68	第 5 図	
SP	1060	6479	56	52	30	87.7	第 19 図	枝材礎盤
SP	1062	6479	40	31	24	87.7	第 5 図	
SP	1063	6582	33	28	24	87.82	第 30 図	
SP	1064A	6683	69	43	20	87.78	第 19 図	柱根あり　枝材礎盤　炭素年代測定
SP	1064B	6683	25	20	36	87.62	第 19 図	
SP	1065	6683	30	29	4	87.92	第 30 図	柱根あり
SP	1066	6683	36	29	12	87.86	第 30 図	柱根あり
SP	1067	6683	48	38	28	87.76	第 30 図	
SP	1068	6682	68	46	14	87.86	第 30 図	
SP	1069	6682	60	33	14	87.74	第 19 図	枝材礎盤
SP	1070	6682	38	34	12	87.78	第 30 図	柱根あり
SP	1071	6681	65	54	24	87.74	第 29 図	
SP	1072	6581	44	42	20	87.86	第 30 図	柱根あり
SP	1073	6581	49	41	36	87.7	第 19 図	枝材礎盤
SP	1074	6581	50	42	32	87.68	第 30 図	
SP	1075	6581	29	20	6	87.96	第 30 図	柱根あり
SP	1076	6581	39	30	8	87.94	第 30 図	
SP	1077	6581	34	34	22	87.78	第 30 図	
SP	1078	6581	45	39	2	87.92	第 29 図	柱根あり
SP	1079	6581	59	41	16	87.8	第 29 図	
SP	1080	6581	51	43	26	87.76	第 29 図	
SP	1081	6680	32	27	14	87.78	第 29 図	
SP	1082	6680	48	47	22	87.72	第 29 図	
SP	1083	6680	36	22	12	87.78	第 29 図	
SP	1084	6580	54	42	34	87.64	第 19 図	枝材礎盤
SP	1085	6580	47	35	26	87.72	第 19 図	枝材礎盤　炭素年代測定
SP	1086	6580	38	36	12	87.88	第 29 図	枝材礎盤
SP	1087	6580	52	48	26	87.7	第 29 図	
SP	1088	6580	46	33	31	87.62	第 19 図	枝材礎盤
SP	1089	6479	28	27	12	87.64	第 33 図	
SP	1090	6479	36	34	22	87.74	第 33 図	
SP	1091	6479	25	20	6	87.9	第 33 図	柱根あり
SP	1092	6479	35	26	18	87.82	第 33 図	

表４　掲載ピット一覧３

分類 番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	掲載図面	備考
SP 1093	6379	43	32	20	87.76	第５図	枝材礎盤
SP 1094	6278	31	27	14	87.88	第 27 図	
SP 1095	6278	31	29	12	87.9	第 27 図	
SP 1096	6278	32	22	8	87.94	第 27 図	
SP 1097	6278	38	34	10	87.9	第 27 図	
SP 1098	6278	36	31	8	87.92	第 27 図	
SP 1099	6378	37	28	20	87.7	第５図	
SP 1100	6378	46	38	10	87.86	第５図	
SP 1101	6277	48	42	20	87.78	第 27 図	枝材礎盤
SP 1102	6277	24	19	4	87.96	第 27 図	
SP 1103	6277	37	24	16	87.82	第 27 図	
SP 1104	6277	54	35	20	87.78	第 27 図	
SP 1105	6277	(25)	30	22	87.74	第 27 図	底面に礫
SP 1106	6377	28	24	24	87.62	第５図	
SP 1107	6377	34	25	16	87.74	第５図	
SP 1108	6478	51	39	20	87.64	第５図	
SP 1109	6478	35	27	14	87.74	第５図	
SP 1110	6376	77	49	30	87.64	第５図	肥前磁器（41）　近代
SP 1111	6376	62	46	20	87.76	第 20 図	枝材礎盤
SP 1112	6376	28	23	8	87.84	第５図	
SP 1113	6376	46	34	2	87.92	第５図	枝材礎盤
SP 1114	6783	44	35	30	87.66	第 42 図	礫礎盤と枝材
SP 1115	6783	31	29	14	87.78	第 42 図	
SP 1116	6883	48	45	32	87.68	第 42 図	
SP 1117	6884	40	38	26	87.68	第５図	
SP 1118	6884	29	25	10	87.9	第 42 図	礫礎盤と枝材
SP 1119	6984	50	42	28	87.66	第５図	
SP 1120	6982	42	30	24	87.6	第５図	
SP 1121	7080	33	29	8	87.76	第 46 図	
SP 1122	7080	26	24	12	87.72	第 46 図	
SP 1123	7080	28	27	14	87.7	第 46 図	
SP 1124	7080	25	25	12	87.72	第 46 図	
SP 1125	6477	53	37	26	87.66	第 20 図	枝材礎盤
SP 1126	6477	44	37	24	87.64	第５図	
SP 1127	6476	32	29	16	87.7	第５図	
SP 1128	6476	78	32	38	87.54	第５図	
SP 1129	6375	34	32	10	87.84	第５図	
SP 1130	6375	41	31	14	87.8	第 20 図	枝材礎盤
SP 1131	6375	40	38	22	87.72	第５図	
SP 1132	6475	43	35	24	87.66	第５図	
SP 1133	6677	37	27	8	87.79	第 20 図	枝材礎盤
SP 1134	6677	54	46	36	87.42	第５図	
SP 1135	6573	41	33	4	87.73	第 20 図	枝材礎盤
SP 1136	6573	29	29	6	87.72	第４図	
SP 1137	6573	41	40	14	87.68	第４図	
SP 1138	6573	54	49	24	87.6	第 20 図	枝材礎盤
SP 1139	6777	35	31	3	87.79	第 20 図	枝材礎盤
SP 1140	6474	35	30	4	87.82	第 46 図	柱根あり
SP 1141	6474	35	32	10	87.72	第 46 図	
SP 1142	6474	24	18	14	87.68	第 46 図	
SP 1143	6676	45	35	15	87.73	第 20 図	枝材礎盤
SP 1144	6676	60	51	14	87.68	第 46 図	柱根あり
SP 1145	6676	42	31	2	87.82	第 46 図	柱根あり　枝材礎盤
SP 1146	6676	39	26	14	87.7	第 46 図	
SP 1147	6676	51	40	14	87.68	第 46 図	柱根
SP 1148	6676	35	12	8	87.74	第５図	柱根
SP 1149	6676	44	30	14	87.68	第５図	
SP 1150	6875	51	37	3	87.85	第 21 図	枝材礎盤
SP 1151	6775	59	38	20	87.6	第 26 図	瀬戸美濃（25）
SP 1152	6775	43	37	14	87.68	第４図	

表５　掲載ピット一覧４

分類	番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	掲載図面	備考
SP	1153	6776	39	31	19	87.65	第 21 図	枝材礎盤
SP	1154	6776	38	29	38	87.4	第４図	
SP	1155	6776	22	22	17	87.67	第 47 図	SD30 ＜
SP	1156	6777	31	24	19	87.63	第 21 図	枝材礎盤
SP	1157A	6675	65	46	4	87.84	第 21 図	枝材礎盤　B ＝底面標高 87.7m
SP	1158	6675	28	23	2	87.76	第 26 図	
SP	1159	6675	31	30	6	87.72	第 26 図	
SP	1160	6773	49	38	20	87.50	第 25 図	瀬戸美濃（23）
SP	1161	6773	46	35	2	87.74	第 21 図	枝材礎盤
SP	1162	6773	67	49	46	87.34	第 25 図	
SP	1163	6773	37	24	2	87.79	第 21 図	枝材礎盤
SP	1164	6773	21	19	4	87.70	第 25 図	柱根あり
SP	1165	6773	46	38	8	87.70	第 25 図	柱痕あり
SP	1166	6773	35	26	16	87.62	第 25 図	
SP	1167	6773	44	32	6	87.70	第 25 図	
SP	1168	6773	32	28	14	87.58	第 25 図	
SP	1169	6773	35	20	12	87.7	第 21 図	礫礎盤
SP	1170	6772	41	23	13	87.69	第 22 図	礫礎盤
SP	1171	6772	35	31	10	87.7	第 22 図	
SP	1172	6772	47	43	-	87.81	第 14 図	根石礎盤　SB62
SP	1173	6772	56	48	35	87.47	第 22 図	枝材礎盤　須恵器（93）
SP	1174	6772	47	46	19	87.65	第 22 図	枝材礎盤
SP	1175	6873	66	61	-	87.7	第 14 図	根石礎盤　SB62
SP	1176	6873	43	34	20	87.57	第 22 図	枝敷列　陶器片（70）
SP	1177	6873	30	24	4	87.76	第 25 図	柱根あり
SP	1178	6873	50	47	10	87.71	第 22 図	枝材礎盤
SP	1179	6873	49	36	-	87.77	第 23 図	枝材礎盤
SP	1180	6673	59	46	29	87.53	第４図	枝材礎盤
SP	1181	6673	50	40	32	87.5	第４図	
SP	1182	6674	39	29	-	87.79	第 23 図	
SP	1183	6774	53	33	22	87.54	第 26 図	
SP	1185	6774	36	36	18	87.62	第 26 図	
SP	1186	6774	47	26	10	87.73	第 23 図	枝材礎盤
SP	1187	6774	75	40	14	87.56	第 26 図	
SP	1188	6774	48	40	22	87.58	第 26 図	
SP	1189	6774	34	33	8	87.72	第 26 図	砥石（162）
SP	1190	6774	47	38	20	87.60	第 26 図	
SP	1191	6774	33	31	14	87.66	第 26 図	
SP	1192	6775	57	49	2	87.84	第 23 図	枝材礎盤
SP	1193	6775	39	28	22	87.56	第 26 図	
SP	1194	6874	45	36	3	87.76	第 23 図	枝材礎盤
SP	1195	6973	74	67	-	87.81	第 13 図	根石礎盤　SB61
SP	1196	6973	90	68	2	87.76	第 13 図	根石礎盤　SB61　＞ SD24B
SP	1197	6973	36	34	4	87.76	第 12 図	礫礎盤
SP	1198	6874	43	40	30	87.48	第 26 図	瀬戸美濃（21）
SP	1199	7073	39	27	-	87.76	第 13 図	根石礎盤　SB61
SP	1200	7073	61	61	-	87.69	第 13 図	根石礎盤　SB61
SP	1201	7072	59	43	14	87.66	第 13 図	根石礎盤　SB61
SP	1202	6972	60	40	-	87.71	第 13 図	根石礎盤　SB61
SP	1203	6972	67	56	6	87.62	第 12 図	
SP	1204	7072	94	66	19	87.56	第 13 図	根石礎盤　SB61
SP	1205	6671	22	22	-	87.8	第４図	枝材礎盤　＞ SD46
SP	1206	6571	62	48	8	87.6	第 23 図	根石礎盤　＞ SD31C
SP	1207	6877	26	21	17	87.68	第 24 図	枝材礎盤
SP	1208	6672	64	55	7	87.73	第 14 図	根石礎盤　SB62
SP	1209	6670	42	35	12	87.68	第４図	
SP	1210	6670	32	26	10	87.70	第４図	
SP	1212	6771	71	47	11	87.69	第 14 図	根石礎盤　SB62
SP	1213	6770	83	72	20	87.62	第 17 図	SB63
SP	1214	6770	30	23	12	87.72	第４図	

表６　掲載ピット一覧５

分類 番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	掲載図面	備考
SP 1215	6870	50	38	20	87.60	第４図	
SP 1216	6870	77	73	20	87.54	第 17 図	枝材礎盤　SB64
SP 1217	6970	43	23	1	87.76	第 16 図	枝材礎盤　SB64
SP 1218	6971	56	43	16	87.65	第 16 図	枝材礎盤　SB63
SP 1219A	6970	44	40	40	87.43	第 16 図	SB63
SP 1219B	6970	28	28	40	87.43	第 16 図	SB63
SP 1220	6970	59	46	9	87.75	第 16 図	枝材礎盤　SB63
SP 1221	6970	35	27	4	87.70	第４図	
SP 1222	7071	38	23	4	87.81	第 16 図	枝材礎盤　SB63
SP 1223	7070	68	49	2	87.81	第 16 図	礫礎盤　SB63
SP 1224	6971	30	25	12	87.70	第４図	枝材礎盤
SP 1225	6969	65	57	17	87.68	第 17 図	枝材礎盤　SB64
SP 1226	6969	42	42	28	87.58	第４図	
SP 1227	6969	55	47	4	87.79	第 16 図	枝材礎盤　SB64
SP 1228	6969	38	33	18	87.64	第４図	
SP 1229	6869	70	58	21	87.64	第 17 図	枝材礎盤　SB64
SP 1230	6869	30	29	12	87.76	第４図	
SP 1231	6869	36	26	6	87.82	第４図	
SP 1232	6869	44	30	12	87.74	第４図	
SP 1233	6869	100	68	16	87.7	第 17 図	枝材礎盤　SB64
SP 1234	6869	40	28	8	87.80	第４図	
SP 1235	6869	60	37	22	87.62	第４図	
SP 1236	6869	46	28	16	87.68	第４図	
SP 1237	6769	40	35	20	87.64	第４図	
SP 1238	6769	32	27	14	87.70	第４図	
SP 1239	6769	29	27	12	87.72	第４図	
SP 1240	6479	37	32	8	87.84	第 24 図	枝材礎盤　＞ SD ２
SP 1241	6480	54	45	14	87.56	第 33 図	＞ SD ２
SP 1242	6579	35	25	12	87.80	第５図	
SP 1243	6578	40	29	22	87.68	第５図	
SP 1244	6678	34	32	18	87.66	第５図	
SP 1245	6679	43	25	4	87.86	第５図	
SP 1246	6679	45	35	12	87.74	第５図	枝材礎盤
SP 1247	6679	46	41	6	87.76	第５図	
SP 1248	6679	27	23	18	87.70	第５図	
SP 1249	6679	57	35	14	87.74	第５図	
SP 1250	6771	56	41	4	87.72	第 14 図	根石礎盤　SB62　木簡（130）
SP 1251	6870	61	48	9	87.63	第 17 図	枝材礎盤　SB64
SP 1252	7565	49	32	18	87.83	第 24 図	枝材礎盤
SP 1253	6871	46	38	10	87.65	第 24 図	枝材礎盤
SP 1257	6581	43	38	24	87.79	第 24 図	板・礫礎盤（148、170）　炭素年代測定
SP 1258	7079	30	26	27	87.55	第 10 図	枝材礎盤　SB60
SP 1259	7078	32	29	15	87.69	第 10 図	枝材礎盤　SB60
SP 1260	6978	42	26	9	87.69	第 10 図	枝材礎盤　SB60
SP 1261	7178	41	33	21	87.57	第 10 図	SB60
SP 1262	7078	31	30	9	87.73	第 10 図	SB60
SP 1263	7178	35	30	22	87.56	第 11 図	枝材礎盤　SB60
SP 1264	7077	39	37	6	87.73	第 11 図	SB60
SP 1265	7077	42	32	13	87.69	第 11 図	枝材礎盤　SB60
SP 1266	7177	36	32	19	87.59	第 11 図	SB60
SP 1267	7077	41	33	12	87.68	第 11 図	SB60
SP 1268	7077	37	35	18	87.64	第 11 図	SB60
SP 1269	6477	30	28	20	87.68	第５図	枝材礎盤
SP 1270	6276	31	(18)	12	87.84	第 27 図	瀬戸美濃（31）
SP 1271	6672	46	35	19	87.56	第 24 図	枝材礎盤
SP 1272	6873	32	20	7	87.73	第 24 図	枝材礎盤
SP 1273	6871	28	24	-	87.75	第 14 図	根石礎盤　SB62

欠番は撹乱と判断されたものや統合されたものなど。他、名称を付していないピットが他に 293 基ある。
礎盤のあるものの底面標高は、礎盤の上で測ったものである。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

遺跡の所在する河北町は山形県の中央東寄り、山形盆地に位置する。現在の人口は 18,000 人ほどである。

北を村山市、西と南を寒河江市、東を東根市、南東を天童市に接する。東根市に所在する山形県内陸部の空の玄関口である「山形空港」まで車で 15 分程度であり、周辺自治体へのアクセスも 15 分から 20 分程度で市街地まで向うことができる。河北町には２つの河川が流れている。寒河江川と最上川である。寒河江川は寒河江市との境にあり東に流れる。寒河江川は河北町の南東隅において最上川と合流する。最上川は天童市との境界となっており、北へと流れる。

河北町域のほとんどは寒河江川によって形成された扇状地上に立地している。この扇状地が形成されたのは比較的新しい時期であり、その形成過程において多くの水害が起こった記録がみられる。その他の地形として最上川の西側に自然堤防が部分的に形成され、北側に河間低地が存在し、西部には山間地が存在している。山間地以外の大部分が河川による影響を受けた土地であるがゆえに地盤は比較的軟弱である。このような土地であるため、水の確保は比較的容易であると考えられ、水田が多く作られている。

街の形成に深く関わった河川は中近世において、町の発展に大きく貢献している。特に最上川を利用した水運が大きい。近世においては文書史料などで確認されており、庄内酒田港を介した各地との貿易により河北町は栄えたとされている。最上川を利用した河川交通は奈良・平安時代まで遡るが難所と呼ばれる危険箇所の改修は近世に行われており、それによってより安全に物資を酒田まで運送することが可能となった。このとき運ばれたのが主に紅花や青苧、大小豆である。特に紅花は染料に使用され、特産品となっていたようである。

このように河北町は土地の形成から経済に至るまで、最上川と寒河江川に密接に関わりながら発展していったと言える。

2　歴史的環境

主に谷地城が存続した期間を含めた谷地城とその近隣地域における中・近世の状況を記述する。また、中世の前段階における奈良・平安時代についても発掘された河北町内の遺跡を中心に概観していきたい。

A　古　代

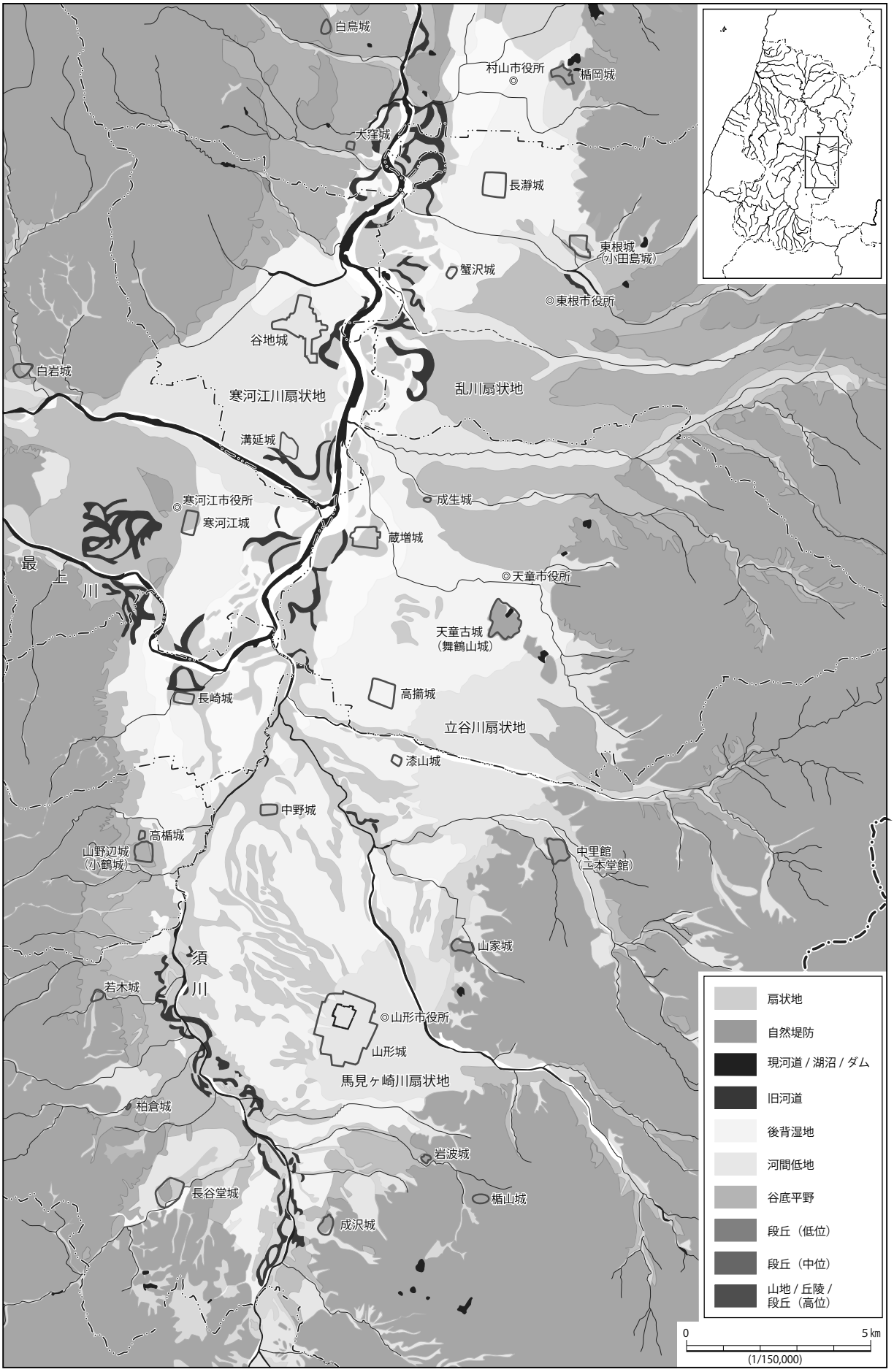
まず、奈良・平安時代についてである。その時期に関係する河北町の遺跡として熊野台遺跡・馬場遺跡・一の坪遺跡・月山堂遺跡・不動木（ゆするぎ）遺跡があげられる。

不動木遺跡では掘立柱建物跡 2 棟・竪穴住居跡 8 棟・土坑 35 基・溝跡 5 条・柱穴 250 基が検出された。遺物は 8 世紀代の須恵器坏や円面硯、9 世紀初頭の土師器などが出土している。

熊野台遺跡では古墳時代前期・奈良時代後半・平安時代の遺構・遺物が確認されている。特に注目されるのは須恵器の大甕に刻書された「大刀自」という文字である。報告書内では「延喜式造酒司」に見られる「大邑刀自」や「小邑刀自」や「少右記」における「大刀自、小刀自各一献を献ずる」という内容から記載された甕を酒造用のものと考えている。甕という器種の性格上、酒造用と考えるのは妥当であり、刀自が転じて杜氏になったとする説もある。また、酒造用の大甕を「大刀自」、小甕を「小刀自」と称する場合もある。

別な意味としては「大刀自」は刀自の尊称であり、刀自は婦人や女性を意味がある。

畑中（一の坪）遺跡からは遺物実測図を参照すると主に 8 世紀末頃から 9 世紀代の遺物が出土しており、少数ながら古墳時代のものとみられる遺物も散見される。須恵器では双耳坏なども確認されており、注目されるのはその中の須恵器に墨書にて「大山郷」と記載されていたことにある。これをもって河北町を古代の行政区画の中の出羽国最上郡大山郷と比定する見解が大勢を占めている。ただ、報告書を確認するに明確に判断出来るような文字だとは言い難い。文字の読解及び解釈にはもう少



第６図　山形盆地における中近世の主要な城館（1/150,000）

『山形城三の丸』（センター240集）に加筆

し検討の余地があると思われる。また、墨書の集計はされておらず、数量も不明である。その上、掲載されている墨書の字体のみでの判断にはあるが文字を理解して書いているのではなく、記号として書いている可能性が高い。このような状況から必ずしもそれをもって大山郷に比定するのは難しいと考えざるをえない。なお、この見解は 1982 年に刊行された山形県史第 1 巻と河北町教育委員会が発行した月山堂遺跡に記載がある。

馬場遺跡では古墳時代の竪穴住居跡 1 棟と掘立柱建物跡が 6 棟検出されている。主な遺物は 8 世紀末から 9 世紀前半の須恵器坏や壺、内黒土器の碗、古墳時代の器台の脚部などが出土している。

月山堂遺跡は奈良・平安時代の集落跡とされる。遺物実測図を見ると、おおよそ 8 世紀後半から 9 世紀の年代だと考えられる。注目されるのは竪穴住居 ST3 から石製の印が出土していることである。上部に貫通孔をあけ紐などを通していたと推測されている。なお、印面は削られており、刻まれていた内容は不明である。共伴遺物がないため、時期は判然としない。

古代に区切って検討すると、いずれの遺跡からも奈良時代末頃にあたる遺物が出土し、9 世紀まで継続する傾向がみらえる。その後、10 世紀前後になると出土遺物が減少していき、集落が廃絶するようである。このような傾向は県内全域で確認される。

古代に関わる遺跡の概観は以上とし、続いて中世の河北町について概観していきたい。

B　中　　世

鎌 倉 期

『河北町の歴史』上巻によれば、中世の河北町は古代から続く寒河江荘に属していた。寒河江荘は摂関家所領の荘園として藤原家が領有していたが、実質には安倍氏・清原氏・平泉藤原氏の順に管理を受け継いだとみられる。文治 5（1189）年の奥州合戦において平泉藤原氏が滅亡した後、寒河江荘は源頼朝の側近である大江広元が領有した。広元はこの他に成島荘・屋代荘・北条荘・置賜郡の地頭職に任じられている。しかし、広元自身は鎌倉に残り、目代として寒河江荘には多田仁綱（ただのりつな）が下向し、これを治めている。なお、同時期に現東根市にあった小田島荘の地頭に中条氏が任じられている。この中条氏が後に谷地の開発と谷地城の建設に関与するとされる。その後、広元の長子である親広が承久 3（1219）年の承久の乱に敗北し寒河江へ隠棲したとされる。親広の死後、寒河江荘を継いだのは子息である大江高元であったが若くして没したため、後継者がおらずその期に接して寒河江川を境に北側が幕僚となり、その後、ここに北寒河江荘が誕生したと考えられている。北寒河江荘は溝延を除いた現河北町域を含んだ地域にあたると考えられており、領有したのは工藤氏とみられている。その後、吉田・堀口・三曹司・両所・窪目の五箇郷は神奈川県鎌倉市の円覚寺仏日庵に寄付されている。

南北朝期

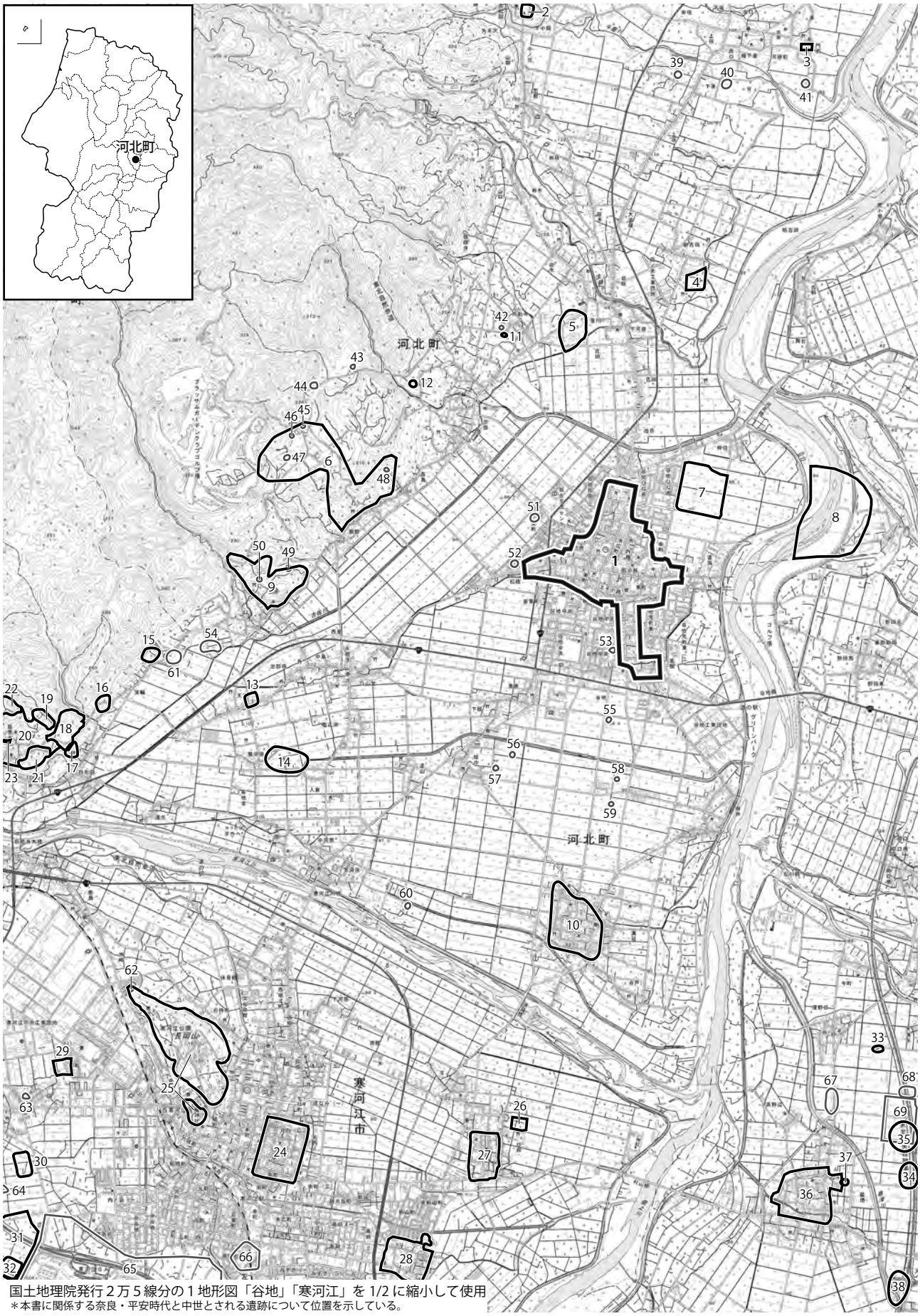
南北朝期に入っても、基本的に五箇郷を含む北寒河江荘の領有者は変わらない。この地に変動が起き始めたのは寒河江を領有していた大江氏七代の時茂のときで、溝延に城を築城し、長子である茂信を配置してからである。

なお、この動きは南朝側であった大江氏の最上川の東に勢力を張る北朝側に対しての動きとみられている。このような出羽地方の南朝側の動きに対し、北朝側は延文元（1356）年斯波兼頼を山形盆地に入部させるなど対策をこうじた。この後に起こった貞治 6（1367）年の「漆川の戦い」においてこの地における南朝側の中枢であった大江氏は敗北し、結果として出羽南部は北朝側の優勢になる。大江氏はその後の外交により寒河江荘の領有が認められ、大江時氏のときに寒河江氏を名乗るようになる。このとき、北寒河江荘は斯波兼頼の支配下に入ったともいわれる。北の五箇郷は変わらず円覚寺が領有しており、少なくとも、応永 26（1438）年までは円覚寺の所領であったことが関東管領持氏の名で出された安堵状によって確認できる。

最上川東においては斯波氏の勢力伸長が顕著になっていく。

中 条 氏

東根市史通史編上巻によれば、奥羽合戦の功にて中条氏が小田島荘の地頭となったとされている。この時の総領は義勝房成尋であり、姓は小野であったという。子には家長と義季があったとされ、『河北町の歴史』によればこの家長の子孫が谷地の開発に関わっていくとしている。しかし、東根市史によれば中条家長は官位こそ出羽守を得ているが領地としては小野総領跡職として尾張守



国土地理院発行２万５線分の１地形図「谷地」「寒河江」を 1/2 に縮小して使用
＊本書に関係する奈良・平安時代と中世とされる遺跡について位置を示している。

第７図　遺跡位置図

表７　遺跡地名表

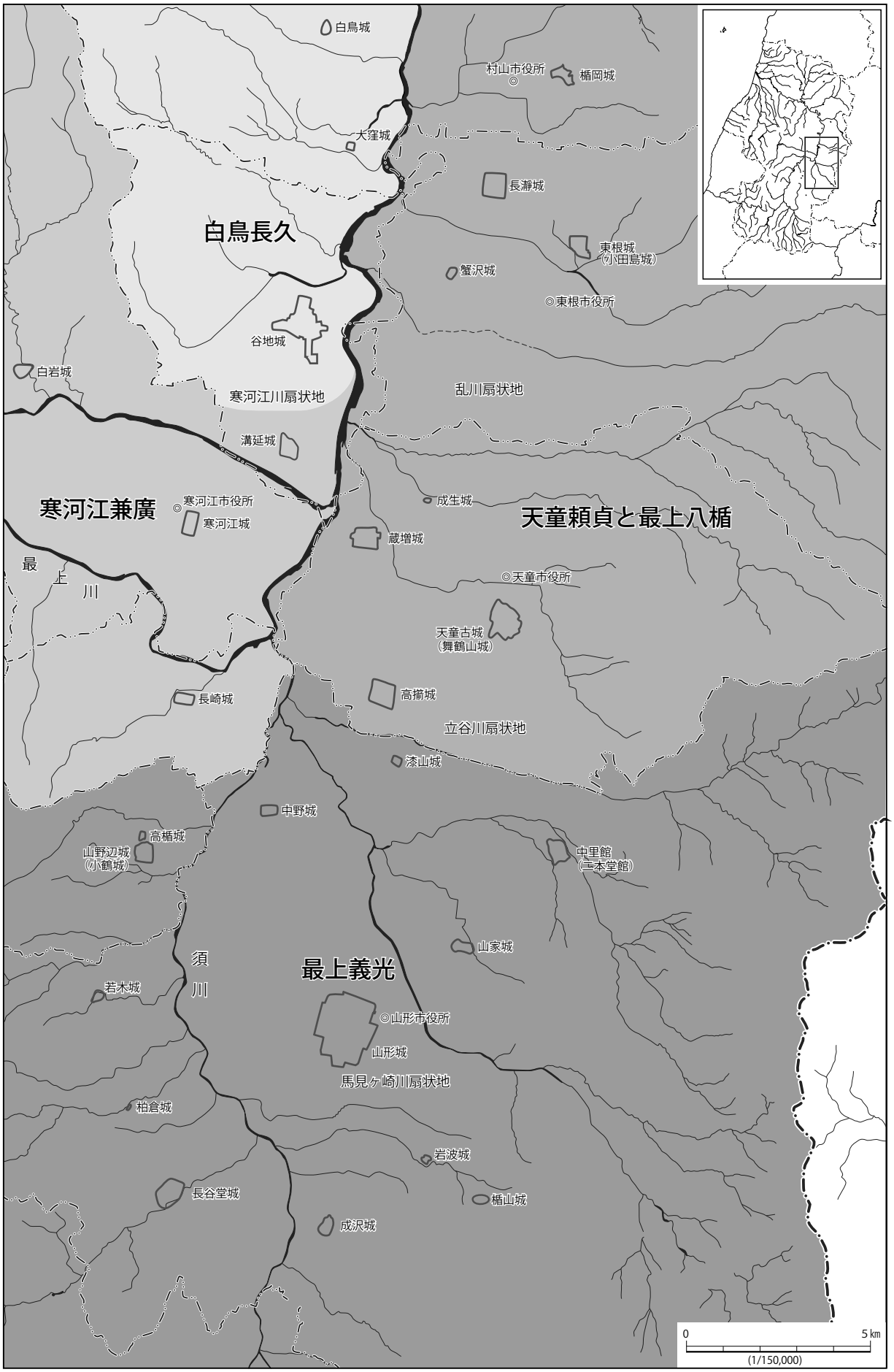
	遺跡名	市町村	時代	種別
1	谷地城跡	河北町	中世	城館跡
2	湯野沢館跡	村山市	中世	城館跡
3	大久保古城跡	村山市	中世	城館跡
4	伊達城跡	河北町	中世	城館跡
5	四ツ塚遺跡	河北町	縄文時代、奈良・平安時代、中世	遺物包蔵地
6	根際山楯跡	河北町	中世	城館跡
7	大塚館跡	河北町	中世	城館跡
8	堀口館跡	河北町	中世	城館跡
9	和楯山楯跡	河北町	中世	城館跡
10	溝延城跡	河北町	中世	城館跡
11	弥勤寺経塚	河北町	中世	経塚
12	定林寺跡	河北町	中世、近世	寺院跡
13	境介次郎屋敷跡	河北町	中世	城館跡
14	小泉楯跡	寒河江市	中世	城館跡
15	箕輪下屋敷跡	寒河江市	中世	城館跡
16	箕輪上屋敷跡	寒河江市	中世	城館跡
17	日和田楯跡	寒河江市	中世	城館跡
18	上の寺遺跡	寒河江市	中世	寺院跡
19	ゴロビツ楯跡	寒河江市	中世	城館跡
20	慈恩寺遺跡	寒河江市	古代～近世	社寺跡
21	松蔵楯跡	寒河江市	中世	城館跡
22	尾山楯跡	寒河江市	中世	城館跡
23	慈恩寺蓮池遺跡	寒河江市	中世、近世	寺社跡、他遺跡
24	寒河江城跡	寒河江市	中世	城館跡
25	長岡山楯跡	寒河江市	中世	城館跡
26	新田楯跡	寒河江市	中世	城館跡
27	日田城の内跡	寒河江市	中世	城館跡
28	本楯館跡	寒河江市	中世	城館跡
29	柴橋楯跡	寒河江市	中世	城館跡
30	高松楯跡	寒河江市	中世	城館跡
31	落衣長者屋敷跡	寒河江市	奈良・平安時代、中世	遺物包蔵地
32	落衣長者屋敷跡	寒河江市	中世	城館跡
33	一楽壇遺跡	天童市	中世	墳墓
34	板橋１遺跡	天童市	縄文時代～中世	集落跡
35	板橋２遺跡	天童市	古墳時代～中世	集落跡
36	蔵増城跡	天童市	中世・近世	城館跡
37	蔵増北Ａ遺跡	天童市	中世	集落跡
38	蔵増押切遺跡	天童市	古墳時代～中世	集落跡
39	西浦遺跡	村山市	奈良時代	集落跡
40	赤坂遺跡	村山市	奈良時代	集落跡
41	市の町遺跡	村山市	平安時代	集落跡
42	弥勤堂遺跡	河北町	平安時代	遺物包蔵地
43	長慶寺原遺跡	河北町	縄文時代、平安時代	遺物包蔵地
44	樽久保Ａ遺跡	河北町	縄文時代、平安時代	散布地
45	土入Ａ遺跡	河北町	平安時代	散布地
46	土入Ｂ遺跡	河北町	縄文時代、平安時代	散布地
47	中土入遺跡	河北町	縄文時代（中期）、平安時代	遺物包蔵地
48	毘沙門山遺跡	河北町	縄文時代、平安時代	遺物包蔵地
49	裏田遺跡	河北町	縄文時代、平安時代	遺物包蔵地
50	権現森遺跡	河北町	縄文時代、平安時代	遺物包蔵地
51	所岡遺跡	河北町	平安時代	遺物包蔵地
52	若宮八幡遺跡	河北町	平安時代	遺物包蔵地
53	荒町遺跡	河北町	平安時代	遺物包蔵地
54	両所Ａ遺跡	河北町	平安時代	散布地
55	月山堂遺跡	河北町	平安時代	遺物包蔵地
56	畑中Ｂ遺跡	河北町	平安時代	遺物包蔵地
57	畑中Ａ遺跡	河北町	平安時代	遺物包蔵地
58	馬場遺跡	河北町	平安時代	遺物包蔵地
59	熊野台遺跡	河北町	古墳時代（初頭・前期）、奈良・平安時代	遺物包蔵地
60	不動木遺跡	河北町	奈良時代（後半８c 末）	遺物包蔵地
61	箕輪遺跡	寒河江市	平安時代	集落跡
62	長岡山窯跡	寒河江市	奈良・平安時代	窯跡
63	柴橋窯跡	寒河江市	平安時代	窯跡
64	高松Ｉ遺跡	寒河江市	縄文時代、平安時代	散布地
65	高瀬山遺跡	寒河江市	縄文時代（中期）、平安時代	集落跡
66	石田遺跡	寒河江市	縄文時代（晩期）～奈良・平安時代	遺物包蔵地
67	蔵増北Ｂ遺跡	天童市	平安時代	集落跡
68	的場遺跡	天童市	平安時代	集落跡
69	三条条里遺構	天童市	奈良・平安時代	条里遺構

護職と三河国高橋荘地頭職を得ており、さらに、奥羽合戦の功で陸奥国稗貫郡の地頭職を得てはいるが出羽に領地を有していた資料は存在していない。また、家長は八田四郎知家の養子となっており、以降藤原姓を称したと言われている。

一方の義季であるが奥羽合戦の功で陸奥国和賀・刈田両郡の地頭職を得て、和田義盛の子となり「中条刈田平右衛門尉」と称している。この義季に父である成尋は小田島荘を託したようで、義季の孫である義春が小田島五郎左衛門尉義春と称している。なお、小田島姓は義季のときに称したとされている。このことから、出羽の地に領地を持っていたのは家長ではなく義季の系譜であり、また、その義季の系譜も南朝方であったため、北朝側の斯波兼頼が山形盆地に入部後の延文元（1356）年、その勢力に押され現在の新庄方面に去ったと言い伝えられている。

『河北町の歴史』によれば家長の子孫である中条秀長が河北地方に入部し、その子孫が谷地の開発を担ったとされる。尊卑分脈によれば、中条秀長は常陸前司であり、左衛門尉であったと記載されている。ただ、他の慈眼寺文書等の秀長に関係するとされる文書をみると、中条備前守と書かれている場合が多数みられる。中条一族で備前守に任官されている人物は尊卑分脈によれば、兄である景長の子の長秀であり、従五位下・備前守・左衛門尉に任官されている。なお、秀長の嗣子といわれている長国は慈眼寺文書によると中条又九郎とよばれており、領地に関する安堵状が応永 13（1406）年に出されている。その内容は北寒河江荘の小堤郷と小見郷を先例の通り領

第８図　山形盆地における鎌倉時代初期の荘園配置図（1/150,000）



第９図　最上義光家督相続期の領土範囲（1/150,000）

有してよろしいという内容である。その６年後の応永19（1412）年には駿河守に任じられた。その任官時に記載された姓名は藤原長国である。ただし、上記に記載した文書関係には疑義が呈されている。その後、長国の子孫は６代長昌まで受け継がれ白鳥氏へと谷地の領有は変遷していくと現状ではされている。

戦 国 期

村山地域の戦国期は今の置賜地方に勢力を伸ばした伊達家が文明11・12（1479・80）年に寒河江大江氏を攻めたのを契機として始まる。この頃の河北町域は河北町の歴史によると、中条氏が領有していたことになる。ただし、中条氏の谷地周辺に掛かる領有については疑義が呈されている。この時期前後の河北町域の動向は定かではない。

戦国期の後半には谷地に進出した白鳥氏が確実に領有としている。ただ、領有した時期については諸説ある。元来、白鳥氏は現村山市にあった小田島荘白鳥郷に白鳥楯を構え居住していた。白鳥氏には中条氏と関係する家系図が残されているなど、中条氏との因縁がある。おそらく、白鳥氏と中条氏の関係はこの小田島荘内にて何らかの事情により構築されていったと推測することが出来るが詳細は不明である。

戦国期後半に谷地へ進出した白鳥氏は天文11（1542）年の伊達植宗と晴宗による親子間の抗争である天文の乱において、伊達植宗から最上義光の父である最上義守への援助を依頼されている。その際の書状には「謹上　白鳥殿」とあり、白鳥氏と伊達植宗の関係姓が伺い知れる。天正２（1574）年には伊達輝宗と中野義時が組み最上義光と対峙した。このときも白鳥氏は和解を勧告し、両者を取り持っている。また、天正５（1577）年には織田信長に使節を送り馬等を献じている。この中央政権との折衝は出羽の武将の中では早く、日本国内の動向に目を光らせていたことが読み取れる。また、寒河江大江氏との関係も深く、一族間で婚姻関係を結んでいる。

このような政治的活動を白鳥氏は谷地城を拠点として行ったと考えられる。谷地城は築城時期も含め、誰が築城を開始したかなど不確定な点も多く、説も多い。このような政治活動を行い、谷地周辺の開発を推進して行ったであろう白鳥十郎長久は天正12（1584）年六月七日に最上義光により謀殺されたと伝えられる。これについては伊達政宗から最上義光に対して白鳥氏を謀殺するにあたり家臣である氏家一族に死者が出たことに対するお見舞いの書状が残されている。つまり、謀殺にあたり闘争が生じたことが伺える。最上義光は謀殺後、すぐに軍を発し谷地城を落城させた。この後、谷地城及び谷地は最上氏が領有することとなり、斎藤伊予が４千石を領有し、三万弐千六百石は蔵入地となった。谷地城はその後、慶長５（1600）年の慶長出羽合戦において一時上杉方の下忠吉に占拠された。しかし、関ケ原合戦の結果を受けた上杉軍の撤退命令が谷地城まで伝わらず上杉軍本体を追撃した後、来襲した最上軍に包囲され、耐えかねず、開城した。その後はまた最上氏が領有し、斎藤伊予が入部することとなった。

C　近　　世

谷地はその後、最上氏の改易ののち、新庄藩の預かりとなり、代官屋敷が置かれた。慶応２（1866）年には大火に合うなどしたが最上川の河川交通により栄えたとされる。谷地城は最上氏の改易とともに廃城となり次第に田畑が形成される土地となっていった。

参考文献

山形県教育委員会　1980 『熊野台遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第31集
山形県教育委員会　1986 『不動木遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第100集
河北町教育委員会　1981 『畑中（一の坪）遺跡発掘調査報告書』 河北町埋蔵文化財調査報告書第２集
河北町教育委員会　1982 『月山堂遺跡発掘調査報告書』 河北町埋蔵文化財調査報告書第３集
三好俊文　2015 「鎌倉幕府の成立と東北」『東北の中世史２　七海雅人編』吉川弘文館
伊藤清郎　2016 『人物業書　新装版　最上義光』吉川弘文館
山形県　1982『山形県史　第一巻　原始・古代・中世編』高橋書店
東根史　1995『東根市史　通史編上巻』豊田太印刷所
河北町　1974『河北町の歴史　上巻』河北町史編纂委員会
阿部猛　1997『日本荘園大辞典』東京堂出版
保角里志　2012『南出羽の戦国を読む』高志書院

Ⅲ　検出した遺構

1　調査の概要

谷地城跡は、山形県西村山郡河北町の中心市街地をなす谷地地区の旧市街地のほぼ全域に広がる広大な遺跡であり、その範囲は南北に 1.83km、東西に 1.46km に及ぶ。今回の調査は、河北町役場の建て替えに伴うもので、遺跡範囲の中央部 2200 ㎡を対象としている。調査前の状況は、現役場の北側に隣接する舗装済みの駐車場と道路、戸建ての民家であった。調査区は建設予定のエネルギー棟部分の小さい区画と庁舎の本体工事部分の区画とが隣接している。市街地のため撹乱による影響が心配されたが、遺構確認面が現地表面から 1 m 以上あり、多くの部分では影響がなかった。ただし、本体工事区の西側では、南北に走る配管が通っているほか、 8 m 四方の浄化槽など、撹乱が大きい。これらの撹乱部は、深掘りをして排水のための水溜や、調査区に侵入するためのスロープなどとして利用している。

調査区周辺の現地表面の標高は、89.5m 前後であり、アスファルト、砕石が数十 cm 敷かれている。これらを剥がした下にみられるのが Ⅰ 層としたシルト層で、調査区全面に厚くみられる。赤みがかかり、粘性はなく、固く締まったこの層は、自然堆積によるものではなく、地区の造成時に盛土として持ち込まれたものと考えられる。 Ⅰ 層の下位あたりから掘り込みが確認できるものもあり、近現代の生活面としてとらえられる。その下には Ⅱ 層とした黒褐色の粘土質のシルト層が堆積している。比較的薄く、場所によっては確認できない部分もあるが、下位のⅢ層とは灰色、あるいは酸化し橙色となる粘土が、ブロック状や縞状に混在することで分けられる。特にⅢ層との境界面は、粘土が層状に堆積しており、水性堆積をうかがわせる。調査区周辺の土地利用の来歴を考えると、近世、近代において水田として利用されていたときのものと考えられる。Ⅲ層は黒色の粘土質シルト層で、近世以前における生活面と考えられる。遺構の覆土として堆積するものの多くは、この層から供給される。下位のⅣ層とは明確に色調が異なるため、Ⅲ層の下位からⅣ層の上面を遺構の確認面とし、これより上位のものは重機にて掘削している。Ⅲ－Ⅳ層の境界面は、場所によって不安定で細かく波打つため、そのような場所では遺構確認面が斑状になる。Ⅳ層は青灰色のシルト質粘土層であり、調査区周辺の地山となる層である。調査区内で最も掘り下げた場所でも、これと異なる地層の検出はみられなかった。遺構の壁面や床面は、Ⅳ層位中にあり、覆土にはこの層を起源とする灰色粘土が粒状やブロック状に含まれることが多い。酸化の程度により青灰色からにぶい黄橙色を呈するが同一のものと考えられる。同一の色調ながら砂層が葉理状に堆積する場所もあり、Ⅳｂ層として分けた。ただし、層的に安定しているものではなく、部分的にしか確認できない。これらの基本土層を調査区の北壁と西壁で取っている（第３～５図）。

本調査で検出された遺構は、掘立柱建物が５棟、ピットが 522 基、溝状遺構が 28 条、土坑が 22 基である。調査区の軸と同じ傾きの溝状遺構が東西南北に区画をつくり、建物跡と考えられるピットが多数みられる。遺構の分布に疎密はあるものの、基本的に調査区全面から遺構は検出している。北西側に少ないのは撹乱の影響である。それらからの出土遺物は、整理箱で 10 箱出土している。遺物の主体をなすのは 15 ～ 17 世紀前半のもので、遺構も同じ年代のものと考えられる。谷地城跡は中世の城館として登録されており、今回の成果はその一部となるものである。以下、遺構の種別ごとに特徴的なものについて解説する。

2　掘立柱建物跡とピット

掘立柱建物跡は SB60 ～ 64 まで、５棟検出している。SB60 は調査区北側に独立して立地しているが、他は西側に寄り、SB61 と 62、SB63 と 64 がそれぞれ同軸で近接するため、同じ建物となるかもしれない。第 10 ～ 17 図に掲載し、個別に解説する。これら以外のピットは、規格的に並ばず、掘立柱建物として組めなかった。多くのものは掘立柱建物跡の柱穴と思われるが、機能を特定できないため、小型の掘り込みの総称として「ピット」

を用いる。

多くのピットには、礎盤構造がみられる。礎盤には、木材を複数並べたものが多く用いられ、それらには径数cm程度の樹皮のついたままの枝、薪のように粗割りしただけの分割材、廃棄された建築部材などが用いられている。ひとつの遺構のなかでこれらが組み合わさって用いられることが多いため、まとめて呼称する際、「枝材」の語を用いる。枝材として用いられる樹種を同定するには至らないが、目視で確認できる限り、統一的なものはなく複数の樹種が用いられている。枝に残る樹皮から桜と判断できるものがいくつかみられた。礎盤には枝材のほか、拳大の円礫を敷き詰めて根石としたものもみられる。これらは枝材のものと比べると、地区的にも限定的で、大部分がSB61、62として組めるものになる。一方、枝材のものは調査区全面に多数検出するも、建物を組めないものや単独で検出しているものが多い。

こういった枝材の礎盤の目的や使用方法については、SP1064AやSP1145で残存する柱材の下に枝材を並べた状況を検出しており、柱材を残さないピットについても、柱の沈下防止のための措置と解釈できる。遺跡の立地する寒河江川扇状地の端部は、現在の調査段階で見る限り、地盤が柔らかく、安定しない地盤へ対応する必要があったものと考えられる。石材や板材よりもコストをかけずに便宜的に済ませようとする意図が感じられるが、このような工法が地盤の安定しない低地への対応としてどの程度一般的なものであったのかは定かではない。類例は2014年に調査された山形城三の丸跡第14次調査、O-3区SK1984に1か所見られる（センター240集）。同遺構は、山形城三の丸跡の調査の中では、最も標高の低い馬見ヶ崎扇状地の西端部の調査区に位置し、枝材を２段に敷いている様子が確認されている。幅の狭い調査区のため、検出したのはこの１基のみである。全国的にどの程度類例があるのかは渉猟しきれていないが、今後の発掘成果の増加を待ちたい。

第18～24図では礎盤構造のあるものなど特徴的なものを掲載し、個別に解説する。また、ピットの集中する地点をピット集中区として第25～30図に掲載する。ピット全体の位置や規模、底面標高については、表２～６にまとめている。

SB60 掘立柱建物跡

位置：調査区中央北側、7077～7178グリッドを中心に検出する掘立柱建物跡である。SP1258～1268の11基のピットからなり、主軸はN－68°－Wで東西方向に桁行をもつ。

規模：桁行は北側で３間、南側で２間となり、それぞれ5.59mと5.71mを測る。梁行は２間で、西側3.96m、東側4.04mを測る。建物の面積は22.6㎡となる。柱間寸法は、北側の桁行で西から1.36 m、2.37 m、1.86 m、南側は1.48 m、4.23 mとなる。梁行は西側で1.81m、2.15m、東側で2.04m、2.0mを測る。ピット個別の規模は、表６に掲載している。30～40cmの規模で、深さは６～27cm、底面標高は87.55～87.73mとなる。

形状：総じて柱通りが悪く、直線状に並ばないものもある。桁行西側の柱間寸法がほかより短く、南側の桁行で柱間が広がる場所では一段掘り下げたがピットは検出できなかった。礎盤に枝を敷くものは、SP1258～1260、1263～1265にみられ、梁行方向に１列飛ばしで並ぶ。SP1258・1265などでは、底面に枝を敷くのではなく、立ち上がり斜面に並べている。SP1261は幅広の底面の隅にわずかにみられるのみ。

前後関係と時期：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はいずれもⅣ層中である。覆土はいずれも黒色の粘土質シルトを基調とする。重複する遺構や出土遺物はない。区画としてSD3の外にあり、SD2・46の中にあることから、同時期の15世紀中頃から16世紀中頃を想定したい。

SB61 掘立柱建物跡

位置：調査区西側、6972～7073グリッドを中心に検出する掘立柱建物跡である。SP1195、1196、1199～1202、1204の７基のピットからなり、主軸はN－70°－Wで東西方向に桁行をもつ。４m南方向にSB62掘立柱建物跡がある。

規模：桁行は北側で２間、南側で１間となり、それぞれ4.74mと5.46mを測る。梁行は２間で、西側4.23m、東側4.34mを測る。建物の面積は21.85㎡となる。柱間寸法は、北側の桁行で西から2.65 m、2.09 m、南側は5.46 mとなる。梁行は西側で1.91m、2.32m、東側

で 1.62m、2.72m を測る。ピット個別の規模は、表５に掲載している。いずれも拳大の礫を根石として敷き詰めるもので、平面規模は 30 ～ 90cm 程度。深さは、ほとんど掘り込みが確認できず遺構検出面まで根石が出ているため深さを測れないものから、深いものでは 24cm のものまである。根石の上で測る底面標高は 87.51 ～ 87.78m となる。

形状：総じて柱通りが悪く、直線状に並ばない。SP1200 はひとつだけ内側に寄っている。桁行南側は１間となるが、この間に検出する SP1203 と SP1197 は、それを補うものかもしれない。根石が検出しないこと、位置がずれることが問題となる。掘り込みの床面に根石を敷くものは SP1201 と 1204 で、他は根石の上端が確認面とほぼ同じ高さに来る。SP1195、1196 では断割りで根石の積み方を検出しているが、掘り込みに石を数段積んで高くしている様子が看取できる。また、SP1196 の上端の端部には径８cm 程度の木杭が打たれている。

前後関係と時期：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はいずれもⅣ層中である。掘り込みのあるものの覆土はいずれも黒色の粘土質シルトを基調とし、粘土粒が混じる。重複する遺構は、SP1196 が SD24B の覆土の上に、SP1201、1202、1204 が SD46 の覆土の上につくられており､これらの時期よりも新しいものである。４m 南に隣接する SB62 は軸を同じくして根石をもつピットという特徴から、同じ建物として組めるかもしれない。ただし、本遺構のものと比べて柱間寸法が広くなることから、同時期の別の建物として分けた。出土遺物はない。区画として SD3 の中にあるものの、SD24B の区画や SD46 の区画よりも新しいことから、17 世紀前半以降を想定したい。

SB62 掘立柱建物跡

位置：調査区西側、6771 ～ 6872 グリッドを中心に検出する掘立柱建物跡である。SP1172、1175、1208、1212、1250、1273 の６基のピットからなり、主軸は N － 68°－ W で東西方向に桁行をもつ。４m 北方向に SB61 掘立柱建物跡がある。

規模：検出している桁行と梁行は１間１間で、桁行は北側で 5.61m と南側で 5.67m、梁行は西側で 3.77m、東側で 3.63m を測る。建物の面積は 20.87 ㎡となる。桁行南側に２つの柱穴 SP1208、1250 があり、張り出し部が想定される。この柱間寸法は、桁行方向で 4.17m と西端まで届かない。東側の SP1208 と本体部分 SP1172 との間は 1.97m である。ピット個別の規模は、表５、６に掲載している。いずれも拳大の礫を根石として敷き詰めるもので、平面規模は 30 ～ 70cm 程度。別遺構の覆土の上にあるものが多く、検出できなかった部分もある。深さは、ほとんど掘り込みが確認できず遺構検出面まで根石が出ているため深さを測れないものがほとんどで、SP1212 のみ 11cm の掘り込みを検出する。根石の上で測る底面標高は 87.69 ～ 87.73m となり、ほとんど差がない。

形状：柱間寸法が極めて広く、途中にいくつかの柱穴があったことが想定される。SP1172 がやや内側に寄るものの、本調査の中では比較的全体の形状は整っている。SP1208 と 1250 による張り出し部は、西側の長さが足りず、SP1250 の北側で対になるものがないが、根石をもち同軸で配置されるピットのため、同じ建物のものと判断した。個別のピットは、他の遺構の覆土の上につくられるものが多く、外形を検出するのは困難である。

前後関係と時期：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はいずれもⅣ層中である。掘り込みのあるものの覆土はいずれも黒色の粘土質シルトを基調とし、粘土粒が混じる。重複する遺構は、SP1208、1250 が SD2 の覆土の上に、SP1212、1273 が SD46 の覆土の上につくられており、これらの時期よりも新しいものである。軸を同じくして根石をもつピットという特徴からも、北に隣接する SB61 とは同時期の所産と判断できよう。また、梁行方向が同軸で、SP1208 から南に 5.5 mに、同じように根石を詰める SP1206 が単独で検出している。関係性がうかがえるが、SP1206 付近で同様のピットは検出されなかった。出土遺物は SP1250 で本調査唯一の判読可能な木簡（130）が出土している。炭素年代測定の結果、1481-1638CalAD（95.4％）という結果が得られている。木簡の内容は年貢米の荷札と考えられる。SD2、46 の区画よりも新しく、SB61 と同じ時期を考えると、17 世紀前半以降が考えられる。

SB63 掘立柱建物跡

位置：調査区西端、6970 ～ 7071 グリッドを中心に検

出する掘立柱建物跡である。SP1218、1219A、1222、1223の4基のピットからなり、南西角のSP1219Aに隣接するSP1219B、1220も関連するピットと考えられる。1.8mほど南にSB64掘立柱建物跡がある。

規模：桁行と梁行は1間1間で方形を呈する。南北は西側で2m、東側で2.27mを測り、東西は北側で2.34m、南側は2.28mを測る。建物の面積は4.93㎡となる。ピット個別の規模は、表6に掲載している。ピットの礎盤構造や、大きさに統一性はなく、平面規模は38～68cm、深さは扁平礫の上面が確認面に達しているSP1223から40cmを測るSP1219Aまでがある。底面の標高は87.43～87.81mを測る。このピットの中ではSP1219A・Bだけが深くなるため、やや軸がずれるものの南西角をSP1220と考えると、87.69～87.81mの底面標高に収まる。

形状：個別ピットの礎盤構造は、SP1218で枝材を同軸方向に2段並べるもの。SP1219A・Bは礎盤なしで他のものより深くなる。SP1220は枝材を敷くがややばらける。SP1222は太めの枝材を1枚敷くもの。SP1223は40cm大の扁平礫を1つ敷く。

前後関係と時期：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はいずれもⅣ層中である。掘り込みのあるものの覆土はいずれも黒色の粘土質シルトを基調とし、粘土粒が混じる。重複する遺構はない。1.8m南に隣接するSB64は南北軸を同じくすることから、同じ建物として組めるかもしれない。ただし、本遺構のものと比べて柱間寸法が広くなることから、同時期の別の建物として分けた。出土遺物はない。SB64と同じ年代を想定し、17世紀前半以降が考えられる。

SB64 掘立柱建物跡

位置：調査区西端、6770～6970グリッドを中心に検出する掘立柱建物跡である。SP1213、1216、1217、1225、1227、1229、1233、1251の8基のピットからなり、南東角のSP1213以外すべて礎盤に枝材を敷く。1.8mほど北にSB63掘立柱建物跡がある。

規模：桁行は3間、梁行は1間で長方形を呈する。南北はおよそ5.7 mを測り、梁行は北側で3.78m、南側で3.48mを測る。建物の面積は20.69㎡となる。ピット個別の規模は、表6に掲載している。ピットの平面規模は43～84cm、深さはほぼ確認面に達しているSP1217から、20cm程度を測るSP1216、1229までがある。底面の標高は87.63～87.79mを測る。

形状：SP1213は不整方形を呈し、中央に20cmほどの柱痕が確認できる。SP1216は東西に長い楕円形で、西側に不安定な底面のテラスを持ち、東側が1段下がる。そこの底面に枝材を同軸方向に2段敷く。SP1217はほぼ確認面で礎盤の枝材が検出している。SP1225は東西に長い楕円形で西側に浅いテラスをつくり、東側が1段下がる。そこに枝材を同一方向に敷いている。SP1227はほぼ確認面で礎盤の枝材が検出している。枝材は底面中央ではなく北東角から立ち上がりにかけて疎らに敷いている。SP1229は東西に長い楕円形で、底面に枝材を井桁状に2段敷き詰めている。SP1233は南北に長い不整長方形で、底面は不定形である。枝材は南西角に敷かれている。SP1251は南北に長い楕円形で、枝材を底面に角度を変えて2段敷き詰めている。

前後関係と時期：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はいずれもⅣ層中である。掘り込みのあるものの覆土はいずれも黒色の粘土質シルトを基調とし、粘土粒が混じる。重複する遺構はない。1.8m北に隣接するSB63は桁行軸を同じくするが、梁行の柱間が異なる。

陶磁器類の出土はない。SP1213から建築部材（147）が出土し、SP1233では礎盤の枝材に角材（149）が見られた。SP1251では礎盤の枝材に先端加工のあるもの（150）や、ほぞ加工のあるもの（152）が用いられていた。これらを用いて炭素年代測定を行っている。147は1481-1638CalAD（95.4％）、150は1297-1400CalAD（95.4％）、152は測定結果に複数のピークが見られ、1646-1680CalAD（36.7％）や1763-1802CalAD（45.3％）などの結果が得られている。同じ建物内において測定年代にかなりの時間差が生じている。建物の主軸方向からSB63と同じ年代を想定し、17世紀前半以降を与えておく。

SP1026 ピット

調査区南東端部の6179グリッドに検出したピットで、ピット集中区3とした東西にピットが並ぶ地区に位置する。平面は不整円形を呈し、長軸53cm、短軸34cm、深さ38cmで底面標高87.61mを測る。壁面の上位に円礫を並べ、柱の根固めとしている。立ち上が

りは大きくオーバーハングする形で掘り込まれ、底面には礎盤として敷居材（145、146）を分割したものが２つ並べて置かれていた。年輪の残存が良いため、炭素年代測定に３点でウィグルマッチ分析を行ったところ、1647-1663CalAD(95.4%) との結果が出ている。

SP1032 ピット

調査区南東部の 6381 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 4 とした SD2 溝状遺構南側に展開するピット群に位置する。平面は円形で長軸 48cm、短軸 40cm、深さは 27cm で底面標高 87.76m を測る。底面は 1 段下がり礎盤として太めの枝材を敷き詰めている。この枝材を用い炭素年代測定をしたところ、1512-1601CalAD(71.3%) という結果を得ている。

SP1045 ピット

調査区南東部の 6380 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 4 とした SD2 の南側に展開するピット群に位置する。平面は円形を呈し、長軸 42cm、短軸 36cm、深さ 17cm で底面標高 87.86m を測る。底面に礎盤として枝材を、角度を変え２段重ねて敷いている。

SP1056A・B ピット

調査区中央東端部の 6583 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 6 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間に展開するピット群の東端に位置する。平面は円形を呈し、２つのピットがつながって検出している。南側を SP1056A とし、平面円形で長軸 31cm、短軸 25cm、深さ 20cm で底面標高 87.88m を測る。底面には礎盤として枝材を敷いている。SP1056B は平面円形を呈し、長軸 25cm、短軸 21cm、深さ 14cm で底面標高 87.94m を測る。底面には礎盤として破損した瀬戸美濃皿の底部（27）を逆位に置いている。

SP1058 ピット

調査区南部の 6378 グリッドに検出したピットで、SD1 と SD2 溝状遺構の間に位置する。平面は楕円形を呈し、長軸 61cm、短軸 46cm、深さ 18cm で底面標高 87.77m を測る。底面には礎盤として枝材を井桁状に敷き詰めている。

SP1060 ピット

調査区南部の 6479 グリッドに検出したピットで、SD1 と SD2 の間に位置する。平面は不整円形を呈し、長軸 56cm、短軸 52cm、深さ 30cm で底面標高 87.70m を測る。礎盤が確認できるが、底面の最深部ではなく底面から立ち上がりにかけて枝材を疎らに敷く。

SP1064A・B ピット

調査区中央東端部の 6683 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 6 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間に展開するピット群の東端に位置する。平面は楕円形を呈し、２つのピットが重なって検出している。南側を SP1064A とし、長軸 69cm、短軸 43cm、深さ 20cm で底面標高 87.78m を測る。深く掘り込まれる北側を SP1064B とし、長軸 25cm、短軸 20cm、深さ 36cm を測る。SP1064A は柱材が残存し、その下の底面から柱材と接する形で枝材が敷かれている様子が検出された。ピットの底面に敷かれた枝材が柱の沈下防止のための礎盤であることの傍証である。柱材は上部に切断痕があり、移設されたと考えられる。この柱材を用いた炭素年代測定にウィグルマッチ分析を行ったが、測定値が分散し、年代を絞り込むことはできなかった。

SP1069 ピット

調査区中央東部の 6682 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 6 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間に展開するピット群に位置する。平面は楕円形を呈し、長軸 60cm、短軸 33cm、深さ 14cm で底面標高 87.74m を測る。底面に礎盤として枝材を同一方向に２段敷いている。東に位置する SP1066、SP1064 が同軸上に並ぶが、対になるものが検出されない。

SP1073 ピット

調査区中央東部の 6581 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 6 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間に展開するピット群に位置する。平面は不整円形を呈し、長軸 49cm、短軸 41cm、深さ 36cm で底面標高 87.70m を測る。底面に礎盤として太めの枝材を 4 本敷く。

SP1084 ピット

調査区中央東部の 6580 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 5 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間に展開するピット群に位置する。平面は不整円形を呈し、長軸 54cm、短軸 42cm、深さ 34cm で底面標高 87.64m を測る。立ち上がりが不整形で東側が階段状、西側はオーバーハングする。底面に礎盤がみられるが、最深部ではなく底面から緩やかに立ち上がる部分に枝材を敷く。

SP1085 ピット

調査区中央東部の 6580 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 5 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間に展開するピット群に位置する。平面は楕円形を呈し、長軸 47cm、短軸 35cm、深さ 26cm で底面標高 87.72m を測る。底面と底面からの立ち上がり部分に礎盤として枝材を敷く。光沢のある樹皮の特徴から、樹種は桜などと考えられる。この枝材を用い炭素年代測定をしたところ、1512-1601CalAD(71.3%) という結果を得ている。

SP1088 ピット

調査区中央東部の 6580 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 5 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間に展開するピット群に位置する。平面は不整円形を呈し、長軸 46cm、短軸 33cm、深さ 31cm で底面標高 87.62m を測る。底面の枝材は疎らで、壁面に意識的に枝材を重ねている。壁面上位にも角度を変えて枝材が重なっている。

SP1111 ピット

調査区中央南端部の 6376 グリッドに検出したピットである。平面は楕円形を呈し、長軸 62cm、短軸 46cm、深さ 20cm で底面標高 87.76m を測る。底面に礎盤として同一方向に隙間なく多くの枝材を 2 段重ねている。

SP1125 ピット

調査区中央南部の 6477 グリッドに検出したピットである。平面は不整楕円形を呈し、長軸 53cm、短軸 37cm、深さ 26cm で底面標高 87.66m を測る。底面に礎盤として太めの枝材を敷く。部分的だが井桁状に 2 段重なる。

SP1130 ピット

調査区中央南端部の 6375 グリッドに検出したピットである。平面は楕円形を呈し、長軸 41cm、短軸 31cm、深さ 14cm で底面標高 87.80m を測る。底面に礎盤として多くの枝材を敷き詰める。

SP1133 ピット

調査区中央南部の 6677 グリッドに検出したピットである。平面は楕円形を呈し、長軸 37cm、短軸 27cm、深さ 8cm で底面標高 87.79m を測る。底面に礎盤として枝材を敷き、南側に寄った部分が井桁状に 2 段重なる。

SP1135 ピット

調査区中央南部の 6573 グリッドに検出したピットで、SD31C と SD2 溝状遺構の間に位置する。平面は円形を呈し、長軸 41cm、短軸 33cm、深さ 4cm で底面標高 87.73m を測る。礎盤として浅い底面に疎らに枝材を敷く。

SP1138 ピット

調査区中央南部の 6573 グリッドに検出したピットで、SD31C と SD2 溝状遺構の間に位置する。平面は円形を呈し、長軸 54cm、短軸 49cm、深さ 24cm で底面標高 87.60m を測る。礎盤として井桁状に 2 重に枝材を敷く。本遺構の掘り方は、枝材の底面よりも深く掘り込まれていた。本遺構以外の枝材の礎盤をもつピットで断ち割りをして確認したものは、すべて遺構の掘り込みの底面に枝材が敷かれている。

SP1139 ピット

調査区中央部の 6777 グリッドに検出したピットである。平面は円形を呈し、長軸 35cm、短軸 31cm、深さ 3cm で底面標高 87.79m を測る。礎盤として井桁状に二重に枝材を敷いている。腐朽のためか潰れて皮だけのようになっている。

SP1143 ピット

調査区中央部の 6676 グリッドに検出したピットで、SD35 溝状遺構の北端部に位置する。平面は楕円形を呈し、長軸 45cm、短軸 35cm、深さ 15cm で底面標高 87.73m を測る。礎盤として底面に枝材を敷く。数本が角度を変えて疎らに重なる。

SP1150 ピット

調査区中央部の 6875 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 2 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間の西側に展開するピット群に位置する。平面は楕円形を呈し、長軸 51cm、短軸 37cm、深さ 3cm で底面標高 87.85m を測る。礎盤として浅い底面に分割材のみを井桁状に重ねている。

SP1153 ピット

調査区中央部の 6776 グリッドに検出したピットで、西側 1.8m に SP1150 が位置する。平面は円形を呈し、長軸 39cm、短軸 31cm、深さ 19cm で底面標高 87.65m を測る。礎盤として底面に枝材を敷き、南壁には重ねて積んでいる。

SP1156 ピット

調査区中央部の 6777 グリッドに検出したピットで、SD24A 溝状遺構の南側に位置する。平面は円形を呈し、長軸 31cm、短軸 24cm、深さ 19cm で底面標高 87.63m を測る。礎盤として底面に枝材を敷く。

SP1157A・B ピット

調査区中央部の 6675 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 2 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間の西側に展開するピット群に位置する。遺構確認面から浅い部分に礎盤として枝材を敷く部分を SP1157A、その北側に 30cm 程度で開口し、A の底面から 10cm 強落ち込む部分を SP1157B とする。SP1157A の平面は不整楕円形を呈し、長軸 65cm、短軸 46cm、深さ 4cm で底面標高 87.84m を測る。SP1157B の平面は不整楕円形を呈し、長軸 34cm、短軸 14cm、深さ 14cm で底面標高 87.70m を測る。

SP1161 ピット

調査区中央部の 6773 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 1 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間の西側に展開するピット群に位置する。平面は楕円形を呈し、長軸 46cm、短軸 35cm、深さ 2cm で底面標高 87.74m を測る。浅い掘り込みの底面に、礎盤として分割材を井桁状に重ねている。

SP1163 ピット

調査区中央部の 6773 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 1 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間の西側に展開するピット群に位置する。平面は楕円形を呈し、長軸 37cm、短軸 24cm、深さ 2cm で底面標高 87.79m を測る。掘り込みはほとんど残らず、遺構検出面に礎盤としての枝材が並ぶ。

SP1169 ピット

調査区中央部の 6773 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 1 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間の西側に展開するピット群に位置する。平面は隅丸長方形を呈し、長軸 35cm、短軸 20cm、深さ 12cm で底面標高 87.70m を測る。底面に 20cm 弱の角礫が置かれるが、水平ではなく斜めである。南壁面際は径 4 cm ほどの打ち込み杭がみられる。

SP1170 ピット

調査区中央部の 6772 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 1 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間の西側に展開するピット群に位置する。平面は楕円形を呈し、長軸 41cm、短軸 23cm、深さ 13cm で底面標高 87.69m を測る。底面に 10cm 大の礫を置く。

SP1171 ピット

調査区中央部の 6772 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 1 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間の西側に展開するピット群に位置する。平面は円形を呈し、長軸 35cm、短軸 31cm、深さ 10cm で底面標高 87.70m を測る。底面に礎盤として枝材を、角度を変えて 2 段敷く。

SP1173 ピット

調査区中央部の 6772 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 1 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間の西側に展開するピット群に位置する。平面は円形を呈し、長軸 56cm、短軸 48cm、深さ 35cm で底面標高 87.47m を測る。急角度の壁面立ち上がりで、深い底面に礎盤として枝材を敷き詰める。

SP1174 ピット

調査区中央部の 6772 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 1 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間の西側に展開するピット群に位置する。平面は円形を呈し、長軸 47cm、短軸 46cm、深さ 19cm で底面標高 87.65m を測る。急角度の壁面立ち上がりで、礎盤として床面に枝材を疎らに敷く。

SP1176 ピット

調査区中央部の 6873 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 1 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間の西側に展開するピット群に位置する。平面は楕円形を呈し、長軸 43cm、短軸 34cm、深さ 20cm で底面標高 87.57m を測る。礎盤として底面から立ち上がり斜面にかけて枝材を敷く。

SP1178 ピット

調査区中央部の 6873 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 1 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間の西側に展開するピット群に位置する。平面は円形を呈し、長軸 50cm、短軸 47cm、深さ 10cm で底面標高 87.71m を測る。礎盤として底面から立ち上がり斜面にかけて枝材を敷き詰める。

SP1179 ピット

調査区中央部の 6873 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 1 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間の西側に展開するピット群に位置する。平面は隅丸長方形を呈し、長軸 49cm、短軸 36cm、深さは確認面に礎盤としての枝材が検出しており測れない。底面標高 87.77m を測る。枝材は幅広のものを 3 本並べている。

SP1182 ピット

調査区中央部の 6674 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 2 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間の西側に展開するピット群に位置する。平面は楕円形を呈し、長軸 39cm、短軸 29cm、深さは確認面に礎盤としての枝材が検出しており測れない。底面標高 87.79m を測る。枝材は同軸方向に並べている。

SP1186 ピット

調査区中央部の 6774 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 2 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間の西側に展開するピット群に位置する。平面は隅丸長方形を呈し、長軸 47cm、短軸 26cm、深さは 10cm で底面標高 87.73m を測る。礎盤として底面に枝材を同軸方向に並べている。

SP1192 ピット

調査区中央部の 6775 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 2 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間の西側に展開するピット群に位置する。平面は隅丸方形を呈し、長軸 57cm、短軸 49cm、深さは 2cm で底面標高 87.84m を測る。礎盤として底面南側に枝材を敷き、軸を変えて 2 段並べている。

SP1194 ピット

調査区中央部の 6874 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 2 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間の西側に展開するピット群に位置する。平面は隅丸長方形を呈し、長軸 45cm、短軸 36cm、深さは 3cm で底面標高 87.76m を測る。礎盤として底面に太めの枝材を並べている。

SP1206 ピット

調査区南西部の 6571 グリッドに検出したピットで、SD31C 溝状遺構の覆土の上につくられる。よって平面形は判然とせず、礎盤として敷き詰められた拳大の礫が検出することでその範囲が測られる。検出長 62cm、短軸 48cm、深さは 8cm で底面標高 87.60m を測る。建物柱穴の根石としてこれらの礫が詰められたと考えられるが、近くに同じタイプのピットが検出しない。北側 5.5m に同じ根石を持つピットで構成される SB62 が存在し、同じ建物となる可能性があるものの、対になるものが検出しない。

SP1207 ピット

調査区中央部の 6877 グリッドに検出したピットで、SD24A 溝状遺構の南側に位置する。平面は円形を呈し、長軸 26cm、短軸 21cm、深さは 17cm で底面標高 87.68m を測る。底面から立ち上がりにかけて、礎盤として枝材を同軸方向に並べている。

SP1240 ピット

調査区南東部の 6479 グリッドの SD2 溝状遺構の覆土上に検出したピットである。平面は円形を呈し、長軸 37cm、短軸 32cm、深さは 8cm で底面標高 87.84m を測る。底面に礎盤として枝材を同軸方向に疎らに並べている。

SP1252 ピット

エネルギー棟調査区の 7565 グリッドに検出したピットである。平面は楕円形を呈し、長軸 49cm、短軸 32cm、深さは 18cm で底面標高 87.83m を測る。底面に礎盤として枝材が雑然と敷かれる。

SP1253 ピット

調査区西部の 6871 グリッドに検出したピットである。平面は隅丸方形を呈し、長軸 46cm、短軸 38cm、深さは 10cm で底面標高 87.65m を測る。底面に礎盤として枝材を同軸方向に並べている。

SP1257 ピット

調査区中央東部の 6581 グリッドに検出したピットで、ピット集中区 6 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間に展開するピット群に位置する。平面は円形を呈し、長軸 43cm、短軸 38cm、深さは 24cm で底面標高 87.79m を測る。底面に礎盤として建築部材（148）を敷き、壁面に礫や凹石（170）を配置する。148 を用い炭素年代を測定したところ 1640-1670CalAD（68.9％）という結果が得られている。

SP1271 ピット

調査区中央南部の 6672 グリッドに検出したピットである。平面は楕円形を呈し、長軸 46cm、短軸 35cm、深さは 19cm で底面標高 87.56m を測る。底面から立ち上がりにかけて礎盤として枝材が同一方向に敷かれる。

SP1272 ピット

調査区中央西部の 6873 グリッドに検出したピットである。ピット集中区 1 とした SD2 と SD3 溝状遺構の間の西側に展開するピット群に位置する。平面は不整長方形を呈し、長軸 32cm、短軸 20cm、深さは 7cm で底面標高 87.73m を測る。底面から立ち上がりにかけて礎

盤として幅広の枝材が２枚敷かれる。

ピット集中区１・２

調査区西側の 6772 ～ 6875 グリッドを中心とし、南を SD2、東を SD30、北を SD24B、西を SD46 などの溝状遺構に囲まれる範囲に多くのピットが集中する。西をピット集中区１、東を集中区２として掲載している。一部 SB62 として建物を組めるものが含まれているが、他は対になるものが探せないピット群である。SD2 をまたいで南側に検出しているピット群もこれらと対になる可能性がある。

枝材や礫など礎盤をもつものが多い。SP1179、1178、1194、1163、1182 などは、枝材礎盤のピットであるが、いずれも掘り込みが浅く、遺構検出面で礎盤が検出しているという特徴を持つ。ただし、建物として組むには不整形で離れすぎている。

この場所は溝状遺構による区画が重複しており、SD2 と SD46 に区画されるのものや、SD24 や SD30 などがつくる区画の中に展開する建物の柱穴群と考えられる。また、SB62 は、これらの区画溝が埋没した後につくられており、多くの時期のものが混在していることが予想される。

ピット集中区３

調査区の南東端から調査区南端を西に向かって列状に検出するピット群である。6181 ～ 6277 グリッドを中心に検出し、第 27 図の左側に西側、右側に東側を掲載している。SP1009、1011、1014、1017 など柱材を残すものが多い。北側には SD1 まで２m 強の遺構空白域があるため、建物としては南側に展開することが予想される。南側は近代に建てられた谷地学校にも近く、それらの開発に伴うものも含まれていると思われる。

ピット集中区４

調査区南側の東端部、SD1 と SD2 に挟まれた地区 6380 ～ 6381 グリッドに検出されたピット群である。SD2 と重複して北側のピット集中区６と続きになることも考えられる。

ピット集中区５・６

調査区中央の東端部、SD2 と SD3 に挟まれた地区 6580 ～ 6683 グリッドに検出されたピット群である。西をピット集中区５、東を集中区６として掲載している。集中区５の南側、SP1088、1084、1085、1086 など枝材礎盤をもつピットが集中している。集中区６では中央部東端の SP1056 などから西の SP1053 へ進み、SP1073 などの南側に折れるように多数のピットを検出しているが、柱通りが悪く、反対側に配置されるべきピットも検出していない。集中区６の北側の SP1064、1066、1069、1070 なども１本のライン上に検出しているが、対になるものがみつからなかった。

３　溝状遺構と土坑

溝状遺構（SD）は、調査区の東西に展開する SD2 と SD3 を中心に 28 条検出している。東西に展開するものは N － 65°～ 75°－ W に、南北に展開するものは N － 17°～ 20°－ E に収まる近似した主軸を持つものが多い。それぞれ組み合わさって区画を作り出していたものと考えられる。これらはすべて同時期のものではなく、重複関係から時期差がうかがえる。土坑（SK）は 22 基検出している。明確に性格や機能を判断できるものは多くはない。いくつかのものは、近代と判断できる。これらは検出した順番に共通の遺構番号を付けている。以下特徴的なものを番号順に解説する。

SD １溝状遺構

位置：調査区南東側の 6281 ～ 6378 グリッドにかけて展開する溝状遺構である。軸は N － 72°－ W で東西方向に伸びる。本体工事区の南端部を隣接する SD2 溝状遺構と平行するように検出している。また、およそ 14 m西に離れているものの、同軸の延長線上に SD31A・31C 溝状遺構が検出している。

規模・形状：検出長は 12.4m ほどで、さらに東側調査区外に延長する。上端の幅 90cm、下端の幅で 45cm を測る。断面は逆台形状に開き、底面は概ね平坦であるが、東側の調査区壁際で掘り込まれ低くなる場所がある。この場所で床面の標高は 87.72m で最も低く、確認面からの深さは 30cm を超える。西側に向かうにつれて浅くなり、西端部では床面標高 87.92 m となる。この場所での確認面との差は数 cm ほどしかない。

前後関係：調査区壁際の断面をみると、基本土層Ⅲ層より掘り込みが見られる。覆土は黒色の粘土質シルトを基調とし、底面はⅣ層起源の灰白色土と混じる。明治期のものと考えられる SK15 土坑に切られる。縁辺にピット SP1030・1031・1037 があり、本遺構に帰属する柱穴

の可能性がある。

出土遺物と時期：遺物は白磁小坏の口縁片（１）と小型の下駄（123）のみである。1は覆土上層よりの出土でＤ類に属するもので 14～ 15世紀前半のもの。123は床面から出土し、形状自体は定型的な作りで新しい印象を受けるが、年代測定の結果は 1402-1440CalAD（95.4％）という結果を得ている。遺物自体は古手のものの、数が少ないため決め手に欠ける。遺構軸の同一性を重視すれば SD31A・Cと同じ時期の 16世紀中～ 17世紀前半代が考えられる。

SD2 溝状遺構

位置：調査区南部の 6382 ～ 6771 グリットにかけて展開する溝状遺構で、軸はＮ－ 73°－Ｗを東西方向に伸びる。本体工事区南側を調査区に沿って伸び、SD1・31 溝状遺構などと平行する。東側は調査区外へ伸び、西側は SD46 と直交する直前で立ち上がる。

規模：検出長は 44.7m ほど、幅は東側で広く、上端で 4.1 m、下端で 2.6 mを測るが、西側の端部では上端幅で 1.4 m、下端で 70cm となる。平均的な中心部の幅では上端 2.2m、下端 1.1m で程度のものとなろう。確認面の標高は東側で 88m、西側で 87.8m であり、ここからの深さは 40 ～ 50cm 程度である。底面の標高は 87.3 ～ 87.6 mを測り、全体的には西側へ緩やかに下っている。

形状：平面形は、基本的に南北の上端ラインが平行するが、6479 グリッド付近で上端の幅が 1.8 mほどにくびれる場所が３m ほど続く。このくびれ口の部分で床面が確認面付近まで立ち上がるが、すぐに下がる。そしてくびれの終わる場所で更に段をなして床面が下がる様子が見て取れる（断面図 f-f'）。この部分の覆土に変化もないため、埋戻しなどはないと思われる。土橋等の機能が考えられるが定かではない。全体的に底面は広く平坦で、壁面は逆台形状に開く。壁面の角度は底面から 20 ～ 45°程度で立ち上がる。

前後関係：東側の調査区壁面は撹乱が多いものの、基本土層Ⅲ層上面から掘り込みが見られ、床面はⅣ層中に収まる。覆土は黒色の粘土質シルトを基調とし、形を成す状態ではないが、全体的に植物の繊維が含まれる。重複する遺構を見ると、SD29・30・33・44・55 に切られ、SD35 を切る。直交する直前で止まる SD46 とは同じ区画意識でつくられたものと考えられ、同時期のものと判断する。SD46 は SD3 に切られるため、本遺構も SD3 よりも古いものと考えられよう。

出土遺物と時期：出土遺物は、残存率がよく、床面付近で出土したものには個別で位置を記録しているが、破片や上層で出土したものは一括で取り上げた。一括の取り上げは、平面位置をａ～ｃ区までの３区に分け、垂直位置を確認面やその付近で出土するもの､覆土上層のもの、床面のものに分けた。平面の地区は、調査区の東端から断面 g-g' のラインまでがａ区、そこから断面 d-d' ラインまでがｂ区、それより西側をｃ区としている。全体の出土遺物は多くはないが、ａ区に集中している。図化した陶磁器片は、いずれも小破片であるものの、白磁の皿の底部片（３）があり、小片ながら E 群の端反皿とみられ、覆土上層から出土している。他には珠洲の擂鉢と思われる口縁片（50）や越前の甕の体部片（54）などが床面から出土している。漆器の椀は小破片も含めるといくつか出土しており、いずれも黒色地に赤で文様を描くものである。97 や 103 は床面から出土している。109 は砕けてしまった漆椀の破片であり、炭素年代測定用の試料とした。銭はすべて渡来銭で 205 ～ 208 の 4 枚が床面からまとまって出土しているほか、遺構確認面でも 209 ～ 211 が重なって出土した。また、ひょうたんと考えられる袋状の植物（214）が出土しており、炭素年代の試料とした。

109 と 214 の試料から測定された年代は、両者とも 1410-1441CalAD（95.4％）という値が出ている。陶磁器類で時期判断できるものは多くはないが、３は白磁皿 E 群とみられるため、炭素年代の測定値と合わせて時間幅と解釈する。重複する SD3 の区画と併存することは考えられないことから、15 世紀中頃から機能し、SD3 がつくられる 16 世紀中頃に埋没したと考える。

SD3 溝状遺構

位置：6783 ～ 7464 グリッドにかけて展開する溝状遺構で、軸Ｎ－ 69°－Ｗで東西方向に伸びる。東側は調査区外へ延長し、西側は本体工事区の北側に沿って横断する。調査区をまたいでエネルギー棟区まで伸び、調査区の幅一杯に広がるため途中から南側の上端の縁辺は区外となる。東西に伸びてきた本遺構は、エネルギー棟

区中程で折れて南側に向かう。東西軸からの角度は 74°とやや内向きである。

規模：検出長は、本体工事区の東端からエネルギー棟区の検出部まで、83.6 mを測る。南側へ折れる部分の検出長は、北側角から 3.2m ほどである。検出幅は上端で 2.5 ～ 4 mほど、下端で 2.3 ～ 1.2m、折れて南に向かう場所では 0.6 mほどである。確認面の標高は、東西両端で 88m ほど、中央部では 87.8 m前後である。底面の標高は、途中上がり下がりはあるものの、86.8 ～ 87.2 m程度で、確認面からの深さは 70 ～ 90cm 前後を測る。

形状：平面形は基本的に 2 本の上端のラインが平行するが、6877 グリッド付近に南側へ大きく膨らむ場所が見られる。ここの土層堆積は、他のものと大きく異なり、Ⅳ層起源の青灰色のシルト質粘土層をベースに、黒色の粘土質シルトが幾層にも縞状に堆積している（断面 i-i'）。掘削後の人為的な埋め戻しと考えられ、7367 グリッドの断面 c-c' にも同様の堆積が見られる。底面は基本的に広く、壁面は逆台形状に開く。底面は、本体工事区の東側 6782 グリッド付近で 25cm ほど立ち上がる場所がある（断面 n-n'）。また、本体工事区の西端、断面 e-e' 付近では、それまでの床面よりも 40cm ほど下がり、底面標高としては最も深くなる。それより先、西側のエネルギー棟調査区に続くにつれ、少しずつ標高は上がって行く。壁面は底面から 35 ～ 40°程度で立ち上がる。

前後関係：調査区壁面で見る遺構の掘り込みは、基本土層のⅢ層中から始まり、底面はⅣ層中に収まる。覆土は黒色の粘土質シルトを基調とし、部分的にⅣ層起源の粘土質シルトが混ざる。重複する遺構は、SK40・56 に切られ、SD34、46・54 を切る。6874 ～ 6975 グリッド付近は、浄化槽があったため大きく撹乱を受けている。重機での表土掘削時にこの場所を掘削したところ、遺構底面まで撹乱が及んでいることを確認した。それより北西の 7171 ～ 7272 グリッド付近も多くの撹乱が見られ、配管が横断している場所もある。とはいえ比較的浅いため底面は検出できている。区画の内側に平行する SD24A･B との直接的な切り合いはないが、ほぼ平行し、同じ区画意識が感じられる。SD30 は 6877 グリッド付近の埋戻し部分で立ち上がっており、本遺構を北側のラインとして区画する意識があったものと考えられよう。よってこれらとは同時期のものと判断する。

出土遺物と時期：出土遺物は、残存率がよく、床面付近で出土したものには個別で位置を記録しているが、破片や上層で出土したものは一括で取り上げた。一括の取り上げは、平面位置をａ～ｄ区までの 4 区に分け、垂直位置を確認面やその付近で出土するもの、覆土上層のもの、床面のものに分けた。平面の地区は、調査区の東端から断面 i-i' のラインまでがａ区、そこから断面 h-h' ラインまでがｂ区、それより西側の本体工事区までをｃ区、更に西側のエネルギー棟区をｄ区としている。出土遺物の大部分は本遺構からのもので、平面位置ではｄ区の曲がり角の部分からの出土が特に多く、垂直位置では遺構確認面から出土するものが多い。

輸入陶磁では白磁皿 C 類の口縁部片（２）、青磁は龍泉窯系碗 B 類の蓮弁文碗（４、５）や稜花皿（６）、盤（９）がある。青花は C 群の碗が 3 点あり（11、12、14）、同じ絵付けを施す 11 と 12 は、未接合同一個体の可能性もある。B 群の皿（13）は、断面に漆継ぎの痕跡を強く残す。B 群の碗の底部もみられる（16）。

国内産の陶磁器では瀬戸美濃や肥前のものが確認でき、珠洲や越前などがわずかにみえる。産地不明のものも少なくない。瀬戸美濃では折縁深皿の口縁片（19）や筒型容器の底部（22）古瀬戸後期のものである。他は大窯期のもので、小天目（26）や皿（28 ～ 30）などある。肥前では唐津の皿の底部（34）や擂鉢の底部（61）、初期伊万里の染付碗（35 ～ 37、42）、皿（43）、猪口（46）などが出土している。他には珠洲の甕か壺の胴部片（51、52）、越前の甕の胴部片（55）などが出土している。産地不明の瓷器系陶器甕の胴部片（57 ～ 60）、瓦質土器片（63 ～ 65）、その他の陶磁器片（69、71、72、77）などがみられる。

漆器類や木製品は底面付近から出土するものが多い。漆器椀はほとんどが内外黒色で文様は赤で施すものである。110 のみ外面黒地で内面は赤地となる。96、98、104、113 は SD3 が折れ曲がる角の底部付近に出土したものであり、他の漆器椀もｄ区の出土が多い。下駄は東側のａ区で連歯下駄（124）と露卯下駄（126）が底面付近から出土している。その他の木製品では、131 は鉤状のもので 132 は先端にくびれを作り出しているものである。底面から出土しているため、炭素年代測定をしたところ、1481-1638CalAD（95.4％）という結

果が出ている。133 は単体で用いられるものではなく、何かを構成する部材であろう。炭素年代測定を２点のウィグルマッチで行い 1513-1601CalAD(70.6％）という結果となった。136 は隅丸方形の蓋で、縁辺に目釘が打たれた孔がある。135 は断面方形で先端が尖る串状のものである。

石製品では、石塔の相輪部（156）が底面から立ち上がりにかけて上下折れた状態で出土している。底面に下部、立ち上がりに上部があり、下部の下には重なって曲物の底板（119）が出土している。石塔の大きさや加工方法など上の寺遺跡（センター 183 集）で出土しているものに類似する。157 は石塔の一部になるものか、中央を窓状にくり抜いている。石材は 156 と同じ石質の凝灰岩である。他にも硯（158)、砥石（159、163)、台石（165)、凹石（167、169)、茶臼（172、173）などがある。172 は確認面よりもやや上層の壁際から出土したものであるが、本遺構のものとして掲載しておく。

金属製品は、渡来銭がｂ区の遺構確認面から 25 枚重なって出土した（174 ～ 198)。表面には繊維質の付着もみられ、袋状のものに入っていたと考えられる。212 と 213 は鉄滓であり、鍛冶滓と考えられる。付近に被熱痕跡を残す遺構はないが､近隣での鍛冶がうかがえる。

年代の判断できる出土遺物からは、15 ～ 17 世紀前半のものが多く、炭素年代の測定値とも一致する。新しいものは遺構確認面付近で多く出土しており、遺構の下限を示しているものと考えられる。遺構間の切合関係から、SD2 などの区画よりも新しいものであり、SB61 などの建物群よりは古いと判断できる。よって 16 世紀中頃機能し、17 世紀前半には埋没していたと考える。

SD4・5 溝状遺構、SK6・9 土坑

位置：調査区の北東側 6783、6881 ～ 6883 グリッドを中心に展開する溝状遺構や土坑である。SD3 溝状遺構に平行するように、同遺構の北側を、SD4 溝状遺構は軸 N － 67°－ W で、SD5 溝状遺構は N － 72°－ W で東西方向に伸びる。SK6・9 土坑は SD5 と重複している。

規模：SD4 の長さは 4.21m、幅は上端で 1 m 前後、下端幅は東側で 60cm、西側で 30cm ほどである。SD5 は長さ 10.1m、幅は上端で 54cm、下端で 24cm を測る。土坑は SK6 が長軸で 2.7m、短軸で 1.75m、SK9 は長軸 1.17m、短軸 74cm である。確認面標高は北東側で 88m、南西側で 87.9m 前後である。ここからの深さは、SD4 で 35cm、SD5 は 10cm で西側に行くほど浅くなり、そのまま立ち上がる。SK6 は 30cm､SK9 は 27cm である。

形状：SD4 の平面形は、中央部からやや西寄りが膨らみ、底面も幅広になる｡断面は逆台形で直線的に立ち上がる。床面は西側の中央部が最も深くなり、東側は徐々に高くなる。SD5 の平面形は、平行する上端が直線的に伸び、断面は浅い逆台形で直線的に立ち上がる。底面は東側で不定形になる場所がみられたが、撹乱による掘り過ぎと判断している。SK6 の平面は不整楕円形で南東よりの上端が伸びて SD4 とくっついてしまう。断面は緩やかに立ち上がり、底面は東側にまとまる。SK9 の平面は楕円形、断面は逆台形でやや急傾斜に立ち上がる。

前後関係：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はいずれもⅣ層中である。いずれの遺構も覆土は黒色の粘土質シルトを基調とし、Ⅳ層起源の粘土質シルトの混ざり方が異なることで分層される。SK6 や SK9 には植物繊維を大量に含む層が確認された。重複する遺構は、SD5 を SK9 が切り、SK6 は SD5 に切られる。

出土遺物と時期：出土遺物は少なく、SD4 に産地不明の陶器胴部片（74)、SK6 に曲物底板（117）と、加工木材（144）があるのみ。117 に充分な年輪が確認できたため、３点のウィグルマッチ分析を行ったところ、1107-1154CalAD（95.4％）という結果が出ている。古代の遺物を除けば、突出して古い値となり、同時代の陶磁器類も確認できていないため、測定値をそのまま受け入れることはできないが、重複関係からみても、これらの遺構の中では最も古いものである。

SD5 は、SD3 を挟んで SD24A と互い違いに伸びているという遺構配置から、同時期のものと判断し、16 世紀中頃～ 17 世前半が与えられる。

SK14 土坑

位置：調査区の南東部の 6279 グリッドを中心に検出する土坑である。

規模・形状：平面は東西に長い楕円形で、長軸は 161cm、短軸は 84cm を測り、深さは浅く、深いところでも 6 cm 程度である。底面や立ち上がりに打ち込み杭や枝材、礫などが確認できる。

前後関係と時期：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はいずれもⅣ層中である。覆土は黒褐色の粘土質シルトを基調とする。重複する遺構はない。出土遺物は肥前の磁器碗（40、49）などがあり、19 世紀以降のものと考えられる。

SK16 土坑

位置：調査区の南側のやや東寄り、6377 グリッドに検出する土坑である。

規模・形状：平面は東西に長い不整楕円形で長軸は 183cm、短軸は 109cm を測るがプランは判然としない。浅い底面から緩やかに立ち上がり、深さは最深部で 20cm を測る。

前後関係と時期：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はいずれもⅣ層中である。覆土は黒褐色の粘土質シルトを基調とする。重複する遺構はなく、出土遺物も得られていないため、時期は不明である。

SK17 土坑

位置：調査区の南東側、SD1 と SD2 の間の 6379 グリッドに検出する土坑である。

規模・形状：平面は南北に長い楕円形で、長軸は 232cm、短軸は 130cm、深さは最深部で 32cm を測る。壁面は逆台形で、丸みをもって立ち上がり。床面は安定的な平面を作り出している。

前後関係：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はいずれもⅣ層中である。覆土は黒褐色の粘土質シルトに粘土ブロックが混在する層と植物繊維を大量に含む層が互層状に入り込む。覆土的には SK32 と類似する。重複する遺構はない。

出土遺物と時期：比較的多くの出土遺物があり、青花の皿の底部片（17）、漆器椀の口縁片（111）、露卯下駄が 2 点（125、127）、櫛は本遺構のみの出土で 2 点（128、129）、表裏に判読不能の墨痕が残る長方形の木札（134）、小型の凹石（166）、裏面にノミ痕が残る石鉢片（171）などがある。下層に含まれていたクルミの実から炭素年代を測定した結果、1490-1603CalAD（76.1％）という結果を得ている。これは SD3 などの出土遺物の測定で出るパターンと同じであり、16 世紀中～ 17 世紀前半と考えられる。

SK21 土坑

位置：調査区の中央東側、6579 グリッドを中心に検出する土坑である。

規模・形状：平面は円形で曲物を埋め込んだ土坑である。直径は 140cm、深さは 22cm 程度を測る。近代の遺構と判断されたため、半裁し、形状と底面を確認した状態で止めている。

前後関係と時期：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はⅣ層中である。覆土は黒色の粘土質シルトを基調とする。重複する遺構はない。大量の近代陶磁器が出土している。白磁小坏の口縁片（226）に「明治三十九年」と上絵がされており、他のものも同時期に一括廃棄されたものと考えられる。同様の規模で曲物を埋め込む遺構がいくつか確認されており、SK10、11、18、58 も同じ時期のものと判断される。

SD24A・B 溝状遺構

位置：調査区北側の 6780 ～ 6972 グリッドに展開する溝状遺構で、SD3 溝状遺構の南側を平行し、軸は N － 72°－ W で東西方向に伸びる。南北方向に伸びる SD30 溝状遺構と直交する場所で立ち上がり、越えたところで掘り込みがはじまる。SD30 を挟んで東側を SD24A、西側を SD24B としている。SD24B は撹乱により中間部を大きく失うが、両端部が同軸の延長線に検出するため同遺構と判断している。

規模：SD24A は長さ 17.03m、幅は上端で 67cm、下端で 40cm を測る。SD24B は両端部間の検出長 17.39 m、幅は上端で 67cm、下端で 40cm である。確認面の標高は 87.76 ～ 87.8 でほぼ平坦、深さは SD24A で 30cm 前後、一部深くなる場所では 61cm を測る。SD24B は、撹乱の東側で 26cm、西側で 36cm となる。

形状：SD24A・B とも平面形は平行する上端のラインが直線的に伸びている。SD30 との直交地点は、幅数 cm の稜線を残す程度まで掘り込みが及ぶものの、結合せずに立ち上がる。SD24A は中央部に一段深くなる場所がある。この場所では平面形もやや膨らみ上端幅で 95cm を測る。断面形は、ほぼ垂直に立ち上がるバケツ形で、北壁部は一部オーバーハングし、深さは溝部の底面から更に 30cm ほど下がる。それ以外の場所の断面形は、や

や急斜度の逆台形となり、底面は安定している。SD24Bは撹乱の西側の断面 b-b' で、底面が確認面付近まで立ち上がり、再び下がる様子が看取できる。幅は上端も下端も東側では太く、西側では細くなっている。

前後関係と時期：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はいずれもⅣ層中である。覆土は黒褐色の粘土質シルトを基調とし、SD24A では砂層を特徴的に含む。SD24A で重複する遺構は、SD34 溝状遺構を切っている。また、一段低くなる場所は、覆土が共通するため別遺構ではないと判断できる。SD24B では SB61 掘立柱建物を構成する SP1196 に切られている。また、SD30 との関係は、その存在を意識したつくりとなっているため同時期のものと判断できよう。出土遺物はない。考えられる時代は、SD30 などと同じ 16 世紀中頃～ 17 世紀前半となる。

SD26 溝状遺構

位置：調査区中央の北端部 6979 ～ 7079 グリッドを中心に展開する溝状遺構である。SD3 溝状遺構の北側、SB60 掘立柱建物の東隣に位置し、軸 N － 20°－ E で南北に伸びる。北側は調査区外へ伸び、南端部は東側に曲がる。

規模：検出長は 9.18m、幅は 2 条平行している部分の上端で 99cm、南部の東に曲がった先の上端幅で 40cm、下端幅は 32cm を測る。確認面の標高は 87.8m 前後でほとんど差はない。深さは中央部で 26cm、南部で 9 cm ほどである。

形状：北部の南北方向に伸びる部分には、途中まで 2 条の溝がくっついている。東側のほうが浅く、断面は b-b' の様にテラス状になる。底面は総じて不定形であるが、南部の東に曲がる部分から特に目立つようになる。底面の際が窪むようなものはピットになる可能性も考慮し図化しているが、柱根などは検出されていない。

前後関係：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はいずれもⅣ層中である。覆土は黒褐色の粘土質シルトを基調とする。SD3 の北側に広がる空間を東西に分けるためのものと考えられる。本遺構の西側に SB60 があるが、本遺構は東側に曲がるため、これを区画するものではないものと考えられる。東側には、南北方向のピット列を検出しているが、東西方向に組めるピットがなく建物を組めない。重複する遺構はない。

出土遺物と時期：砥石が 2 点（161、164）と凹石（168）が出土している。比較的大きくもない規模にも関わらず、石製品ばかり 3 点も出土しているのが特徴的といえよう。これらの出土遺物のみで重複関係もないため、時期の特定は困難である。

SD29 溝状遺構

位置：調査区中央南側の 6475 ～ 6476 グリッドを中心に展開する溝状遺構で、SD30 溝状遺構と SD2 溝状遺構との間を、軸 N － 47°－ E 方向で南北に伸びる。

規模：検出長 6.6m で上端幅 43cm、下端幅 24cm である。確認面の標高は東側で 87.9m、西側で 87.82m であり、深さは最深部で 12cm を測る。

形状：平行する上端のラインが直線的に伸びる。断面は浅い逆台形状で、SD2 との接合部では確認面に迫るほど浅くなる。

前後関係と時期：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はⅣ層上面である。覆土は黒褐色の粘土質シルトに灰色の粘土ブロックが混ざる。本遺構とほぼ同軸で北側の SD2 と SD3 との間に、コンクリート製の小型 U 字溝が部分的に検出している。本来の位置はより上層にあったものと思われるが、部分的に沈み込んだものが検出している。本遺構はこれと同じものとも考えられる。しかし、本遺構の延長線上からは、わずかにずれていることや、U 字溝を埋めていた砂利が本遺構からは検出していないことから、別遺構として掲載しておく。重複遺構は SD2・30・35 があり、これらよりも新しい。

SD30 溝状遺構

位置：調査区中央南端部から北に向かう 6475 ～ 6876 グリッドを中心に展開する溝状遺構で、調査区の南端を軸 N － 47°－ W 方向で東西に伸び、そこから北に折れ曲がり、軸 N － 20°－ E 方向で南北に伸び、途中 SD2 溝状遺構を横断し、SD3 溝状遺構まで届く。

規模：長軸は東西に 5.17m 進み、北に折れ曲がり 23.44 mほど伸びる。幅は場所により差が大きく、SD2 より南では上端幅で 145cm、下端幅で 95cm ほど、SD2 より北では、幅広の部分で上端幅 170cm 前後、下端幅で 125cm ほどを測るが、狭くなる部分では上端幅 50cm、下端幅 34cm である。深さは北側の最深部で

51cm、南側の浅い部分では 20 ～ 30cm ほどである。

形状：平面形は、南側の東西に伸びる場所では不定形であり、下端の際には杭が不規則に検出する。南北方向に曲がってからは安定した形状となり、SD2 を越えた場所では２か所の拡幅部とそれに挟まれた狭窄部がみられる。北側の拡幅部では、縁辺にピットや木杭がみられる。更に北側では SD24 の A と B に挟まれる部分を通過し、SD3 の埋戻し部分で収束する。断面形は南側では浅い逆台形でところにより段をなす。それ以外では逆台形で深い底面から急斜度で立ち上がる。底面は東西方向に進む南側では不定形で浅く、南北方向に曲がるところから一段深くなる。２か所の拡幅部のうち南側のものは、幅広で安定した底面を作り出しているが、北側のものの底面は南側がやや段になり、北側に向けて下がっている。両者間の狭窄部は、拡幅部よりも 10cm 程度床面が高くなっている。

前後関係：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はⅣ層中である。覆土は黒褐色の粘土質シルトを基調とする。重複する遺構は南から SD31A・B、SD29、SD2、SD34、SD3 とあり、SD29 より古く、SD2・34 よりは新しい。SD2 との新旧関係は、SD2 の断面 e-e’ で確認できる。SD31A・B との関係性はとらえ難いものの、東西に続いてきた溝状遺構が本遺構に直交する場所で途切れていることから、同じ区画を構成していたように思える。SD3 との関係性は、SD3 の縁辺まで伸び、それより先には続かないことから、SD3 を北端として利用する区画意識がうかがえ、同時期の所産であると考えられる。

出土遺物と時期：漆器椀の底部片（105）、曲物の側板（118）、笊（121）、木蓋が３点（120、138、137）、杭（143）などがある。121 は北側の拡幅部の覆土上層から出土したものである。ほぼ完形となるもので土ごと固めて取り上げている。143 の杭はその付近から出土したもので、炭素年代を測定したところ、ふたつのピークがあり、1460-1527CalAD（46.3 %）、1555-1634CalAD（49.1 %）となった。総じて SD3 のものでみられるものと同じであり、遺構配置から看取できる区画意識からしても同時代のものと考えられよう。よって 16 世紀中頃から 17 世紀前半が与えられる。

SD31A・B・C 溝状遺構

位置：調査区南端の中央から西部の 6475 ～ 6670 にかけて、途切れたり互い違いになったりして検出する３条の溝状遺構である。軸はいずれも N － 70° － W 方向で東西に伸びる。

規模：A は SD30 溝状遺構に直交するまで長軸で 2.14m を検出し、上端幅 80cm、下端幅で 60cm を測る。深さは 20cm ほどである。B は SD30 に直交するまで 7.72m を検出し、上端幅 66cm、下端 47cm ほどである。深さは最深部で 10cm ほどと、平行する A や C よりも浅い。C は検出長 16.38m で西側を撹乱に切られる。上端幅 80cm、下端幅 45cm、深さは 20 ～ 30cm ほどを測る。

形状：平面形は平行する上端が直線的に伸び、端部までほぼ同じ幅で続く。A・C と B が隣接して平行し、上端が重なる。同軸延長線上に位置する A と C は、1.8m の間があり、その場所に収まるように SK32 土坑が位置する。断面はいずれも浅い逆台形状で、B の床面はやや不定形で、中央部に最深部をもち、端部は浅く確認面に近づく。A や C は安定的な底面が続く。

前後関係と時期：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はⅣ層中である。覆土は黒褐色の粘土質シルトを基調とし、灰色粘土ブロックの混ざり方で分けられる。出土遺物はない。A ～ C はその位置関係からセットで区画する意図があったと思われ、同時期のものと考えられる。重複する遺構は SD30 があり、これと直交する場所で途切れることから、本遺構で東西、SD30 で南北をという区画意識がうかがえ、同時期の所産と考えられる。C の西側に重複する SP1206 は根石を敷き詰めたピットで、より新しい時期のものである。直接的な重複関係はないが、A と C との間に丁度収まる SK32 は、その位置から同時期のものと判断できよう。これらの遺構配置から 16 世紀中頃から 17 世紀前半代が考えられる。

SK32 土坑、SD33 溝状遺構

位置：調査区中央南側、6474 ～ 6575 グリッドにかけて検出する SK32 土坑と SD32 溝状遺構の重複したもので、両者とも軸 N － 25° － E 方向で、SD31 と SD2 の間を南北に伸びる。

規模：SK32 は検出長軸 148cm、短軸で 108cm、確認面からの深さは 56cm を測る。SD33 は検出長 3.43 m、上端幅で 173cm、下端幅で 115cm、深さは 36cm である。

形状：SK32 の平面形は、南北に長い長方形で、断面からみると上端は更に北側へ伸びていたものとわかる。断面は、北壁以外急角度で立ち上がるバケツ形である。床面は平坦なものの湧水があり、正確な判断が困難である。覆土の 4 層は地山に 3 層の覆土が染み込んだものかもしれない。SD33 の平面形は、長方形に近い。平行する上端のラインが SD2 の南壁斜面中に曲がり収束する。SK32 に切られる南端部は幅広である。壁面は丸みをもつ立ち上がりで、西壁面の方が緩やかな傾斜となる。床面は幅広で安定した底面をつくり、重複する SK32、SD2 よりも高い床面標高となる。

前後関係と時期：両遺構とも遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はⅣ層中である。両者とも覆土は黒褐色の粘土質シルトを基調とし、上層には特徴的に植物繊維を含む土層が堆積する。下層も粘土ブロックを多く含む層が多く、人為的な埋戻しが考えられる。重複関係は SD2 よりも SD33 の方が新しく、SK32 は SD33 よりも更に新しい。とはいえ SK32 と SD33 は、共通する覆土などから別時期のものではなく、埋戻し時の差と考えてよいだろう。また、SK32 をまたぐように SD31A と SD31C が位置しており、意識的な配置と考えられるため、これらとは同時期のものと考えられる。出土遺物は SD33 に産地不明陶器の胴部片（73）が出土するのみである。遺構の配置から 16 世紀中頃～ 17 世紀前半が想定される。

SD34 溝状遺構

位置：調査区中央部の 6674 ～ 6981 グリッドにかけて展開する溝状遺構である。軸は N － 80°－ E で東西方向に伸び、6779 グリッド付近から弧を描き、軸 N － 46°－ E 北上し、調査区外へと伸びる。

規模：検出長は 33.28m を測る。幅は総じて狭く、上端幅で 25 ～ 74cm、下端幅 12 ～ 45cm ほどを測り、深さは 20 ～ 30cm 前後である。

形状：不整形ながらも平行する上端のラインがみられ、弱く蛇行しながら東西に進み、丸みをもって北へ曲がる。南西の端部は細く窄まり立ち上がる。断面は基本的に逆台形を呈するものの、場所により傾斜の差が大きく、判然としない部分も少なくない。床面は不定形で狭く、不明瞭である。覆土に特徴があるため、それを追うことで遺構の範囲を確定している。

前後関係：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はⅣ層中である。上層の覆土は暗褐色の粘土質シルトに大量の樹皮状の繊維が含まれるもので、下層はⅣ層をベースに上層のものが混ざり込む。重複する遺構は西から SD30・24・3、SK57 などがあり、いずれにも切られる。本遺構のみ、他の溝状遺構と比べて軸が大きく異なり、覆土の質感も特徴的なため、大きな時期差を予期させる。

出土遺物と年代：出土した遺物はすべて縄文土器である。いずれも小片で型式判断できるものは少ないが、78 は後期後半の瘤付きの口縁部片であり、他のものも後期後半のものと考えられる。しかし、覆土に含まれる植物繊維を炭素年代測定にかけたところ、764-881CalAD（71.1 %）という結果が出ているため、これらの縄文土器は流れ込みと判断できよう。平安時代の土器は、他の遺構での流れ込みや、遺構確認面でいくつかみられることから、調査区周辺に同時代の土地利用が一定規模あったことがうかがえる。

SD35 溝状遺構

位置：調査区中央南部の 6476 ～ 6676 グリッドを中心に展開する溝状遺構で、軸は N － 20° － E 方向で南北に伸びる。西側 80cm ほどに SD30 溝状遺構が平行し、途中 SD2 溝状遺構を横断する。

規模：SD35 は長軸で 6.68m、上端幅 95cm、下端幅 74cm を測る。SD35 の深さは最深部で 50cm を測る。

形状：平面形は、途中に膨らむ部分があるものの、基本的に上端のラインは平行し、端部は幅広のため、長方形のようになる。断面は急傾斜の逆台形であり、特に西側の壁面は急角度となる。床面は幅広で安定しており、南端部は緩かに傾斜しながら上がってゆく。隣接する SD30 よりは若干床面の標高が高い。

前後関係と時期：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はⅣ層中である。覆土は黒褐色の粘土質シルトに灰色の粘土ブロックが含まれる。SD2 の断面 e-e' ではこの覆土層を確認できないため、SD2 よりも古いと判断できる。出土遺物はないため、直接的な時期判断はできないが、重複関係から 15 世紀中頃以前とする。

SD43 溝状遺構

位置：調査区の南端部、SD31 の南側の 6472 グリッド

に検出する溝状遺構である。軸はＮ－20°－Ｅで南北方向に伸び、南側は調査区外へ続く。東側には付属するピット EP1 がある。

規模：長軸は検出長で 2.83m、幅は上端幅で 109cm、下端幅で 55cm、深さは 36cm である。EP1 は東西に長く、長軸で 68cm、短軸で 43cm、最深部の深さは 13cm である。

形状：平面形は、平行する上端のライン、端部は幅広となるため、長方形のようになる。断面は逆台形で直線的に立ち上がる。底面は幅広で安定的である。EP1 は不整楕円形で壁面や床面は不定形である。

前後関係と時期：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はいずれもⅣ層中である。覆土は黒色の粘土質シルトを基調とする。EP1 よりも新しい。重複する遺構はなく、他の溝状遺構とのセット関係も不明である。出土遺物はなく、時期を判断するのは困難である。

SD44 溝状遺構

位置：調査区の南西部、SD2 をまたいで 6573 ～ 6774 グリッドに検出する溝状遺構である。軸はＮ－17°－Ｅで南北方向に伸びる。

規模：長軸は 7.42m、幅は上端幅で 57cm、下端幅で 43cm、深さは最深部でも 10cm ほどである。

形状：平面形は、平行する上端のラインが伸び、端部は窄まる。断面は浅い逆台形で、底面は不定形で SD2 を越えて北側に行くほど浅くなり、確認面との差がなくなるように立ち上がる。

前後関係と時期：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はいずれもⅣ層中である。覆土は黒色の粘土質シルトに灰色粘土のブロックを含む。重複する遺構は SD2 よりも新しく、SD2 の断面 c-c' で確認できる。出土遺物は得られていない。区画溝としての性格が予想されるが、その範囲は不明である。

SK45 土坑

位置：調査区の中央部、6873 グリッドを中心に検出する土坑である。

規模・形状：平面は長方形で長軸 280cm、短軸 190cm、深さは 40cm 程度を測る。近代の遺構と判断されたため、半裁し、形状と底面を確認した状態で止めている。

前後関係と時期：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はⅣ層中である。覆土は 5mm 径の礫と砂で埋められていた。重複する遺構はない。大量の近代陶磁器が出土している。味の素の瓶（245、246）から昭和初期のものと考えられる。

SD46・55 溝状遺構

位置：6672 ～ 7373 グリッドに検出し、調査区の西部を縦断する溝状遺構である。SD46 の軸はＮ－18°－Ｅで南北方向に伸び、途中 SD3 溝状遺構に切られて、北側に続き、調査区外へと延長する。SD55 は南北から東西方向に曲がり、SD2 や SD46 を切りながら合流する。

規模：SD46 の検出長は 29.6 m、幅は上端で 130cm、下端で 56cm を測る。中央にくびれる部分があり、上端幅で 58cm、下端幅で 30cm を測る。確認面の標高は 87.74 ～ 87.80 mの間で前後する。深さは 35 ～ 56cm を測る。SD55 は検出長で 4.6m、幅 46cm、深さ 26cm である。

形状：SD46 の平面形は、中央部にくびれる部分がある他は、基本的に東西の上端ラインが平行する。底面は、くびれの南側で深くなり、それ以外ではほぼ安定的で、底面標高は 87.18 ～ 87.34m を測る。壁面は安定的な底面から逆台形状に立ち上がる。SD55 は SD2 と SD46 をつなぐように位置し、やや不定形な底面から逆台形状に立ち上がる。

前後関係と時期：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はいずれもⅣ層中である。SD46 の覆土は黒色の粘土質シルトに灰色粘土粒が混在する。SD55 は黒色の粘土質シルトに砂や灰色粘土粒が層状に含まれる。重複関係は SD46 を SD3、55 が切り、SD55 は SD2 も切っている。SD46 は SD2 とセットで区画をつくり出しているため、同時期のものと考えられる。出土遺物はなく、直接的な時期判断はできないが SD46 は SD2 と同じ 15 世紀中頃から 16 世紀中頃が与えられる。SD55 は SD2、46 を切るものの、これに合流していることから、時期的に大差はないと考えられる。

SK49 土坑

位置：調査区の北西側、SD3 の北側の 7174 グリッドに

検出する土坑である。

規模・形状：40cm 径の曲物で、底板から側板が 14cm ほど残存する。ほぼ遺構検出面で出土し、掘り込みはほとんどない。西から東に傾いて出土している。

前後関係と時期：検出はⅢ層中にあり、旧地表面から浅い掘り込みで置かれたものと思われる。曲物の中には黒褐色の粘土質シルトが堆積していた。わずかに残る曲物内の覆土から、成人と思われる歯（122）が 5 本出土した。うち 2 本を用い炭素年代を測定した結果、1417-1448CalAD（95.4％）という結果を得ている。こういった出土遺物から円形木棺の可能性が考えられるが、成人のものとしては小型過ぎる。SD2 と SD46 がつくる区画の内側にあり、炭素年代のピークも SD2 のものと類似することから、これらの遺構と同じ 15 世紀中頃～ 16 世紀中頃が考えられる。

SK51 土坑

位置：調査区の南西端、6569 グリッドを中心に検出する土坑である。

規模・形状：平面は円形で長軸は 148cm、短軸 139cm を測る。壁面は丸みをもって立ち上がり、床面とともにやや不定形で凹凸が多い。深さは最深部で 35cm を測る。

前後関係と時期：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はいずれもⅣ層中である。覆土は黒色の粘土質シルトを基調とする。重複する遺構はない。北側のすぐ近くに撹乱が入る。出土遺物はなく時期の特定は困難である。

SD52 溝状遺構

位置：調査区の西部南端、6471 ～ 6571 グリッドを中心に検出する溝状遺構である。軸は N － 67° － W で東西方向に伸びる。

規模・形状：平面は不整形で、長軸は 3.78 m、幅は 79cm を測る。ほとんど掘り込みはなく、深さは最深部でも 5cm 程度で、底面は極めて不定形である。

前後関係と時期：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はⅣ層中である。覆土は黒色の粘土質シルトを基調とする。重複する遺構はない。陶磁器類の出土はないが、渡来銭（199）や動物の骨（216）が数点出土している。中世のものと考えられるがそれ以上の特定は困難である。

SK57 土坑

位置：調査区の北東部、6981 グリッドを中心に検出する土坑である。

規模・形状：平面は楕円形で長軸 122cm、短軸で 70cm、深さは最深部で 48cm を測る。

前後関係と時期：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はⅣ層中である。覆土は黒色の粘土質シルトを基調とし、途中に粘土粒を多く含む層が挟まれる。SD34 溝状遺構を切っている。出土する遺物はなく時期の特定は困難である。

SK58 土坑

位置：調査区の北東部、6980 グリッドに検出する。

規模・形状：平面は方形で一辺 90cm、深さは最深部で 32cm を測る。

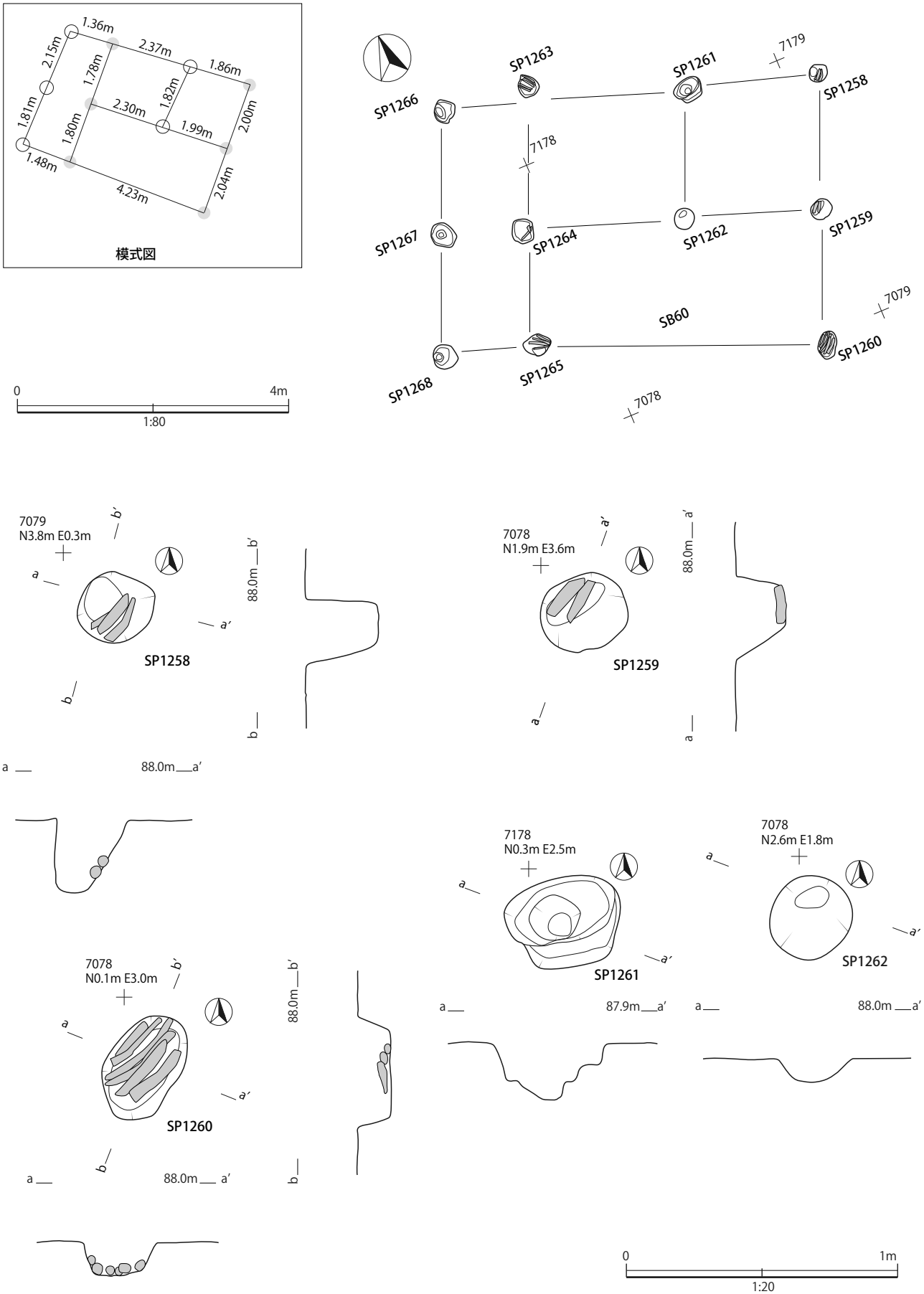
前後関係と時期：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はⅣ層中である。覆土は黒色の粘土質シルトを基調とする。重複する遺構はない。出土する遺物は瀬戸や肥前の陶磁器類を中心に 228 ～ 232 を得ている。SK21 や SK45 よりも古い印象を受けるが、それでも 19 世紀以降のものと考えられる。

SK59 土坑

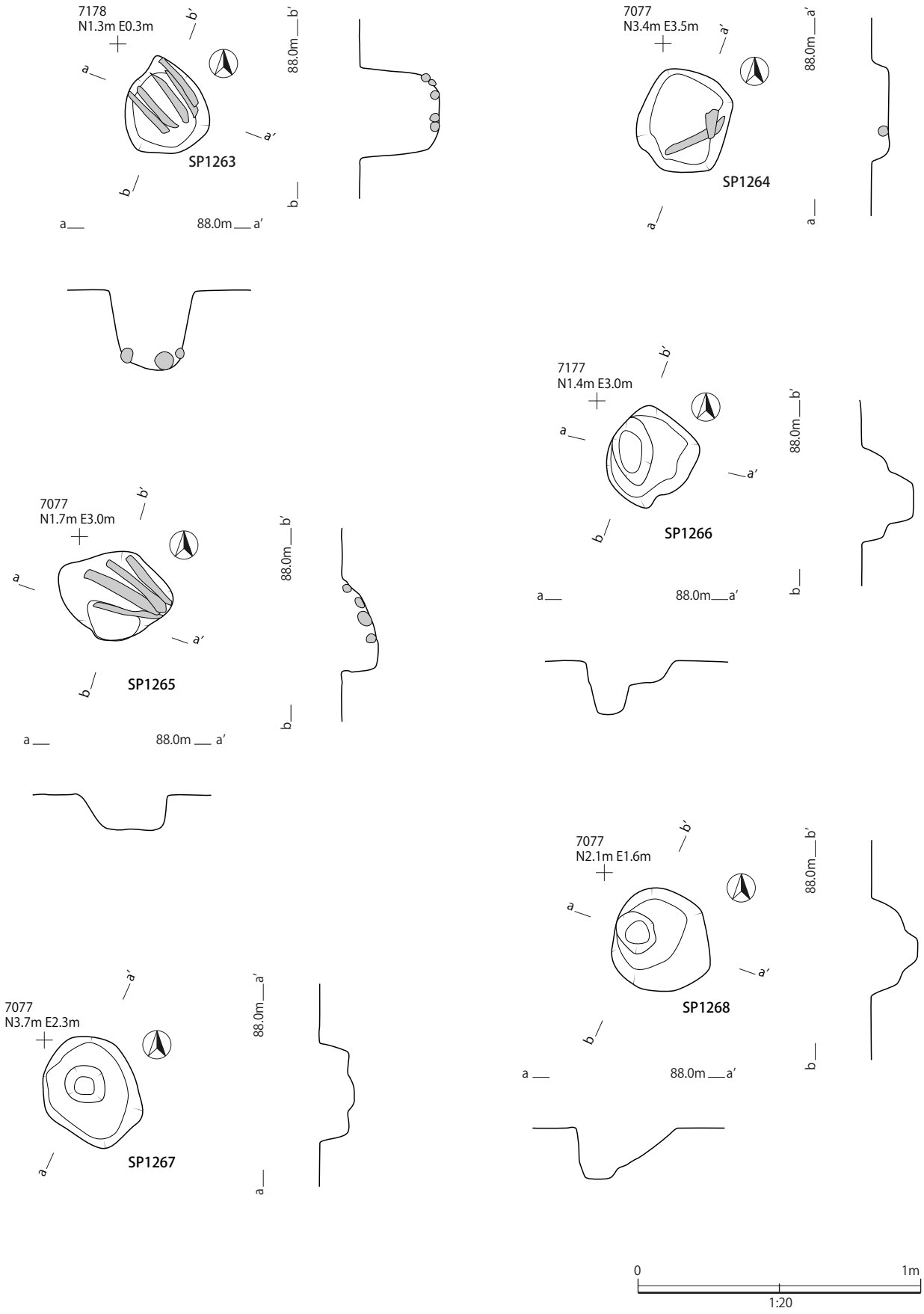
位置：調査区の西側、SD46 の南西に隣接した 6770 グリッドに検出する土坑である。当初ピットとしてとらえたが、掘り進めると底面や壁面が広がったため、土坑として振り替えた。

規模・形状：平面円形で長軸 91cm、短軸 88cm、深さ 48cm を測る。底面に礫を詰め、壁面にも枝材や礫が組まれている。井戸のようにもみえるが規模が小型過ぎ、ピットとして考えるには、他のものと比べ大き過ぎる。

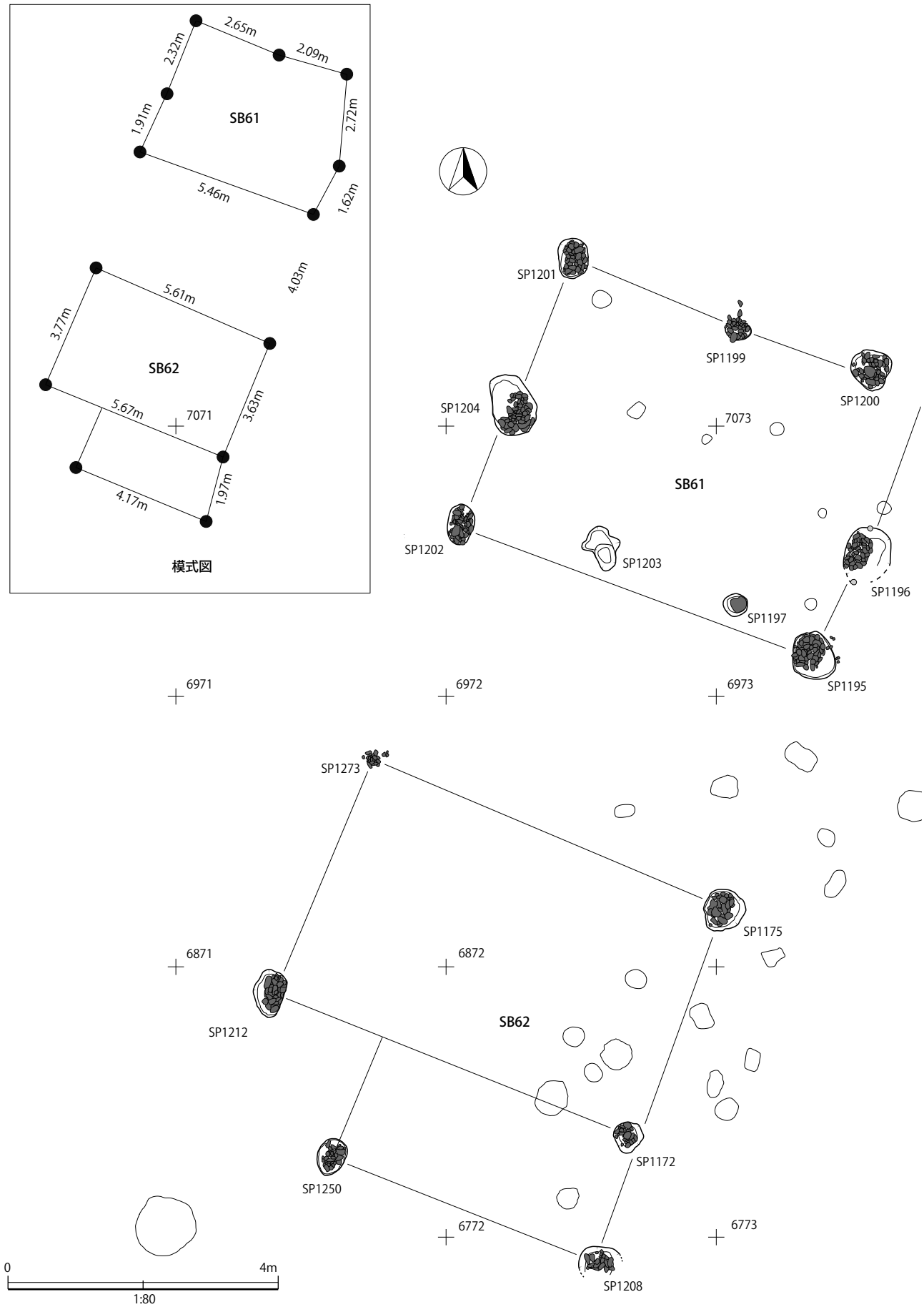
前後関係と時期：遺構検出はⅢ層下からⅣ層上で、遺構の底面はⅣ層中である。覆土は黒色の粘土質シルトを基調とする。重複する遺構はない。出土遺物には唐津の皿の口縁片（33）があり、17 世紀前半代が与えられる。加えて壁に組まれていた建築部材（139）を炭素年代測定したところ、1633-1668CalAD（78.8％）との結果が得られている。これらの結果から 17 世紀前半以降の年代が考えられる。



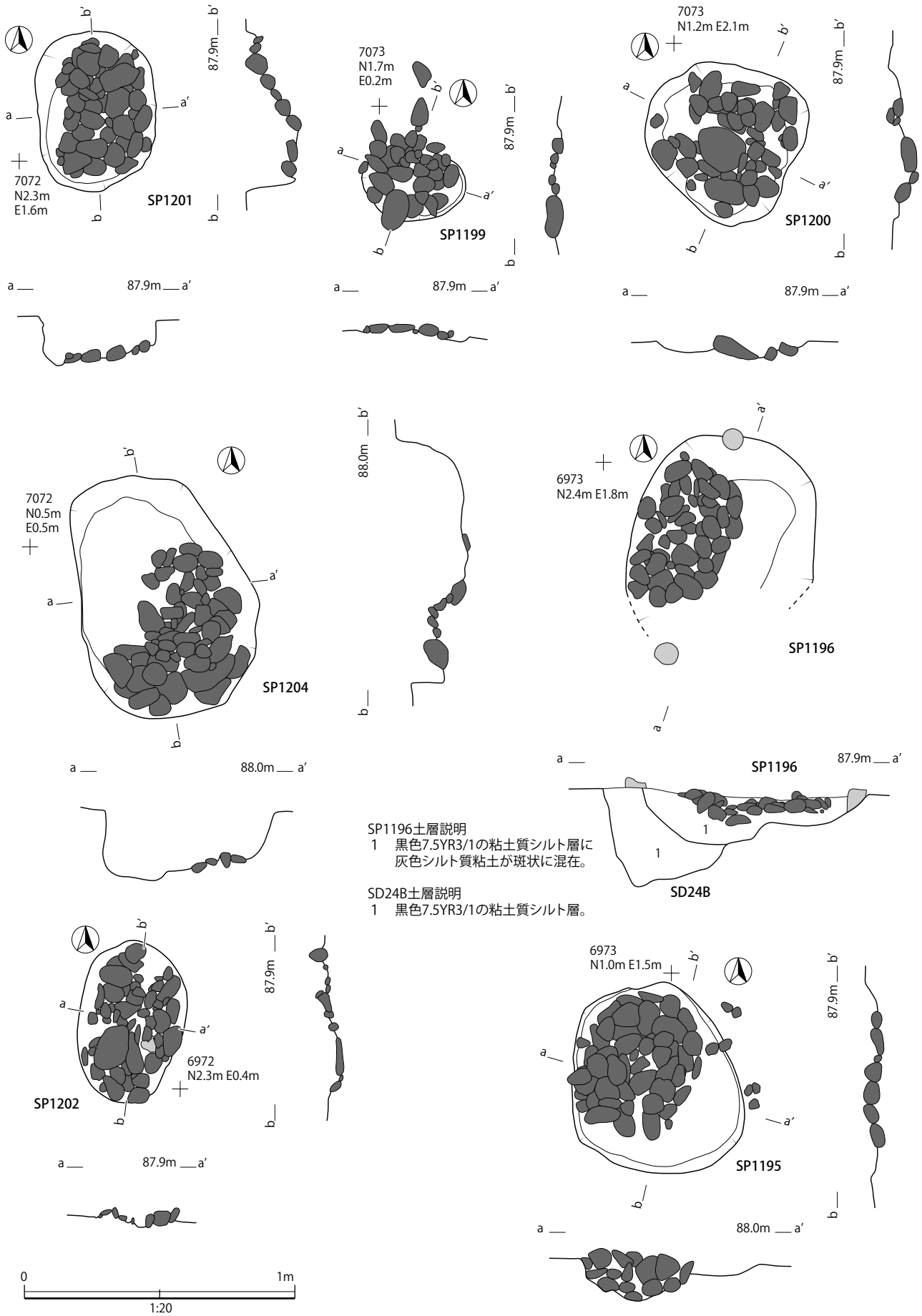
第 10 図　SB60 掘立柱建物跡 1



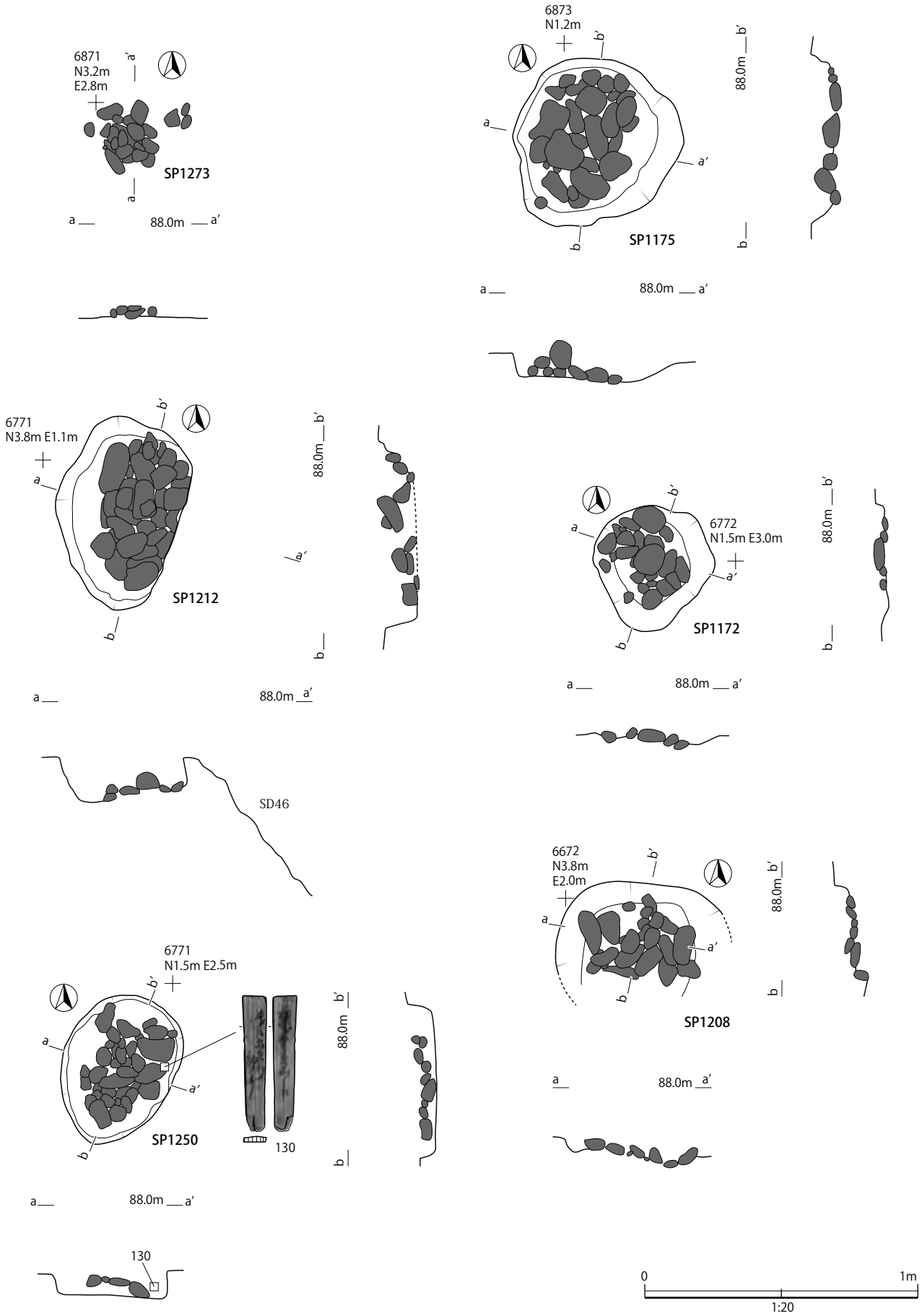
第 11 図　SB60 掘立柱建物跡 2



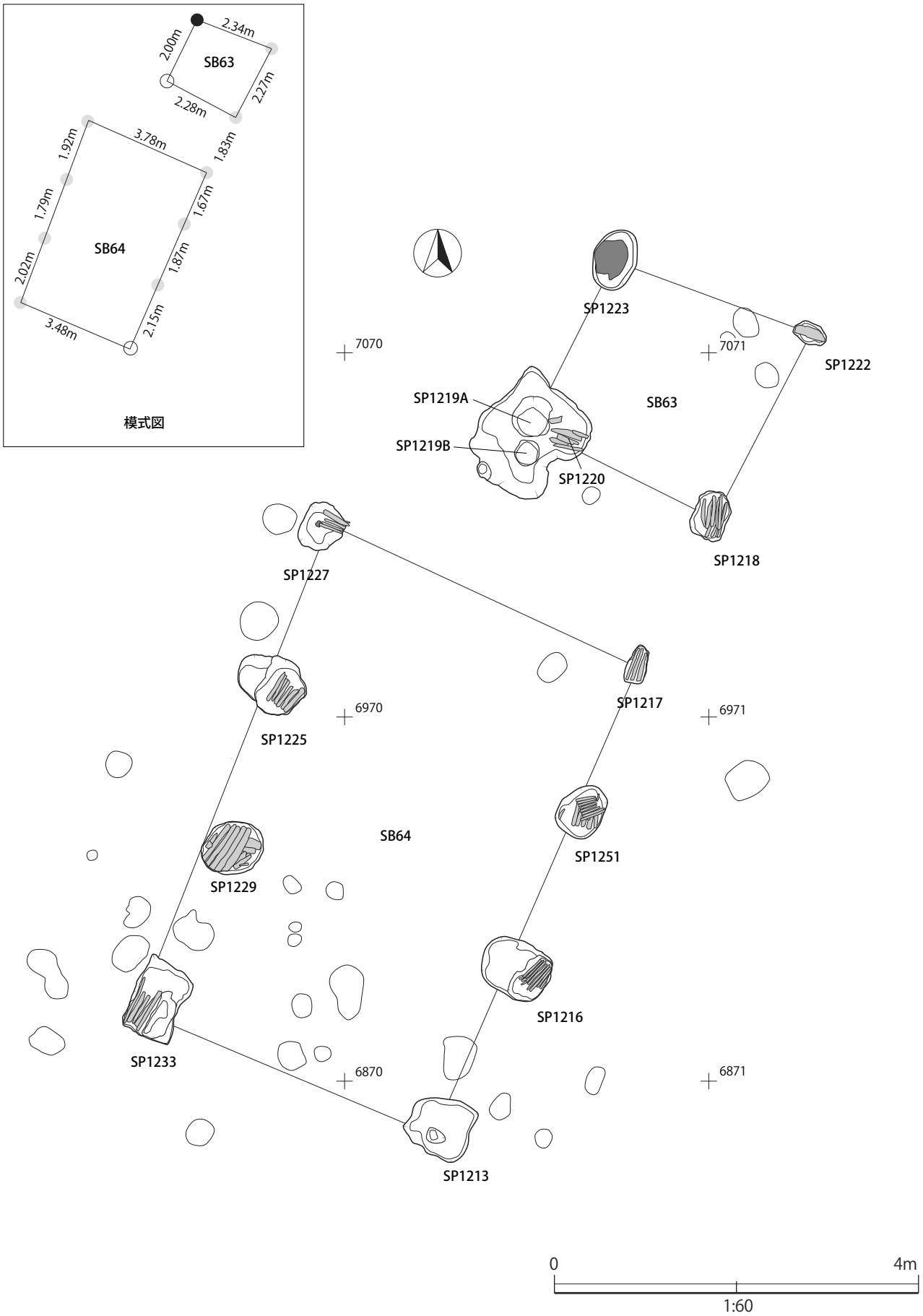
第 12 図　SB61・62 掘立柱建物跡



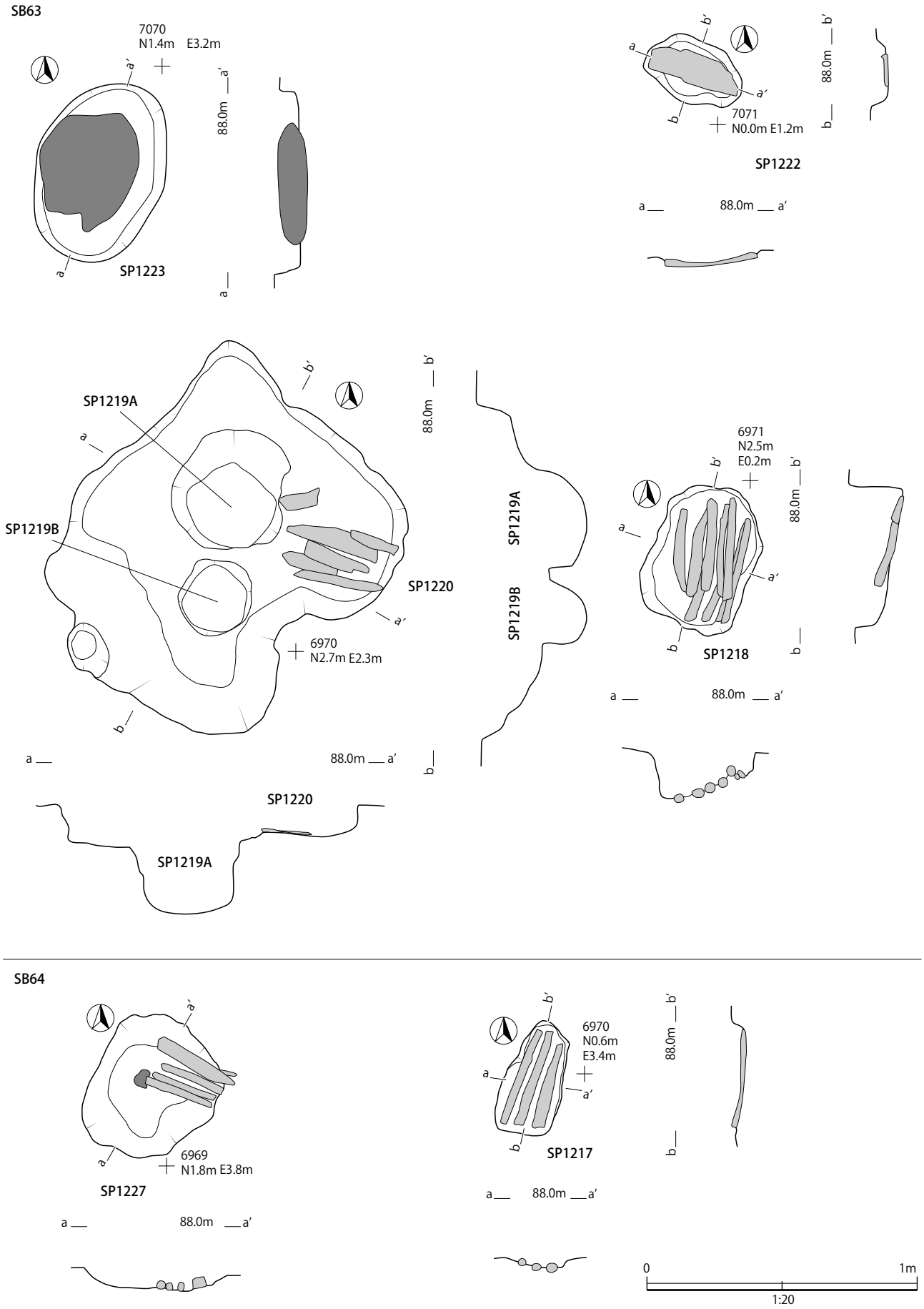
第 13 図　SB61 掘立柱建物跡



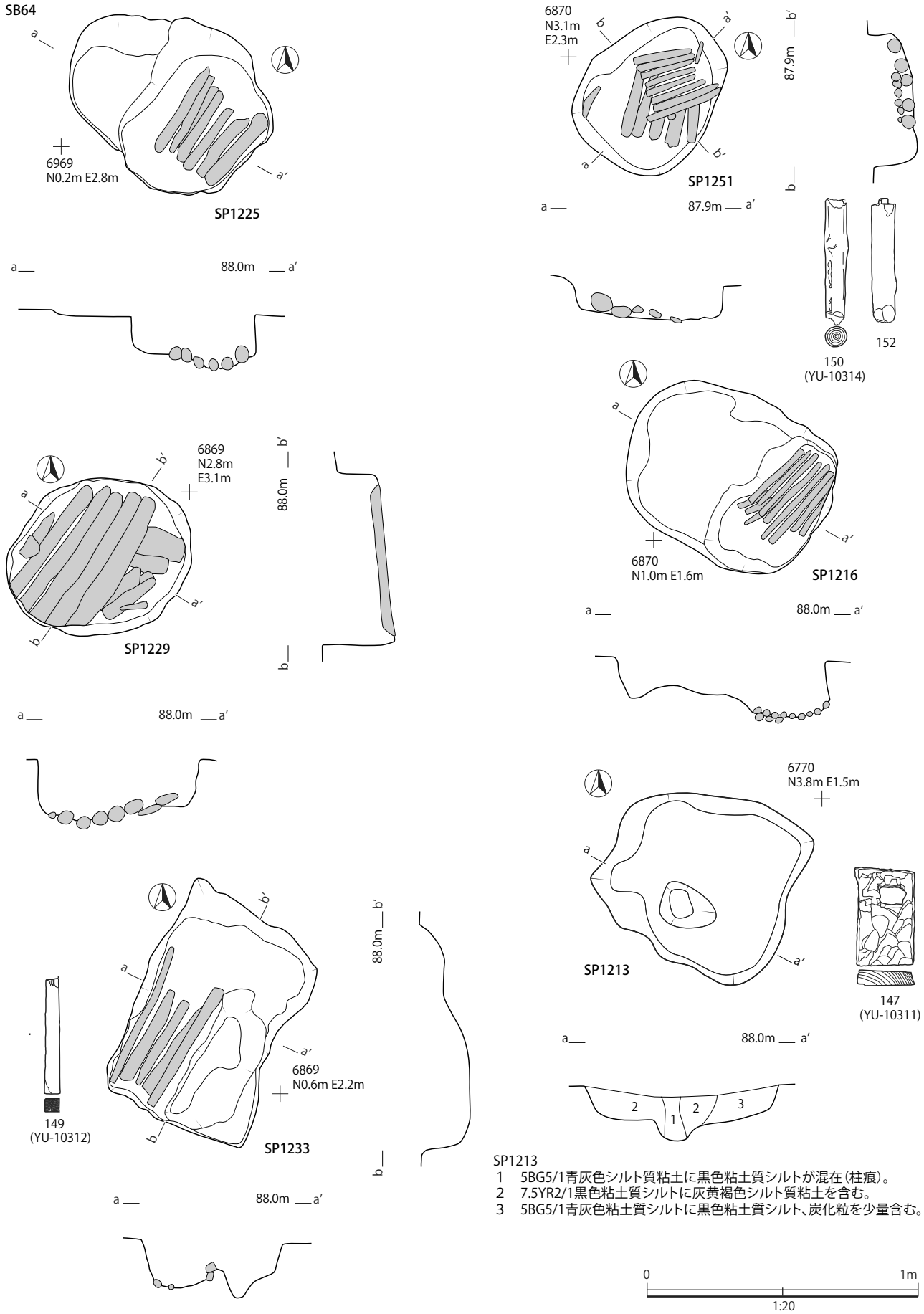
第 14 図　SB62 掘立柱建物跡



第 15 図　SB63・64 掘立柱建物跡 1



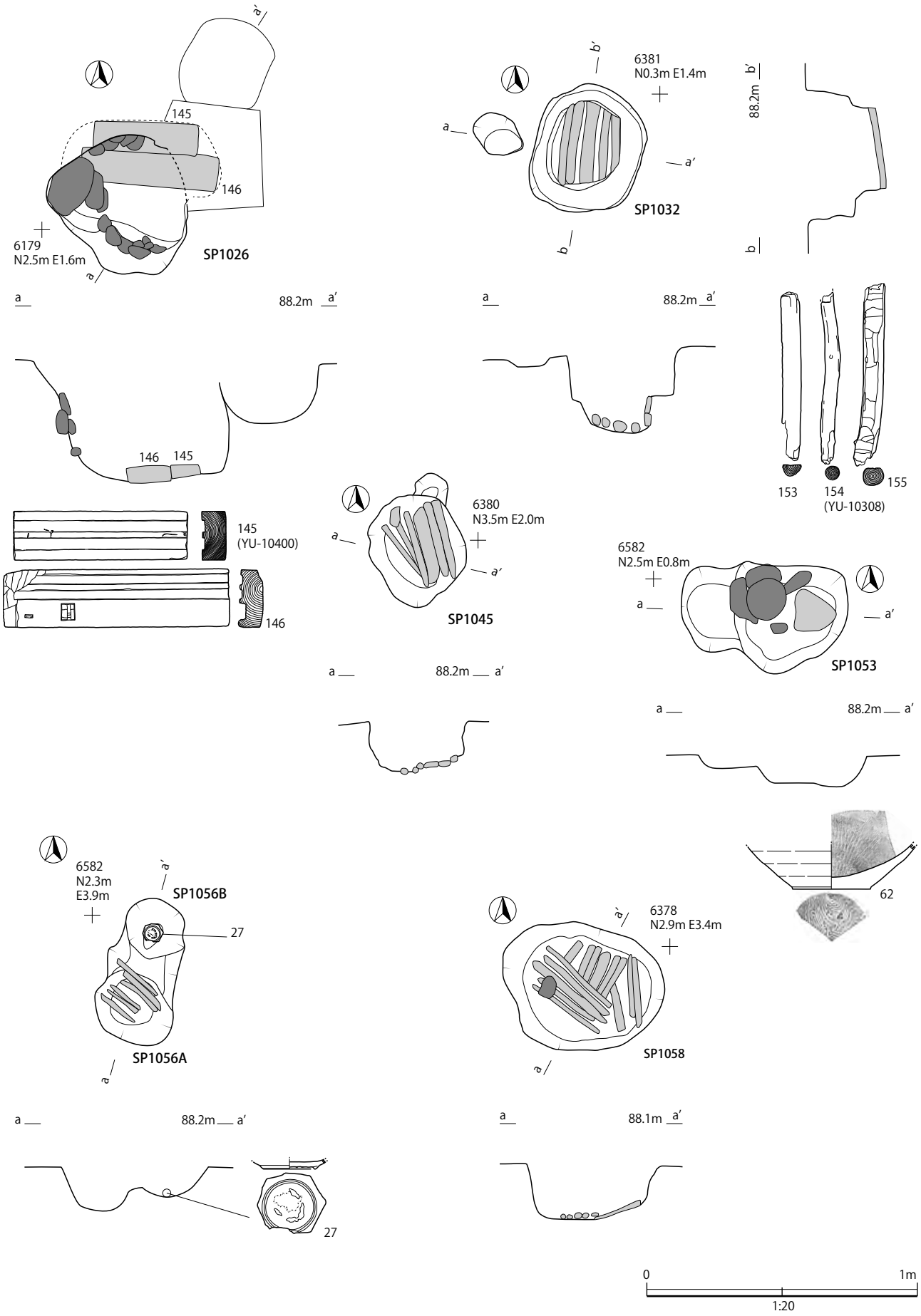
第 16 図　SB63・64 掘立柱建物跡 2



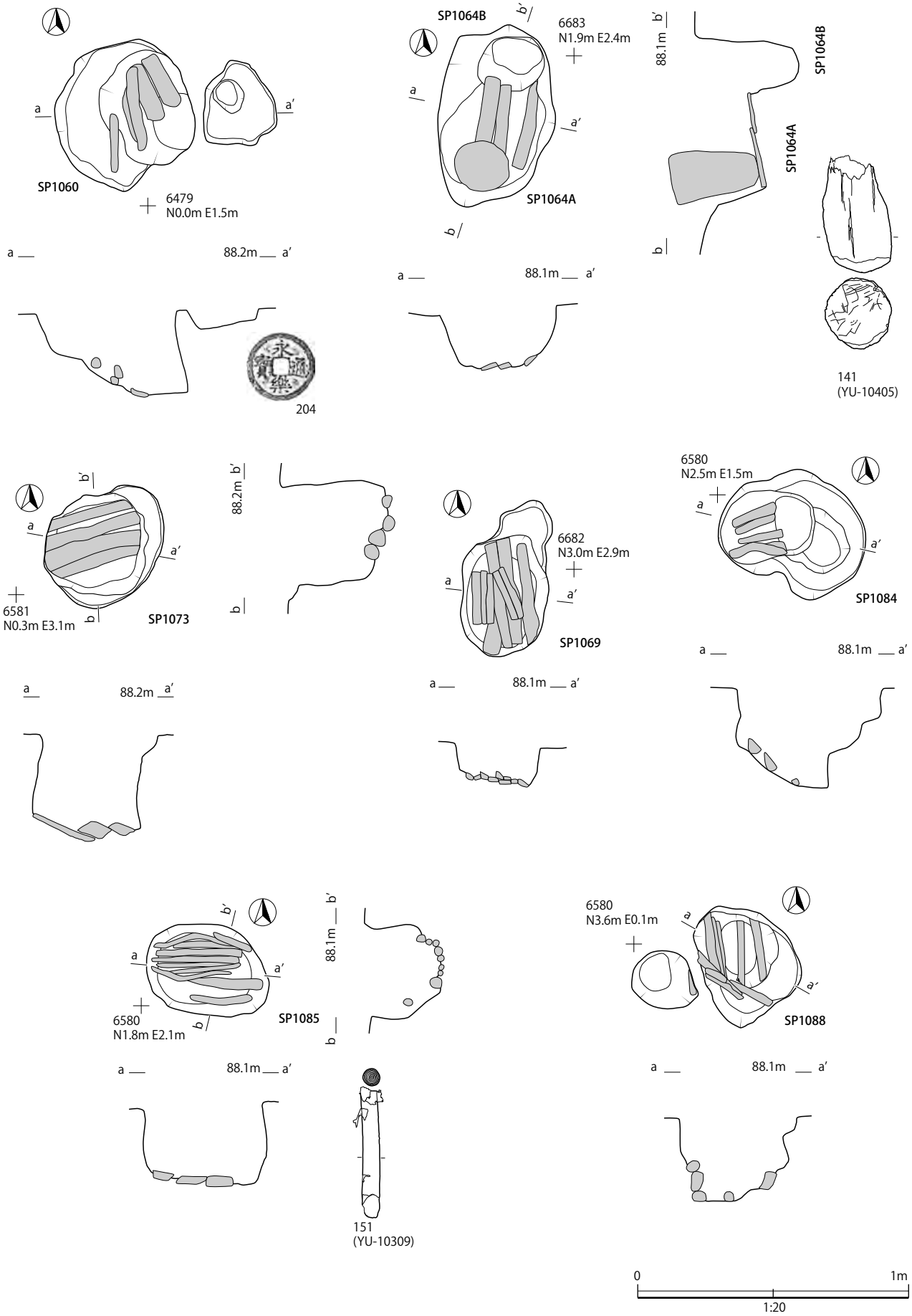
SP1213
1　5BG5/1青灰色シルト質粘土に黒色粘土質シルトが混在（柱痕）。
2　7.5YR2/1黒色粘土質シルトに灰黄褐色シルト質粘土を含む。
3　5BG5/1青灰色粘土質シルトに黒色粘土質シルト、炭化粒を少量含む。

0　1m
1:20

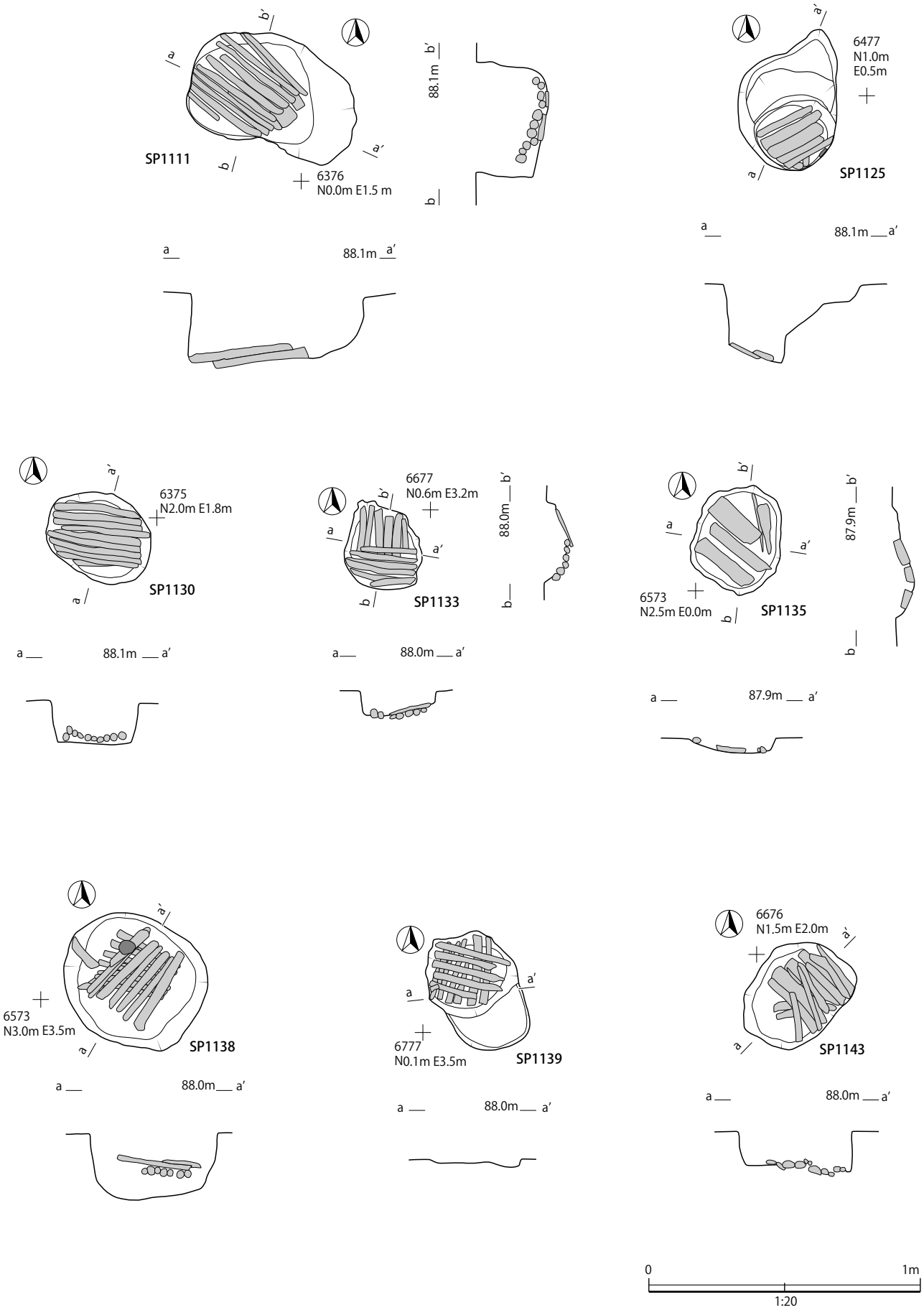
第 17 図　SB63・64 掘立柱建物跡 3



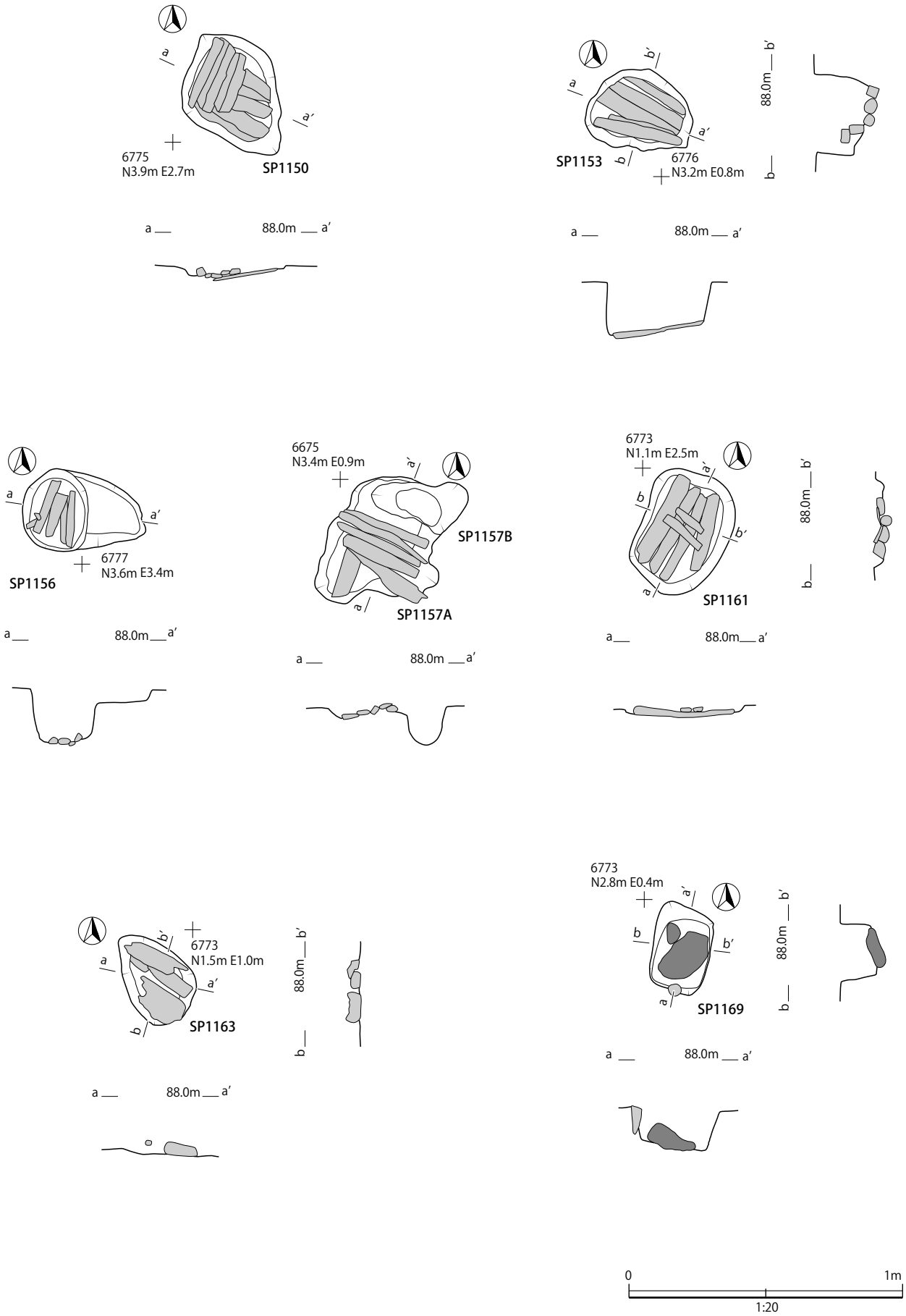
第 18 図　個別掲載ピット 1（SP1026-1058）



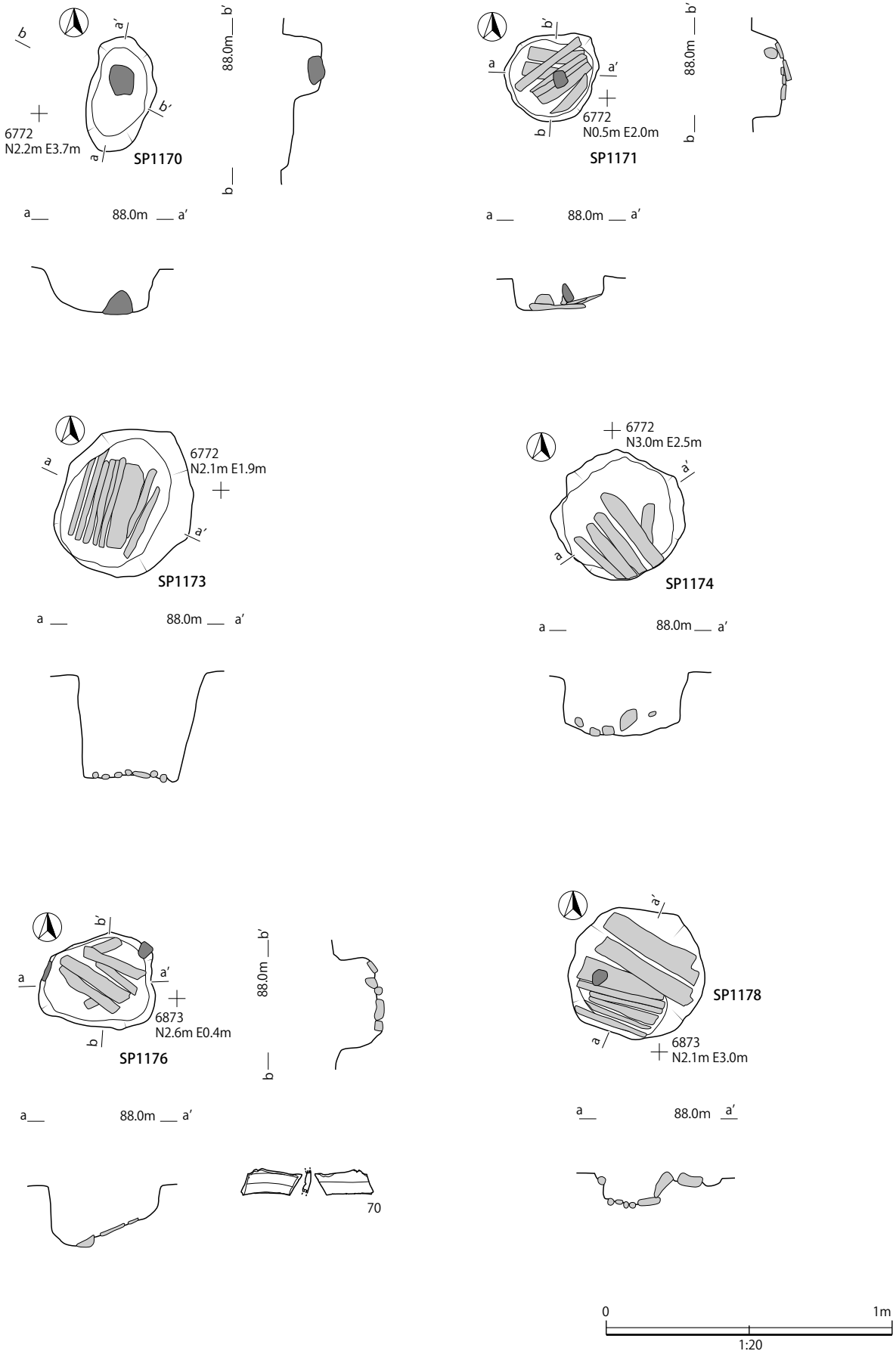
第 19 図　個別掲載ピット 2（SP1060-1088）



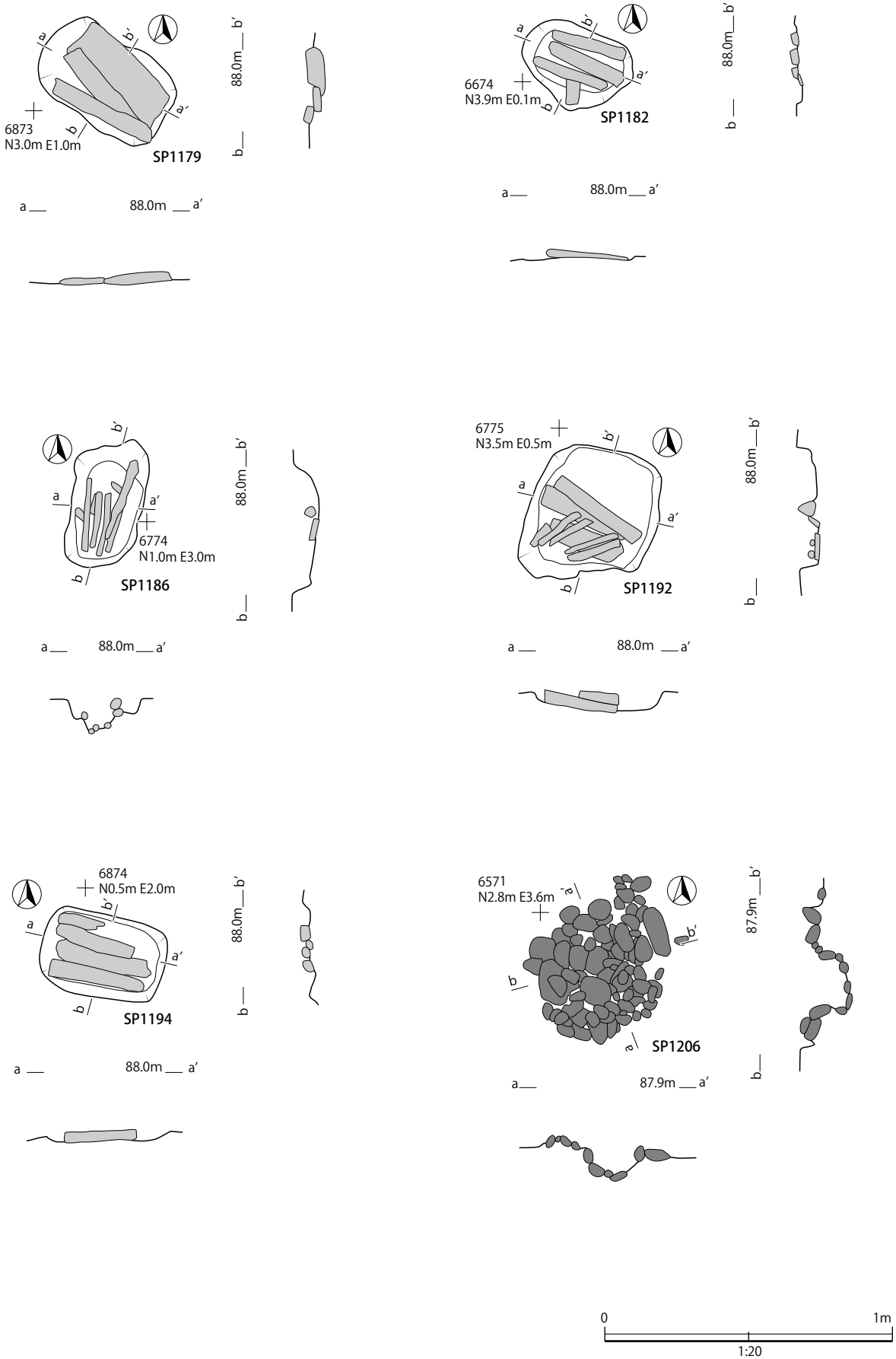
第 20 図　個別掲載ピット 3（SP1111-1143）



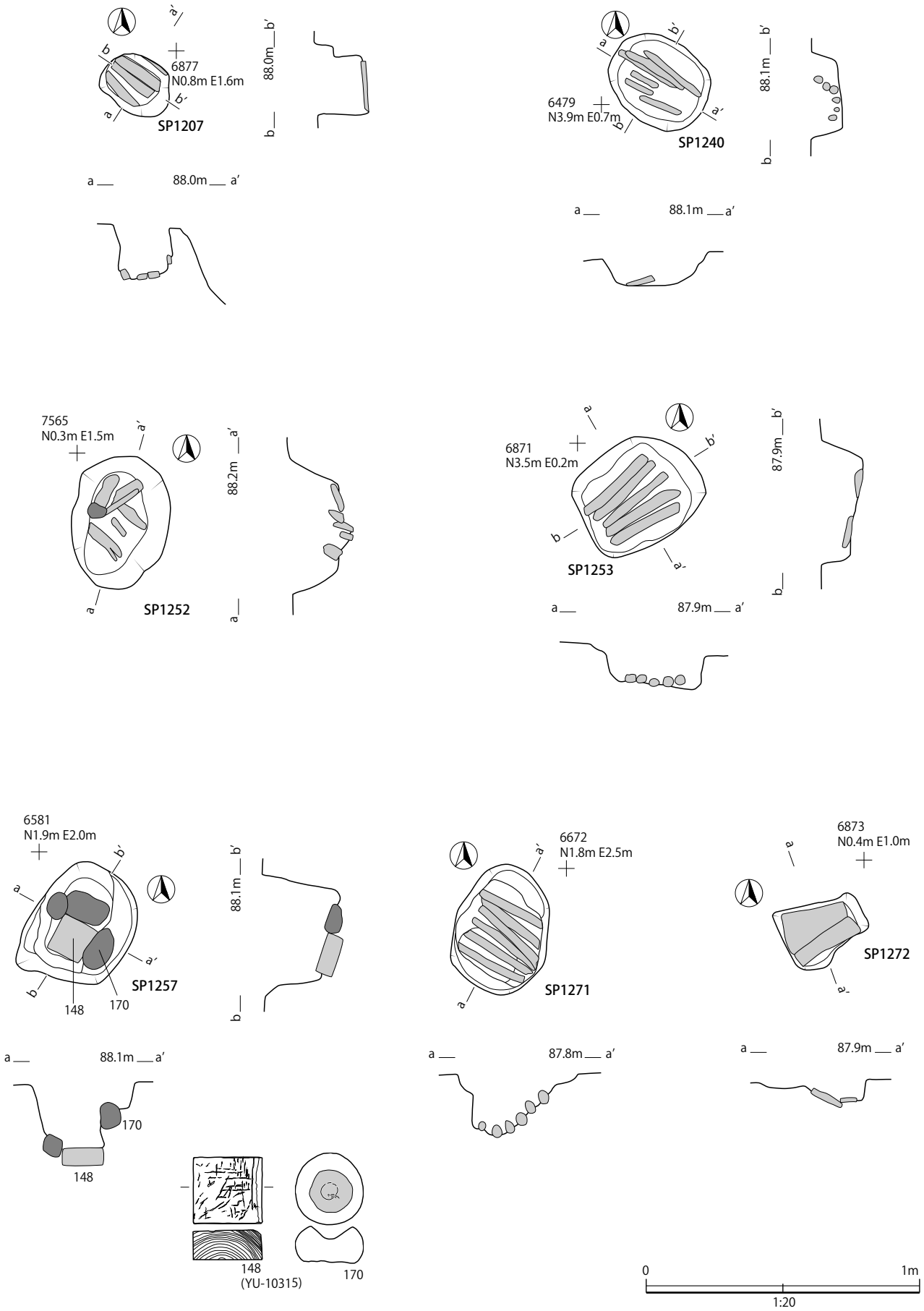
第 21 図　個別掲載ピット 4（SP1150-1169）



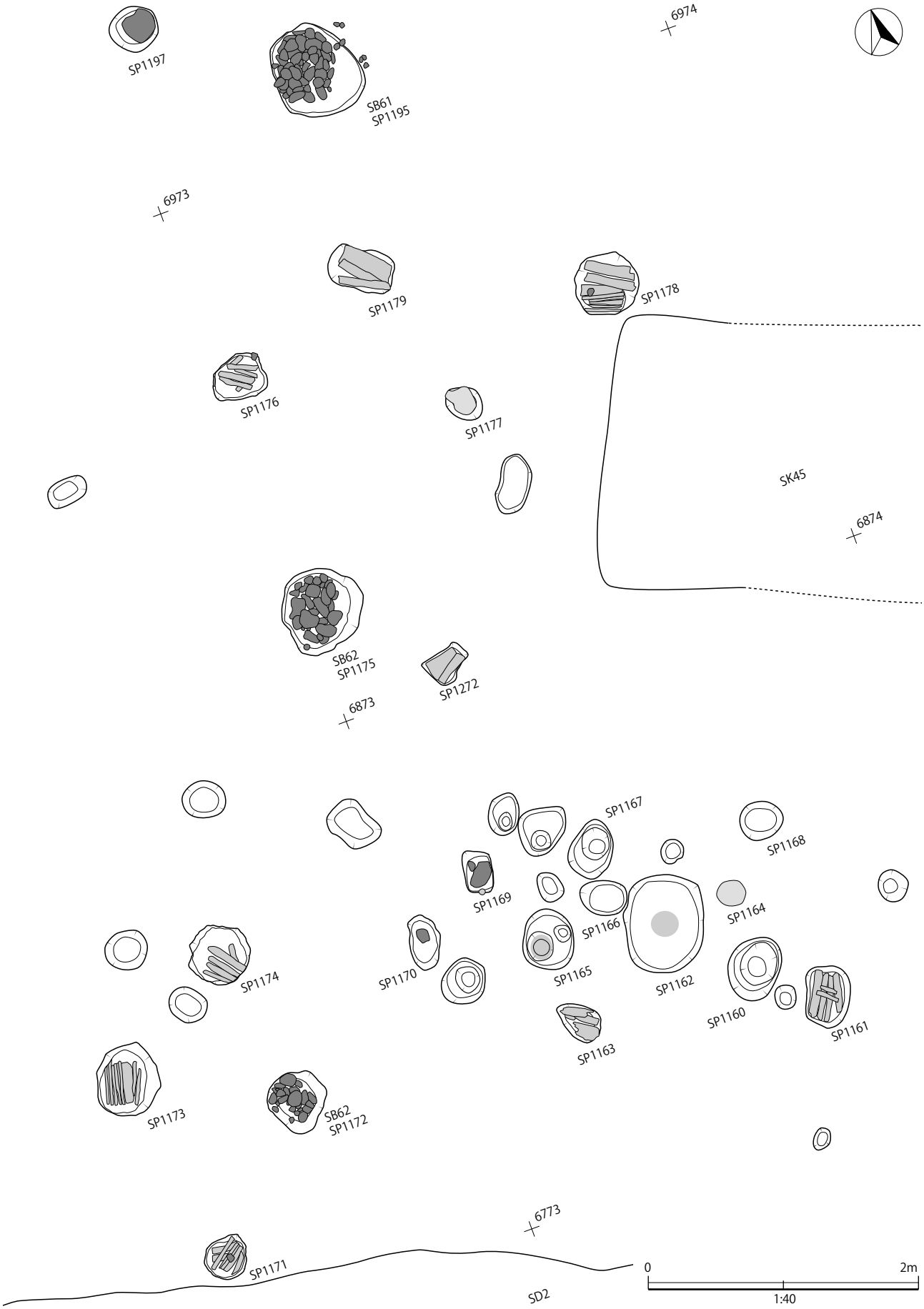
第 22 図　個別掲載ピット 5（SP1170-1178）



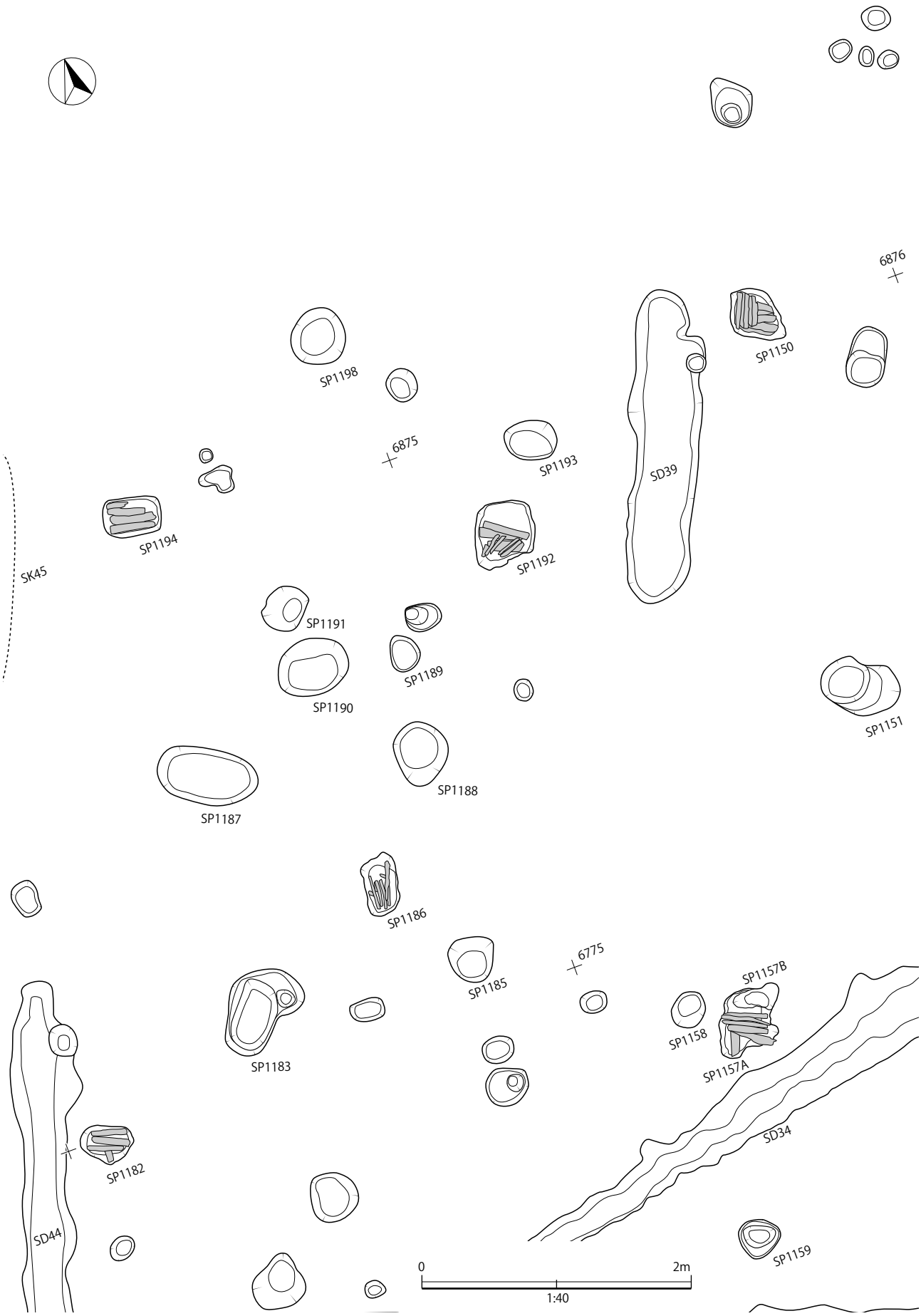
第 23 図　個別掲載ピット 6（SP1179-1206）



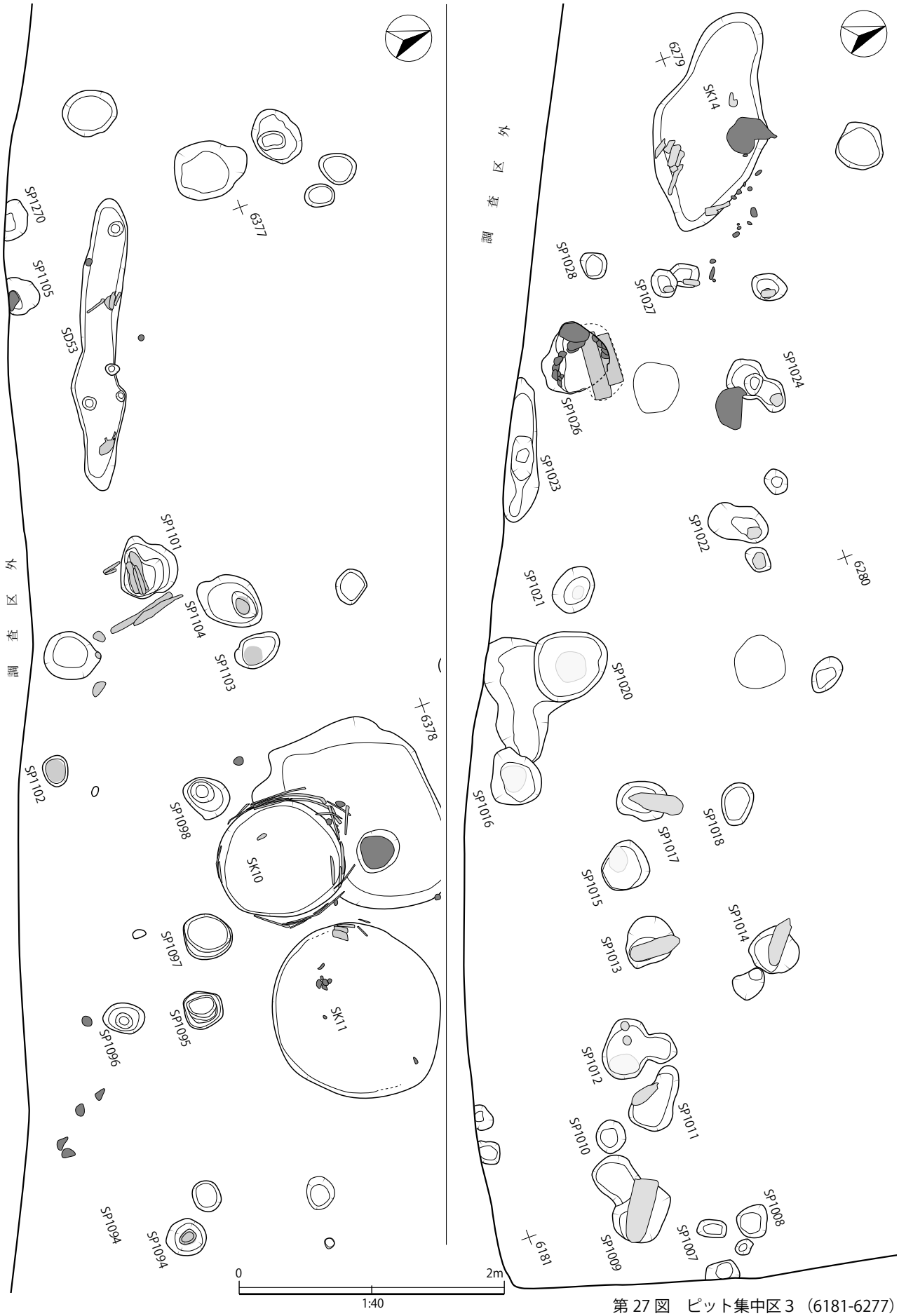
第 24 図　個別掲載ピット 7（SP1207-1272）



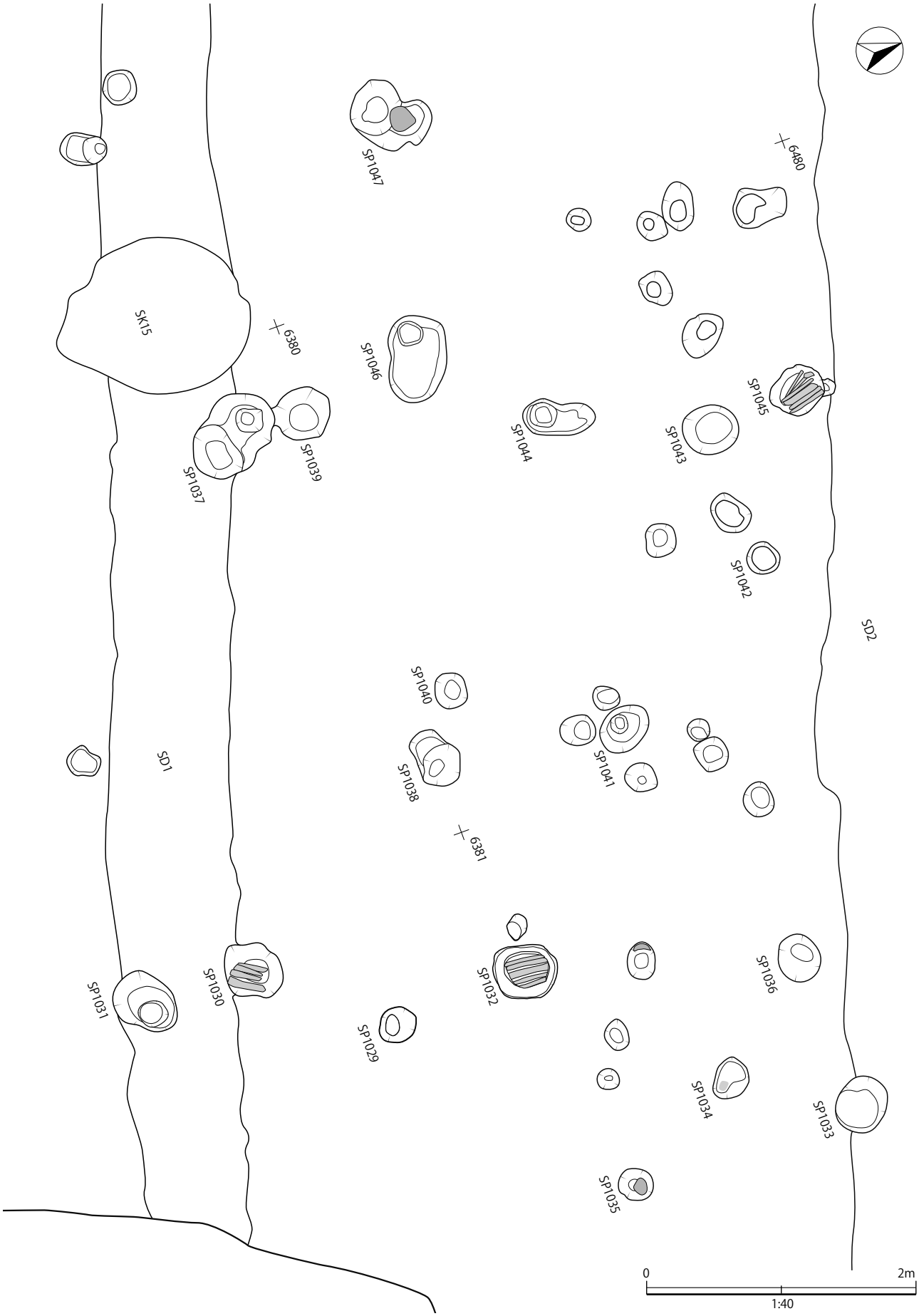
第 25 図　ピット集中区 1（6772-6873）



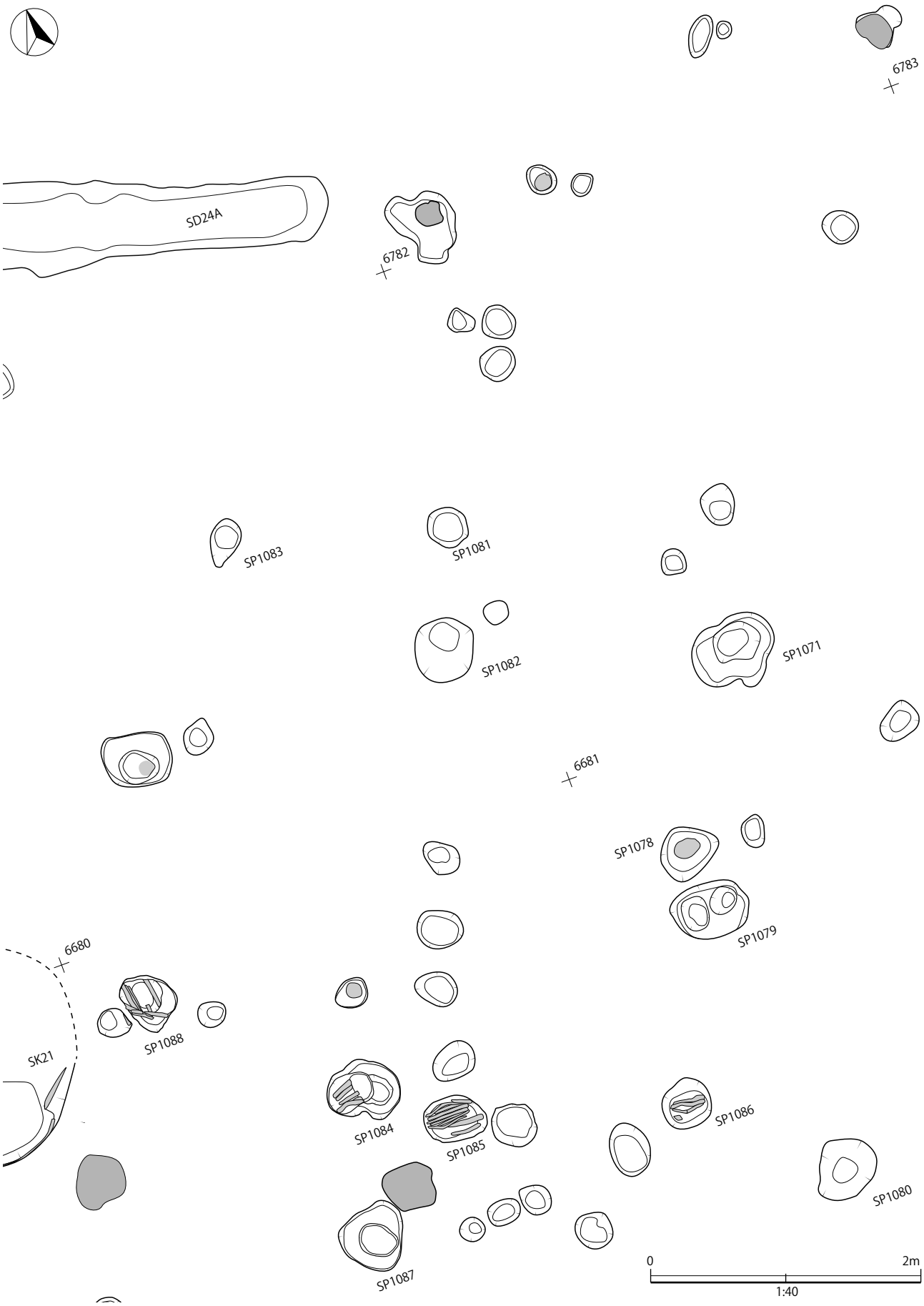
第 26 図　ピット集中区 2（6774-6775）



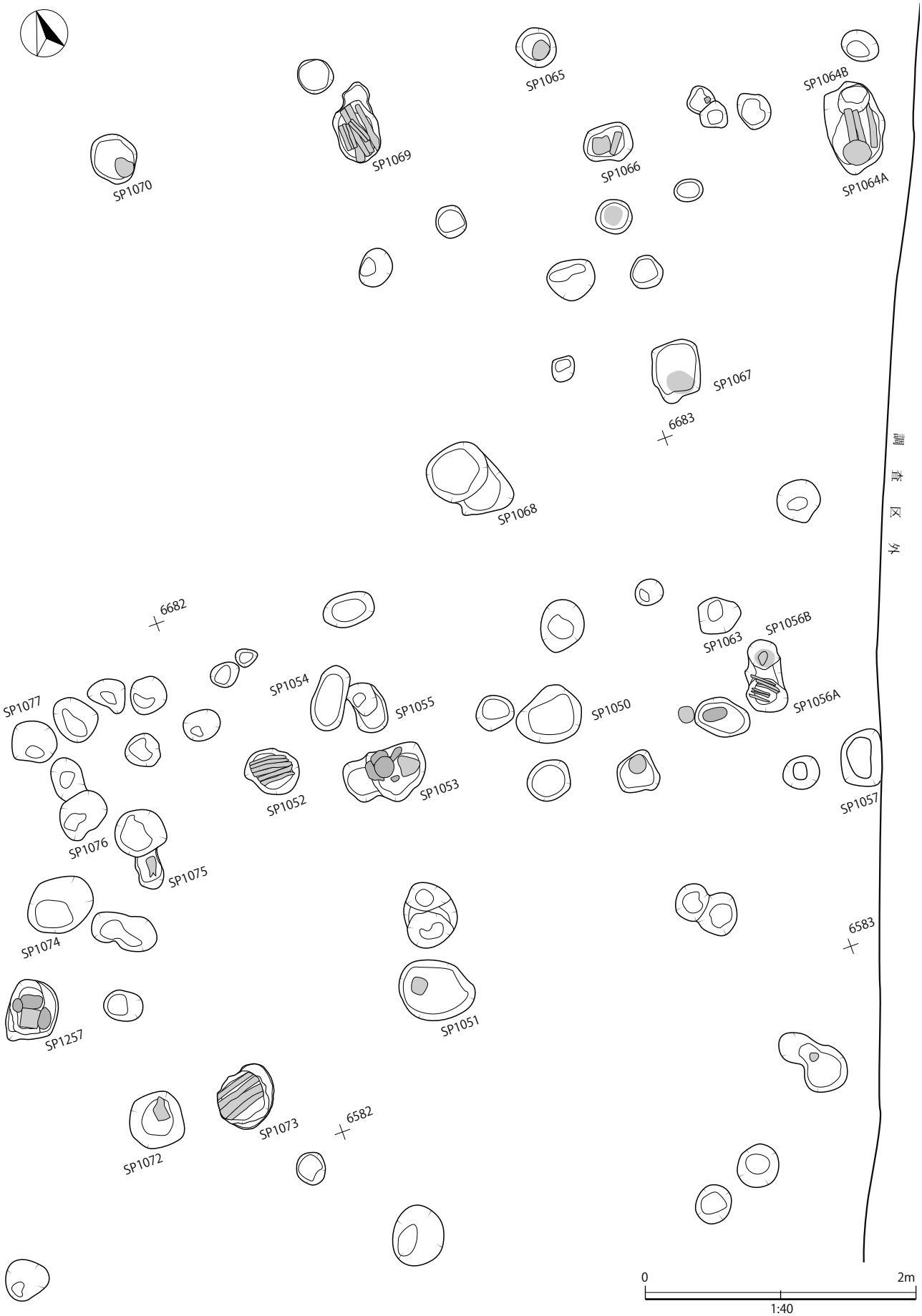
第 27 図　ピット集中区 3（6181-6277）



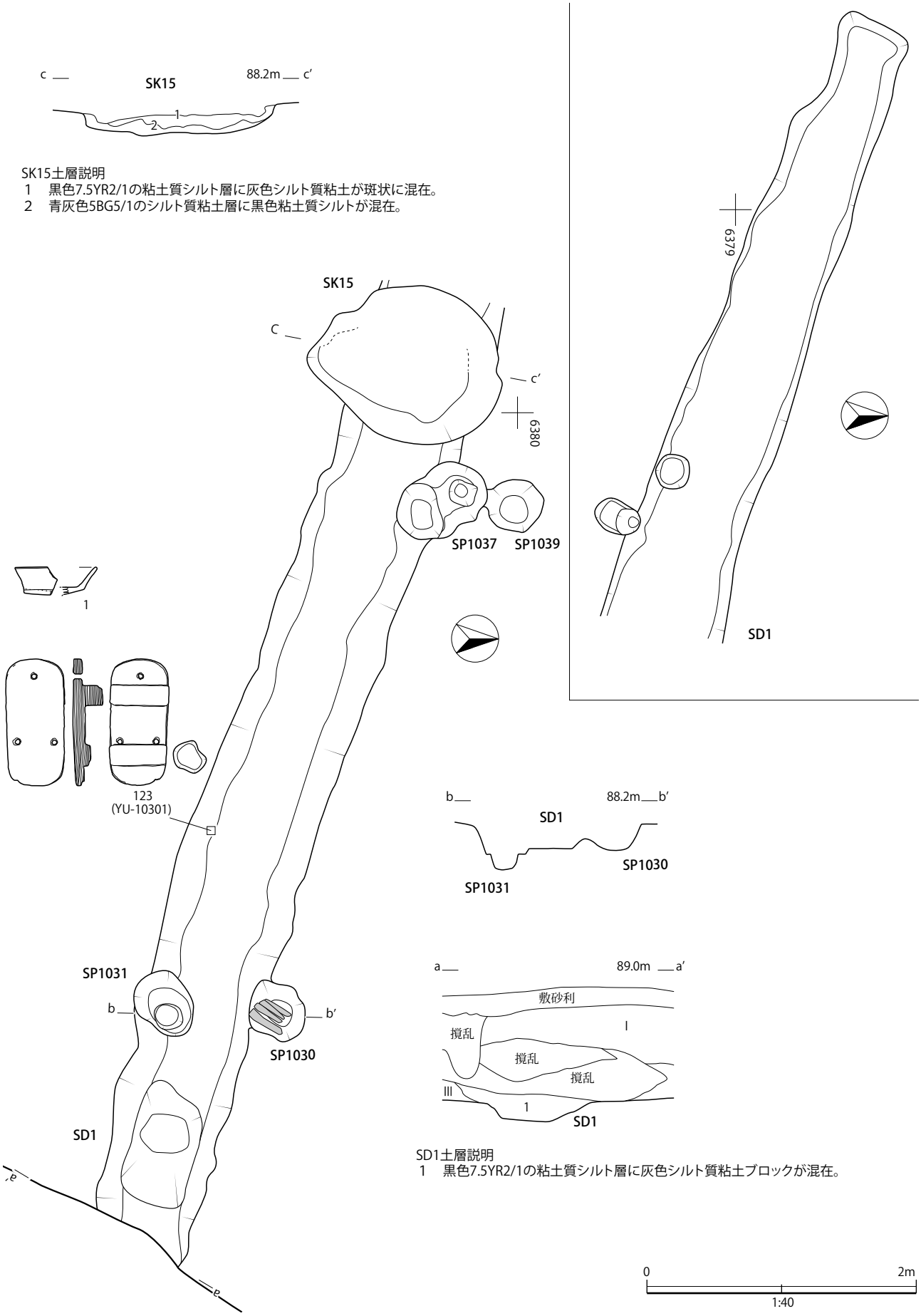
第 28 図　ピット集中区 4（6380-6381）



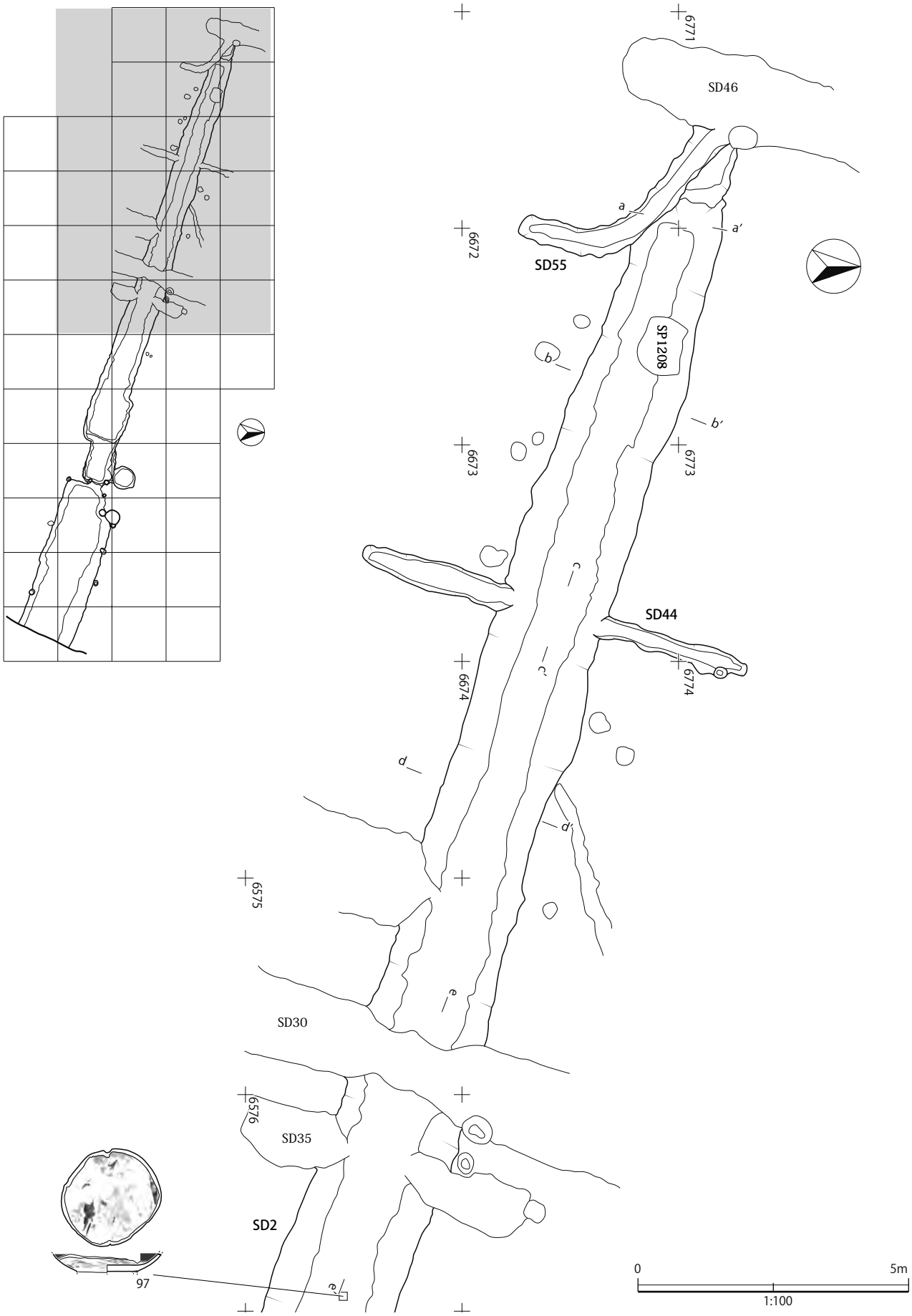
第 29 図　ピット集中区 5（6580-6681）



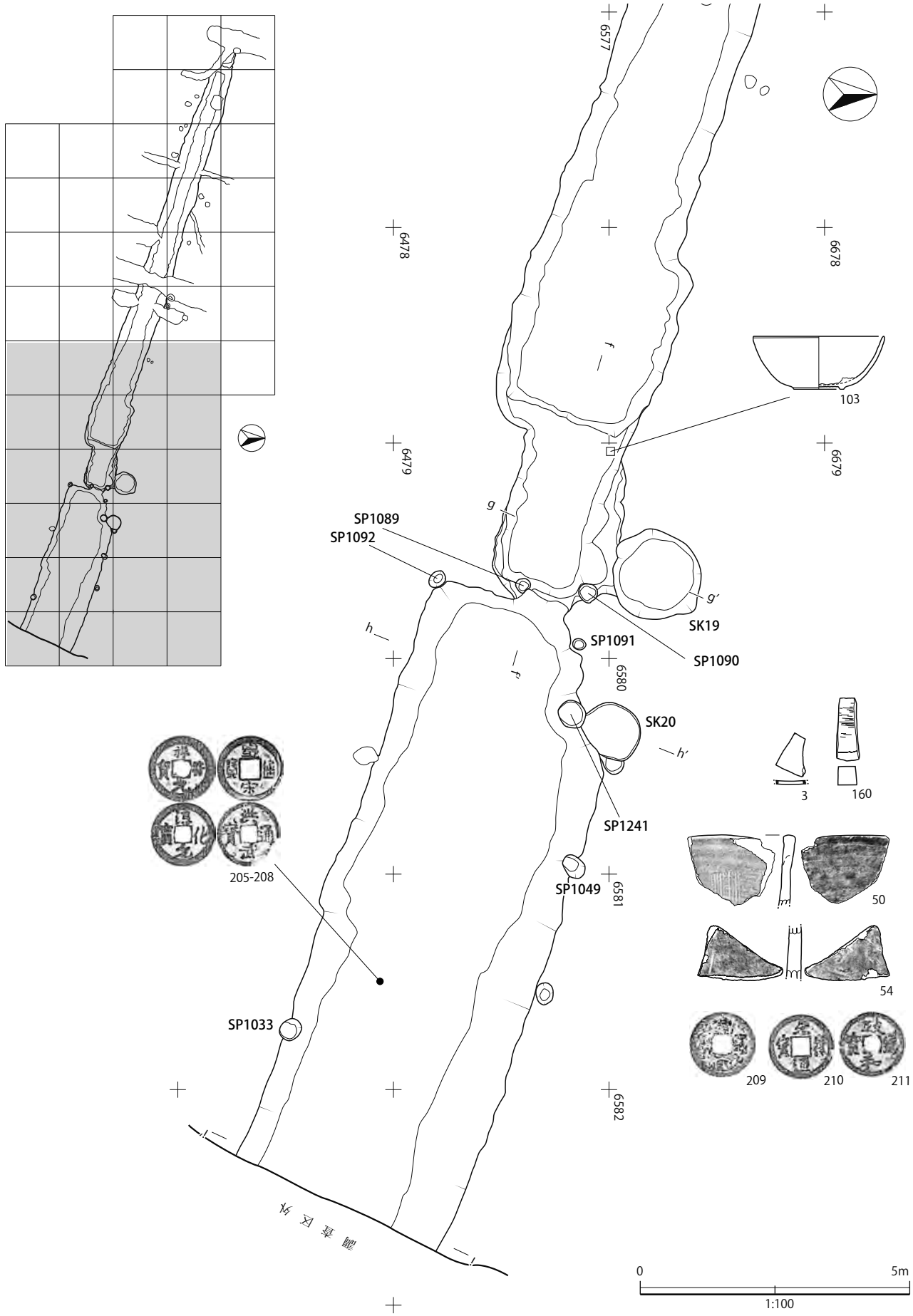
第 30 図　ピット集中区 6（6582-6683）



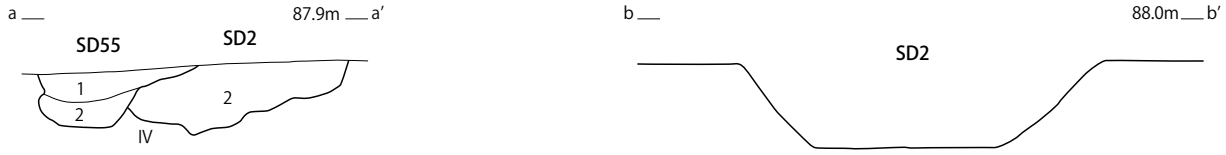
第 31 図　SD1 溝状遺構



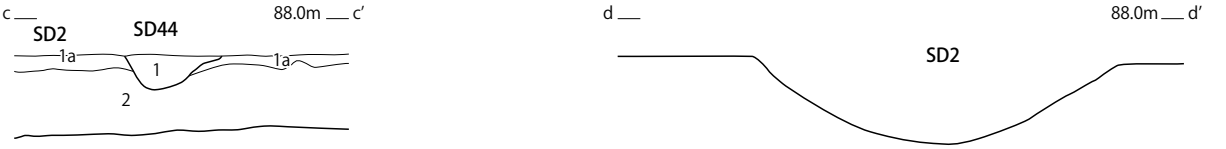
第 32 図　SD2 溝状遺構 1（平面）



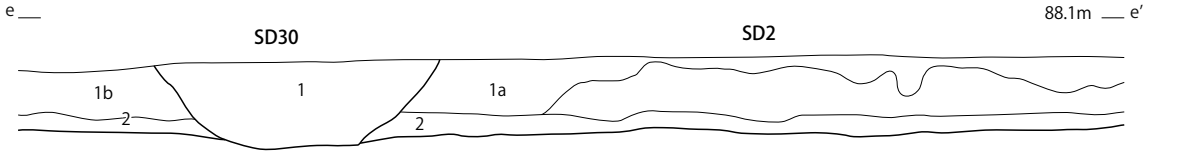
第 33 図　SD2 溝状遺構 2（平面）

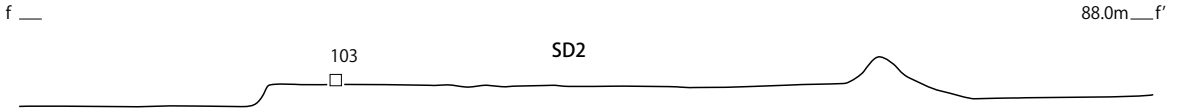


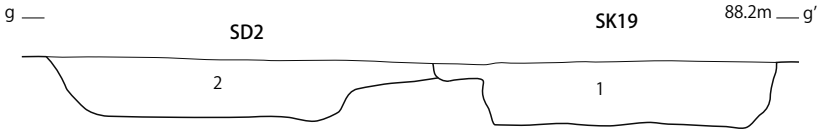
SD55土層説明
1　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層。砂、灰色粘土粒を層状に含む。
2　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に灰色シルト質粘土を含む。



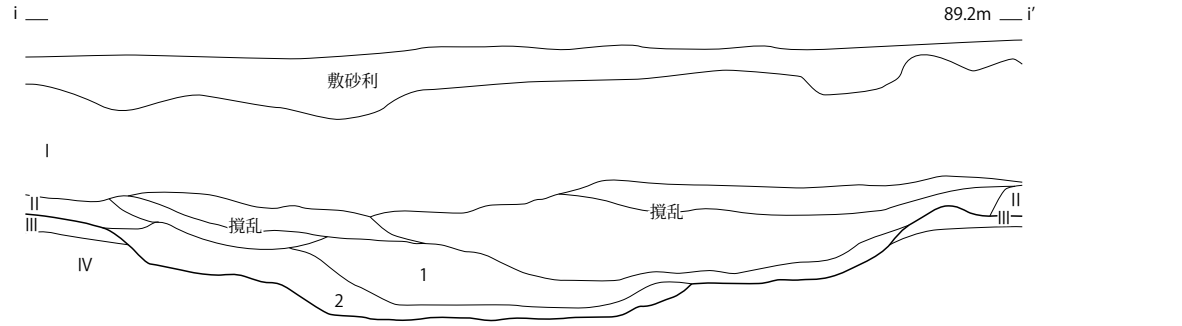
SD44土層説明
1　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に灰色粘土ブロックを含む。



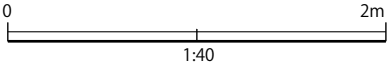




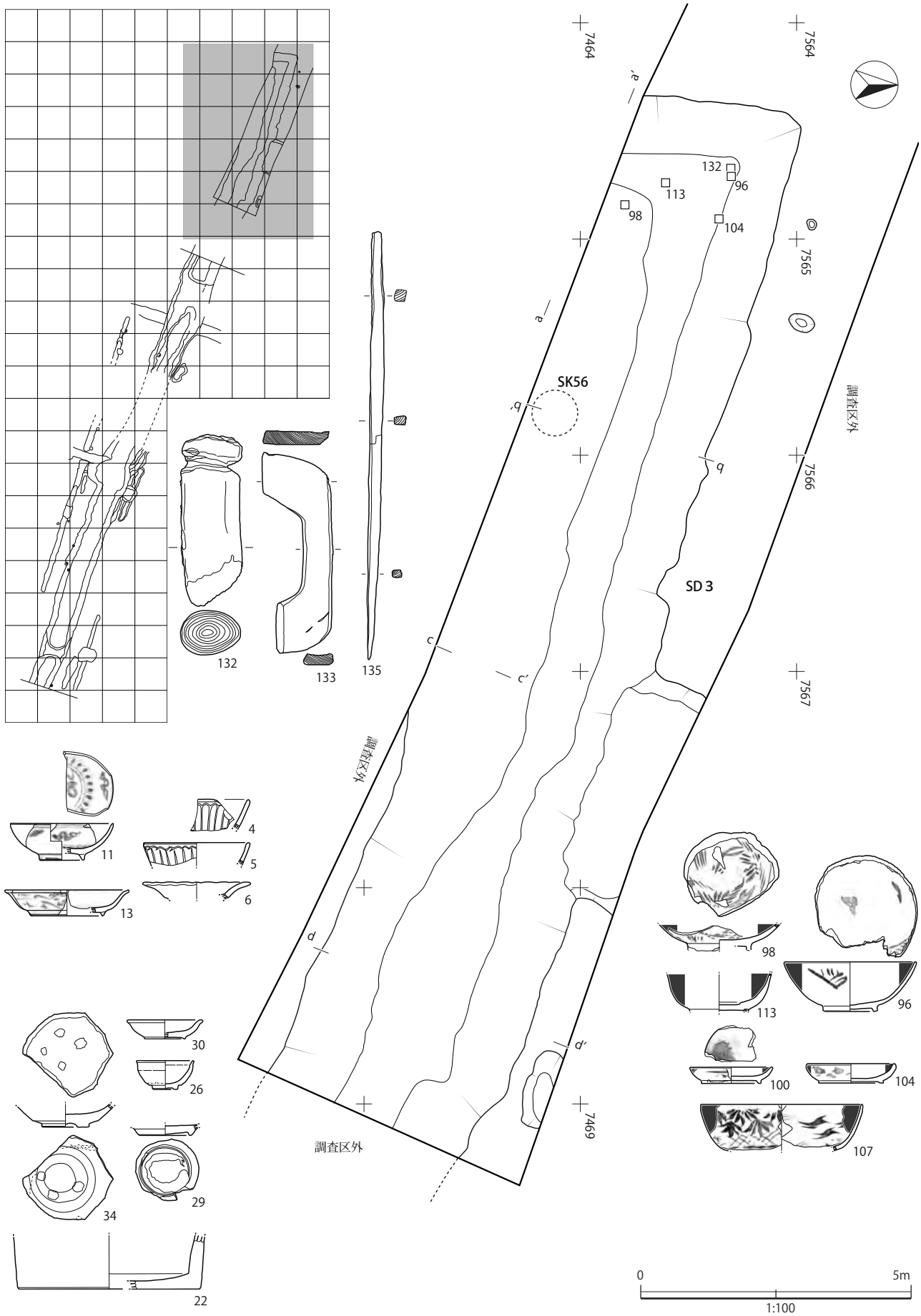
SK19土層説明
1　黒褐色7.5YR3/1の粘土質シルト層に灰褐色粘土が混在。



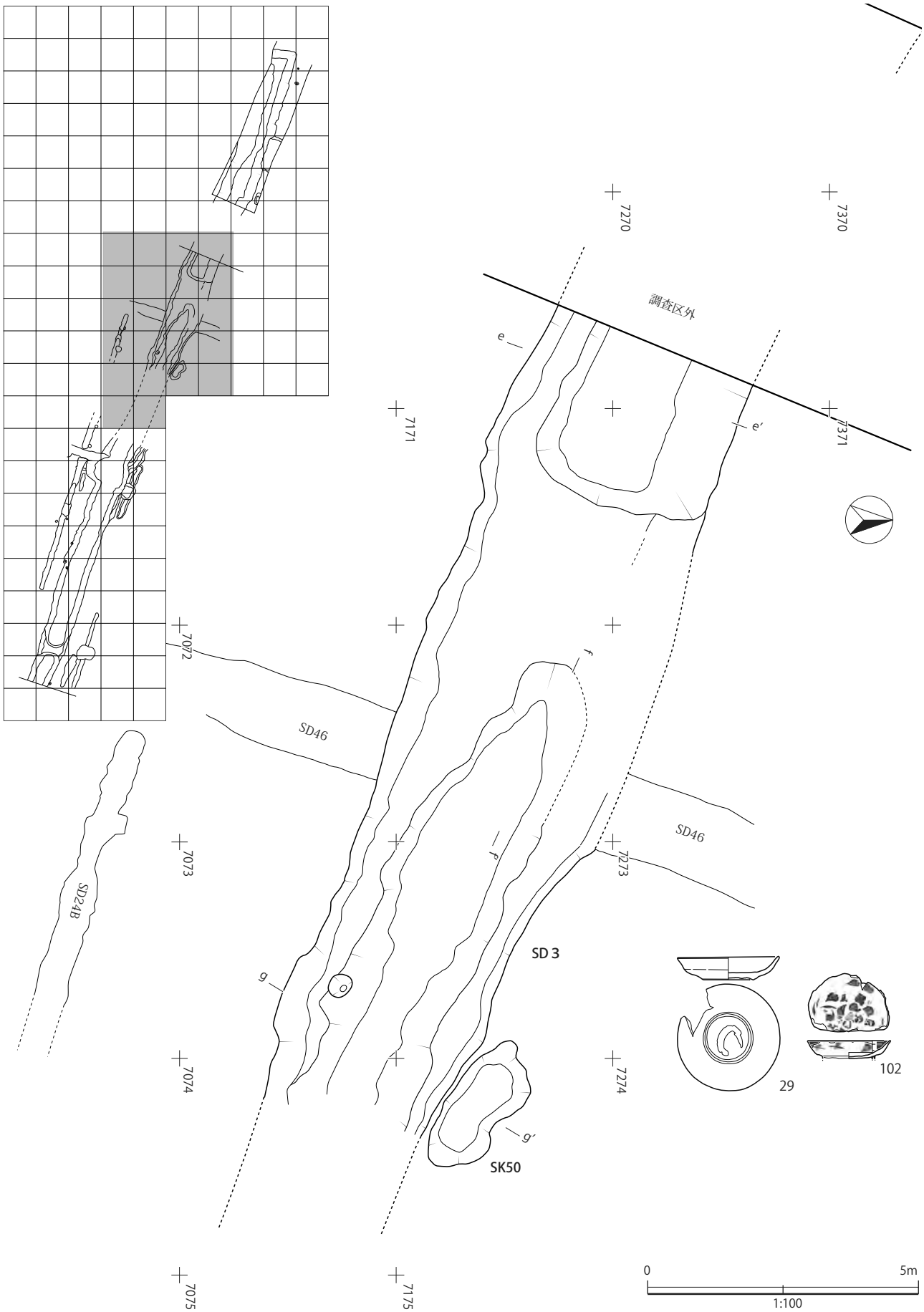
SD2土層説明
1 a 黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に灰色シルト質粘土が混在
1 b 黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に
2　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層。植物繊維を含む。



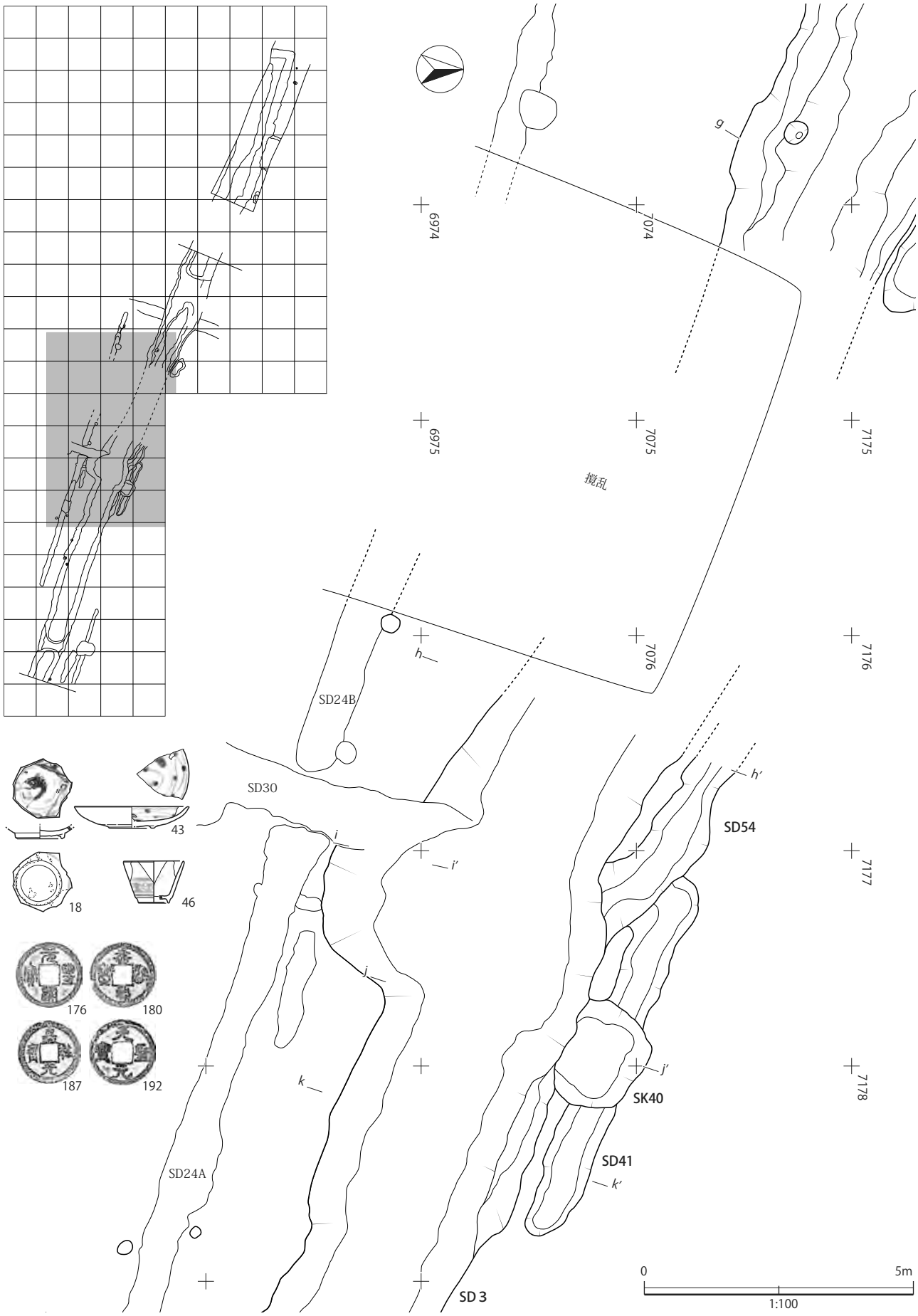
第 34 図　SD2 溝状遺構 3（断面）



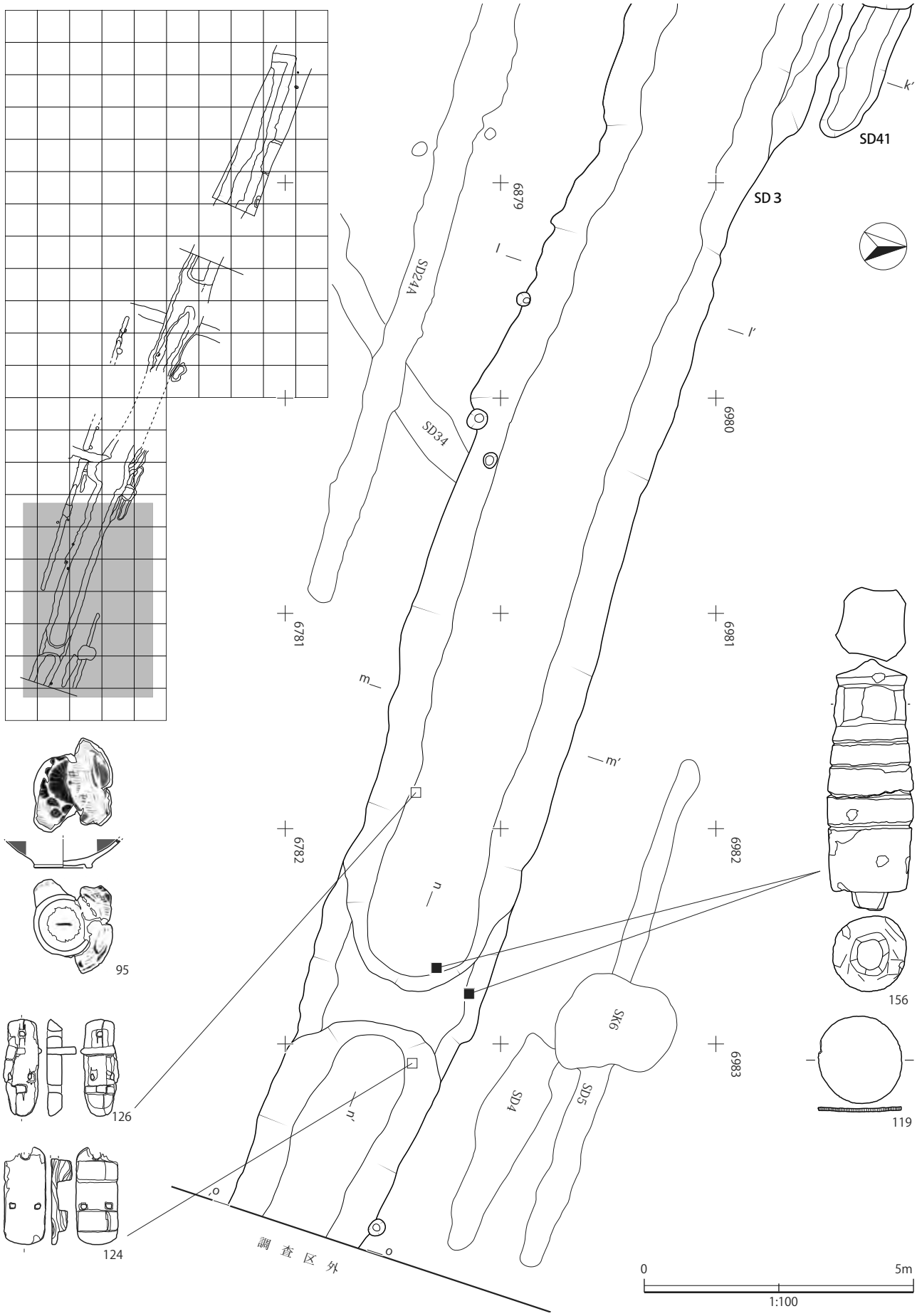
第 35 図　SD3 溝状遺構 1（平面）



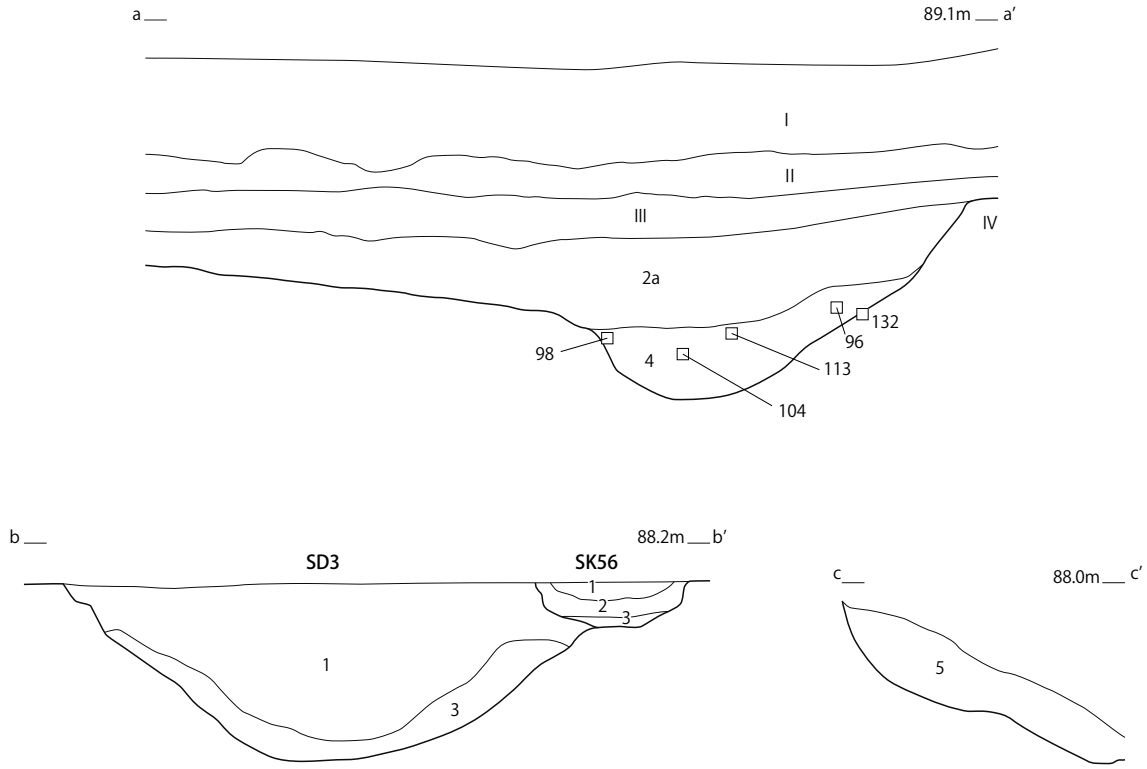
第 36 図　SD3 溝状遺構 2（平面）



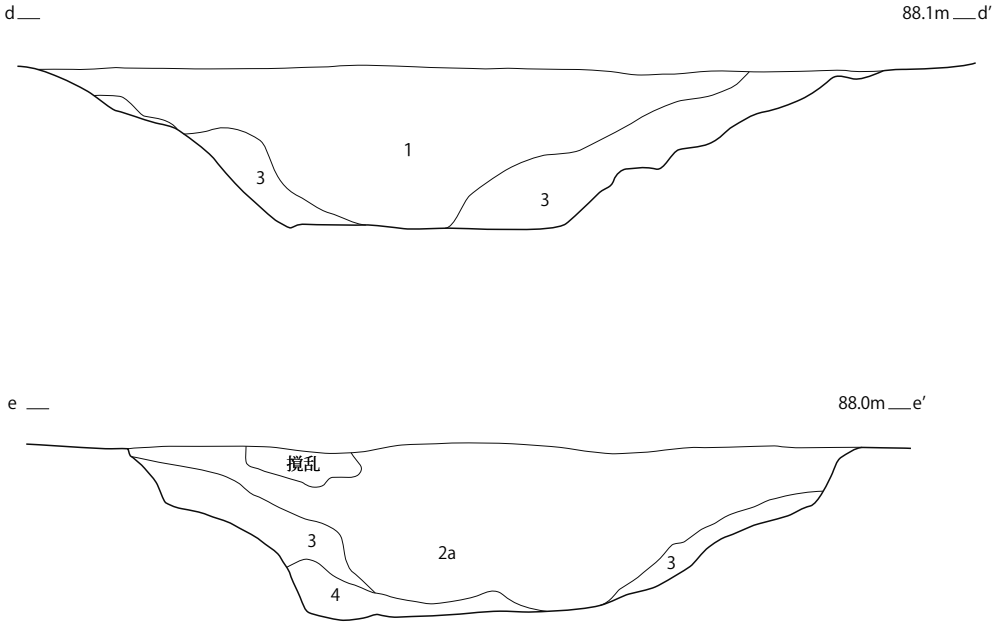
第 37 図　SD3 溝状遺構 3（平面）



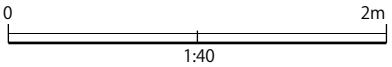
第 38 図　SD3 溝状遺構 4（平面）



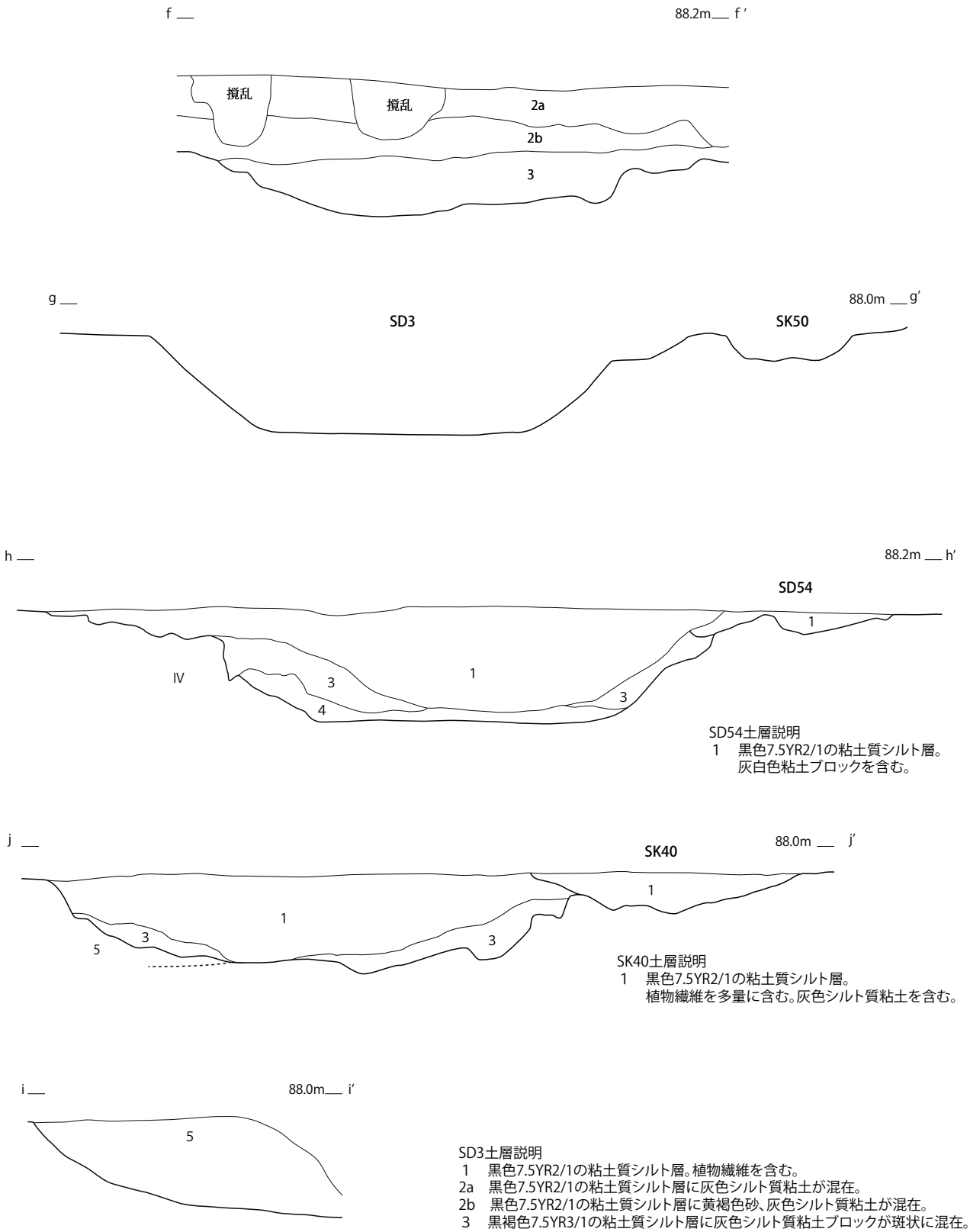
SK56土層説明
1　黒褐色7.5YR3/1の粘土質シルト層。灰色シルト質粘土粒を大量に含む。
2　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層。灰色シルト質粘土ブロックを斑状に含む。
3　褐灰色7.5YR4/1の粘土質シルト層。灰色シルト質粘土を含む。



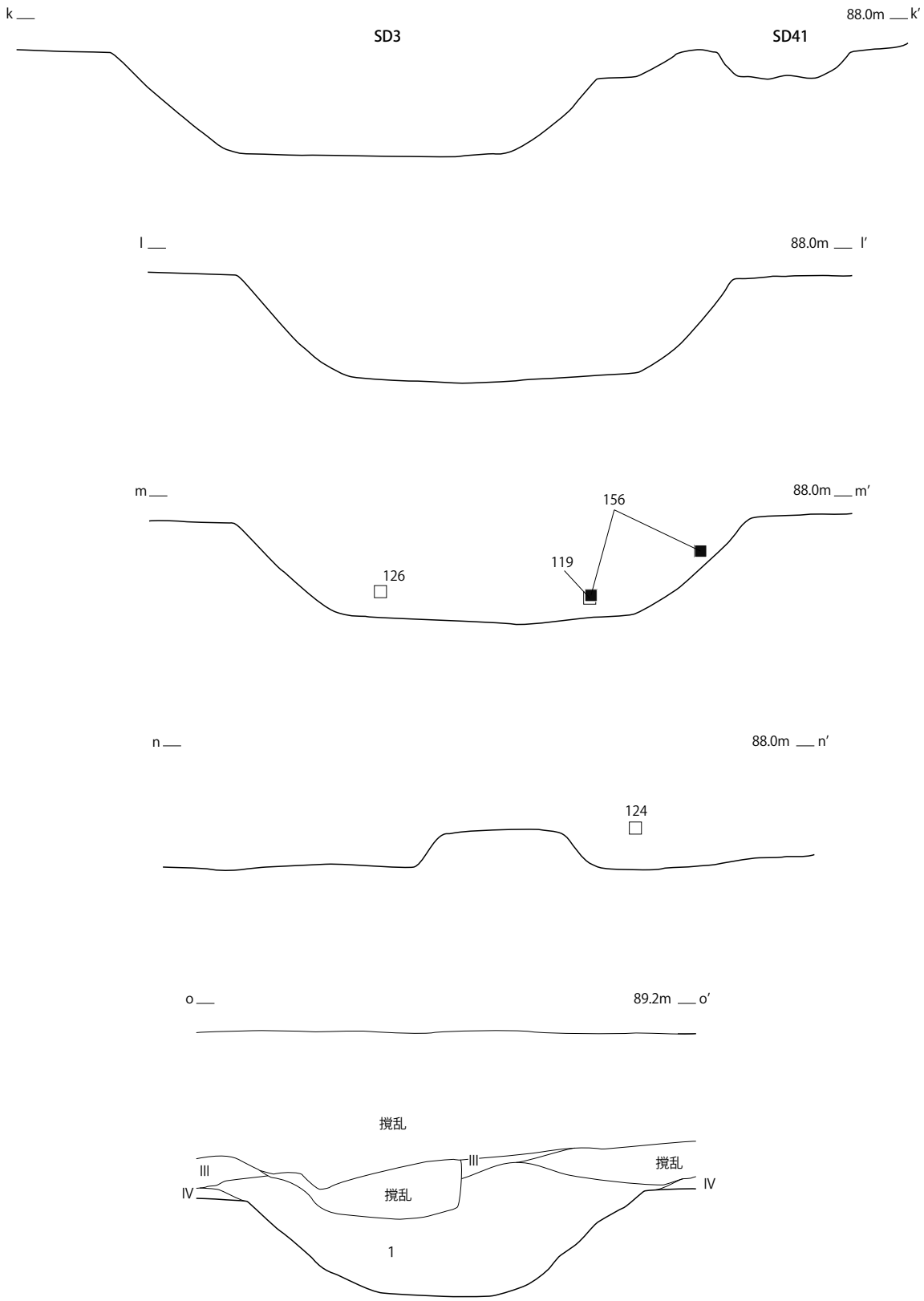
SD3土層説明
1　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層。植物繊維を含む。
2a　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に灰色シルト質粘土が混在。
2b　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に黄褐色砂、灰色シルト質粘土が混在。
3　黒褐色7.5YR3/1の粘土質シルト層に灰色シルト質粘土ブロックが斑状に混在。
　　黒色土層が層状に堆積。
4　青灰色5BG5/1のシルト質粘土層に黒色粘土質シルトが混在。
5　青灰色5BG5/1のシルト質粘土層に黒色粘土質シルト縞状に堆積。埋戻し層。



第 39 図　SD3 溝状遺構 5（断面）



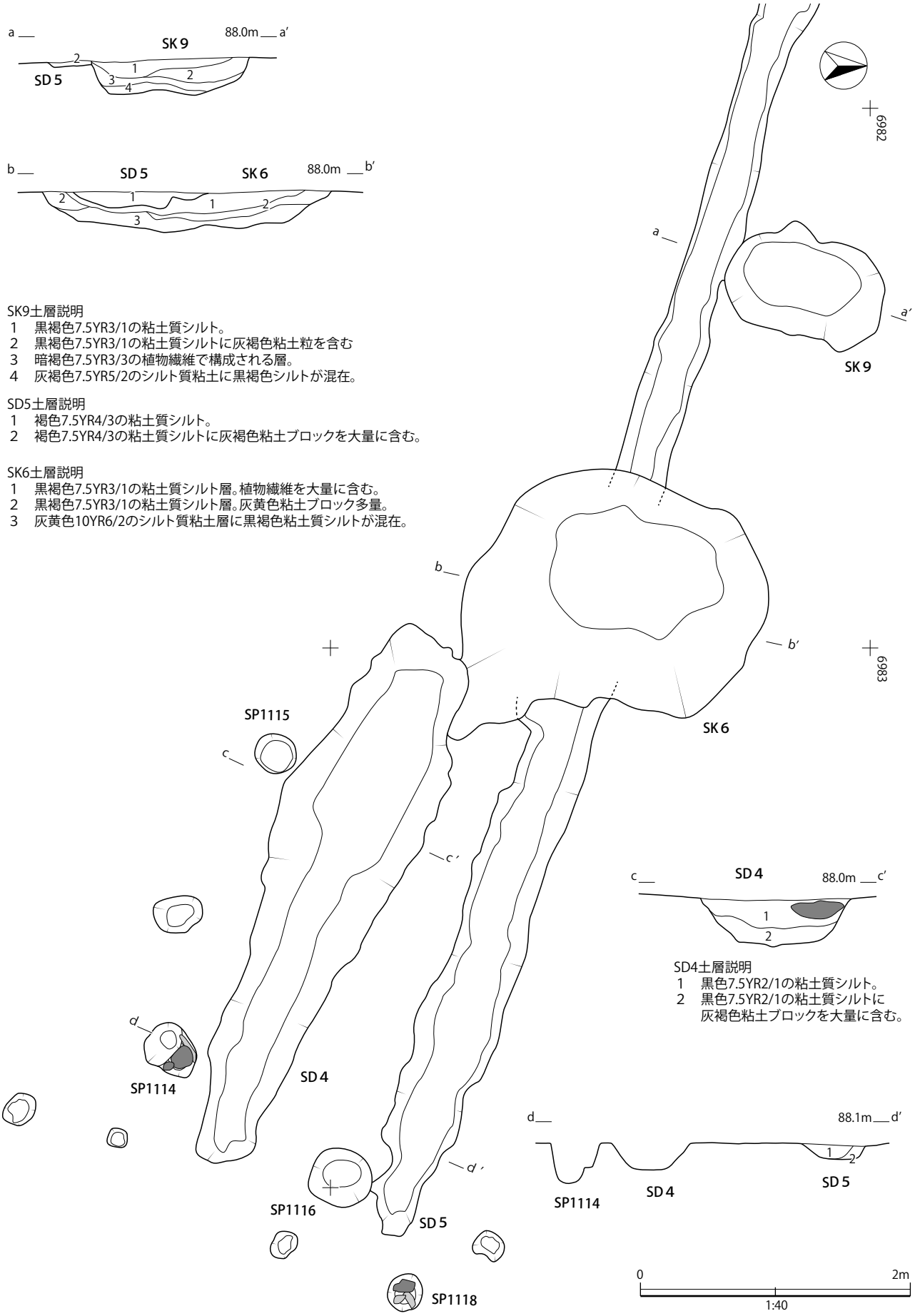
第 40 図　SD3 溝状遺構 6（断面）



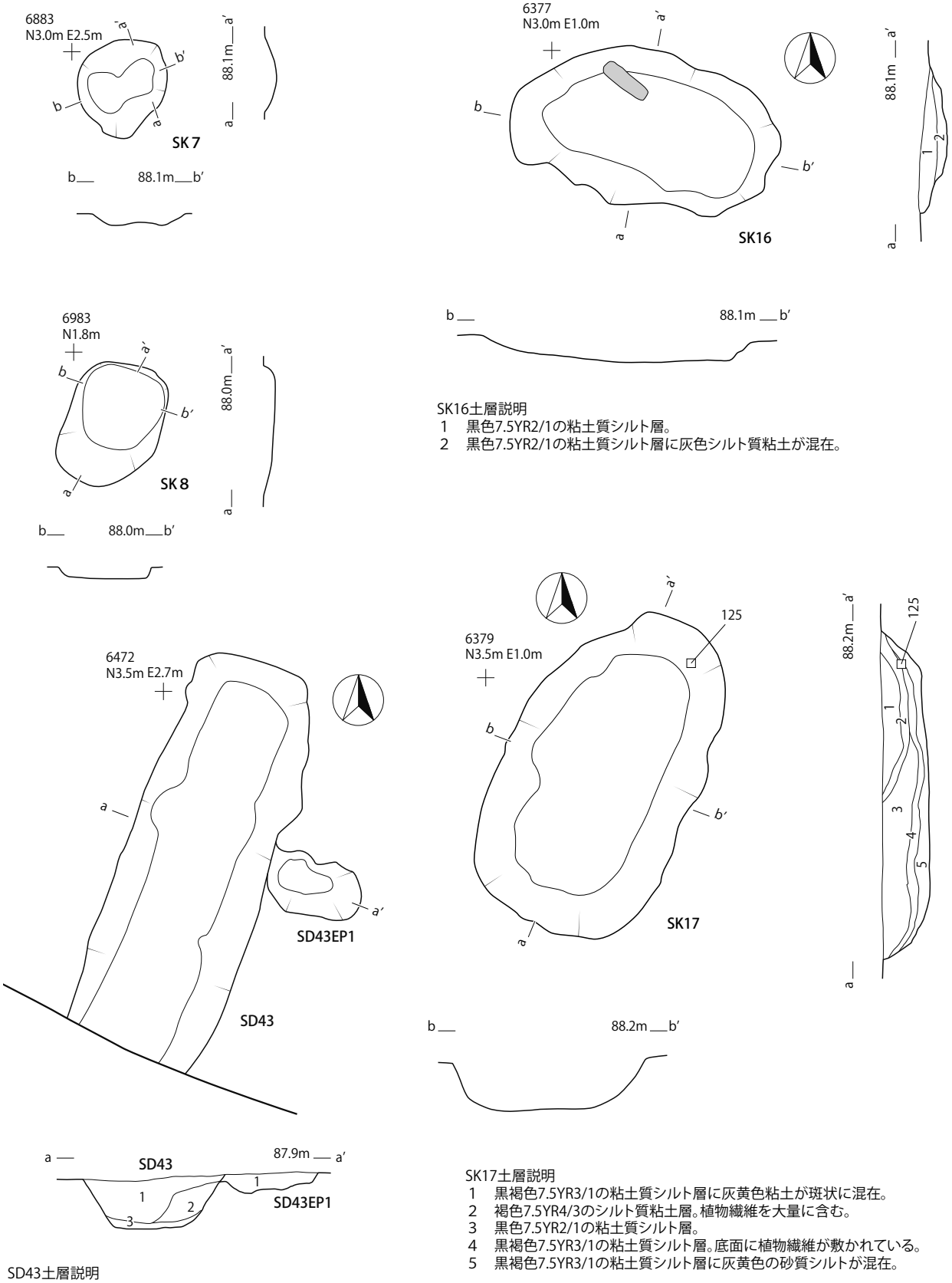
SD3土層説明
1　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層。植物繊維を含む。

0　2m
1:40

第 41 図　SD3 溝状遺構 7（断面）



第 42 図　SD4・5 溝状遺構、SK6・9 土坑



SK16土層説明
1　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層。
2　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に灰色シルト質粘土が混在。

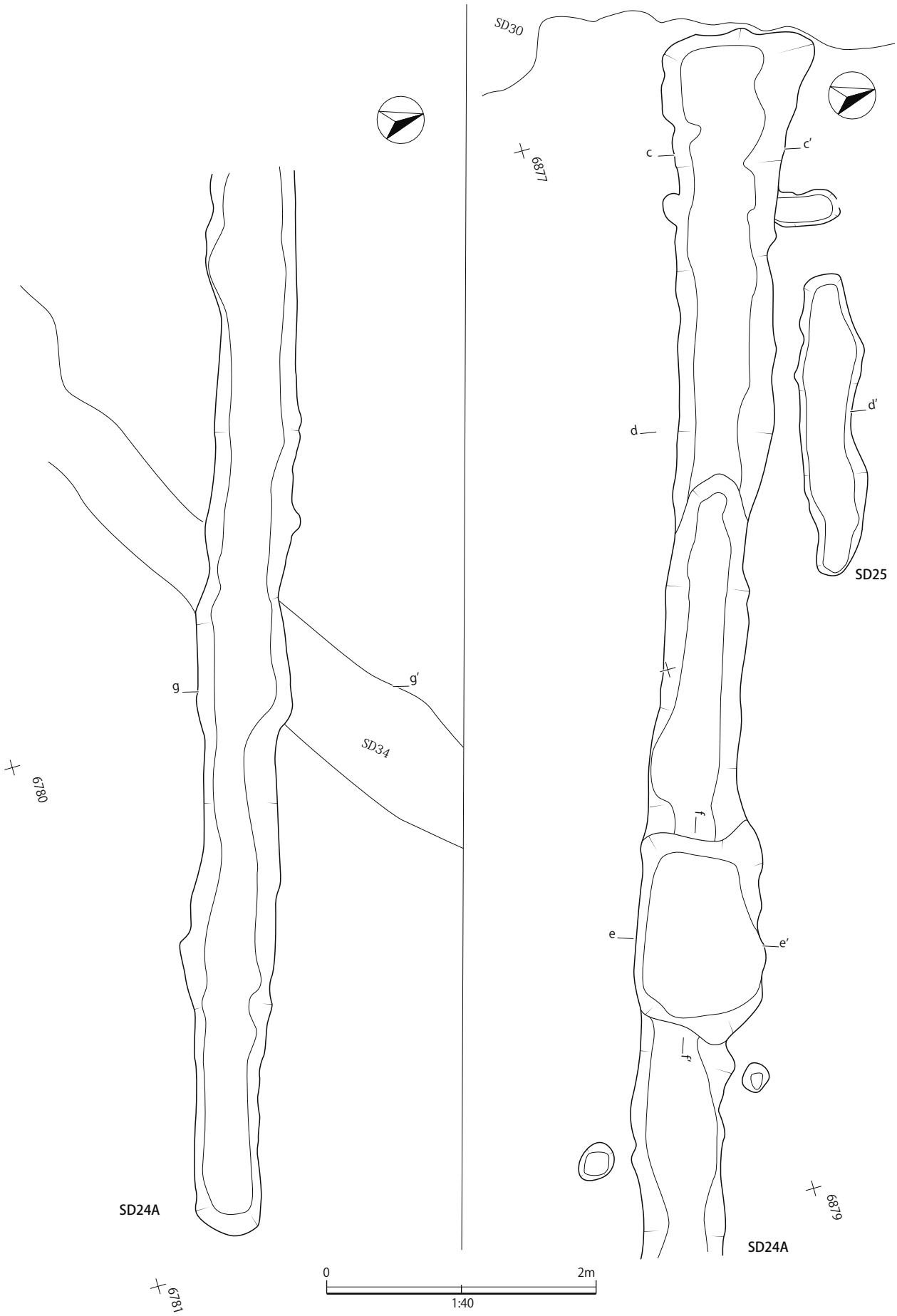
SK17土層説明
1　黒褐色7.5YR3/1の粘土質シルト層に灰黄色粘土が斑状に混在。
2　褐色7.5YR4/3のシルト質粘土層。植物繊維を大量に含む。
3　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層。
4　黒褐色7.5YR3/1の粘土質シルト層。底面に植物繊維が敷かれている。
5　黒褐色7.5YR3/1の粘土質シルト層に灰黄色の砂質シルトが混在。

SD43土層説明
1　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層。
2　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に灰色粘土ブロックを含む。
3　黒褐色7.5YR3/1の粘土質シルト層。

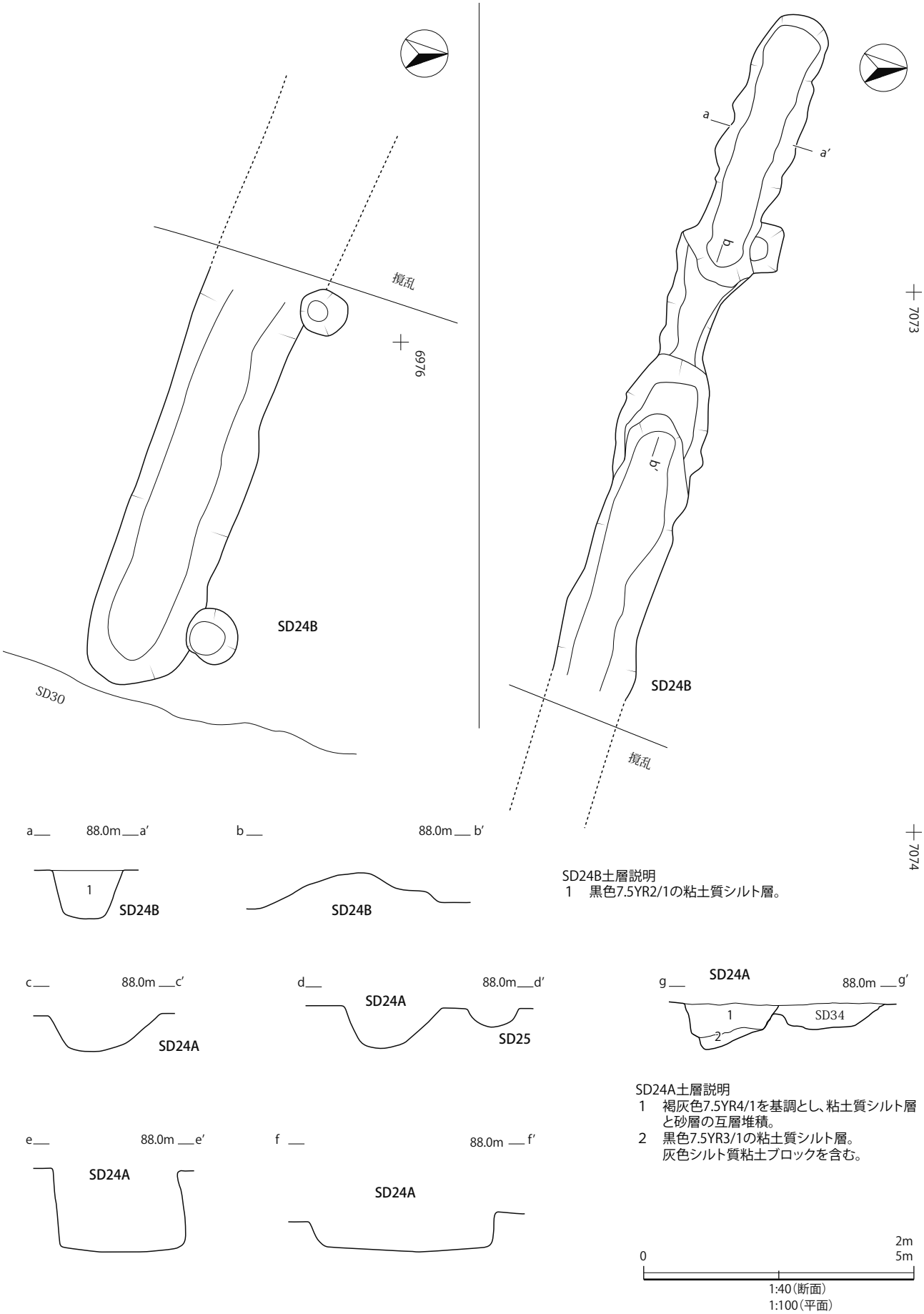
SD43EP1土層説明
1　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に灰褐色土ブロックを少量含む。

0　2m
1:40

第 43 図　土坑ほか 1（SK7・8・16・17、SD43）



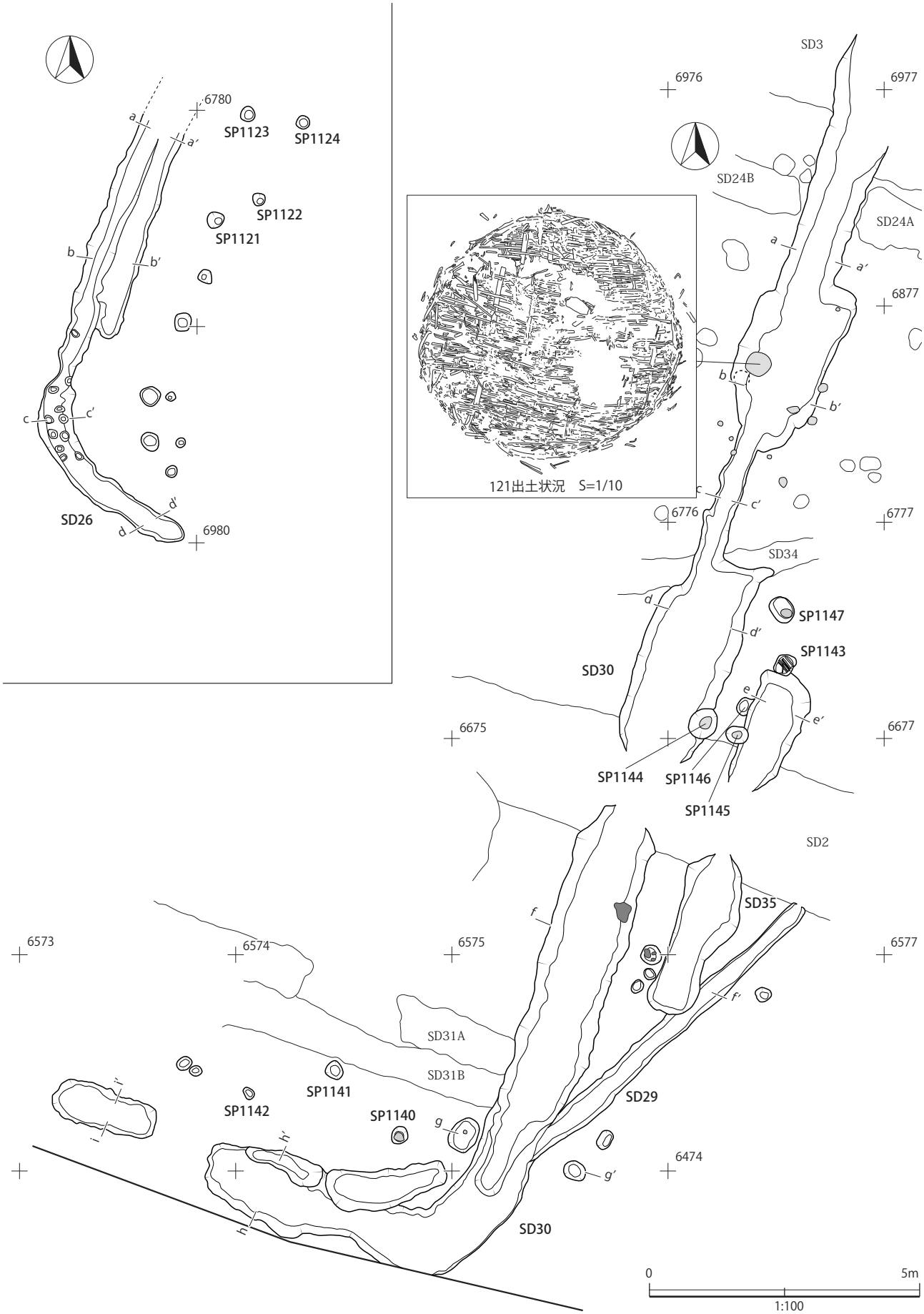
第 44 図　SD24 溝状遺構 1（平面）



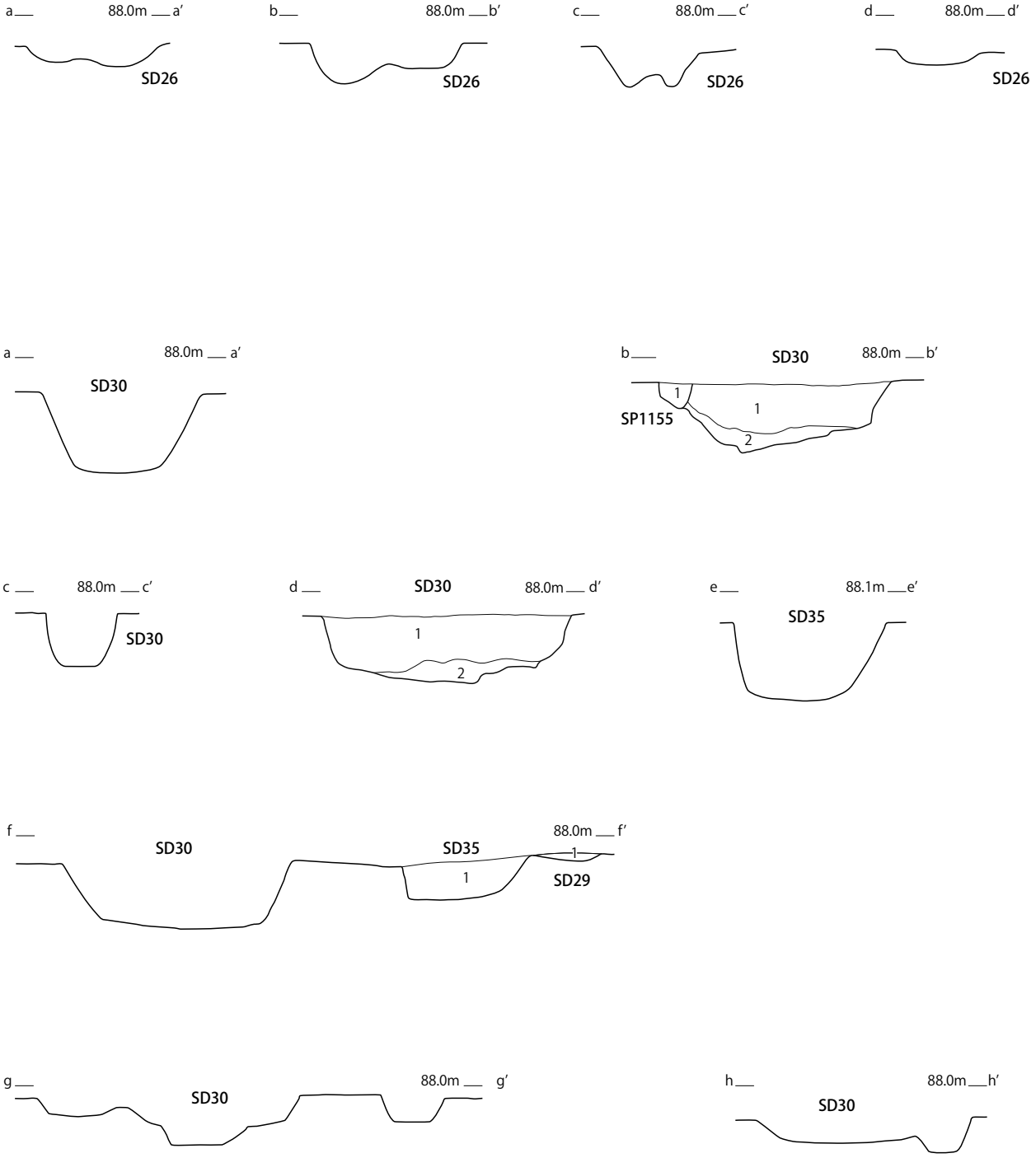
SD24B土層説明
1　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層。

SD24A土層説明
1　褐灰色7.5YR4/1を基調とし、粘土質シルト層と砂層の互層堆積。
2　黒色7.5YR3/1の粘土質シルト層。灰色シルト質粘土ブロックを含む。

第 45 図　SD24 溝状遺構 2（平面・断面）



第 46 図　SD26・29・30・35 溝状遺構 1（平面）



SD29土層説明
1　黒褐色7.5YR3/1の粘土質シルト層に灰色粘土ブロックが斑状に混在。

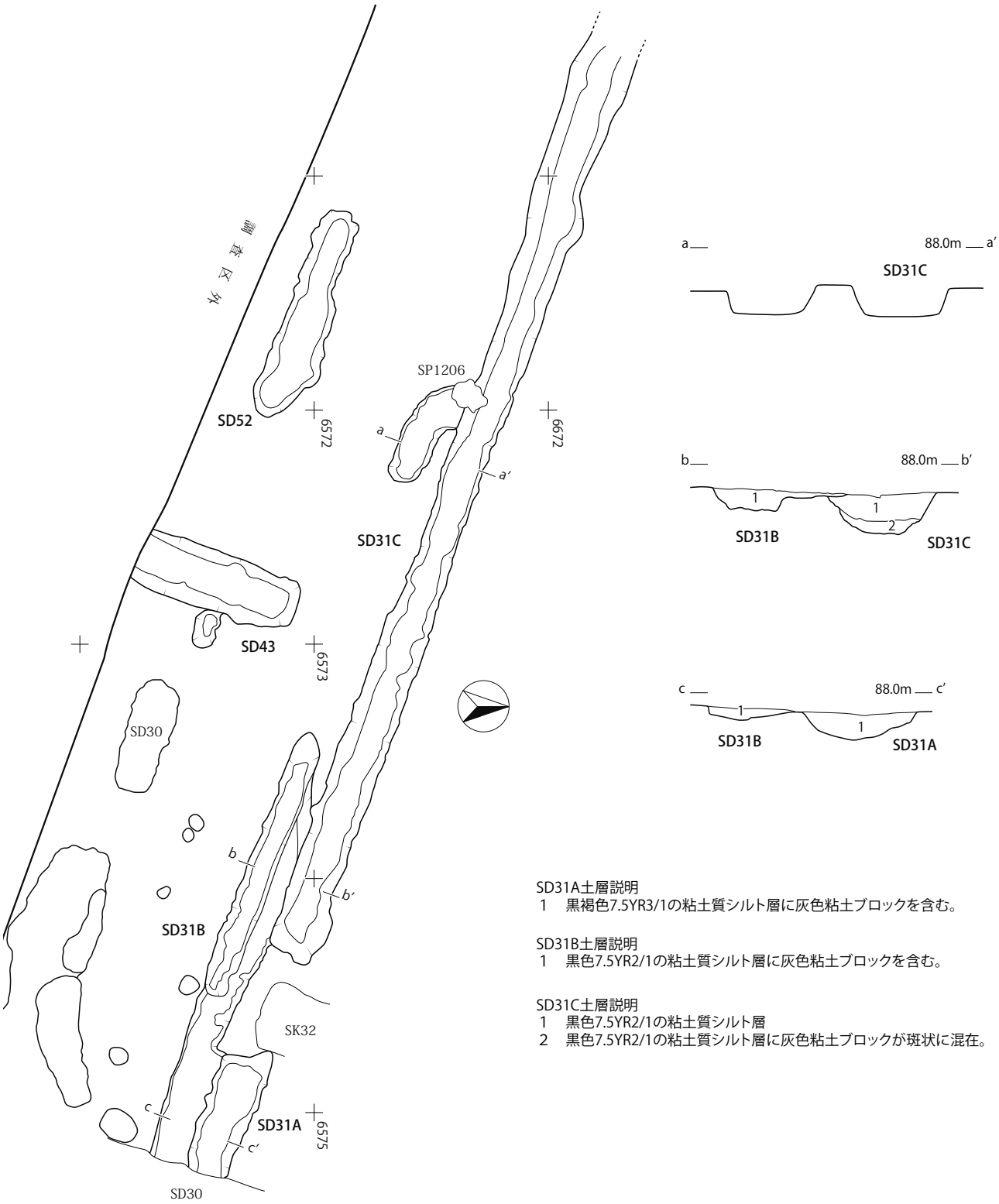
SD30土層説明
1　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層。
2　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に灰色シルト質粘土ブロックを大量に含む。

SD35土層説明
1　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に灰色粘土ブロックを含む。

SP1155土層説明
1　黒褐色7.5YR3/1の粘土質シルト層に灰色粘土粒が斑状に混在。

0　2m
1:40

第 47 図　SD26・29・30・35 溝状遺構２（断面）



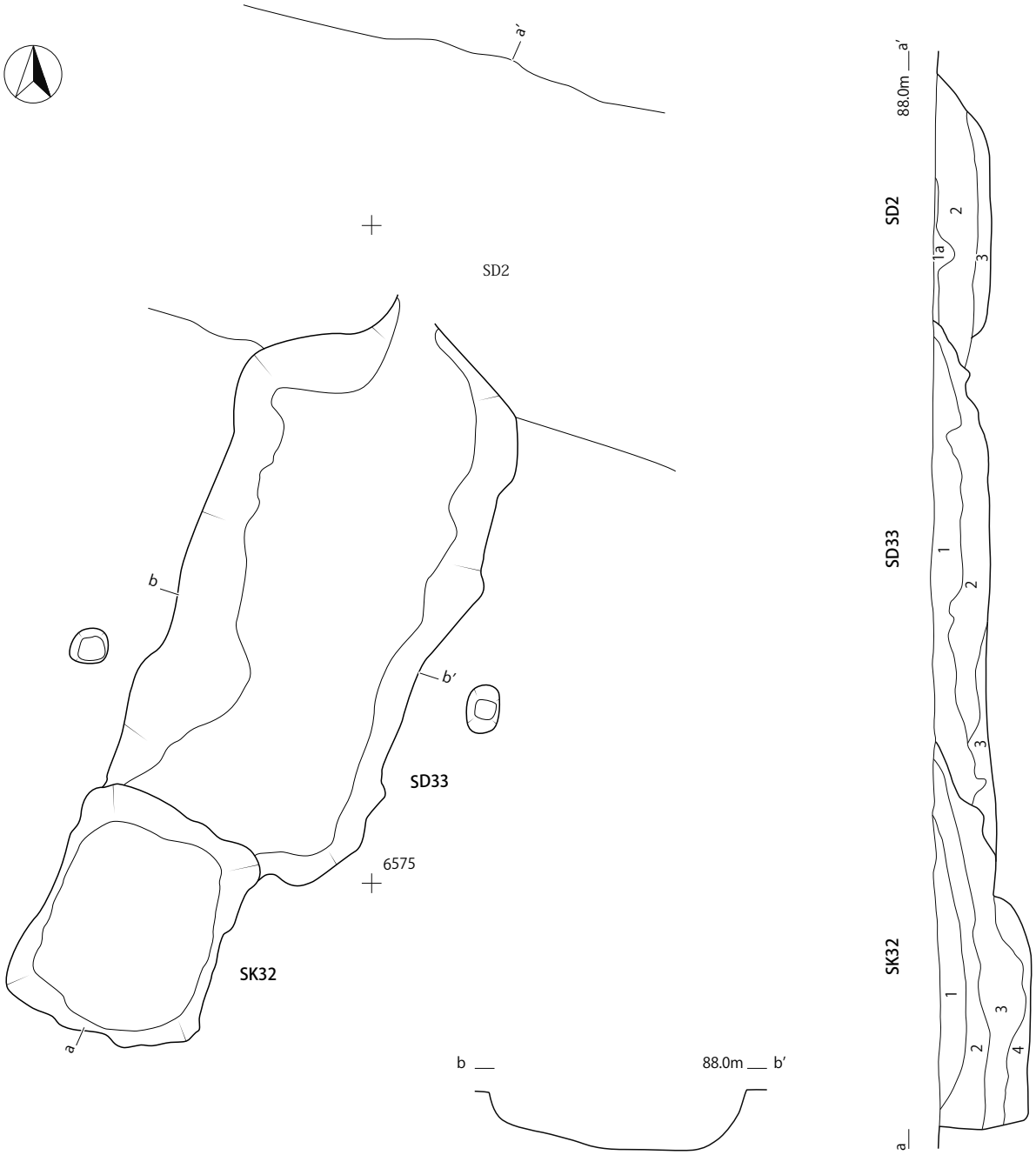
SD31A土層説明
1　黒褐色7.5YR3/1の粘土質シルト層に灰色粘土ブロックを含む。

SD31B土層説明
1　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に灰色粘土ブロックを含む。

SD31C土層説明
1　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層
2　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に灰色粘土ブロックが斑状に混在。

0　2m　5m
1:40（断面図）
1:100（平面図）

第 48 図　SD31A・B・C 溝状遺構



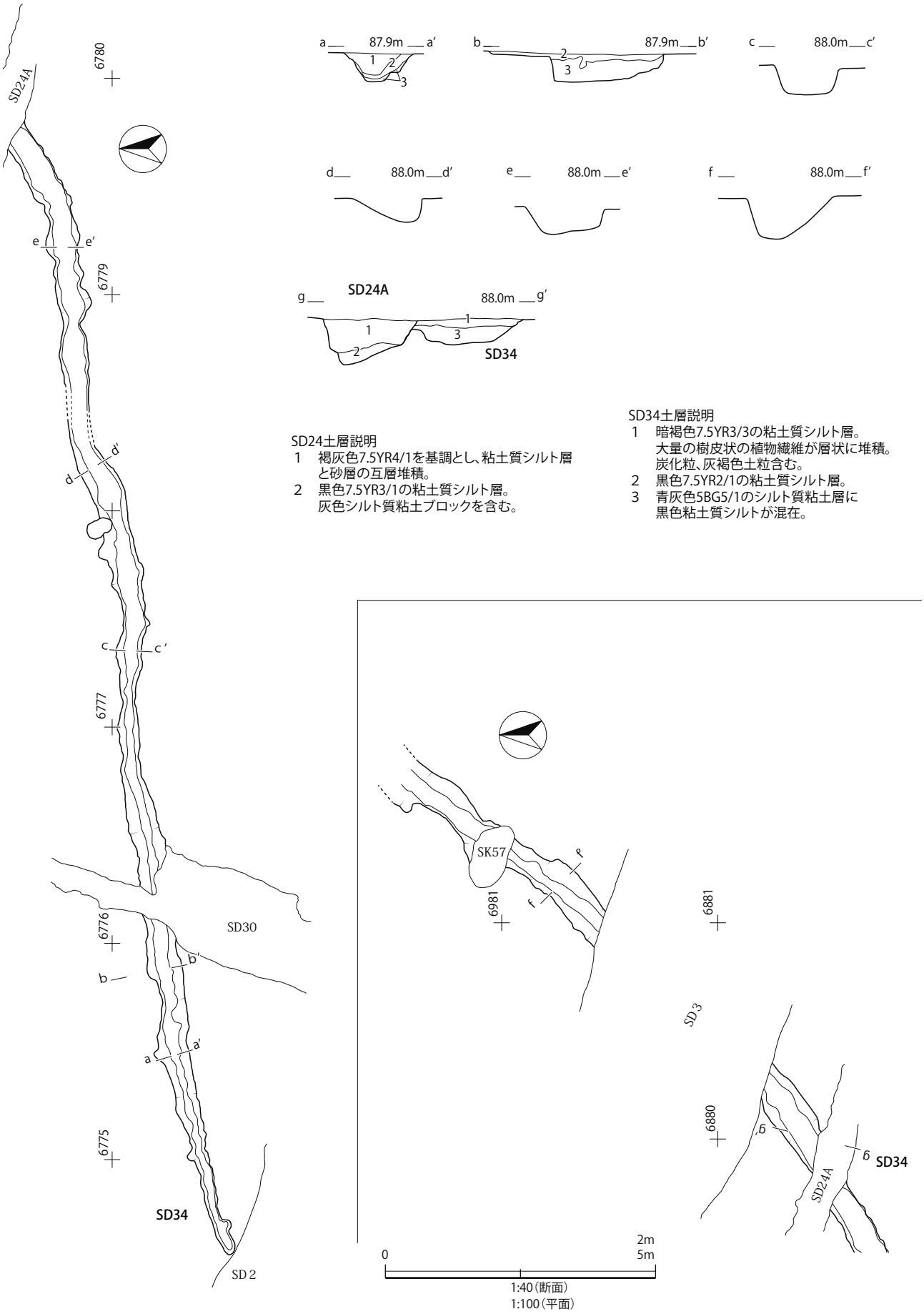
SK32土層説明
1　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に植物繊維が層状に堆積。灰色粘土粒を含む。
2　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に灰色シルト質粘土を含む。
3　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に灰色シルト質粘土ブロックを斑状に含む。
4　青灰色5BG5/1のシルト質砂層に黒色粘土質シルトが混在

SD33土層説明
1　黒褐色7.5YR3/1の粘土質シルト層に灰色粘土粒を斑状に含む。2層との境に植物繊維層を成す。
2　黒褐色7.5YR3/1の粘土質シルト層に灰色シルト質粘土が全体的に混在。
3　青灰色5BG5/1のシルト質砂層に黒褐色粘土質シルトが混在

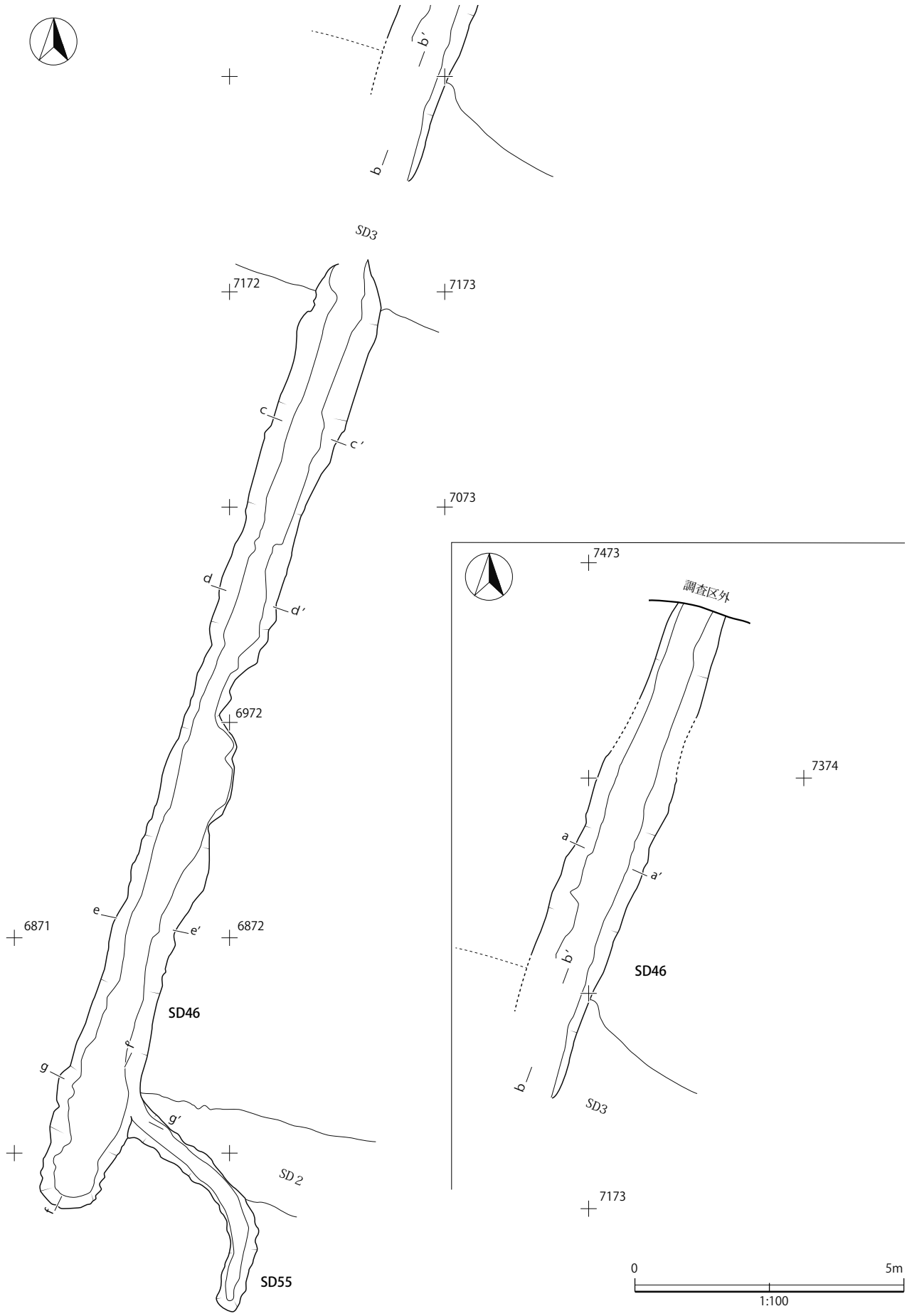
SD2土層説明
1a 黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に灰色シルト質粘土が混在
2　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層。植物繊維を含む。
3　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に灰色シルト質粘土が混在。

0　2m
1:40

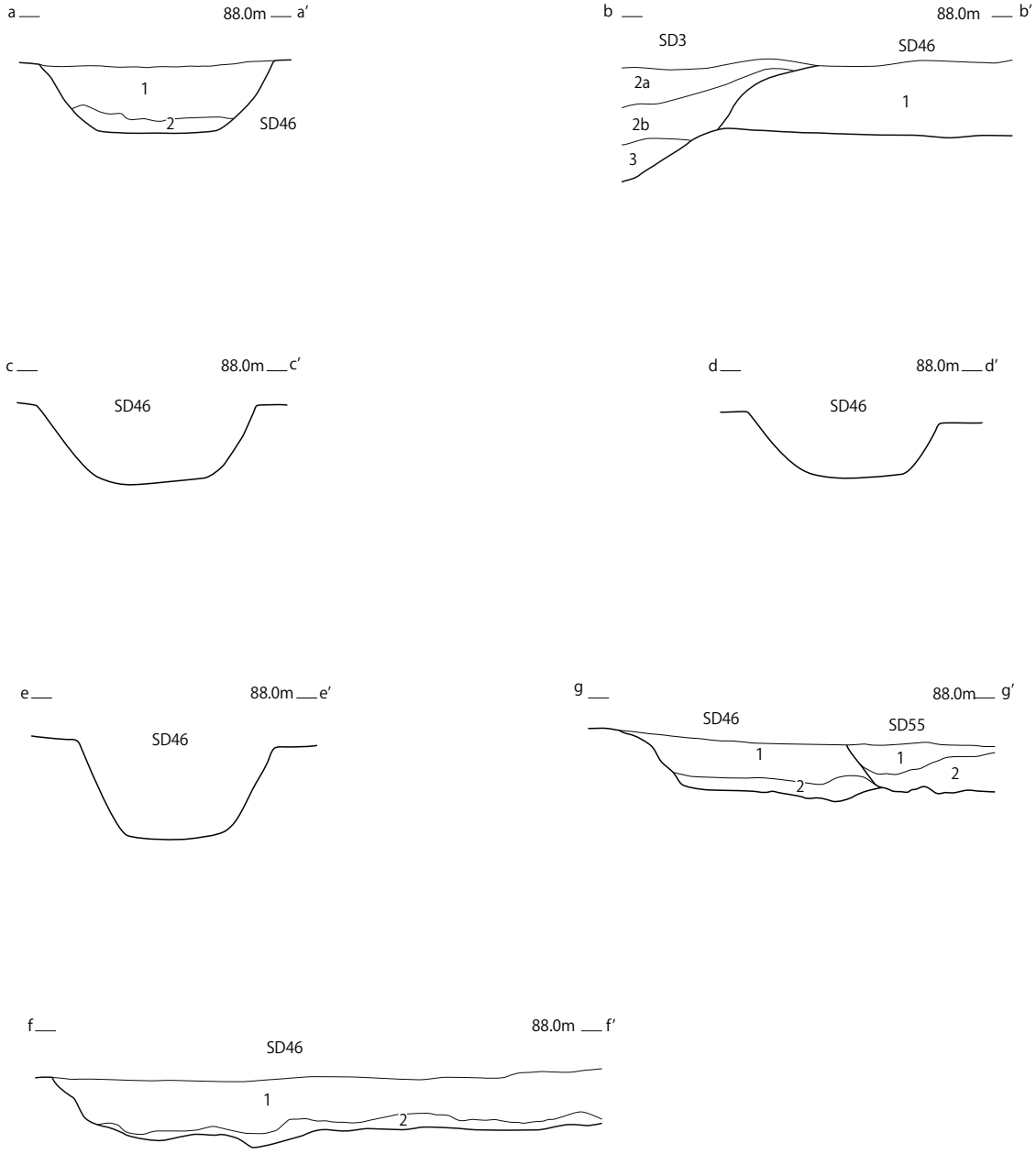
第 49 図　土坑ほか 2（SK32、SD33）



第 50 図　SD34 溝状遺構



第 51 図　SD46・55 溝状遺構 1（平面）



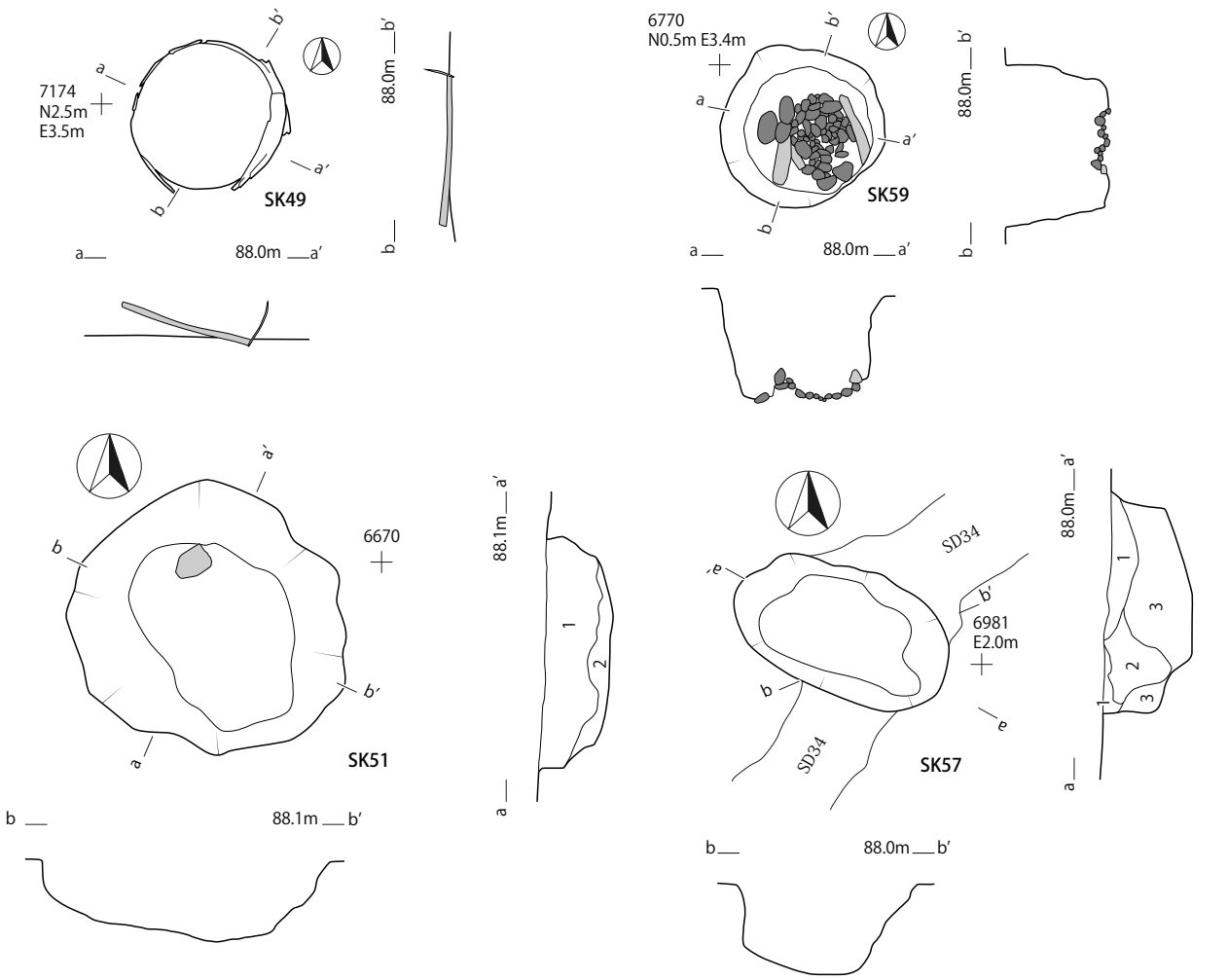
SD3土層説明
2a　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に灰色シルト質粘土が混在。
2b　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に黄褐色砂、灰色シルト質粘土が混在。
3　黒褐色7.5YR3/1の粘土質シルト層に灰色シルト質粘土ブロックが斑状に混在。黒色土層が層状に堆積。

SD46土層説明
1　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に砂、灰色シルト質粘土粒が混在。
2　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層。灰色シルト質粘土ブロックを含む。

SD55土層説明
1　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層。砂、灰色粘土粒を層状に含む。
2　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に灰色シルト質粘土を含む。

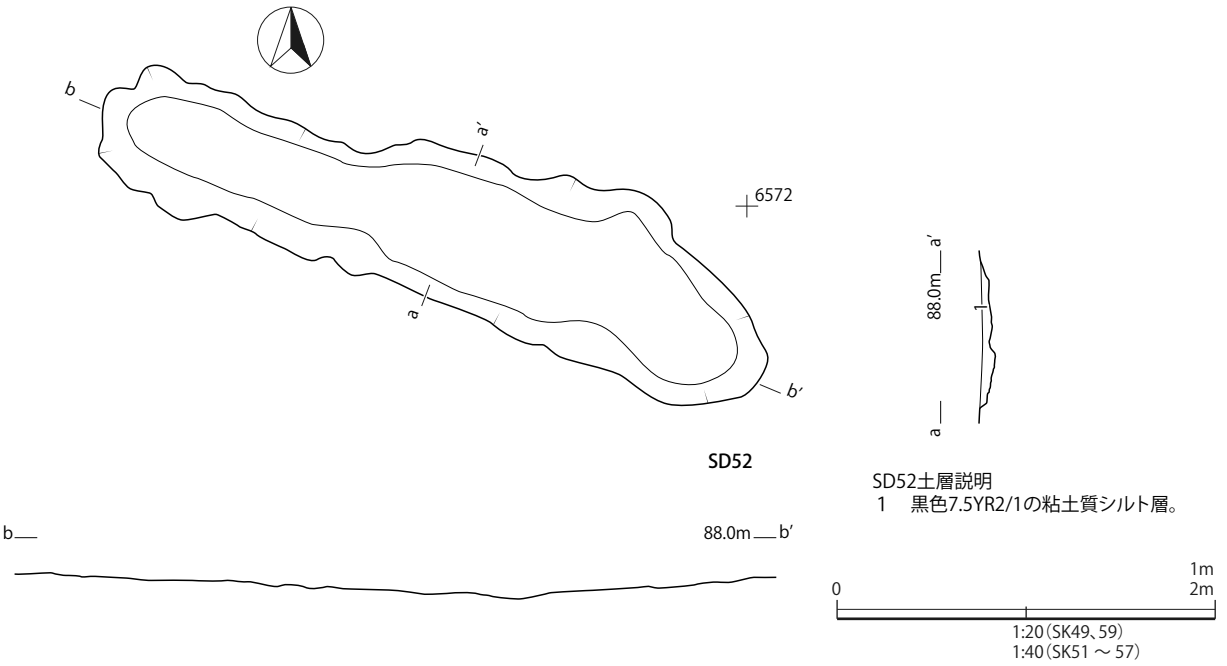
0　2m
1:40

第 52 図　SD46・55 溝状遺構 2（断面）



SK51土層説明
1　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層。
2　青灰色5BG5/1のシルト質粘土層に黒色粘土質シルトが混在。

SK57土層説明
1　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層に灰色シルト質粘土を少量含む。
2　青灰色5BG5/1のシルト質粘土層に黒色粘土質シルトが斑状に混在。
3　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層。



SD52土層説明
1　黒色7.5YR2/1の粘土質シルト層。

第 53 図　土坑ほか 3（SK49・51・57・59、SD52）

Ⅳ　出土した遺物

1　遺物の概要

出土した遺物についてまず概略を記し、のちに個々の遺物について記述する。出土した遺物の主なものは陶磁器、木製品、石製品、古銭である。これらは出土遺構にかかわらず、種類や産地ごとにまとめて掲載している。番号はすべて共通して通し番号をつけている。近代陶磁器は図面上に写真をはめ込んでいるため、写真図版は省略し、自然遺物や分析サンプルなどは、写真のみの掲載となっている。

陶磁器類は中世から近世に属するもの、特に16世紀から17世紀にかけての遺物が多く、輸入磁器の白磁、青磁や青花、国産陶器の瀬戸美濃、肥前陶磁器がみられる。それ以前のものとしては13世紀後半から15世紀にかかる輸入磁器や、珠洲の擂鉢や甕、他に古瀬戸の後期様式期のものと考えられる筒形容器や瓶類、盤もしくは折縁深皿の破片、在地で作られたと考えられる瓷器系陶器がみられる。その他では、19世紀以降の陶磁器類が大量に出土している。これらは3基の土坑から出土したものがほとんどで、今回調査した遺構全体からすれば、主たるものではない。輸入磁器類と瀬戸美濃陶器は第54図、肥前・瀬戸陶磁器と珠洲・越前製品は第55図、瓷器系陶器や擂鉢と産地不明陶器、中世以前の土器類は第56～57図にまとめている。また、表16には中世の陶磁器の集計をまとめている。

木製品では漆器椀・皿、木椀、曲物の部材、笊（ざる）などの食物の供膳や加工に関係するもの、下駄や横櫛といった日用品、年貢米に関係すると考えられる木簡、その他用途がはっきりしないものなどが出土している。また、柱穴の底に礎盤として敷かれた枝材の中には、二次的に利用されたものもあり、杭を加工したものや引戸の樋として使用していたものを転用している例が確認された。ほとんどの枝材に使用された枝材は鉈などで伐採されたと思われ、鋸の痕跡は確認されていない。樹皮がついたままのものがある一方、全体的に樹皮を剥いだであろう痕跡を残すものもあった。漆器椀・皿は第58図、曲物、蓋、笊は第59図、下駄や横櫛は第60図、木簡や不明木製品などは第61図、ピット等の礎盤として用いられたものなどは第62～63図にまとめている。

石製品は石塔の部材、硯、砥石、凹石、茶臼がみられた。石塔の部材は相輪と考えられる。類似したものが寒河江市にある上の寺遺跡から出土している。硯は1点のみ出土している。砥石は6点出土し、ほとんどが仕上砥と思われる。四角柱形のものと板状のものがみられた。凹石は、中近世の遺跡で多く出土するが用途は不明である。また、茶臼の部材も出土している。第63～65図にまとめている。

金属に関係する遺物は古銭が主になる。その他に鉄滓が2点出土している。古銭は北宋銭が多く、次いで明銭が多い。一括して出土するものが多く、SD3溝状遺構では25枚がまとまって出土している。第66～67図にまとめた。

19世紀以降の遺物は、大部分がSK21、58、45の3基の土坑から出土しているため、これらについては遺構ごとにまとめている。主体となるのは瀬戸産の磁器である。第68～69図にまとめている。

次節からは項目ごとに詳細を記載する。なお、記載のないものは遺物観察表を参照いただきたい。観察表の法量に関して、復元値は（　）、残存値は＜　＞で示す。出土位置のａ～ｄは、長大な遺構を東から分割したもので、その範囲内での出土を表す。具体的な範囲は前章に記述している。また、Ｆは覆土中、Ｙは床面からの出土を表している。F1は覆土の1層目であり、２とあれば２層目である。F1上は、確認面からの出土を示すものである。

2　陶磁器、土器

輸入磁器

白磁・青磁・青花が出土している。白磁は3点、青磁は8点、青花は11点の計22点であり、そのうち図化したのは18点である。

第54図1から3までが白磁で、１はSD1から出土している。森田勉編年のＤ類に属する小坏とみられる。口

縁部がやや反り、体部下端でくの字状に屈曲する。釉薬は口縁からその屈曲部までかけられている。屈曲部の下端には白磁釉ではなく、何らか付着物が薄く塗られている。底部の形状は欠損しており不明である。見込み部分は煤けており、灯明皿として使用された可能性を指摘できる。

２はSD3から出土したD類の皿とみられる。口縁から体部下端までの破片で轆轤成形の痕が顕著にみられる。下端は露胎である。内面に釉薬の泡立ちがみられることにより軽度の被熱を受けた可能性がある。

３はSD2から出土しているE類に属する端反皿の底部破片である。釉薬の変色がみられた、被熱による可能性が考えられる。これら３点の内、D類２点が15世紀の所産、E類が16世紀の所産である。

続いて、青磁であるが稜花皿１点、碗５点、盤１点、破片が小さいため器種が特定できなかったものが１点の計８点が出土した。

４・５はSD3から出土した龍泉窯産の青磁碗である。外面に線刻蓮弁文が施されるが４より５の方が蓮弁先端が鋭利である。この２点に大きな時期差はないと思われる。上田分類のB類に属するもので、15世紀後半から16世紀中葉頃の所産と考えられる。

６は稜花皿である。SD3から出土している。全体に被熱を受け、釉薬の光沢はなく、表面もザラザラとした触感である。口縁に沿って内面に２本の沈線が施される。断面には全体的に漆が付着しており、漆継を行ったことが確認できる。

７・８は碗と考えられるが破片である。７はSP1044から出土した口縁部の破片、８はSD30から出土した体部の破片である。７は釉薬が黄色味を帯びており、外面に線刻がされている。８は断面が一部分赤く変色している。

９・10はいずれもSD3から出土している。９は盤と考えられる大型の器であり、断面の一部に漆継の痕跡がみられる。10は碗の底部破片である、この遺物についても断面に漆の付着がみられる。漆継を行ったものと推察される。７から10は年代を決定づける詳細な根拠はないが、他の青磁の年代から15世紀後半から16世紀中葉頃までの範囲内で捉えて問題ないと考える。

続いて青花である。青花は皿が３点、碗が５点、器種不明が３点出土してる。大部分が景徳鎮産のものと考えられる。

内、11と12は小野分類のC-Ⅲ群に属する連子碗であり、同一種類と考えられる。ただし、接点がないため別個体とし、各１点として集計している。いずれも口縁部に内外に二重圏線を施す。見込みには蓮弁文と吉祥文のようなものが確認できる。

13はB_1群に属する端反皿で口縁部内面に二重圏線が描かれ、見込みに二重圏線その内部に恐らく草花文が描かれていたと思われる。外面は口縁部と高台に圏線が施され体部の高台と体部の接続部の体部側に二重圏線が施される。体部には草花文が施される。断面に漆が付着しており、漆継を行ったとみられる。

14と16は碗である。14はC群のもので、口縁部内外面に圏線を施し、見込みにも圏線を施す。圏線の下から釉薬が途切れており、その先は欠損しているが内面は露胎であった可能性が高い。外面体部は草花文である。16は底部のみであるがB群の端反碗だと思われる。高台部は薄く、内傾がきつい。外面は高台部に圏線が入り、残存する体部下位には菊花弁文が施される。見込みには二重圏線が施されており内面にも文様がみられるが詳細は不明である。また、頻繁に使用されたのか見込み部には複数の細かいキズが見られ、器壁の光沢も失われている。

15・17は皿の破片とみられる。15は口縁部の破片で内外面に圏線が施され、内面にも文様があったとみられるが小破片のため、判別がつかない。17は高台から底部の破片である。外面の体部下端に二重圏線が施され、見込みには同じく二重圏線と葉が連続する文様が施される。

18は皿の高台及び底部の破片である。外面は体部下端に圏線が施される。高台は付け高台で、高台の接続部付近に漆が付着している。見込みには海老もしくは魚類と思しきものが描かれている。また、焼台の痕跡が２箇所確認できる。全体的に変色しており、色調はくすんでいる。被熱によるものと考えられる。またこの遺物も漆継を行ったとみられ、断面には漆の付着が確認された。

青花は16のB群の碗が15世紀代、11から14のC群の碗やB_1群の皿などは15世紀後半～16世紀中頃に位置づけられるものである。ほとんどがSD3出土のもので、17のみSK17から出土している。

古瀬戸、瀬戸美濃

本調査では古瀬戸の後期様式と考えられる遺物が５点出土している（19～23）。19は口縁部の破片で盤類と

考えられる。ただし、詳しい器種は判然としない。口縁部の形状と体部の傾斜から折縁皿の可能性がある。内外両面とも灰釉を施し、黄緑色を呈す。断面に漆の付着がみられ、漆継の痕跡と推察される。20 は体部破片で外面に灰釉を施し、内面は露胎である。轆轤成形の痕跡が顕著にみられる。21 は盤類の体部破片と考えられる。小破片のため、詳しい器種は不明である。内外面とも露胎であることから体部でも下部の破片だと思われる。20・21 とも黄緑色を呈す。22 は筒型容器とよばれる体部から底部の破片で底部外面中央部に露胎部分を残すがそれ以外は灰釉をかけられている。色調は深緑である。底部外面には重ね焼きから剥がす際に剥離したと思われる欠損がみられる。23 は瓶類の体部破片である。破片中央部に 5 本の並行した沈線が施されている。また、沈線の下端に釉薬が剥離したような痕跡がある。装飾が外れた可能性がある。内面には成形した際の痕跡が確認できる。内外面とも灰釉が塗られており、深緑色を呈す。これらの古瀬戸は上記の通り後期様式のものと考えられ、14 世紀後半から 15 世紀末ごろのものである。

大窯期の瀬戸美濃製品は、24 から 32 にまとめている。また、近現代の遺構である SK45 からも同時期の皿(240)が出土している。

24 から 26 は小天目で 24 は底部の破片である。外面は露胎であり、内面は錆釉がかけられる。断面には漆継の痕跡がみられる。25 は体部の破片である、両面とも錆釉が施される。26 は口縁から底部までが残存している。口縁部から体部下端まで鉄釉が施されており、底部は露胎である。24・25 と比べ光沢が残る。こちらも漆継を施したようで、接続する断面のいずれにも漆が付着する。これらの内、24・25 は小破片であるため詳しい年代はわからないが 26 については口縁部の外反が先端部分に限ること、体部の器形が丸みを帯びていることから大窯Ⅲ からⅣ段階に属するものと思われ、16 世紀中葉から末のものと考えられる。

27 から 32・240 は皿である。28 は全体に鉄釉をかけた丸皿である。高台内面には重ね焼きを行った粘土紐の痕跡が残る。胎土は褐灰色で緻密である。そのため、越中瀬戸の可能性があるが、越中瀬戸の場合、高台内面と見込みを持って施釉するため全面施釉にはならず、また、胎土は白いとされる。そのような特徴には当てはまらない。胎土については古瀬戸の 22・23 のような色調であることから、瀬戸美濃の大窯初期のものと考えられるが検討を要す。27 から 32 は丸皿で全面に灰釉が施されている。このことから大窯Ⅰ・Ⅱ段階の製品だと考えられる。27 は高台及び底部の破片である。全面被熱のため釉薬の光沢が抜けてしまっている。高台内面には重ね焼きの痕跡である粘土紐の痕跡が残る。29 も 28 とほぼ同様であるが、こちらは変色するほどの被熱は受けておらず釉薬の泡立ちが確認できるにとどまり、深緑を呈す。30 は小皿にあたり釉薬の色調は黄緑色を呈す。口縁部は先端付近で外反する。31 は口縁部の破片である。内外面とも灰釉を施しており黄緑色を呈す。32 は中皿か小皿で内外面灰釉が施され深緑色を呈する。内外面とも若干被熱を受けており、釉薬が変色している箇所がみられる。240 は内剥皿である。見込み部は露胎であり、その他は灰釉が施される。全面被熱変色している。大窯Ⅲ・Ⅳ段階の製品とみられる。

24 は SD41、25 は SP1151、26・28・30 は SD3、27 は SP1056、31 は SP1270、32 は SD30 からの出土である。

肥前陶磁器・瀬戸磁器

肥前産の陶磁器は、陶器皿が 2 点、陶器碗が 3 点、染付磁器碗が 7 点、染付磁器皿が 1 点、瓶類が 2 点を図化した。

33 と 34 は唐津で焼かれた皿であり、16 世紀末から 17 世紀初頭に製作されたものである。釉薬は外面口縁部から体部中ほどまで灰釉で施されており、内面は全面施釉である。胎土はにぶい橙色を示す。33 は溝縁形の口縁部の破片である。先端の手前で一度外反し、先端部は内湾する。被熱し、釉薬の光沢が失われている。34 も同様で内面が特に被熱している。見込みに見える胎土目は 4 つであり、高台には 3 つの目跡が確認できる。

35 は呉器手碗である。全面を黄色味のかかった灰釉により施されている。高台の接地面には重ね焼きから外す際に破損したと思われる箇所が 3 箇所みられる。17 世紀前半の製品と考えられる。

36・37 は陶器碗である。36 は内面全面と外面は口縁部から体部下端まで灰釉が掛けられており、体部下端から高台内部までが露胎である、釉薬は薄い緑色を呈す。高台には砂目積みの痕跡と見られる砂が付着している。36・

37 はいずれも 17 世紀前半のものと考えられる。37 は全面に灰釉が施され、薄い青色を呈す。見込みには灰釉を使用して描かれたと思われる白色の曲線がみられる。高台には砂目積みの痕跡とみられる砂が付着している。

17 世紀前半の 38・39 は染付磁器碗類の口縁部の破片である。破片のため詳しい形状は不明である。38 は口縁部内面に二重圏線を施し外面体部には草花文が施される。39 は外面に草花文が施される。

40・41 は 17 世紀後半から 18 世紀代の丸碗である。40 は口縁部から体部下端までの破片で染付の丸碗である。体部中央に最大径をもち、そこから口縁に向かい緩やかに内湾していく。外面は竹の葉が描かれ、体部下端には圏線が書かれる。内面は口縁部と見込み部分に二重圏線が施される。41 は口縁部から体部までの破片で碗である。外面はコンニャク印判にて菊花文が施される。

42 は碗類の高台部と底部の破片である。体部下部と高台との接続部、高台の上下に計 4 箇所の圏線が施される。

43 は皿で碁笥底状に高台を削り出している。高台部には砂目積みの痕跡と思われる砂が付着しており、17 世紀前半の製品だと考えられる。内面は口縁部に圏線が施され、内面に草花文が施される。

44 と 45 は瀬戸産の磁器であり、19 世紀のものと考えられる。44 は皿の高台から底部の破片、45 は蓋である。 いずれも遺構外からの出土である。

46 は肥前磁器の猪口で、腰が張る器形を呈し、17 世紀の製品とみられる。体部下半に呉須で上から細い、太い、細い順で円圏線を施し、太い円圏線のところに桜の花弁を型抜きするように施している。

47・48 は瓶類の破片である。47 は頸部下端から肩部にかけての破片である。頸部直下に二重圏線を施している。内面は無釉でロクロ成形の痕跡が残る。48 は体部の破片である外面には草花文と思われる模様が施されている。内面は一部釉薬がかかっている。

49 は碗類の体部から高台までの破片である。外面体部に松と思われる絵が施され、高台上部に二重圏線が施される。高台には砂目積みの痕跡と見られる砂が付着している。

33 は SK59 からの出土、34 は SD3 の覆土からの出土、35・36・37・42・43・46 は SD3 の覆土直上からの出土、39 は SP1053、40・49 は SK14、41 は SK1110、47 は SD30、48 は SK19 から出土している。

珠洲・越前

珠洲は 4 点出土している。擂鉢が 1 点、甕が 1 点で壺が 2 点である。50 は擂鉢で口縁部から体部の破片であり 9 条 1 組の擂目を持つ。擂目付近は摩滅しており、滑らかな触感を呈す。胎土には 1 mm 以下の黒色の鉱物が均一に含まれている。器形と擂目から珠洲 4 群とみられ、13 世紀末から 14 世紀後半の製品と考えられる。

51 は甕の頸部下端から体部の破片である外面には格子目状のタタキの痕跡が残り、内面には手の親指付け根で抑えたような痕跡が残る。胎土も 50 同様に 1mm 以下の黒色鉱物が均等に含まれている。断面には漆が全体に付着しており、漆継を行っていたことが考えられる。

52・53 は壺の体部の破片である。52・53 は刻み目が斜めに入ったタタキであり、それが上下方向に施され、横へ移動しタタキの向きを変えさらに上下方向へ施している。51 と同様に胎土には 1mm 以下の黒色鉱物が均等に含まれている。タタキの状況と胎土から 52・53 は同一個体の可能性が高いと思われる。

50 は SD2 から出土し、51・52 は SD3、53 は遺構外からの出土である。いずれも 13 から 14 世紀の製品だと思われる。

54・55 は構成する胎土がほぼ同様で、黒色鉱物を均一に含んでいるが、焼き締まりが甘く、にぶい橙を呈している。ともに越前と考えられるが、他の産地の可能性があるため、表においては「越前か」としている。いずれも薄く錆釉を施しており、54 は SD2 からの出土、55 は SD3 からの出土であり、ともに 16 世紀ごろの製品と考えられる。

瓷器系陶器、肥前擂鉢

57 から 60 は瓷器系陶器の甕である。57 と 58 は頸部から体部にかけての破片、59 と 60 は体部の破片である。内外面無釉である。付着物が多く、黒色の物質が付着しており、場所によっては光沢がみられる。また、破損後に何らかの道具として使用したのか断面にも黒色の付着物がみられる。60 は 57 から 59 までと違い付着物の量は少ない。焼成は一部で甘い部分がみられ、58 と 59 は断面中央部が黒色である。いずれも SD3 からの出土である。13 から 14 世紀ごろの製品とみられる。

56・61・62 は擂鉢である。61・62 は肥前産の擂鉢

でロクロ成形であり、いずれも擂目付近は使用により摩耗している。61 は瓦質であり無釉で、擂目は 7 条 1 組。62 は 10 条 1 組の擂目をもつ。いずれも 17 世紀の製品と考えられるが 61 の方が若干古い様相を持つ。56 は肥前もしくは信楽の擂鉢の体部から底部である。擂目がない箇所の破片である。内外面とも無釉でロクロ成形である。底面にも擂目は確認できないことから信楽の可能性が高い。外面には黒色の炭と思われる付着物がみられる。16 から 17 世紀ごろの製品とみられる。出土地点は 56・61 が SD3、62 が SP1053 から出土している。

瓦質土器

63 から 65 の 3 点が出土している。いずれも SD3 の覆土からの出土である。年代は近世に属すると考えられるが、SD3 の覆土内から出土した遺物は新しくとも 16 世紀末から 17 世紀初頭のものであるため、これら瓦質土器もこの年代を含めたそれ以前のものと思われる。63 は器種不明の体部破片である。内外面とも器壁表面が剥がれている。被熱を受けた可能性が高い。内面下端と考えられる部分には屈曲部がみられる。64 は土瓶の口縁から体部下端までの破片であり、注口を有す。外面は多数の磨きで器壁の調整を行っているがあまり丁寧ではない。注口は棒状の粘土を体部に取り付けた後に串状の工具で穴を開けている。内面には黒色で光沢のある付着物が内面注口の穴付近と下端に多く付着している。65 は鉢の口縁付近から体部の破片である。ロクロ成形の後、凹凸を消し滑らかな器壁を作り出している。内面は使用したためか滑らかさは消失している。

産地不明の陶磁器

66 から 77 は産地不明の陶磁器である。66・67 は擂鉢の破片で、66 は口縁部から体部の破片、67 は体部の破片である。68 は器種不明の陶器である、胎土は肥前のものに類似する。69 は小型壺の口縁、70 から 72 は瓶類などの破片とみられる。73 は碗の体部の破片で在地窯の製品と考えられる。74 は小型甕の体部破片、75 は小型皿、76 は瓶類の口縁部、77 も瓶類と考えられ、部位は体部下部と高台の一部である。年代はいずれも近世で 75・76 については近代の可能性がある。

縄文土器、土師器、須恵器

78 から 82 は縄文土器である。いずれも縄文時代後晩期に属する。78 は刺突文が施されたもの、79 は沈線を施したものになる。80 から 82 は粗製深鉢の破片になる。いずれも SD34 から出土している。83・84 は古墳時代の土師器で、83 は小型甕の口縁部である。ナデにより整形される。84 は高坏の脚部上部の破片である。85 から 88、91 から 94 は須恵器である。85 は高台坏の底部であり、底部及び断面には炭化物が多量に付着している。破損後転用硯として使用したとみられる。8 世紀後半のものと見られる。86 から 88 は甕の体部である。91 から 94 は坏でいずれも 9 世紀中頃から後半のものとみられる。94 は底面に「利□」と 2 文字の墨書がみられるが、欠損のため 1 文字は判読できない。89・90 は土師器とみられる。89 は小型甕の底部、90 は坏の口縁部と見られる。器形から蓋の可能性も考えられる。時期はいずれとも古代の範疇として留める。

3　木製品、石製品、金属製品

漆　器

95 から 115 までが漆器である。遺存状態は非常に悪く、完形のものはない。また、漆も剥落している。95 から 111 までは黒漆の上に赤漆で文様などを描いている。112 から 115 は黒漆のみを塗っている。描かれているものは殆どにおいて草花と考えられ一部は鳥のような図柄も見て取れる。また、95 においては底部外面に赤漆にて「一」の字が書かれる。103 についても底部外面に何らかの文字が記載されていたようだが漆が剥離しており確認できない。99・100・101 は内面において、絵を描かず、赤漆を塗布するのみとなっている。SD2 から出土している破片資料の 109（写真のみ）においては炭素年代測定を行っており、1410-1440CalAD（95.4％）の値を得ている。他の漆器について年代を測るすべはないが SD3 出土の 95・96、98 から 102・104・107・110・112・113 の漆器については他の陶磁器類の年代観から 16 から 17 世紀前半以前のものと考えて良いと思われる。また、黒漆のみを使用したものは赤漆を使用したものより古いとされている。112 から 115 については素地となる木椀の形状も違っており、年代差の可能性がある。

木椀、曲物、笊

116 は刳物の木椀である。底部を残す。底部は側面を削り、高台を作った上で、底部外縁付近を溝状に薄

く削っている。SD3 からの出土である。117 から 120 は曲物の側板と底板である。117、119、120 が底板、118 が側板である。117 は残存している長さで 232mm と大きく、119 と 120 は 100mm 前後であり、曲物の大きさで使用方法が違っていたと思われる。117 は SK6、118 と 120 は SD30、119 は SD3 から出土している。

121 は盆笊で、SD30 から出土している。非常に脆弱であったため、現地で委託業者による取り上げとその後の保存処理をした遺物になる。直径 500mm 程で竹ひごを使用して編んでいる。細いヒゴと太いヒゴを縦横に組み合わせているが規則性があり、横を細いヒゴとした場合、縦は太いヒゴのみを使用している。ヒゴ幅は細いものが 1 ～ 4mm、太いヒゴは 7、8mm のものを使用しており、持ち手となる部分には 5mm 程度のものを使用している。

122 は SK49 に埋設された曲物の側板と底板である。中からは成人の歯が 5 本出土している。側板は屈曲させるため、縦及び斜めに細い傷をいれている。留め具には桜の皮が使用されていた。炭素年代測定を歯で実施したところ 1417-1448CalAD（95.4％）の数値を得ているため、曲物自身も同様の時期に作成されたものと考えられる。なお、使用用途については円形木棺の可能性もあるが、成人のものにしては小さいため、検討を要す。

下駄、横櫛

123 から 127 までが下駄である。123・124 が連歯下駄である。123 は SD1 から出土した小型品である。丸形の孔を持ち、規格的で仕上げも整っているため、新しい印象を受けるが、炭素年代測定では 1402-1440CalAD（95.4％）という古手の結果が出ている。124 は SD3 から出土したもので、孔の形状は四角い。

125 から 127 は露卯差歯下駄であり、いずれも遺存状態は悪い。125 と 127 は同じ SK17 土坑から出土したものであり、対になる可能性があるが、遺存状態が悪く判断しかねる。

128・129 は横櫛で、両者とも SK17 から出土している。

木簡、木蓋、串、用途不明木製品

130 は木簡であり、SB62 を構成している SP1250 から出土している。表に「升取忠左衛門（改行）勘□」、裏には「□□ [谷地ヵ] 半左衛門分」と記載されている。年貢に関する木簡と思われるが詳細は不明である。木簡下部が欠損している。上部の幅が広く、下部が狭くなる形状である。炭素年代の測定では 1481-1638CalAD（95.4％）という結果を得ている。

131 から 133 は用途不明の木製品である。131 はカギ状の形状を持っているため、何かをかけるなどの用途に使用したものと思われる。132 は上部にくびれを作り出しており、くびれに糸を巻く、もしくは部材同士を組み合うなどに使用したものと思われるが詳細は不明である。山形県内では酒田市の亀ヶ崎城（センター 180 集）に類似品が出土している。炭素年代の測定では 1481-1638CalAD（95.4％）という結果を得ている。133 は持ち手としての機能が想像されるもので、紐をかけたような痕跡が認められる。

134 は長方形に整えられた木札で、両面にわずかに墨痕が認められるものの、判読はできない。SK17 より出土している。

135 はその形状から串と考えられる。

136 ～ 138 は木蓋である。136 は SD3 から出土し、隅丸形で半分を欠く。端部に貫通孔が 2 箇所認められる。137 は中央に指が入る程度の孔が空けられたもの。138 は厚手で中央に小さい孔が確認できる。137、138 は SD30 からの出土である。

その他の木製品

139 から 155 は、柱の沈下防止のための礎盤としてピットの底面に並べられた枝材や、他の遺構から出土した杭や建築部材である。

139 は SK59 から検出したもので、丸太材を半截し、中央部を刳り貫いて枠木としたものである。炭素年代の測定では 1633-1668CalAD（78.8％）となった。

140 から 142 は SP1064 から出土した柱材の残欠とその下に敷かれた状態で出土した枝材である。141 は柱材として、140、142 は三角形状に加工し杭として使用した後、礎盤に転用したものと思われる。

143 は SD30 から検出した杭で、両端を斜めに削っている。炭素年代を測定し、1460-1527CalAD（46.3％）と 1555-1634CalAD（49.1％）分散した結果となった。

144 は SK6 から出土した杭であり、全面に加工が施され、上部は欠損している。

145・146 は SP1026 から出土したもので、引き戸

の敷居を礎盤として転用していたものである。146 については充分な年輪数が確認できたことから、炭素年代にウィグルマッチ分析を行った結果 1647-1663CalAD（95.4％）という結果を得ている。得られた年代は伐採年代であり、伐採後加工し、屋敷等の引き戸の敷居として使用されたのち、建物が解体され、最終的に柱の礎板となったことが言える。145 も同様のことがいえる。

147 は SB64 を構成する SP1213 から出土している。全面に加工痕を残し、上部に窓が空けられる。何らかの部材だったことが推定される。炭素年代の測定値は、1481-1638CalAD（95.4％）を示す。

148 から 155 はピットの底面に敷かれた枝材の一部である。中には樹皮が付いたままのものもあり、伐採後すぐに使用されたものと考えられる。切断面をみると鋸を使用した痕跡は見られず、鉈などで切断したとみられる。149・152・155 など加工したものもみられるがそういったものは転用材の可能性が高く少数である。これらは基本的に炭素年代測定用の試料としてサンプル的に採取してきたものである。多くの記述は遺構のものと重なるため、そちらに譲る。

石製品、鉄製品、近代遺構出土品

156 ～ 173 までは石製品で、石塔、砥石、凹石、茶臼などを掲載している。156 は石塔の相輪部で、SD3 溝状遺構の底部から立ち上がり斜面にかけて、２つに割れた状態で出土している。風化の進んだ凝灰岩を用い、本来あるべき相輪よりも省略が進んでいるのが特徴である。下位の受花はなく、宝輪部は９段になるところ４段しかない。宝珠はくびれをほとんどつくらずに小さく円錐形に収束させて終わる。宝珠の下位の面取りされている部分を水煙とみれば、これは層塔の相輪と考えられる（藤澤・狭川 2017）。156 と極めて類似したものが、近隣の上の寺遺跡（第７図 18）からも出土しており、参考資料としてスケールを合わせたものを載せておく。宝輪の省略、水煙の面取り、宝珠の形など共通点が多い。

157 は同じ石塔に用いられたものか、同じ SD3 から出土し、石材も近似する。全体形では方形で内部がくり抜かれて器のようになる。156、157 らの鑑定には畠山篤雄氏の協力を得た。

158 は、硯である。使用が進み、中央部が薬研状に窪む。

159 ～ 164 は砥石である。すべて流紋岩を用い、159 ～ 163 は仕上砥で 164 だけがやや荒く中砥と思われる。形状は四角柱形をなすものと、板状のものがあるが、いずれも４面とも充分に使用されている。多くのものは端部を欠損し、欠損部にも使用痕が残る。

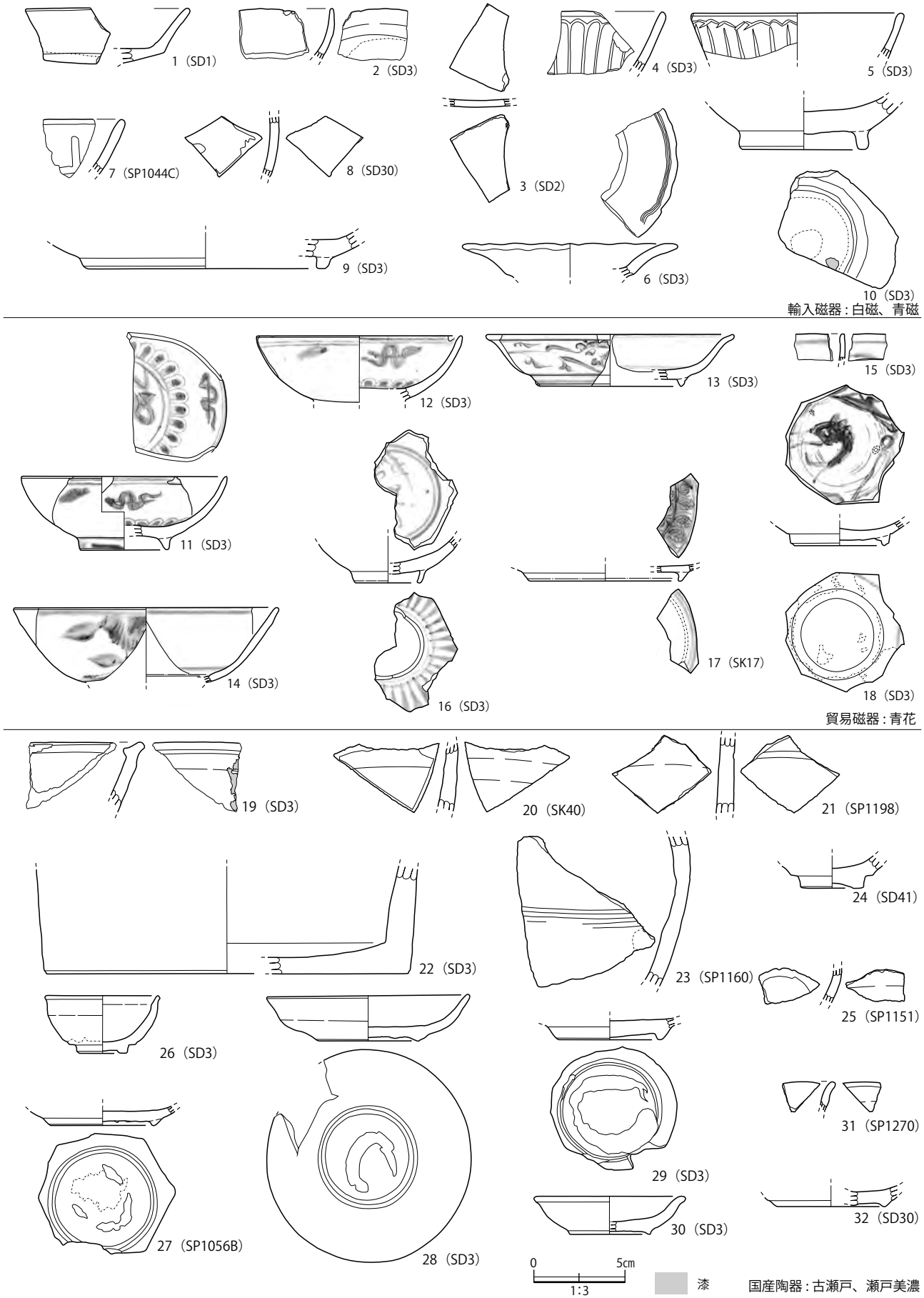
166 ～ 170 は凹石である。中近世の遺跡に多く出土するものの、用途については不明な点が多い。円礫の表裏、側面を研磨して形を整え、凹みをつくり出す 166、167。素材の形をほとんど変えない 168 ～ 170 がある。170 は SP1257 ピットの側面に柱の根固めとして据えられていたもので、凹み面に煤が付着する。

171 ～ 173 は茶臼や石鉢である。171 は小片であるがノミの痕跡を残している。

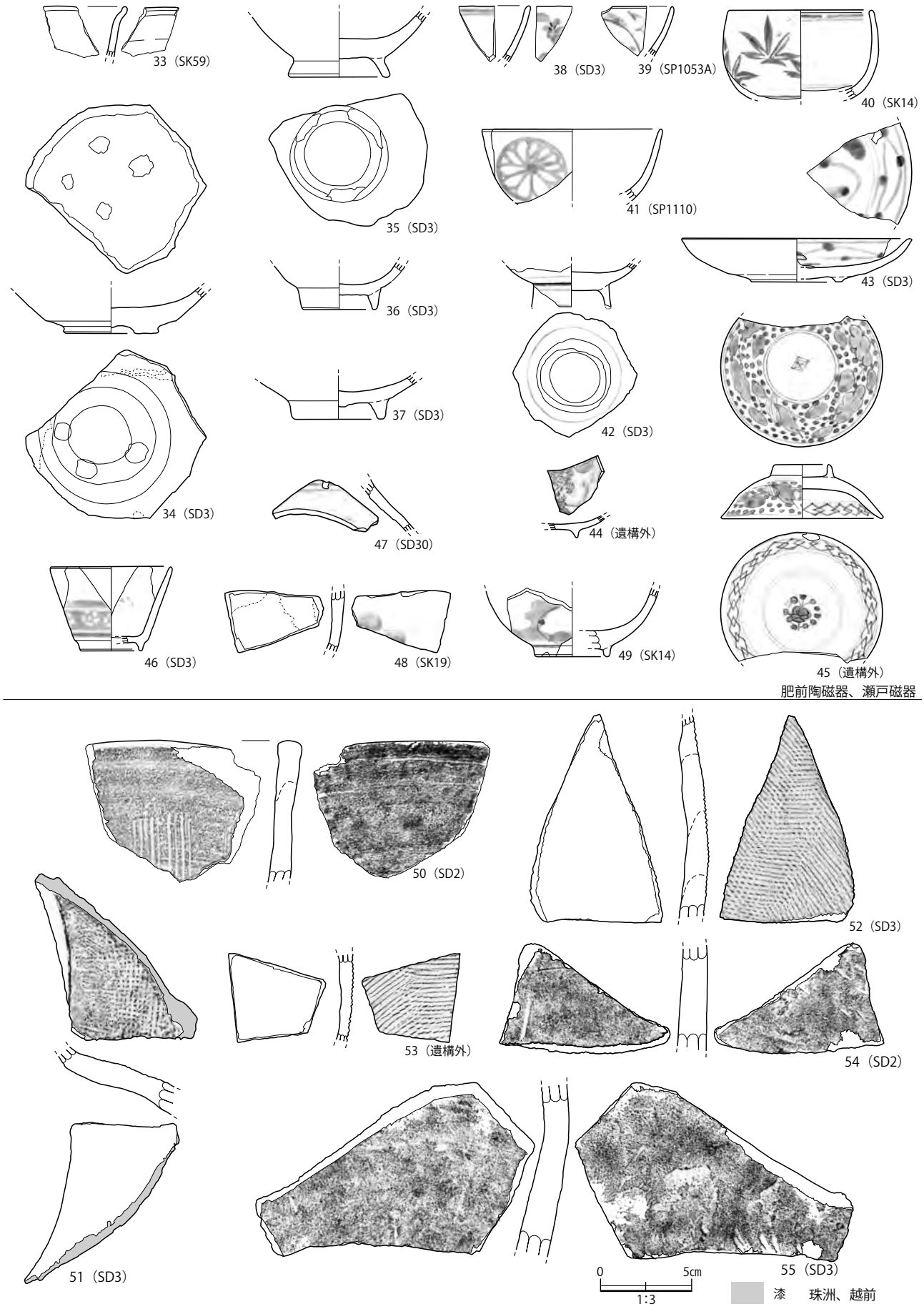
174 ～ 211 までは古銭ですべて渡来銭である。出土した 38 枚に寛永通宝など近世鋳造のものは１枚もない。174 ～ 198 までの 25 枚、205 ～ 208 までの４枚、209 ～ 211 までの３枚と、一括で出土するものが多い。25 枚のものには繊維片が付着しており、袋状のものに入った状態で埋没したものと考えられる。遺構の確認面で出土するものが多く、SD3 で 174 ～ 198 が、SD2 で 209 ～ 211 が出土している。SD2 では床面から 205 ～ 208 が出土しているが、明確な時期差はみられない。

212、213 は鉄滓で、鍛冶などによるものと思われる。

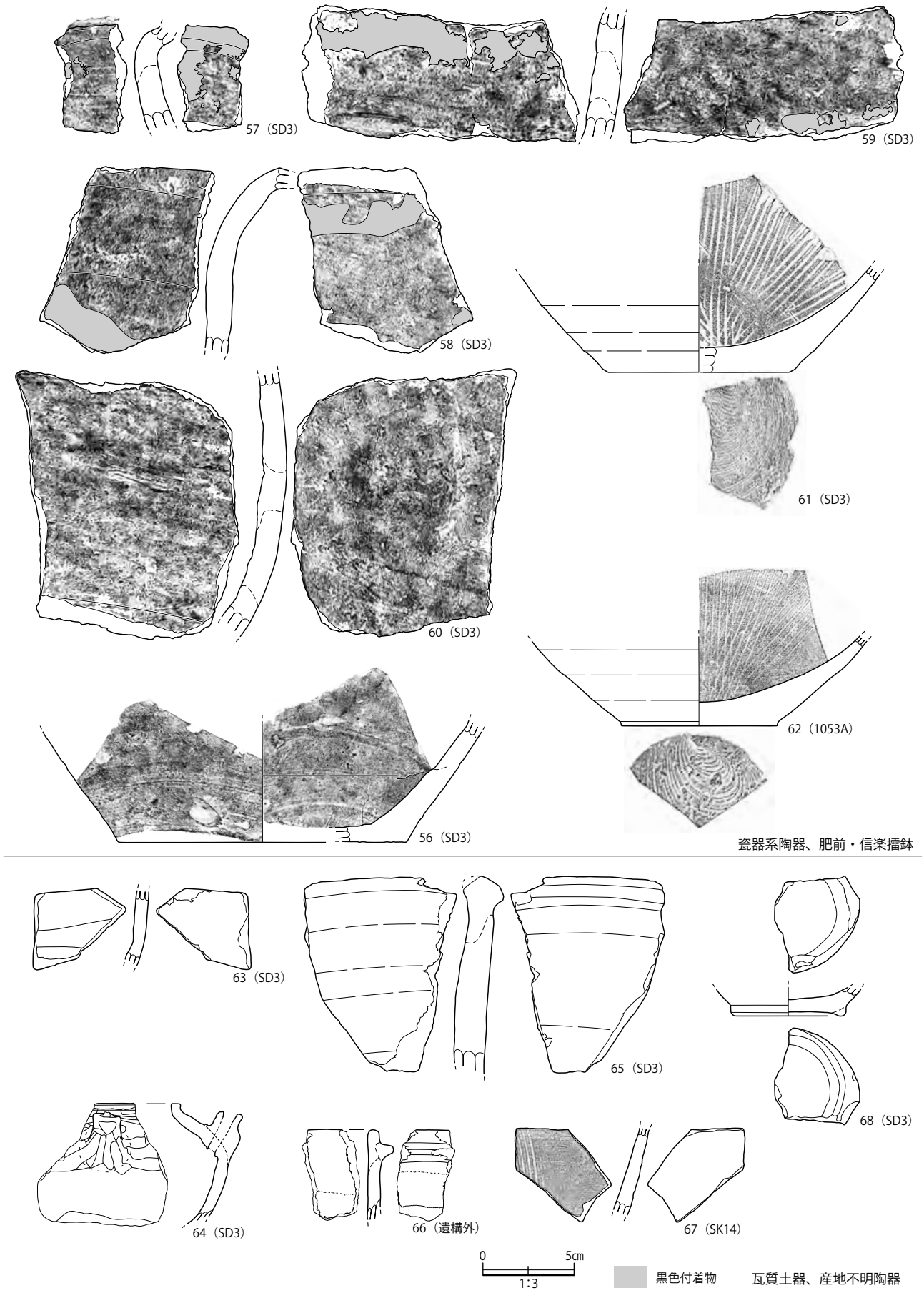
220 ～ 247 は、SK21、58、45 の近世～近代にかけての遺構から出土したものをまとめている。SK21 から出土したものは、220 ～ 227 で瀬戸の染付製品や山形市の平清水産と思われる皿（222）が出土している。加えて薄手酒坏の口縁片（226）に「明治三十八年」と記されていることから、遺構は 20 世紀初頭以降のものであろう。SK58 は 19 世紀以降と思われる瀬戸製品（230）が出土しているものの、SK21、45 のように大量には出土していない。高台に○×連続文をもつ 18 世紀の肥前の染付皿（232）は、本調査区全体でみても同時期のものが他にほとんど出土がみられないものである。SK45 は近代瀬戸製品（233 ～ 238 など）大量の遺物が出土している。245、246 は底部の刻印から味の素のビンと判断できるもので、245 が明治末、246 が昭和初期頃製造のものである。瀬戸大窯の皿（240）や肥前の碗（241）は、SK45 の掘削時に混入したものと思われる。



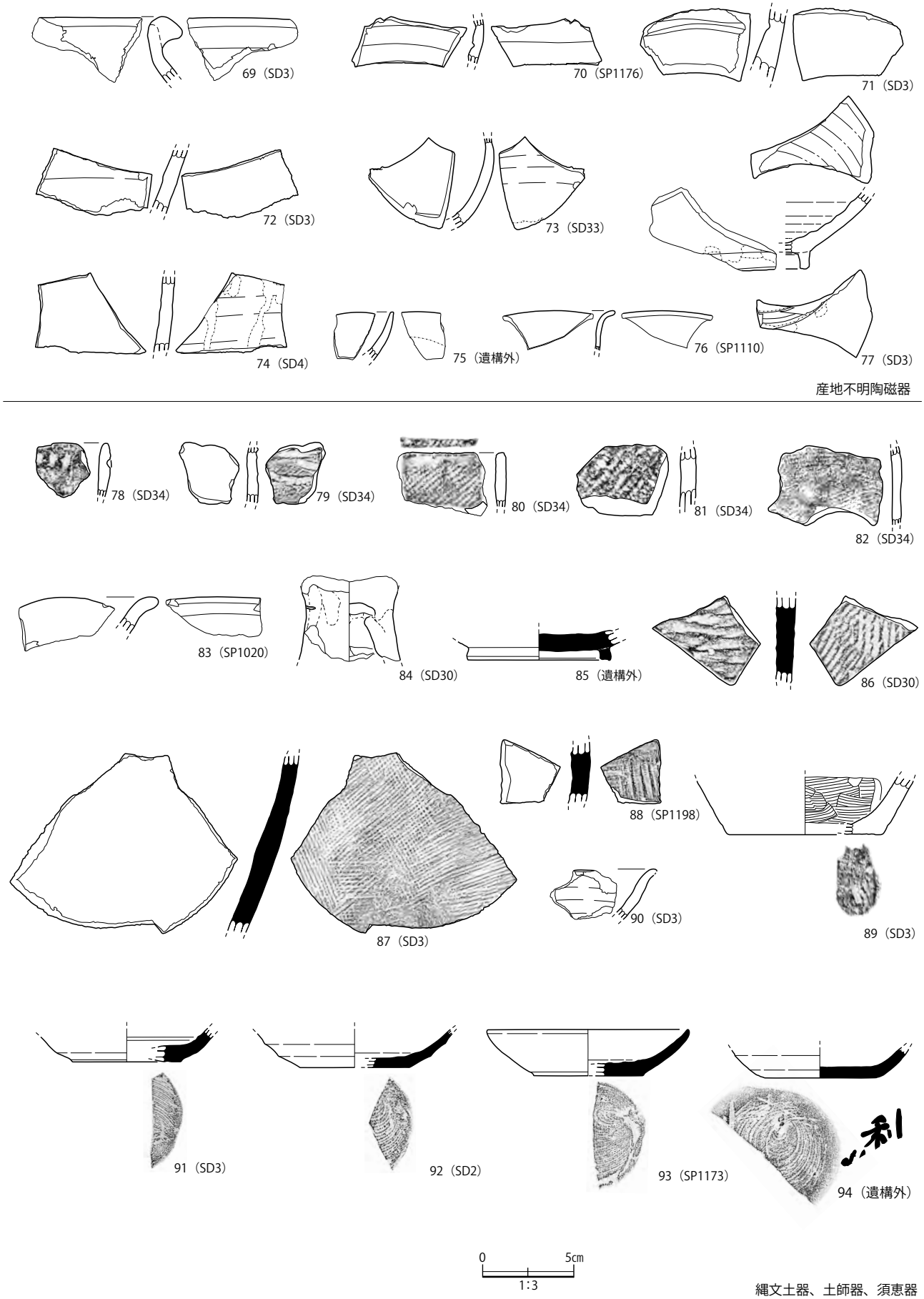
第 54 図　出土遺物 1（輸入磁器、国産陶器）



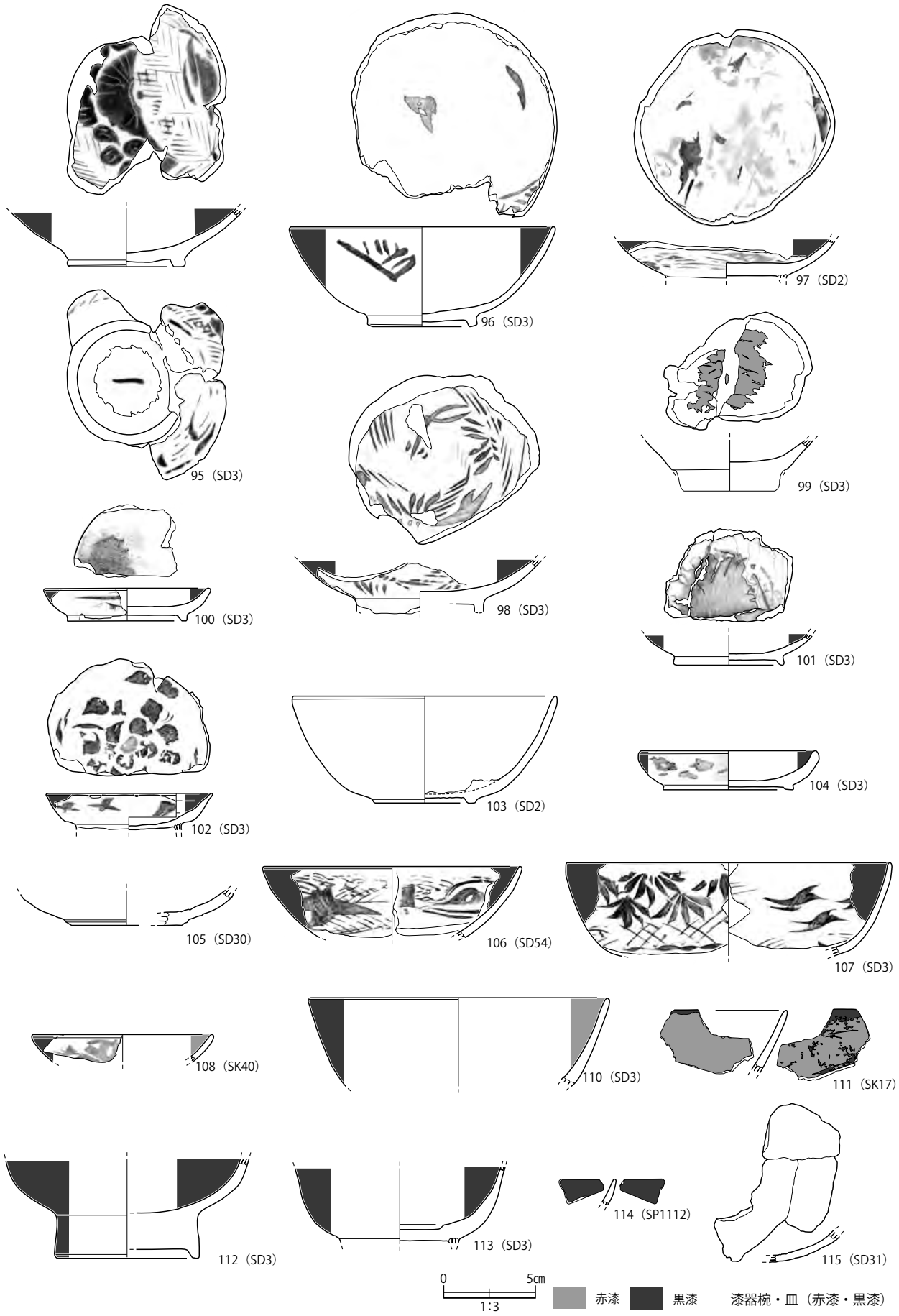
第 55 図　出土遺物 2（肥前陶磁器、瀬戸磁器、珠洲、越前）



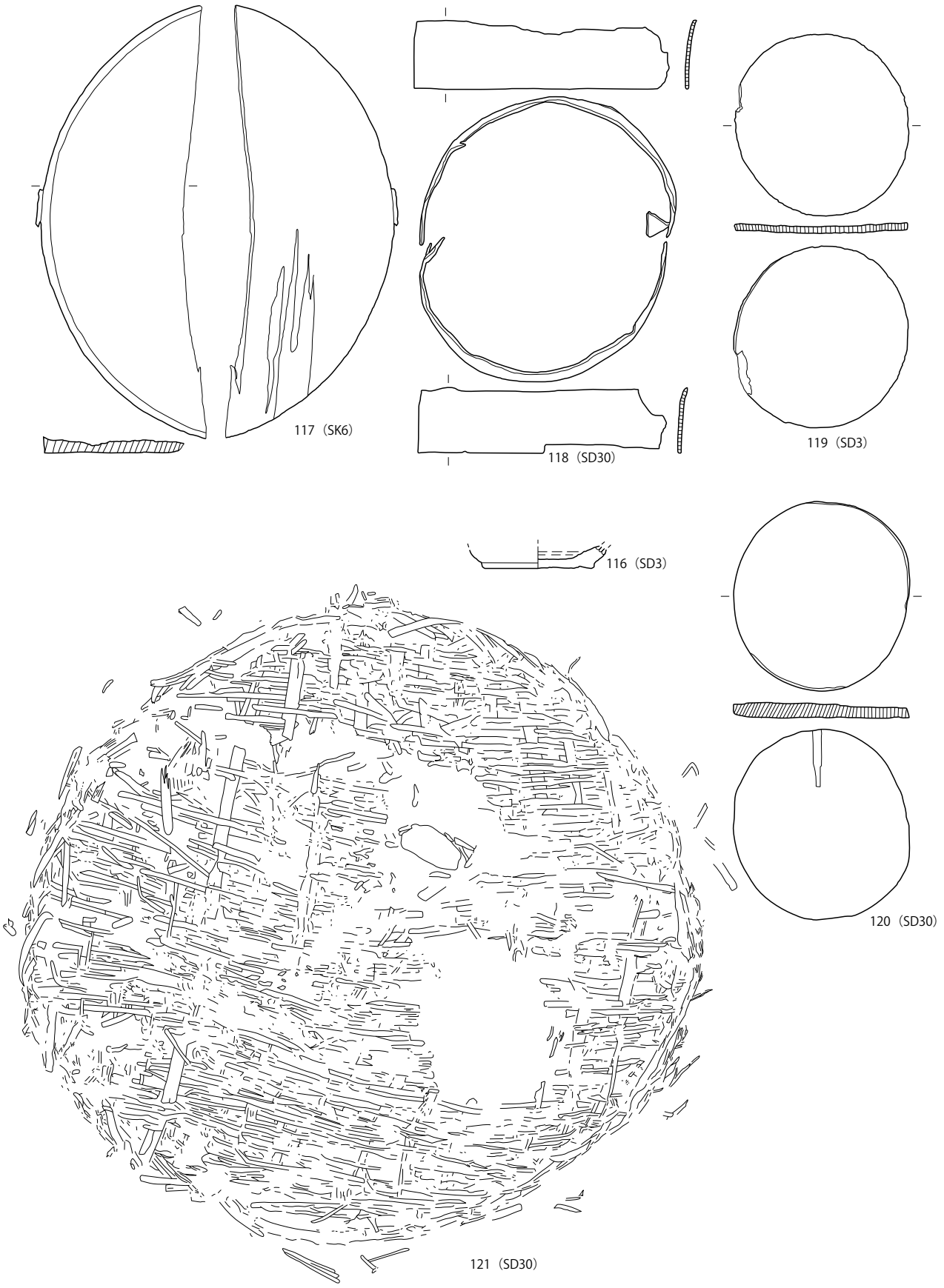
第 56 図　出土遺物 3（瓷器系陶器、擂鉢、瓦質土器、産地不明陶器）



第 57 図　出土遺物 4（産地不明陶磁器、縄文土器、須恵器、土師器）

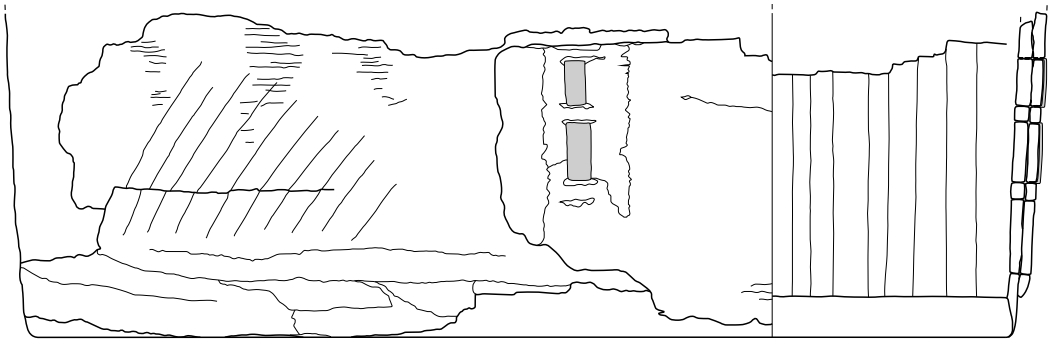


第 58 図　出土遺物 5（漆器）

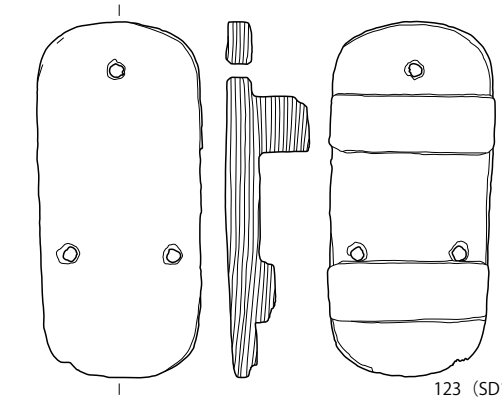


木皿、曲物、笊

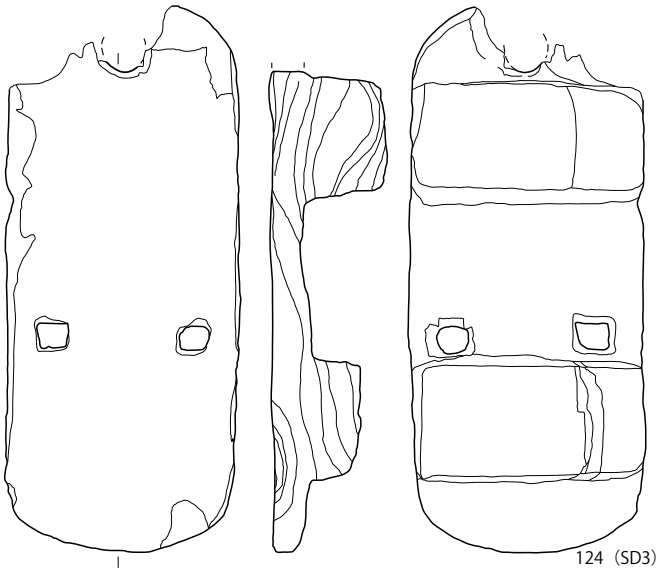
第 59 図　出土遺物６（木皿、曲物、笊）



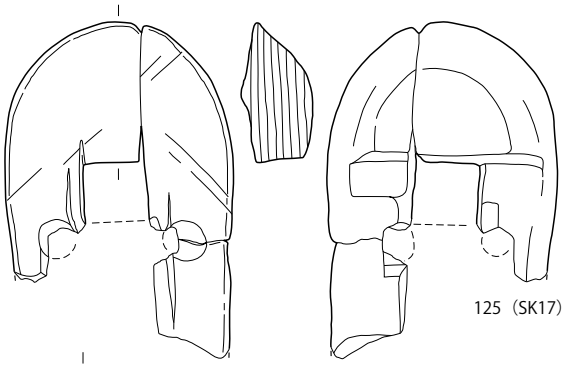
曲物
122（SK49）



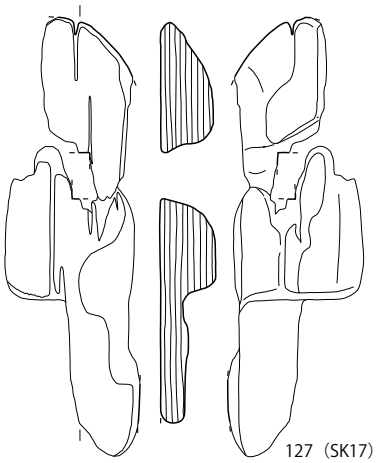
123（SD1）



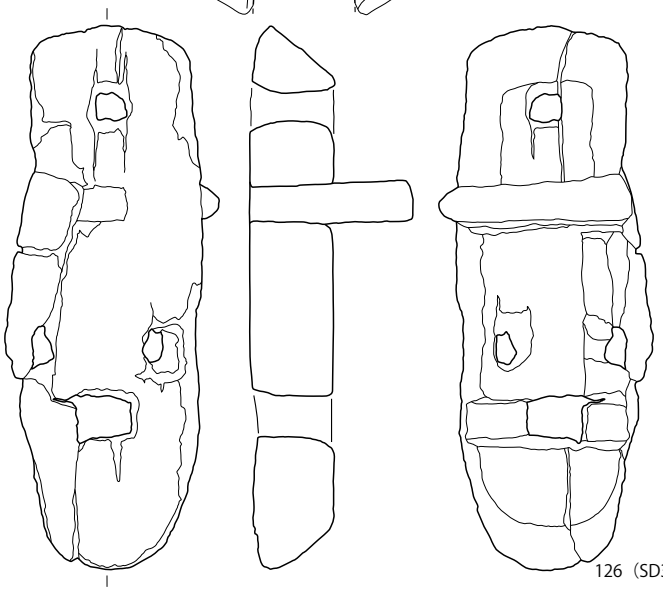
124（SD3）



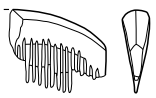
125（SK17）



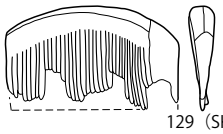
127（SK17）



126（SD3）



128（SK17）

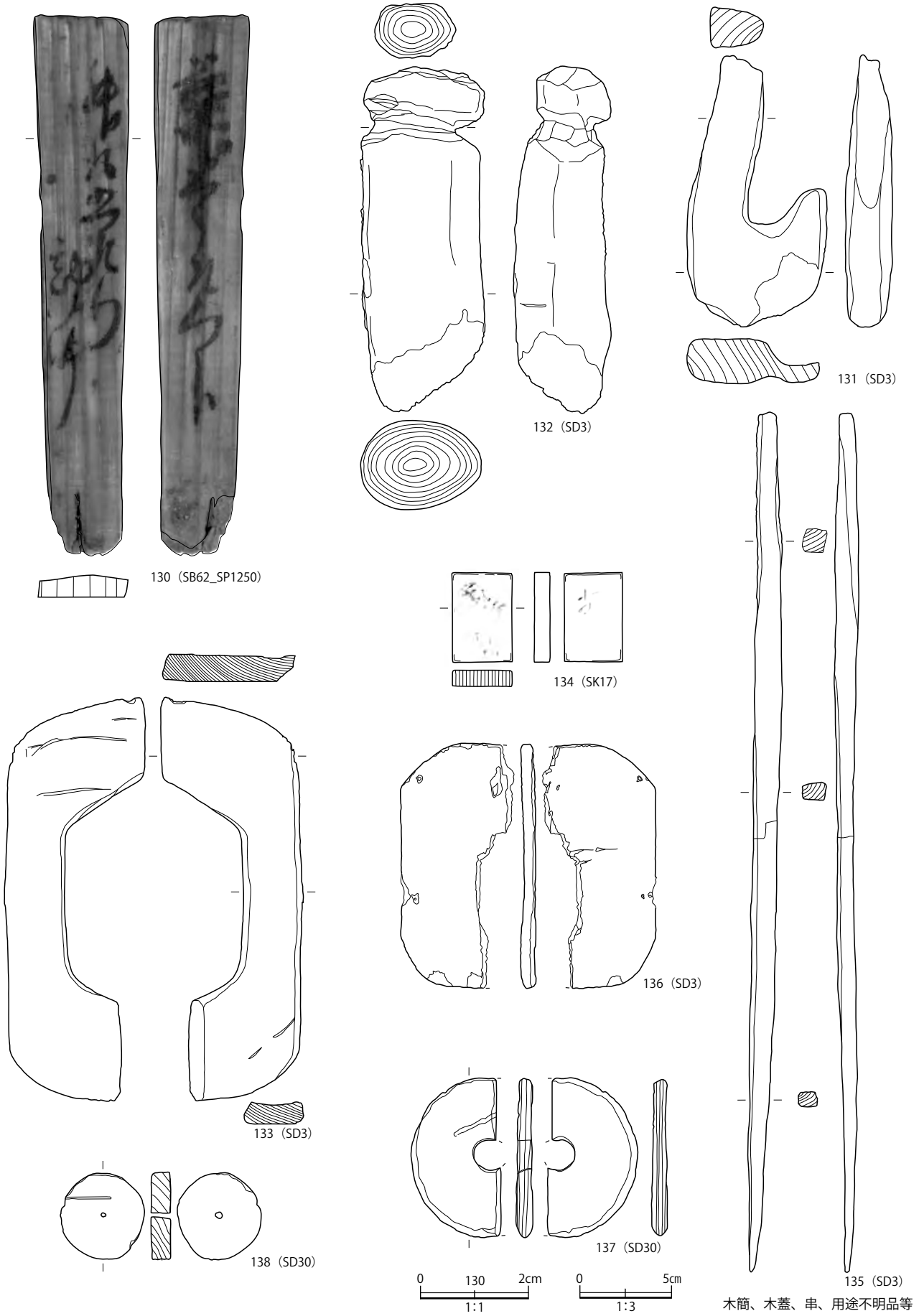


129（SK17）

0　5cm
1:3

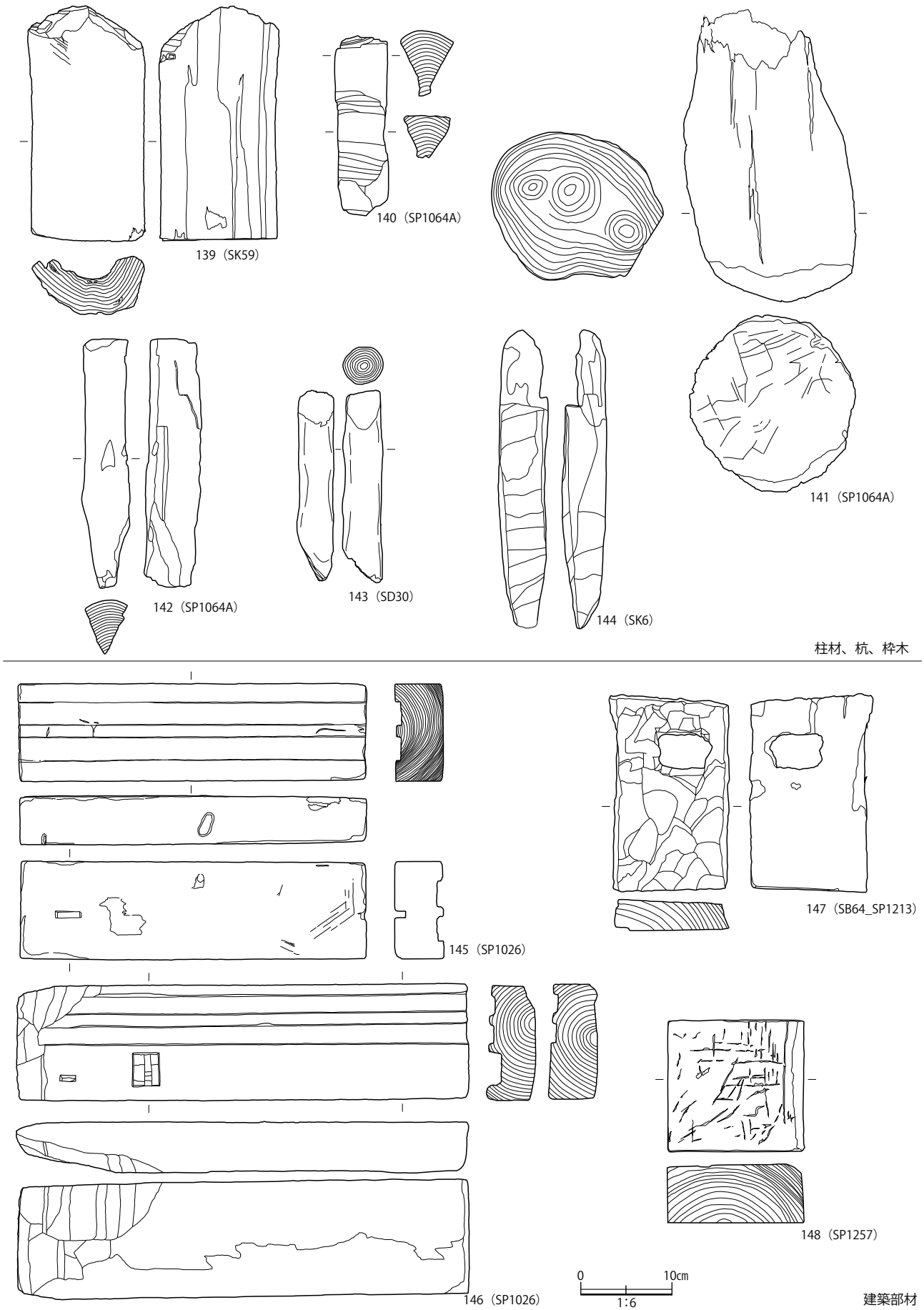
下駄、横櫛

第 60 図　出土遺物 7（曲物、下駄、横櫛）

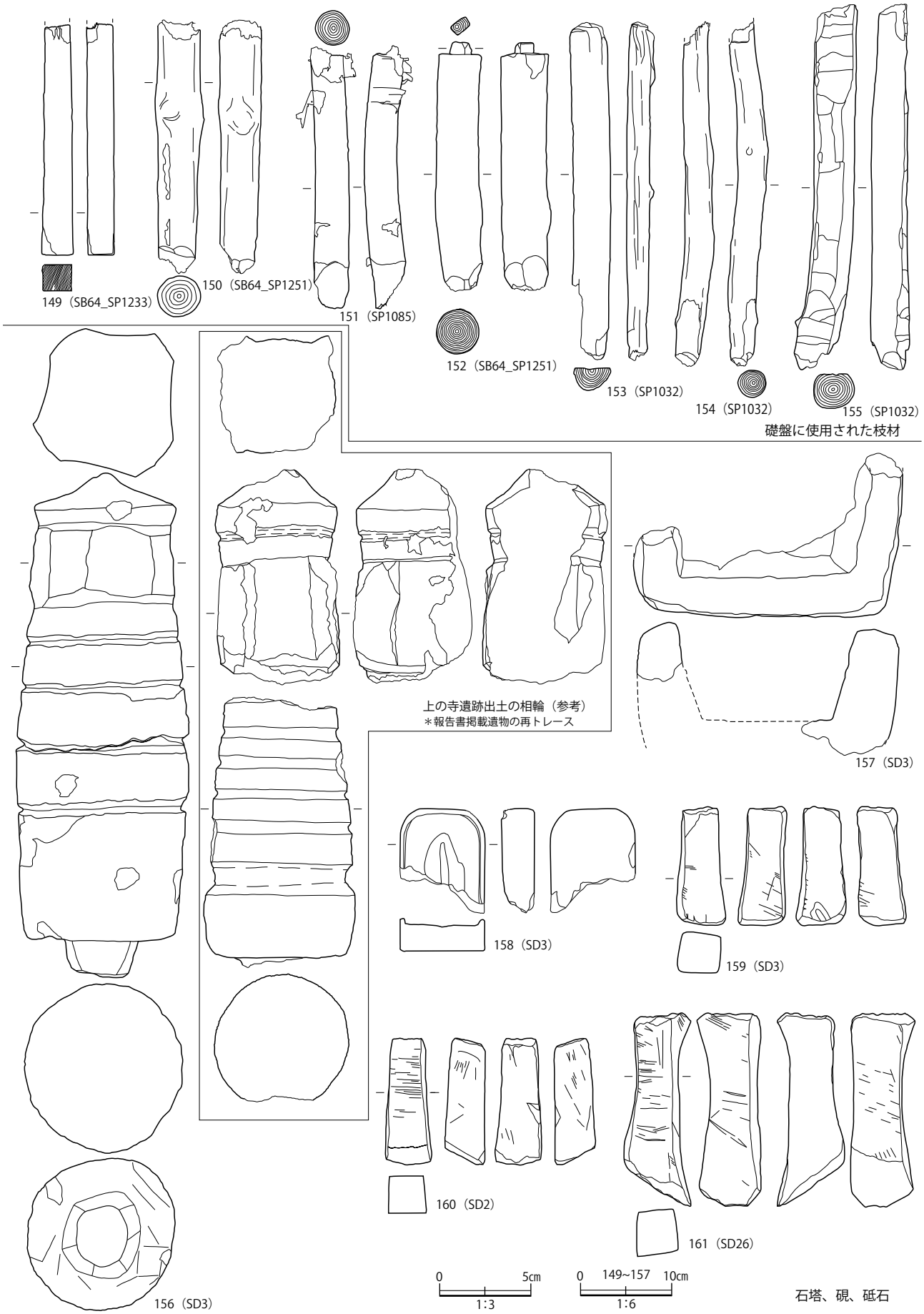


木簡、木蓋、串、用途不明品等

第 61 図　出土遺物８（木簡、木蓋、串、用途不明木製品）

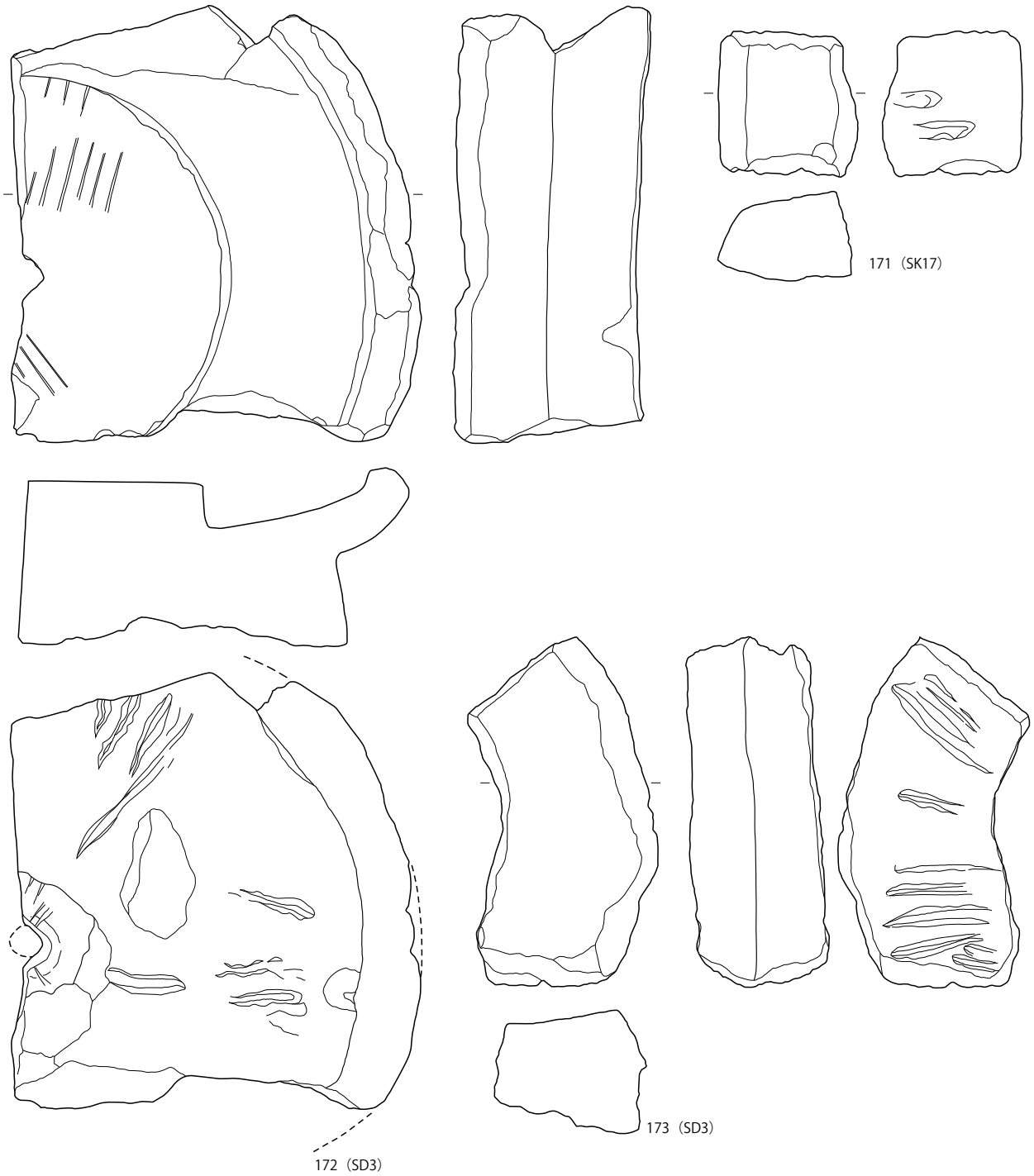


第 62 図　出土遺物 9（柱材、杭、枠木、建築部材）



第 63 図　出土遺物 10（枝材、石塔、硯、砥石）

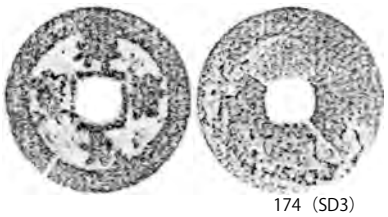
第 64 図　出土遺物 11（砥石、磨石、凹石）



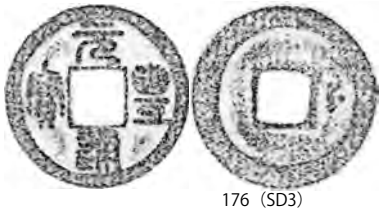
0　5cm
1:3

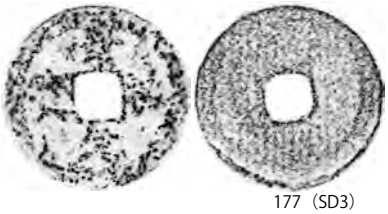
茶臼・石鉢

第 65 図　出土遺物 12（茶臼、石鉢）

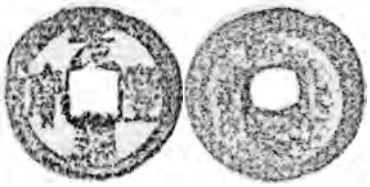

174（SD3）

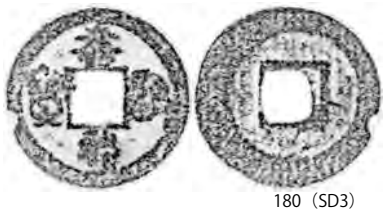
175（SD3）


176（SD3）


177（SD3）

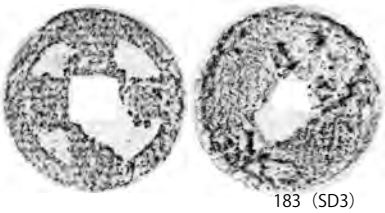
178（SD3）

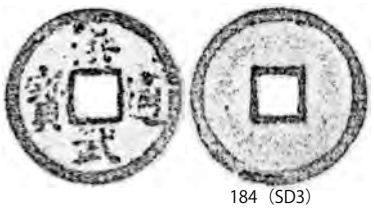

179（SD3）


180（SD3）

181（SD3）

182（SD3）

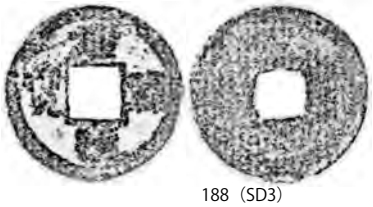

183（SD3）

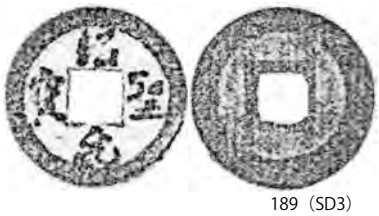

184（SD3）

185（SD3）

186（SD3）

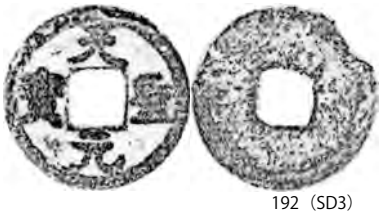
187（SD3）


188（SD3）


189（SD3）

190（SD3）

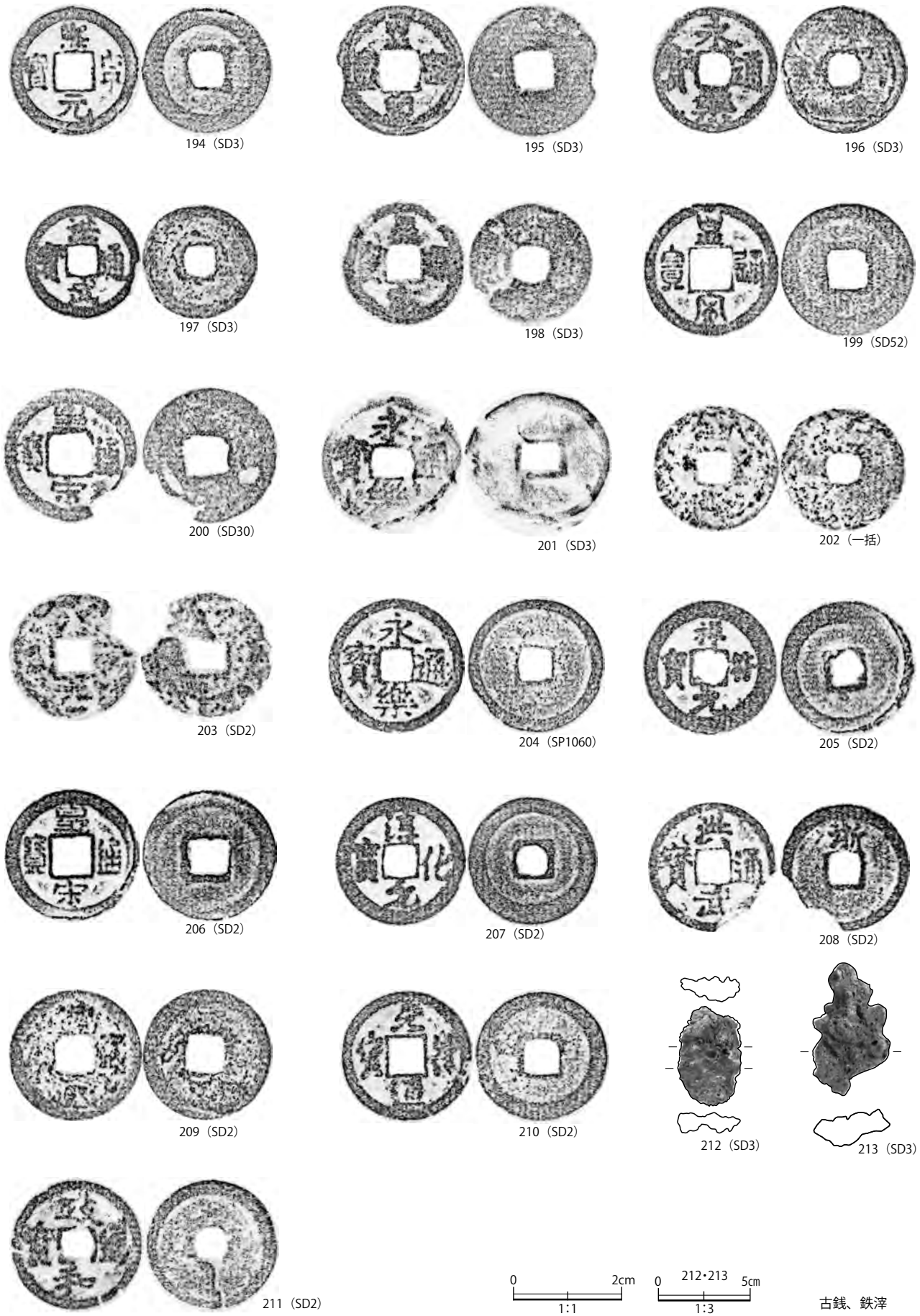
191（SD3）


192（SD3）

193（SD3）

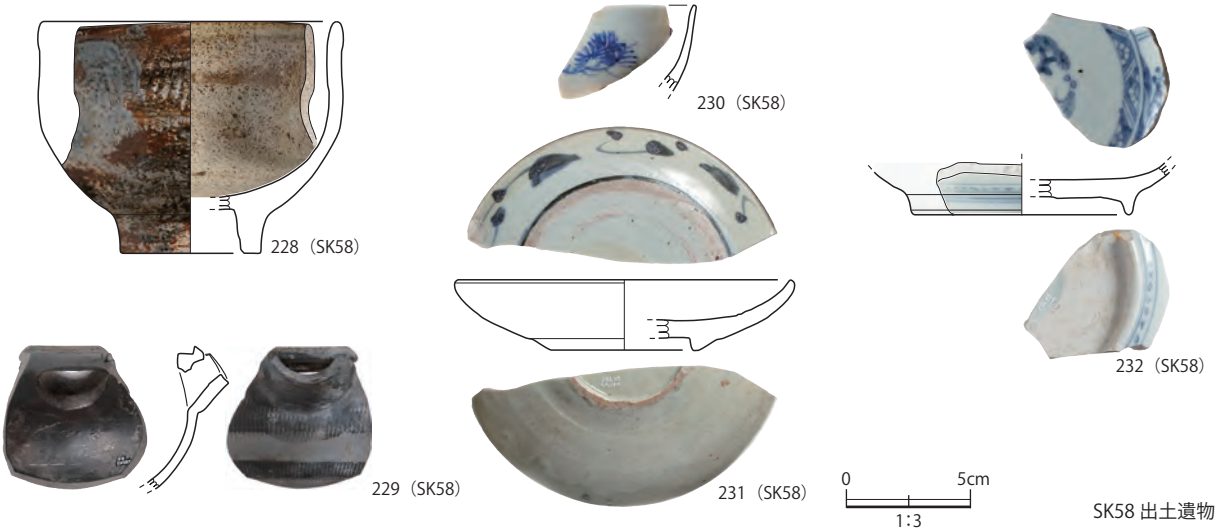
0　2cm
1:1
古銭

第 66 図　出土遺物 13（古銭）



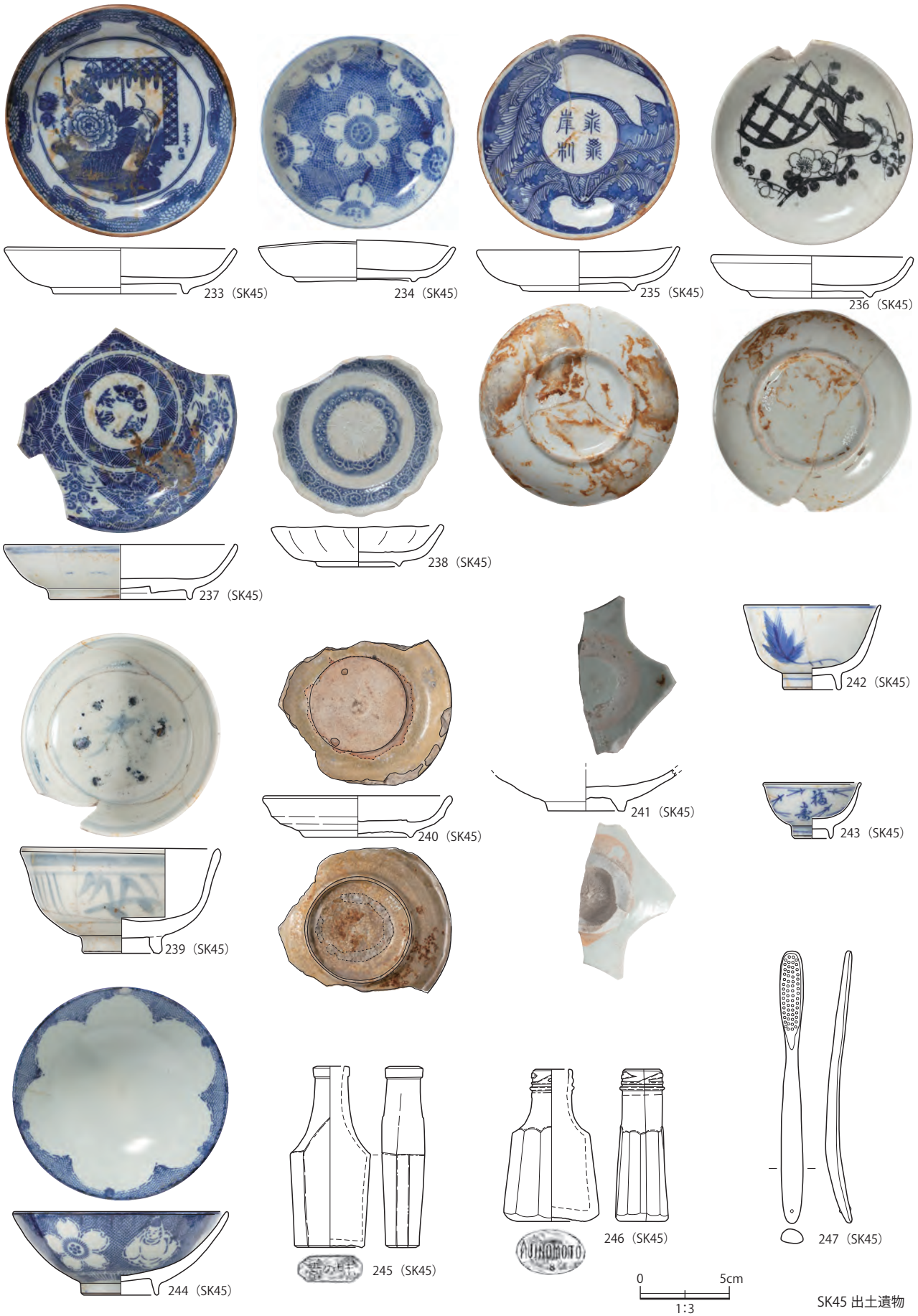
第 67 図　出土遺物 14（古銭、鉄滓）

SK21 出土遺物



SK58 出土遺物

第 68 図　出土遺物 15（SK21、SK58）



SK45 出土遺物

第 69 図　出土遺物 16（SK45）

表８　陶磁器・瓦質土器観察表

図版番号	掲載番号	推定産地	種類（釉薬）	器種	出土地点	法量 口径	法量 底径	法量 器高	法量 器厚	胎土色調	推定年代	備考
54	1	中国	白磁	小坏	SD1a_F1			〈31〉	4	褐灰	15c 後	D 類。内面煤付着により、灯明皿の可能性あり。
	2	中国	白磁	皿	SD3d_F			〈28〉	4	灰白	15c 後	D 類。内面軽度の被熱。
	3	中国	白磁	端反皿	SD2a_F1			〈4〉	4	灰白	16c	E 類。
	4	中国　龍泉窯	青磁	碗	SD3d_F			〈33〉	5	灰白	15c 後 ~16c 中	口縁部内面が一部被熱、。
	5	中国　龍泉窯	青磁	碗	SD3d_F1	（115）		〈4〉	4	灰白	15c 後 ~16c 中	外面線刻蓮弁文。
	6	中国　龍泉窯系	青磁	稜花皿	SD3d_F1 上	（116）		〈19〉	6	灰	16c	内外面被熱。全断面に漆継の痕跡。
	7	中国　龍泉窯系	青磁	碗	SP1044c_F			〈30.5〉	5	褐灰	15c 後 ~16c 中	内外面、若干被熱。内面下部に黒色付着物あり。
	8	中国　龍泉窯系	青磁	碗	SD30_F			〈34〉	5	灰白	15c 後 ~16c 中	断面の一部分、赤く変色。二次被熱か
	9	中国　龍泉窯系	青磁	盤	SD3b_F1		（132）	〈20〉	8.5	灰白	15c 後 ~16c 中	漆継。
	10	中国　龍泉窯系	青磁	盤か碗	SD3b_F1		68	〈29〉	11	灰白	15c 後 ~16c 中	内面被熱、外面若干被熱。漆継。底部一部露胎。
	11	中国　景徳鎮	青花	碗	SD3d_F1	（113）	48	31	4	白	16c	12 と同一個体。高台裏に砂付着。
	12	中国　景徳鎮	青花	碗	SD3d_F1	113		〈37〉	4	白	16c	11 と同一個体
	13	中国　景徳鎮	青花	皿	SD3d_F	（136）	78	29	4.5	灰白	16c	断面及び高台に漆継ぎ。内外面に漆の汚れあり。
	14	中国　景徳鎮	青花	碗	SD3d_F1	（146）		〈42〉	4	灰白	16c	見込みに重ね焼きの痕跡あり。
	15	中国　景徳鎮	青花	皿	SD3b_F1 上			〈12〉	3	灰白	16c 後	
	16	中国　景徳鎮	青花	碗	SD3b_F1 上		36	〈25.5〉	5	白	16c	内面使用痕あり。内面二次被熱か。
	17	中国　景徳鎮	青花	皿	SK17_F		（84）	〈9.5〉	3.5	灰白	16c	
	18	中国　景徳鎮	青花	皿	SD3b_F1 上		50	〈14〉	4	にぶい黄橙	16c 末	被熱により変色。高台内面に漆付着あり。漆継。
	19	古瀬戸	陶器（灰釉）	盤	SD3d_F			〈39〉	6.5	灰白	14c 後 ~15c 末	漆継。
	20	古瀬戸	陶器（外：灰釉）	瓶子	SK40_F			〈38〉	7	褐灰	14c 後 ~15c 末	後期様式。
	21	古瀬戸	陶器	盤類	SP1198_F			〈42〉	8	褐灰	14c 後 ~15c 末	内面に点々と灰釉の飛び散りが見られる。
	22	古瀬戸	陶器（灰釉）	筒型容器	SD3d_F1		（200）	〈60〉	14	褐灰	14c 後 ~15c 末	全面被熱、断面にも被熱痕あり。二次被熱。漆継。
	23	古瀬戸	陶器（灰釉）	瓶子	SP1160_F			〈83〉	8	黄灰	14c 後 ~15C 末	
	24	瀬戸美濃	陶器（内：錆釉）	小天目	SD41_F		（32）	〈18〉	8.5	灰白	16c	漆継。
	25	瀬戸美濃	陶器（錆釉）	小天目	SP1151_F			〈20〉	5	褐灰	15c 末 ~16c 中	
	26	瀬戸美濃	陶器（鉄釉）	小天目	SD3d_F1 上	（62）	26	32	5	灰白	16c 後	施釉陶器。漆継。
	27	瀬戸美濃	陶器（灰釉）	皿	SP1056_F		57	〈11〉	4	褐灰	15c 末 ~16c 中	全面被熱。付着物あり。
	28	瀬戸美濃	陶器（鉄釉）	皿	SD3c_F1	112	56	25.5	5	褐灰	15c 末 ~16c 中	胎土が緻密。越中瀬戸の可能性あり。
	29	瀬戸美濃	陶器（灰釉）	皿	SD3d_F1		56	〈12〉	5.5	灰白	15c 末 ~16c 中	内面被熱。釉薬の被熱による泡立ちが見られる。
	30	瀬戸美濃	陶器（灰釉）	皿	SD3d_F1	（80）	44	21	5.5	灰白	15c 末 ~16c 中	
	31	瀬戸美濃	陶器（灰釉）	皿	SP1270_F			〈17〉	4	灰白	16c	外面一部被熱。
	32	瀬戸美濃	陶器（灰釉）	皿	SD30_F		（60）	〈12〉	7	灰白	15c 末 ~16c 後	内外面若干被熱している。被熱により一部変色。
55	33	肥前	陶器（灰釉）	皿	SK59_F			〈28〉	4	にぶい橙	17c 初	内外面被熱。
	34	肥前	陶器（灰釉）	皿	SD3d_F1		50	〈25.5〉	7	にぶい橙	16c 末 ~17c 初	体部下部以下底部は露胎。
	35	肥前	呉器手（灰釉）	碗	SD3b_F1 上		54	〈36.5〉	6	灰白	17c 初	高台部に胎土目から外した際の割れが 3 箇所あり。
	36	肥前	陶器（灰釉）	碗	SD3b_F1 上		40	〈26〉	5	灰白	17c 前	高台裏に、砂目積みの跡あり。

図版番号	掲載番号	推定産地	種類（釉薬）	器種	出土地点	法量 口径	法量 底径	法量 器高	法量 器厚	胎土色	推定年代	備考
55	37	肥前	灰釉	碗	SD3d_F1 上		50	〈24〉	5	灰白	17c 前	
	38	肥前	染付	碗	SD3b_F1 上			〈31〉	3.5	灰白	近世	
	39	肥前	染付	碗	SP1053A			〈28〉	3	灰白	近世	
	40	肥前	染付	碗	SK14_F	（79）		〈49.5〉	3.5	灰白	18c	丸型。コンニャク印判か
	41	肥前	染付	碗	SP1110F	（98）		〈40〉	3	灰白	18c	
	42	肥前	染付	碗	SD3b_F1 上			〈24〉	5	白	近世	
	43	肥前か	染付	皿	SD3b_F1 上	（126）	（50）	24	4.5		17c	高台部に砂
	44	瀬戸美濃	染付	皿	SD31b_F1 上（攪乱部）			〈12〉	3	灰白	近世～近代	
	45	瀬戸美濃	染付	蓋	6982G_Ⅳ上	88	30	30	5		近世	
	46	肥前	染付	猪口	SD3b_F1 上	（66）	（34）	47	4	灰白	17c	
	47	肥前	染付	瓶子	SD30_F			〈26〉	5	灰白	17c	外面少し被熱。
	48	肥前	染付	瓶類	SK19_F			〈32〉	5.5	灰白	近世	
	49	肥前	染付	碗	SK14_F		（40）	〈38〉	5		近世	高台に砂。外：松
	50	珠洲	陶器	擂鉢	SD2a_Y			〈73.5〉	9	褐灰	13c~14c 後	
	51	珠洲	陶器	甕	SD3d_F1			〈37.5〉	13	灰白	13~14c	漆継。
	52	珠洲	陶器	壺	SD3d_F			〈112〉	12	灰白	13~14c	胎土に約 0.1mm の黒い鉱石が均一に混入。
	53	珠洲	陶器	壺	6179G_Ⅳ上			〈46.5〉	6.5	灰白	13~14c	
	54	越前か	瓷器系陶器	甕	SD2b_Y			〈59〉	15	にぶい橙	中世	断面、一部変色。
	55	越前か	陶器	甕	SD3d_F1			〈96〉	16	褐灰	16c か	外面：灰褐色。
56	56	信楽か肥前	陶器	擂鉢	SD3d_F1		（160）	〈67.5〉	13	灰白	16c~17c	体部外面付着物あり。
	57	在地	瓷器系陶器	甕	SD3d_F			〈58〉	14	灰白	13~14c	内外面と断面に付着物あり。57・59・60 と同一。
	58	在地	瓷器系陶器	甕	SD3d_F1			〈104〉	14	外：明赤褐・中：黒	13~14c	内外面に付着物あり 57・59・60 と同一。
	59	在地	瓷器系陶器	甕	SD3d_F			〈70〉	15	外：明赤褐・内：黒	13~14c	内外面付着物あり。57・58・60 と同一。
	60	在地	瓷器系陶器	甕	SD3d_F1			〈147〉	13.5		13~14c	57・58・59 と同一。付着物が少ない。
	61	肥前	陶器	擂鉢	SD3b_F1 上		（100）	〈59〉	11	明赤褐	17c 初	擂目摩滅。擂目：7 条 1 組。
	62	肥前	陶器	擂鉢	SP1053A_F		（86）	〈49.5〉	13		17c 前	擂目摩滅。被熱。擂目 :10 条 1 組。
	63	在地	瓦質土器	不明	SD3d_F			〈42〉	7	灰白	近世	内面に横ナデが見られる。内外面摩滅。
	64	在地	瓦質土器	土瓶	SD3d_F			〈67〉	6.5	褐灰	近世	見込み部に付着物あり。
	65	在地	瓦質土器	鉢	SD3a_F1			〈110〉	16.5	褐灰	近世	内面中央付近に少量の付着物あり。外面が滑らか。
	66	産地不明	陶器	擂鉢	7465G_Ⅱ			〈50〉	7	灰白	近世	施釉陶器。内外面被熱。
	67	産地不明	陶器	擂鉢	SK14_F			〈48〉	7	にぶい褐	17c	使用痕顕著、器壁薄い。摩滅。ロクロ成形。肥前か
	68	産地不明	陶器	不明	SD3c_F1 上		（60）	〈16〉	7	橙	近世	全面摩滅。時期不明。
57	69	産地不明	陶器（鉄釉）	瓶か壺	SD3d_F			〈37〉	7.5	灰	近世	
	70	産地不明	陶器（鉄釉）	瓶類	SP1176_F			〈25〉	6	灰白	近世	
	71	産地不明	陶器（内：鉄釉）	瓶か袋物	SD3d_F1 上			〈40〉	11.5	黄灰	近世	72 と同一か
	72	産地不明	陶器（鉄釉）	瓶か袋物	SD3d_F1			〈35〉	8	黄灰	近世	71 と同一か

図版番号	掲載番号	推定産地	種類（釉薬）	器種	出土地点	法量 口径	法量 底径	法量 器高	法量 器厚	胎土色	推定年代	備考
57	73	産地不明	陶器	碗か鉢	SD33_F			〈50〉	6	灰白	近世	施釉陶器。
	74	産地不明	陶器（外：鉄錆釉）	小型甕か	SD4_F1			〈42〉	7	褐灰	近世～	
	75	産地不明	白磁	皿	7563G＿Ⅱ			〈27〉	5	灰白	近世・近代か	
	76	産地不明	白磁	瓶類	SP1110_F			〈21〉	2	灰白	近現代　近世	
	77	産地不明	磁器	瓶類	SD3b_F1 上			〈42.5〉	6.5	灰白	近世	

表９　縄文土器・須恵器・土師器観察表

図版番号	掲載番号	種類	器種	年代	出土地点	法量 口径	法量 底径	法量 器高	法量 器厚	調整	備考
57	78	縄文土器	深鉢	後晩期	SD34_F			〈30〉	7	外：刺突文	
	79	縄文土器	深鉢	後晩期	SD34_F			〈30〉	5.5	外：沈線文	外面に炭化物付着。
	80	縄文土器	深鉢	後晩期	SD34_F			〈30〉	6	口唇部：押圧縄文	
	81	縄文土器	深鉢		SD34_F	(40)	(51)	8			粗製土器
	82	縄文土器	深鉢		SD34_F	(44.5)	(64)	5.5			粗製土器。
	83	土師器	小型甕	古代	SP1020_F			〈20〉	7	ロクロ成形	付着物あり。
	84	土師器	高坏	古墳	SD30_F			〈47〉	13.5	外：ナデ	輪積み痕顕著。
	85	須恵器	高台坏	8c 後	6472G_Ⅳ上		79	〈16〉	8		断面及び底部に炭化物付着。
	86	須恵器	甕	古代	SD30_F			〈45〉	9		内外面摩滅。断面一部摩滅。
	87	須恵器	甕	古代	SD3d_F1			〈95.5〉	11		内外面に漆付着。
	88	須恵器	甕	古代	SP1198_F			〈31〉	9.5		
	89	土師器	小型甕	古代	SD3d_F1		(84)	〈32〉	10	内：ハケメ	外面付着物あり。
	90	土師器	坏	古代	SD3b_F1			〈28〉	5.5	ロクロ成形	
	91	須恵器	坏	9c 中	SD3d_F		(60)	〈18.5〉	6.5	ロクロ	
	92	須恵器	坏	9c 中	SD2a_F1		(60)	〈21〉	4	ロクロ	
	93	須恵器	坏	9c 後	SP1173_F	(112)	60	25.5	5	ロクロ	
	94	須恵器	坏	9c	6572G_Ⅳ上		62	〈16.5〉	5	ロクロ	墨書「利□」

表 10　木製品観察表

図版番号	掲載番号	器種	出土地点	法量 口径（長さ）	法量 底径（幅）	法量 器高（厚さ）	法量 器厚	備考
58	95	漆椀	SD3a_F1 上		64	〈32〉	5	破片多数。
	96	漆椀	SD3d_F1	(146)	(53)	55	3.5	
	97	漆椀	SD2b_F			〈21〉	4	
	98	漆椀	SD3d_Y		(70)	〈28〉	5.5	
	99	漆椀	SD3b_F1		(50)	〈28〉	5	
	100	漆皿	SD3d_F1	(90)	(66)	18	5	101 と類似。
	101	漆皿か	SD3d_F1		(59)	〈17〉	3.5	
	102	漆椀	SD3c_F1	(91)		〈20〉	4	
	103	漆椀	SD2b_Y	(144)	(55)	59	4.5	
	104	漆皿	SD3d_F1	(96)	(71)	21.5	6	
	105	漆椀	SD30_F		(61)	〈19〉	5	
	106	漆椀	SD54_F	(142)		〈39〉	4	黒地に赤。
	107	漆椀	SD3d_F1	(178)		〈51〉	4	
	108	漆椀	SK40_F	(99)		〈15〉	3	
写図 33	109	漆椀	SD2b_F1					写真のみ。分析サンプル（YU-10303）
58	110	漆皿か	SD3d_F1	(164)		〈48.5〉	4	
	111	漆椀	SK17			〈34.5〉	4	
	112	漆椀	SD3d_F1		(78)	〈55〉	5.5	三重（厚底）。

図版番号	掲載番号	器種	出土地点	法量				備考
				口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	器厚	
58	113	漆椀	SD3d_Y			〈42〉	7	黒地。
	114	漆椀か皿	SP1112_F			〈14〉	4	
	115	漆椀	SD31_F			〈18〉	4	
59	116	木椀	SD3a_F1		57	〈12〉	7	漆無し。
	117	曲物	SK6_F2~F3	〈232〉	〈92〉	9		底板。分析サンプル（YU-10397-399）
	118	曲物	SD30_F		〈37〉	2		側面。
	119	曲物	SD3a_Y	98	93	4		底板。
	120	曲物	SD30F	94	102	8		底板。
	121	盆笊	SD30_F 上	（500）				出土状況のオルソ画像をトレース。土ごと保存処理。
60	122	曲物	SK49_Y		386	〈129〉	9	底板厚：16mm。底板、側面残存。中から歯出土。分析サンプル（YU-10536）
	123	連歯下駄	SD1_Y	141	65	33		小型。分析サンプル（YU-10301）
	124	連歯下駄	SD3a_Y	217	94	47		
	125	差歯下駄	SK17_Y	〈133〉	〈91〉	〈28〉		露卯。
	126	差歯下駄	SD3a_Y	216	〈86〉	65		露卯。
	127	差歯下駄	SK17_Y	〈174〉	〈54〉	〈22〉		露卯。
	128	横櫛	SK17_Y	〈38〉	〈33〉	11		
	129	横櫛	SK17_Y	〈69〉	〈41.5〉	10		
61	130	木簡	SP1250	〈100〉	18	4		墨書。「升取忠左衛門　勘□」、「□□半左衛門分」。分析サンプル（YU-10313）
	131	不明	SD3d_F	150	78	26		カギ形。
	132	不明	SD3d_F1	192	68	50		くびれのある木柱状。分析サンプル（YU-10304）
	133	不明	SD3d_F	223	79	15		隅丸形。紐痕。分析サンプル（YU-10395-10396）
	134	木札	SK17	50	33	9		墨書あり、判読不可。
	135	串か	SD3d_F1	475	18	13		
	136	木蓋	SD3d_F1	〈135〉	〈68〉	〈9〉		隅丸形。半分残。
	137	木蓋	SD30_F	89	〈50〉	7		丸形。中央に孔。
	138	木蓋	SD30_F1	49	46	11		小型丸蓋。中央に貫通孔。
62	139	枠木	SK59_Y	261	133			分析サンプル（YU-10310）。
	140	杭	SP1064_Y	200	60	72		礎盤。側面加工
	141	柱材	SP1064_Y	325	191	191		分析サンプル（YU-10404-10405）。
	142	杭	SP1064_Y	277	64	60		礎盤。先端加工
	143	杭	SD30_F	214	45	45		分析サンプル（YU-10305）。
	144	杭	SK6_F2~F3	332	54	49		角形。全面加工
	145	礎板	SP1026_Y	387	109	54		敷居を二次利用。分析サンプル（YU-10400-10403）。
	146	礎板	SP1026_Y	503	130	56		敷居を二次利用。
	147	建築部材	SP1213_Y	220	138	34		四角の穴。分析サンプル（YU-10311）。
	148	礎板	SP1257_Y	151	146	65		面取り材。分析サンプル（YU-10315）。
63	149	枝材	SP1233_Y	257	34	29		角材。分析サンプル（YU-10312）。
	150	枝材	SP1251_Y	281	55	45		先端部加工痕、少。分析サンプル（YU-10314）。
	151	枝材	SP1085_Y	293	46	38		樹皮付（桜か）。分析サンプル（YU-10309）。
	152	枝材	SP1251_Y	277	55	50		ほぞ加工のあるもの。
	153	枝材	SP1032_Y	375	45	25		半截。紐痕あり。
	154	枝材	SP1032_Y	382	44	30		先端切り取り痕。
	155	枝材	SP1032_Y	406	70	45		側面加工か？分析サンプル（YU-10308）。

表 11　石製品観察表

図版番号	掲載番号	種類	出土地点	法量 長さ	幅	厚さ	重量（g）	石材	備考
63	156	層塔	SD3a_Y	560	192	188	12990	凝灰岩	相輪。
	157	板碑か石塔	SD3b_Y	〈299〉	〈183〉	最大厚さ〈66〉	2086.9	凝灰岩	156 と同一石材。
	158	硯	SD3b_F1 上	58	47	18	37.1	粘板岩	岡に使用痕顕著。
	159	砥石	SD3b_F	66	27	23	70	流紋岩	仕上砥。四角柱。
	160	砥石	SD2a_F	70	26	20.5	64	流紋岩	仕上砥。四角柱。
	161	砥石	SD26_F	107	37	26	158.4	流紋岩	仕上砥。四角柱。
64	162	砥石	SP1189_F	52	50	13.5	71	流紋岩	仕上砥。板状。
	163	砥石	SD3d_F	119.5	43	29	265.2	流紋岩	仕上砥。四角柱。
	164	砥石	SD26_F	81	37	18.5	63	流紋岩	仕上砥。板状。
	165	磨石	SD3d_F1	〈77〉	〈93〉	36	354.1	安山岩	外面摩滅後被熱。全面付着物あり。
	166	凹石	SK17_F	41	35	17	26.1	流紋岩	底面に擦痕あり。両面を研磨して平坦面を作っている。
	167	凹石	SD3d_F1	64	54	28	68.9	流紋岩	側面、裏面を研磨して外形を成形している。
	168	凹石	SD26_F	140	80.5	43	492.2	流紋岩	分割した円礫をそのまま使用。
	169	凹石	SD3d_F	118	79	68	481	凝灰岩	河原石の分割面を利用。風化進み軟質。
	170	凹石	SP1257_Y	157.5	149	80.5	2107.3	流紋岩	凹み部周辺に被熱痕あり。凹み範囲にスス付着。
65	171	石鉢	SK17_F	70	67	43	273.6	安山岩	
	172	茶臼	SD3d_F1 上	209	197	86	4100	安山岩	下石。
	173	茶臼	SD3d_F1 上	168	91.5	5.9	1024.2	安山岩	摩滅、擂り目の一部が確認できる。

表 12　古銭観察表

図版番号	掲載番号	出土地点	種類	書	国・王朝	初鋳年	法量 直径㎜	厚さ㎜	重量（g）	備考
66	174	SD3b_F1 上	□□元寶				25.2	1.1	3.68	174~198 まで一括出土。
	175	SD3b_F1 上	治平元寶		北宋	1064	24	1.1	2.71	174~198 まで一括出土。
	176	SD3b_F1 上	元豊通寶	篆書	北宋	1078	24.8	1	3.55	174~198 まで一括出土。
	177	SD3b_F1 上	□□元寶				24.9	1.2	3.39	174~198 まで一括出土。
	178	SD3b_F1 上	□□通寶				25.2	1.4	3.15	174~198 まで一括出土。
	179	SD3b_F1 上	元豊通寶	篆書	北宋	1078	24.3	1.1	3.13	174~198 まで一括出土。
	180	SD3b_F1 上	嘉祐通寶	篆書	北宋	1056	24.3	0.9	3.34	174~198 まで一括出土。
	181	SD3b_F1 上	洪武通寶	背一銭	明	1368	22.8	1.7	3.90	174~198 まで一括出土。
	182	SD3b_F1 上	元寶通寶	篆書	北宋	1078	24.3	0.9	2.71	174~198 まで一括出土。
	183	SD3b_F1 上	□□□寶				24.4	1.2	2.77	174~198 まで一括出土。
	184	SD3b_F1 上	洪武通寶		明	1368	23.6	1.6	3.66	174~198 まで一括出土。
	185	SD3b_F1 上	□□通寶				24.2	0.9	2.27	174~198 まで一括出土。
	186	SD3b_F1 上	□□元寶				25	1.3	3.11	紹聖元宝か。174~198 まで一括出土。
	187	SD3b_F1 上	嘉祐元寶	真書	北宋	1056	23.6	1.2	3.59	174~198 まで一括出土。
	188	SD3b_F1 上	□□□寶				23.7	1.3	3.78	174~198 まで一括出土。
	189	SD3b_F1 上	紹聖元寶	行書	北宋	1094	24.5	1.3	4.20	174~198 まで一括出土。
	190	SD3b_F1 上	元豊通寶	行書	北宋	1078	23.4	1.3	2.77	174~198 まで一括出土。
	191	SD3b_F1 上	元豊通寶	行書	北宋	1078	24	1	2.14	174~198 まで一括出土。
	192	SD3b_F1 上	天正元寶	真書	北宋	1023	25	1.3	3,18	174~198 まで一括出土。
	193	SD3b_F1 上	元□通寶				24.7	1.2	3.44	174~198 まで一括出土。
67	194	SD3b_F1 上	熈寧元寶		北宋	1068	24	1.4	3.70	174~198 まで一括出土。
	195	SD3b_F1 上	□□□寶				24.2	0.8	2	174~198 まで一括出土。
	196	SD3b_F1 上	永樂通寶				23.6	1.2	3	174~198 まで一括出土。
	197	SD3b_F1 上	洪武通寶		明	1368	21.3	1.4	2.86	174~198 まで一括出土。

図版番号	掲載番号	出土地点	種類	書	国・王朝	初鋳年	法量 直径㎜	厚さ㎜	重量（g）	備考
67	198	SD3b_F1 上	□□□□				22.4	1	2.02	174~198 まで一括出土。
	199	SD52_Y	皇宋通寶	篆書	北宋	1038	25	1.1	3.44	
	200	SD30_Y	皇宋通寶	真書	北宋	1038	24.9	1	2.57	
	201	SD3c_F1	永樂通寶				26.8	1.1	3.24	
	202	一括	永樂通寶				23	1.5	2.72	
	203	SD2aF1	□□元寶				23.6	1	1.47	
	204	SP1060	永樂通寶				25.1	1.3	2.98	
	205	SD2a_Y	祥符元寶		北宋	1008	25	1.2	3.72	205~208 まで一括出土。
	206	SD2a_Y	皇宋通寶	真書	北宋	1038	24.7	1.2	3.07	205~208 まで一括出土。
	207	SD2a_Y	淳化元寶	行書	北宋	990	23.8	1.1	3.85	205~208 まで一括出土。
	208	SD2a_Y	洪武通寶	背浙			23.9	1.1	2.36	205~208 まで一括出土。
	209	SD2a_F1 上	□□通寶				24.4	1.2	2.38	建炎通寶か 209~211 まで一括出土。
	210	SD2a_F1 上	元符通寶	行書	北宋	1098	24.2	1.2	2.76	209~211 まで一括出土。
	211	SD2a_F1 上	政和通寶	篆書	北宋	1111	24.3	1.1	2.12	209~211 まで一括出土。

表 13　鉄滓観察表

図版番号	掲載番号	出土地点	法量 長さ	幅	厚さ	重量（g）	備考
67	212	SD3_F1	55	35	14.5	23.14	椀形滓。
	213	SD3b_F1	73	43	21	59.64	流出滓。鍛冶。

表 14　自然遺物観察表

図版番号	掲載番号	出土地点	種類	器種	備考
写図 35	122	SK49	自然遺物	歯	5 点。分析サンプル (YU-10536)。
写図 41	214	SD2a_F1 上	植物遺体	瓢箪か	分析サンプル（YU-10302）。
	215	SD34_F	自然遺物	土	分析サンプル（YU-10306）。植物繊維を多く含む。
	216	SD52_Y	自然遺物	骨	骨、3 cm 角。
	217	SD3b_F	自然遺物	骨	骨片。
	218	SD3b_F	自然遺物	骨	骨。
	219	SD3b_F	自然遺物	骨	骨。

表 15　SK21・58・45 出土遺物観察表

図版番号	掲載番号	推定産地	種類（釉薬）	器種	出土地点	法量 口径（長さ）	底径（幅）	器高	器厚	胎土の色	推定年代	備考
68	220	瀬戸	染付	皿	SK21_F	97	47	22	3	白	近代	
	221	平清水か	染付	皿	SK21_F	130	81	34.5	2.5	白	近世	型紙摺絵。蛇の目高台。呉須ダレが所々みられる。
	222	平清水	染付	皿	SK21_F	143	79	41	2.5	白	近世～近代	蛇の目高台。内外面被熱。高台内一部に漆付着。
	223	瀬戸	染付	碗	SK21_F	97	34	49	3	白	近世～近代	
	224	瀬戸	染付	小坏	SK21_F	（73）	25	33	2.5	灰白		高台部に砂付着。
	225	産地不明	陶器（灰釉）	乗燭	SK21_F	51	46	51	2.5	灰白	近世～	
	226	瀬戸か	磁器	薄手酒坏	SK21_F			〈19〉	2	白		内面に「明治三十九年五月」と書かれている。
	227		ガラス製品	ビン	SK21_F	41	41		2.5			体部外面「金城堂　大野□」とある。
	228	産地不明	陶器（灰釉、鉄錆釉）	碗	SK58_F	（116）	（54）	92	4	褐灰	近代	底部断面に漆継。
	229	産地不明	陶器（鉄釉）	土瓶	SK58_F			51.5	3.5	灰		内面の注口部に黒色の付着物あり。
	230	瀬戸	染付	小坏	SK58_F			〈34〉	2.5	灰白	近代	
	231	肥前	染付	皿	SK58_F	132	（59）	28	5	灰白	17c 前	蛇の目釉ハギ。底部に砂付着。削り高台。

図版番号	掲載番号	推定産地	種類（釉薬）	器種	出土地点	法量 口径（長さ）	法量 底径（幅）	法量 器高	法量 器厚	胎土の色	推定年代	備考
68	232	肥前か	染付	皿	SK58_F		（86）	〈21〉	5	灰白	18c	蛇の目高台。○×連続文。
	233	瀬戸	染付（口紅）	皿	SK45_F	126	74	26	3			銅版転写。
	234	瀬戸	染付	皿	SK45_F	107	65	23	3			型紙摺絵。
	235	瀬戸	染付（口紅）	皿	SK45_F	110	62	25	4			銅版転写。
	236	瀬戸	染付（鉄錆釉）	皿	SK45_F	110	66	24	3			銅版転写。
	237	瀬戸	染付	皿	SK45_F	127	76	30.5	3			型紙摺絵。蛇の目高台。
	238	瀬戸	染付	皿	SK45_F	91	45	23.5	4			口縁部、波状。口縁部一部欠損。
	239	肥前か	染付	碗	SK45_F	108	42	59	4			見込みと青色の付着物、高台に黒色の付着物あり。
69	240	瀬戸美濃	陶器（灰釉）	内禿ぎ皿	SK45_F	102	58	23	4	褐灰	16c 中～後	高台内重ね焼きの痕あり。全面被熱。
	241	肥前	磁器	皿	SK45_F		（42）	〈23〉	4	灰白	17c 後	見込みと高台に重ね焼きの痕あり、砂付着。
	242	瀬戸	染付	坏　小坏	SK45_F	75	31	47	4	白		高台内面に砂付着。
	243	瀬戸	染付	小坏	SK45_F	53	20	31	3.5	白	近世～	高台内面に砂付着。
	244		染付	碗	SK45_F	118	41	46	4.5			型紙摺絵。高台内付着物あり。
	245		ガラス製品	ビン	SK45_F	100	16		4			底部刻印「素の味」。
	246		ガラス製品	ビン	SK45_F	84	19		4			底部刻印「AJINOMOTO」。
	247		木製品	歯ブラシ	SK45_F	150	12	8				ブラシ部分一部毛が残る。

表 16　中世陶磁器集計表

種類	器種・形状	点数	出土地点	総計
白磁	小坏	1	SD1（1）、SD2（1）、SD3（1）	3
	皿	1		
	端反皿	1		
青磁	稜花皿	1	SD3（6）、SD30（1）、SP1044（1）	8
	碗	5		
	盤	1		
	不明	1		
青花	皿	3	SD3（10）、SK17（1）	11
	碗	5		
	不明	3		
古瀬戸	盤	1	SD3（2）、SK40（1）、SP1160（1）、SP1198（1）	5
	瓶子	3		
	筒型容器	1		
瀬戸美濃	小天目	3	SD3（4）、SD41（1）、SD36（1）、SP1056（1）、SP1151（1）、SP1270（1）SK45（1）	10
	皿	7		
珠洲	擂鉢	1	SD2（1）、SD3（2）、遺構外（1）	4
	甕	1		
	壺	2		
肥前陶器	皿	1	SD3（1）、SK59（1）	2
	折縁皿	1		
瓷器系陶器	甕	4	SD3（4）	4

Ⅴ　理化学分析

1　放射性炭素年代測定

山形大学高感度加速器質量分析センター

A. はじめに

公益財団法人山形県埋蔵文化財センターより依頼された試料 20 点に対して、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

B. 試料と測定方法

表 17 ～ 19 に試料情報を示す。測定試料は、元素分析計、質量分析計、ガラス真空ラインより構成されるグラファイト調整システムにてグラファイト化を行った。その後、加速器質量分析装置（NEC 製 1.5SDH）を用いて放射性炭素濃度を測定した。

C. 年代測定の考え方

放射性炭素（^{14}C）年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代(yrBP)の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.3.2[1]（較正曲線データ：IntCal13[2]）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

D. 結　果

表 20 ～ 22 に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行った放射性炭素年代、較正曲線データを使用して放射性炭素年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。各試料の暦年較正結果については、本報告書に添付した。

また、年輪間隔の分かったそれぞれの測定試料の放射性炭素年代を較正曲線上で比較照合する、いわゆるウィグルマッチング法で得られた結果を表 21 ～ 22 及び、図 70 ～ 73 にそれぞれ示す。サンプルの最外年輪層に対する年代範囲として「No5_133」試料では 1513 － 1601 年(70.6%), 1620 － 1647 年(24.8%)、「No8_117」試料では 1107 － 1154 年（95.4%)、「No11_145」試料では 1647 － 1663 年（95.4%)、「No13_141」試料では 1689 － 1711 年(8.8%), 1717 － 1746 年(28.8%), 1758 － 1762 年（0.5%）, 1810 － 1891 年（57.2%）が得られた。

参考文献

1　C Bronk Ramsey, (2017), Methods for Summarizing Radiocarbon Datasets. Radiocarbon, 59 (2), 1809-1833.

2　Paula J Reimer, Edouard Bard, Alex Bayliss, J Warren Beck, Paul G Blackwell, Christopher Bronk Ramsey, Caitlin E Buck, Hai Cheng, R Lawrence Edwards, Michael Friedrich, Pieter M Grootes, Thomas P Guilderson, Haflidi Haflidason, Irka Hajdas, Christine Hatté, Timothy J Heaton, Dirk L Hoffmann, Alan G Hogg, Konrad A Hughen, K Felix Kaiser, Bernd Kromer, Sturt W Manning, Mu Niu, Ron W Reimer, David A Richards, E Marian Scott, John R Southon, Richard A Staff, Christian S M Turney, Johannes van der Plicht, (2013), IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887

表 17　試料情報 1

ラボコード	測定試料名	試料情報	試料状態	処理
YU-10301	No1_123 （SD1）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.1 SD1-1 下駄 谷地城跡試料 No1_SD1-1	前処理後の試料 21.009mg から 3.003mg 使用	超音波洗浄実施（純水、アセトン） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（2 回） 1M HCl 80 度 1 時間
YU-10302	No2_214 （SD2）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.2 SD2-3 ひょうたん 谷地城跡試料 No2_SD2-3	前処理後の試料 43.276mg から 3.069mg 使用	超音波洗浄実施（純水、アセトン） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（3 回） 1M HCl 80 度 1 時間
YU-10303	No3_109 （SD2）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.3 SD2-9 漆椀（砕片） 谷地城跡試料 No3_SD2-9	前処理後の試料 11.155mg から 3.099mg 使用	AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（3 回） 1M HCl 80 度 1 時間
YU-10304	No4_132 （SD3）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.4 SD3-1 不明木製品 谷地城跡試料 No4_SD3-1	前処理後の試料 175.096mg から 3.089mg 使用	超音波洗浄実施（純水、アセトン） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（8 回） 1M HCl 80 度 1 時間
YU-10305	No6_143 （SD30）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.6 SD30-6 杭 谷地城跡試料 No6_SD30-6	前処理後の試料 44.320mg から 3.050mg 使用	超音波洗浄実施（純水、アセトン） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（3 回） 1M HCl 80 度 1 時間
YU-10306	No7_215 （SD34）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.7 SD34-1 土（植物繊維含） 谷地城跡試料 No7_SD34-1	酸処理後 250um のフルイを 通過したものを回収・乾燥 前処理後の試料 1440.164mg から 69.832mg 使用	酸処理 1M HCl 80 度 1 時間 (4 回)
YU-10307	No9_ 図版なし （SK17）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.9 SK17-6 種実（クルミ） 谷地城跡試料 No9_SK17-6	前処理後の試料 55.668mg から 3.021mg 使用	超音波洗浄実施（純水、アセトン） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（3 回） 1M HCl 80 度 1 時間
YU-10536	No10_122 （SK49）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.10 SK49-2 歯（５点） 谷地城跡試料 No10_SK49-2_2	前処理後の試料 462.98mg から 129.955mg 使用	サンドブラストで表面を研磨 超音波洗浄実施 (純水、アセトン)
YU-10308	No12_155 （SP1032-2 ）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.12 SP1032-2 敷枝 谷地城跡試料 No12_SP1032-2	前処理後の試料 125.300mg から 3.016mg 使用	超音波洗浄実施（純水、アセトン） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（3 回） 1M HCl 80 度 1 時間
YU-10309	No14_151 （SP1085）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.14 SP1085-1 敷枝（桜） 谷地城跡試料 No14_SP1085-1	前処理後の試料 48.881mg から 3.034mg 使用	超音波洗浄実施（純水、アセトン） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（3 回） 1M HCl 80 度 1 時間
YU-10310	No15_139 （SK59）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.15 SP1211-2 敷枝 谷地城跡試料 No15_SP1211-2	前処理後の試料 64.492mg から 3.052mg 使用	超音波洗浄実施（純水、アセトン） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（5 回） 1M HCl 80 度 1 時間
YU-10311	No16_147 （SP1213）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.16 SP1213-1 建築部材 谷地城跡試料 No16_SP1213-1	前処理後の試料 59.107mg から 3.037mg 使用	超音波洗浄実施（純水、アセトン） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（3 回） 1M HCl 80 度 1 時間

表 18　試料情報 2

ラボコード	測定試料名	試料情報	試料状態	処理
YU-10312	No17_149 （SP1233）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.17 SP1233-1 敷枝 谷地城跡試料 No17_SP1233-1	前処理後の試料 69.821mg から 3.026mg 使用	超音波洗浄実施（純水、アセトン） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（2 回） 1M HCl 80 度 1 時間
YU-10313	No18_130 （SP1250）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.18 SP1250-1 木簡（墨書） 谷地城跡試料 No18_SP1250-1	前処理後の試料 14.154mg から 3.049mg 使用	超音波洗浄実施（純水、アセトン） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（2 回） 1M HCl 80 度 1 時間
YU-10314	No19_150 （SP1251）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.19 SP1251-2 敷枝 谷地城跡試料 No19_SP1251-2	前処理後の試料 65.273mg から 3.039mg 使用	超音波洗浄実施（純水、アセトン） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（2 回） 1M HCl 80 度 1 時間
YU-10315	No20_148 （SP1257）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.20 SP1257-1 礎板（建築部材） 谷地城跡試料 No20_SP1257-1	前処理後の試料 67.117mg から 3.069mg 使用	超音波洗浄実施（純水、アセトン） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（2 回） 1M HCl 80 度 1 時間
YU-10395	No5_133（1） （SD3）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.5 SD3-22 1-5 年輪 不明木製品 (ウィグルマッチ) 谷地城跡試料 No5_SD3-22_1	前処理後の試料 67.782mg から 3.118mg 使用	超音波洗浄実施 アセトン 5 分（1 回）→クロロホルム ＋メタノール（1:1）30 分（2 回） → アセトン 5 分（2 回） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（2 回） 1M HCl 80 度 1 時間
YU-10396	No5_133（2） （SD3）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.5 SD3-22 16-21 年輪 不明木製品 (ウィグルマッチ) 谷地城跡試料 No5_SD3-22_2	前処理後の試料 37.992mg から 3.034mg 使用	超音波洗浄実施 アセトン 5 分（1 回）→クロロホルム ＋メタノール（1:1）30 分（2 回） → アセトン 5 分（2 回） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（2 回） 1M HCl 80 度 1 時間
YU-10397	No8_117（1） （SK6）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.8 SK6-1 1-5 年輪 曲物底板 (ウィグルマッチ) 谷地城跡試料 No8_SK6-1_1	前処理後の試料 19.713mg から 3.054mg 使用	超音波洗浄実施 アセトン 5 分（1 回）→クロロホルム ＋メタノール（1:1）30 分（2 回） → アセトン 5 分（2 回） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（2 回） 1M HCl 80 度 1 時間
YU-10398	No8_117（2） （SK6）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.8 SK6-1 36-40 年輪 曲物底板 (ウィグルマッチ) 谷地城跡試料 No8_SK6-1_2	前処理後の試料 18.115mg から 3.061mg 使用	超音波洗浄実施 アセトン 5 分（1 回）→クロロホルム ＋メタノール（1:1）30 分（2 回） → アセトン 5 分（2 回） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（2 回） 1M HCl 80 度 1 時間
YU-10399	No8_117（3） （SK6）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.8 SK6-1 71-75 年輪 曲物底板 (ウィグルマッチ) 谷地城跡試料 No8_SK6-1_3	前処理後の試料 28.135mg から 3.010mg 使用	超音波洗浄実施 アセトン 5 分（1 回）→クロロホルム ＋メタノール（1:1）30 分（2 回） → アセトン 5 分（2 回） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（2 回） 1M HCl 80 度 1 時間
YU-10400	No11_145（1） （SK1026）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.11 SP1026-2 1-5 年輪 建築部材 (ウィグルマッチ) 谷地城跡試料 No11_SP1026-2_1	前処理後の試料 19.170mg から 3.014mg 使用	超音波洗浄実施 アセトン 5 分（1 回）→クロロホルム ＋メタノール（1:1）30 分（2 回） → アセトン 5 分（2 回） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（2 回） 1M HCl 80 度 1 時間

表 19　試料情報 3

ラボコード	測定試料名	試料情報	試料状態	処理
YU-10401	No11_145（2） （SK1026）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.11 SP1026-2 16-20 年輪 建築部材 (ウィグルマッチ) 谷地城跡試料 No11_SP1026-2_2	前処理後の試料 29.144mg から 3.178mg 使用	超音波洗浄実施 アセトン 5 分（1 回）→クロロホルム ＋メタノール（1:1）30 分（2 回） → アセトン 5 分（2 回） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（2 回） 1M HCl 80 度 1 時間
YU-10403	No11_145（4） （SK1026）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.11 SP1026-2 31-35 年輪 建築部材 (ウィグルマッチ) 谷地城跡試料 No11_SP1026-2_4	前処理後の試料 16.566mg から 3.178mg 使用	超音波洗浄実施 アセトン 5 分（1 回）→クロロホルム ＋メタノール（1:1）30 分（2 回） → アセトン 5 分（2 回） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（2 回） 1M HCl 80 度 1 時間
YU-10404	No13_141（1） （SP1064 ）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.13 SP1064-3 1-5 年輪 柱 (ウィグルマッチ) 谷地城跡試料 No13_SP1064-3_1	前処理後の試料 170.393mg から 3.061mg 使用	超音波洗浄実施 アセトン 5 分（1 回）→クロロホルム ＋メタノール（1:1）30 分（2 回） → アセトン 5 分（2 回） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（7 回） 1M HCl 80 度 1 時間
YU-10405	No13_141（2） （SP1064 ）	山形県埋蔵文化財センター試料 2019/09/26 受取 No.13 SP1064-3 8-12 年輪 柱 (ウィグルマッチ) 谷地城跡試料 No13_SP1064-3_2	前処理後の試料 150.600mg から 3.101mg 使用	超音波洗浄実施 アセトン 5 分（1 回）→クロロホルム ＋メタノール（1:1）30 分（2 回） → アセトン 5 分（2 回） AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間（7 回） 1M HCl 80 度 1 時間

表 20　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果 1

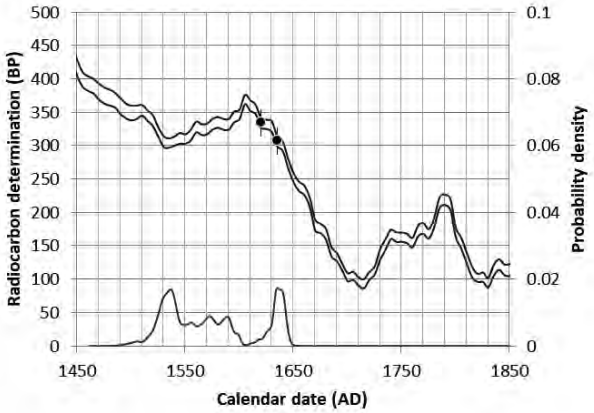
測定番号	試料名 （掲載番号）	$\delta^{13}C$ (‰)	放射性炭素年代 （yrBP ± 1 σ）	放射性炭素年代を暦年代に較正した年代範囲 1 σ暦年代範囲	 2 σ暦年代範囲
YU-10301	123（SD1）	-25.54 ± 0.23	514 ± 20	1412AD (68.2%) 1430AD	1402AD (95.4%) 1440AD
YU-10302	214（SD2）	-29.80 ± 0.22	500 ± 20	1416AD (68.2%) 1435AD	1410AD (95.4%) 1441AD
YU-10303	109（SD2）	-29.56 ± 0.19	501 ± 20	1415AD (68.2%) 1435AD	1410AD (95.4%) 1440AD
YU-10304	132（SD3）	-28.47 ± 0.25	336 ± 20	1495AD (20.7%) 1526AD 1557AD (34.7%) 1602AD 1616AD (12.8%) 1632AD	1481AD (95.4%) 1638AD
YU-10305	143（SD30）	-28.38 ± 0.22	354 ± 20	1475AD (37.2%) 1522AD 1576AD (4.8%) 1584AD 1591AD (26.2%) 1624AD	1460AD (46.3%) 1527AD 1555AD (49.1%) 1634AD
YU-10306	215（SD34）	-26.27 ± 0.24	1226 ± 20	721AD (16.9%) 741AD 767AD (11.1%) 778AD 791AD (24.0%) 827AD 840AD (16.3%) 864AD	695AD (1.2%) 701AD 709AD (23.1%) 745AD 764AD (71.1%) 881AD
YU-10307	図版なし（SK17）	-27.63 ± 0.23	326 ± 20	1515AD (10.5%) 1530AD 1540AD (44.3%) 1598AD 1618AD (13.4%) 1635AD	1490AD (76.1%) 1603AD 1612AD (19.3%) 1642AD
YU-10536	122（SK49）	-16.47 ± 0.36	474 ± 20	1426AD (68.2%) 1443AD	1417AD (95.4%) 1448AD
YU-10308	155（SP1032）	-30.66 ± 0.19	309 ± 20	1522AD (50.3%) 1575AD 1585AD (3.0%) 1590AD 1625AD (14.9%) 1643AD	1497AD (1.8%) 1505AD 1512AD (71.3%) 1601AD 1616AD (22.4%) 1647AD
YU-10309	151（SP1085）	-28.77 ± 0.19	309 ± 20	1522AD (50.3%) 1575AD 1585AD (3.0%) 1590AD 1625AD (14.9%) 1643AD	1497AD (1.8%) 1505AD 1512AD (71.3%) 1601AD 1616AD (22.4%) 1647AD

表 21　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果２

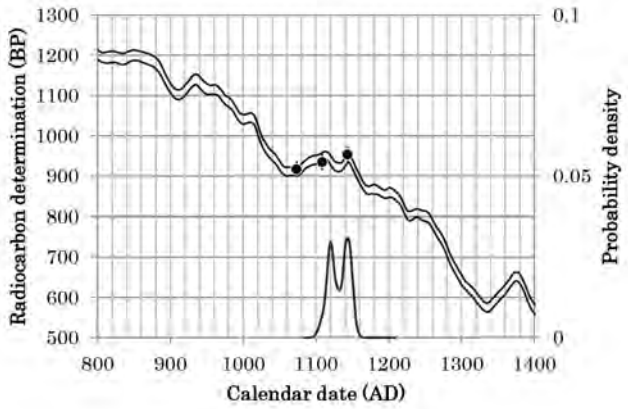
測定番号	試料名（掲載番号）	δ ^{13}C (‰)	放射性炭素年代（yrBP ± 1 σ）	放射性炭素年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
YU-10310	139（SK59）	-27.05 ± 0.18	259 ± 20	1640AD (68.2%) 1664AD	1528AD (7.8%) 1550AD 1633AD (78.8%) 1668AD 1782AD (8.9%) 1797AD
YU-10311	147（SP1213）	-27.21 ± 0.19	336 ± 20	1495AD (20.7%) 1526AD 1557AD (34.7%) 1602AD 1616AD (12.8%) 1632AD	1481AD (95.4%) 1638AD
YU-10312	149（SP1233）	-25.55 ± 0.20	613 ± 20	1303AD (28.3%) 1324AD 1345AD (27.4%) 1366AD 1383AD (12.5%) 1393AD	1297AD (95.4%) 1400AD
YU-10313	130（SP1250）	-24.91 ± 0.19	336 ± 20	1495AD (20.7%) 1526AD 1557AD (34.7%) 1602AD 1616AD (12.8%) 1632AD	1481AD (95.4%) 1638AD
YU-10314	150（SP1251）	-28.60 ± 0.20	216 ± 20	1653AD (29.3%) 1669AD 1781AD (38.9%) 1798AD	1646AD (36.7%) 1680AD 1763AD (45.3%) 1802AD 1938AD (13.3%) ...
YU-10315	148（SP1257）	-27.20 ± 0.19	242 ± 20	1646AD (54.2%) 1665AD 1785AD (14.0%) 1793AD	1640AD (68.9%) 1670AD 1780AD (26.5%) 1800AD
YU-10395	133_1（SD3）	-25.47 ± 0.18	307 ± 20	1522AD (53.1%) 1574AD 1628AD (15.1%) 1643AD	1499AD (0.9%) 1503AD 1513AD (71.3%) 1601AD 1616AD (23.2%) 1648AD
YU-10396	133_2（SD3）	-24.97 ± 0.18	334 ± 20	1496AD (19.4%) 1527AD 1555AD (35.6%) 1601AD 1616AD (13.2%) 1633AD	1481AD (95.4%) 1640AD
ウィグルマッチ				1522AD (29.3%) 1546AD 1554AD (1.8%) 1557AD 1566AD (9.9%) 1579AD 1582AD (7.9%) 1592AD 1630AD (19.3%) 1644AD	1513AD (70.6%) 1601AD 1620AD (24.8%) 1647AD
YU-10397	177_1（SK6）	-24.00 ± 0.22	953 ± 20	1030AD (20.4%) 1047AD 1089AD (38.0%) 1122AD 1139AD (9.8%) 1148AD	1023AD (27.7%) 1059AD 1067AD (67.7%) 1155AD
YU-10398	177_2（SK6）	-24.31 ± 0.24	935 ± 20	1040AD (10.1%) 1052AD 1081AD (58.1%) 1152AD	1034AD (95.4%) 1155AD
YU-10399	177_3（SK6）	-22.58 ± 0.27	917 ± 20	1046AD (42.2%) 1093AD 1121AD (16.9%) 1140AD 1147AD (9.1%) 1158AD	1037AD (95.4%) 1164AD
ウィグルマッチ				1114AD (30.4%) 1127AD 1135AD (37.8%) 1150AD	1107AD (95.4%) 1154AD
YU-10400	145_1（SP1026）	-27.84 ± 0.28	238 ± 20	1648AD (51.4%) 1665AD 1785AD (16.8%) 1793AD	1641AD (64.0%) 1670AD 1780AD (30.5%) 1800AD 1945AD (0.9%) 1949AD
YU-10401	145_2（SP1026）	-28.08 ± 0.19	280 ± 20	1528AD (29.6%) 1551AD 1634AD (38.6%) 1651AD	1521AD (48.1%) 1576AD 1584AD (1.1%) 1591AD 1626AD (46.2%) 1662AD
YU-10403	145_3（SP1026）	-27.99 ± 0.24	355 ± 20	1474AD (40.0%) 1521AD 1578AD (2.5%) 1582AD 1591AD (25.6%) 1621AD	1459AD (47.1%) 1526AD 1556AD (48.3%) 1633AD
ウィグルマッチ				1652AD (68.2%) 1661AD	1647AD (95.4%) 1663AD

表 22　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果 3

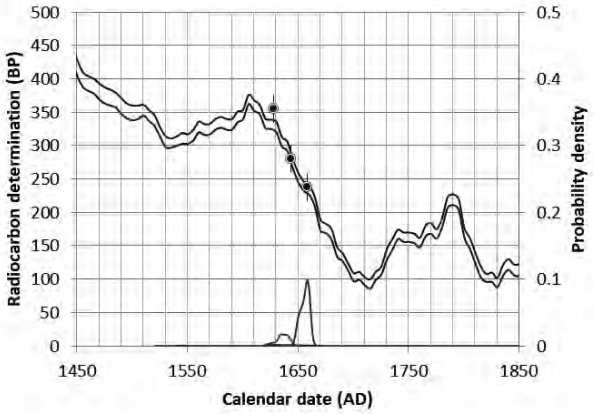
測定番号	試料名（掲載番号）	δ ^{13}C (‰)	放射性炭素年代 (yrBP ± 1 σ)	放射性炭素年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
YU-10404	141_1（SP1064）	-27.26 ± 0.21	144 ± 20	1679AD (11.0%) 1695AD 1727AD (24.4%) 1764AD 1801AD (8.4%) 1813AD 1838AD (1.9%) 1842AD 1853AD (7.0%) 1868AD 1918AD (15.5%) 1939AD	1669AD (16.0%) 1707AD 1719AD (31.3%) 1780AD 1797AD (11.1%) 1820AD 1832AD (19.3%) 1883AD 1914AD (17.7%) 1945AD
YU-10405	141_2（SP1064）	-27.96 ± 0.21	114 ± 20	1692AD (10.5%) 1709AD 1718AD (6.3%) 1728AD 1812AD (45.7%) 1889AD 1910AD (5.7%) 1920AD	1682AD (27.8%) 1735AD 1806AD (54.9%) 1897AD 1902AD (12.7%) 1930AD
ウィグルマッチ				1726AD (23.4%) 1739AD 1836AD (44.8%) 1878AD	1689AD (8.8%) 1711AD 1717AD (28.8%) 1746AD 1758AD (0.5%) 1762AD 1810AD (57.2%) 1891AD



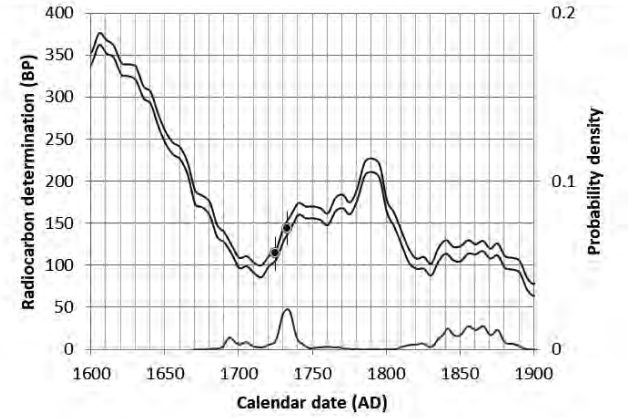
第 70 図　133 のウィグルマッチの結果



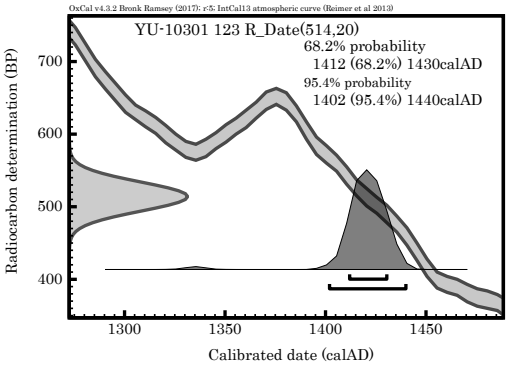
第 71 図　117 のウィグルマッチの結果

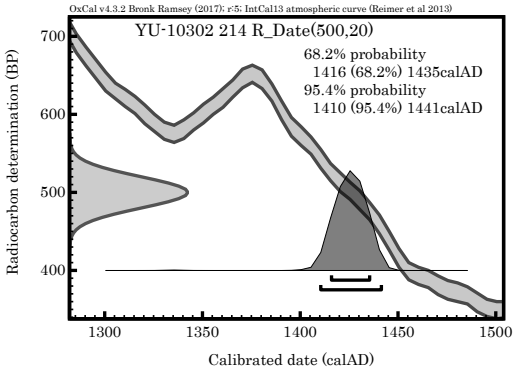


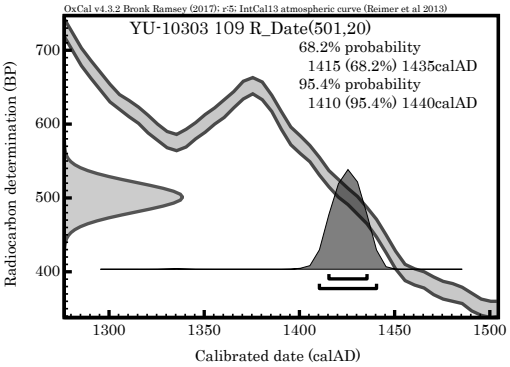
第 72 図　145 のウィグルマッチの結果

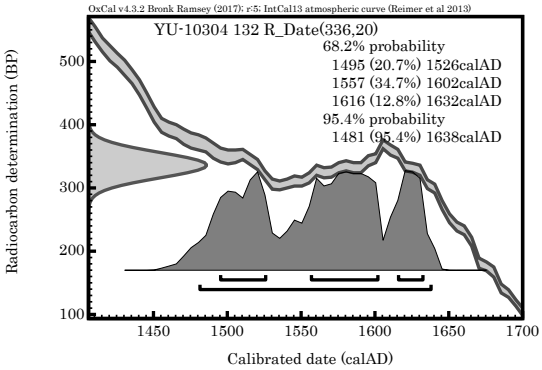


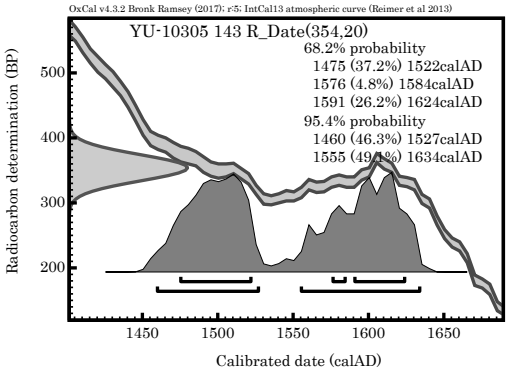
第 73 図　141 のウィグルマッチの結果

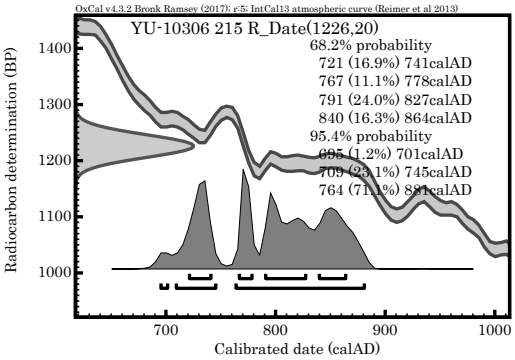


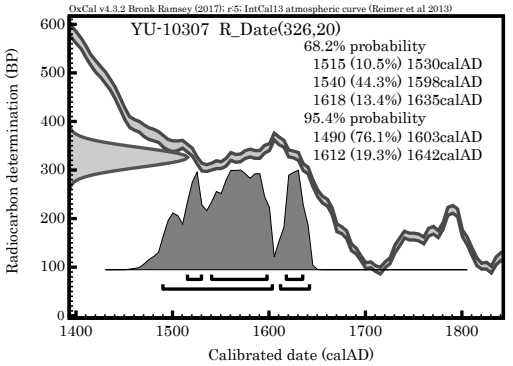


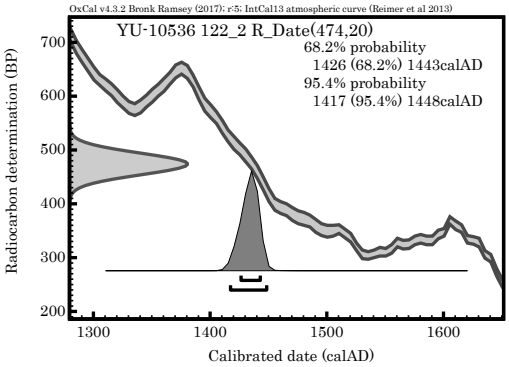




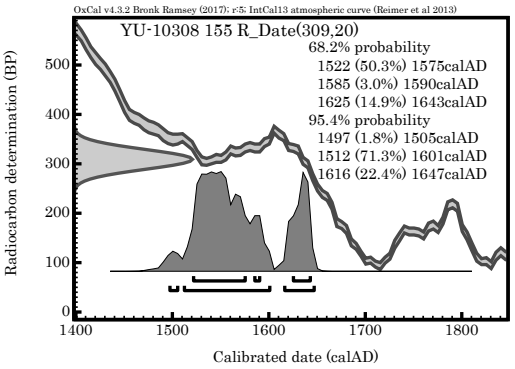


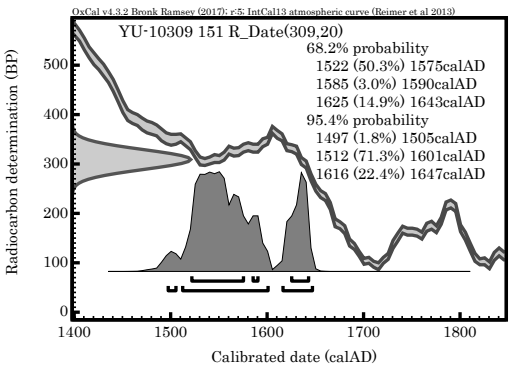


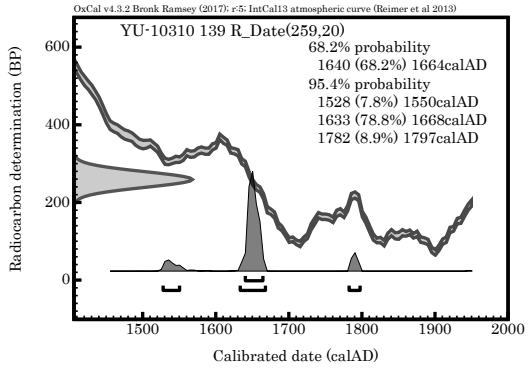


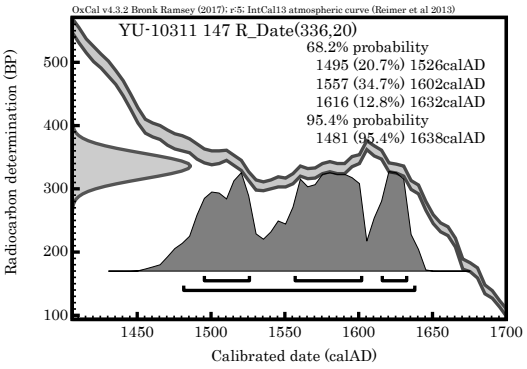


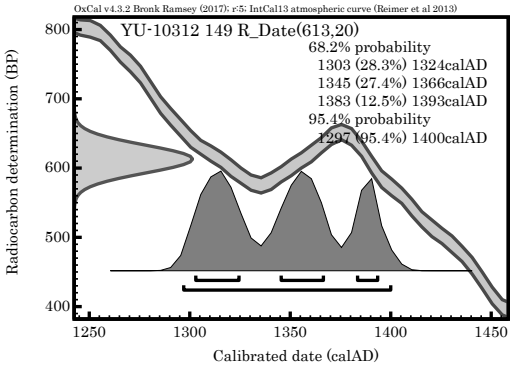
第 74 図　暦年較正年代グラフ 1

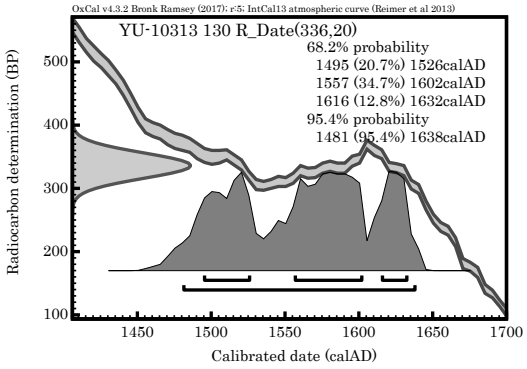


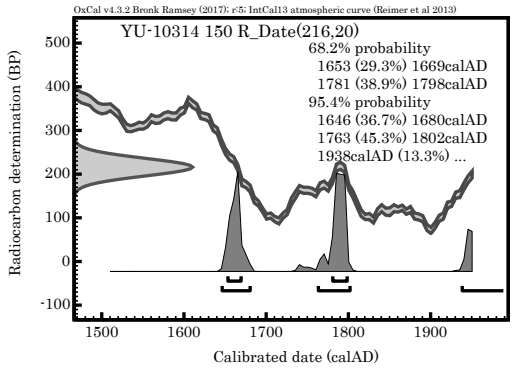


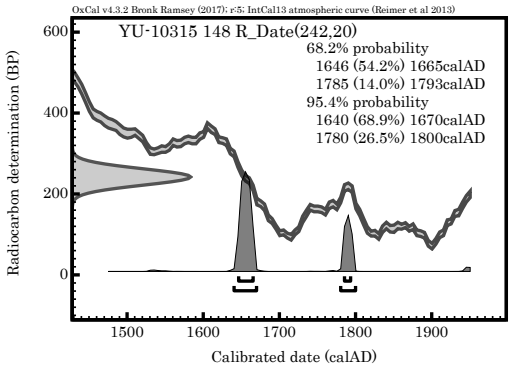




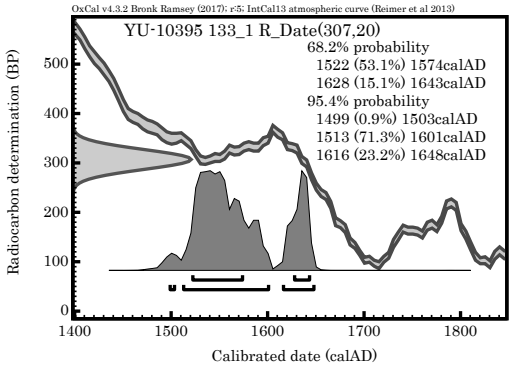


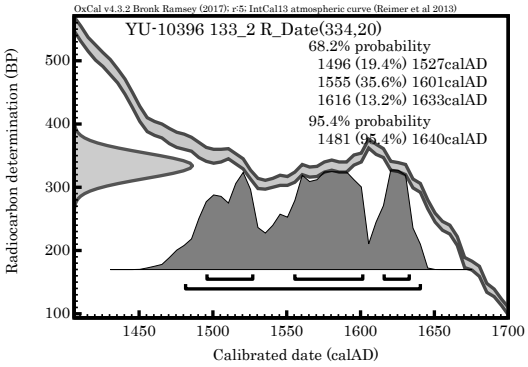


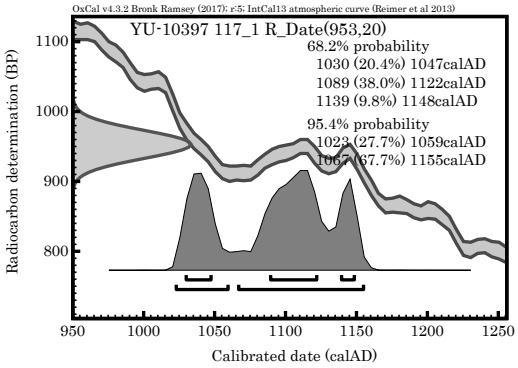


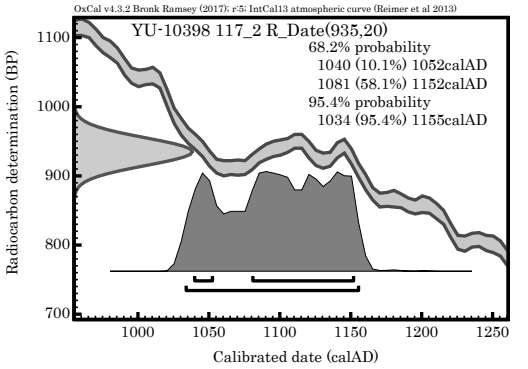


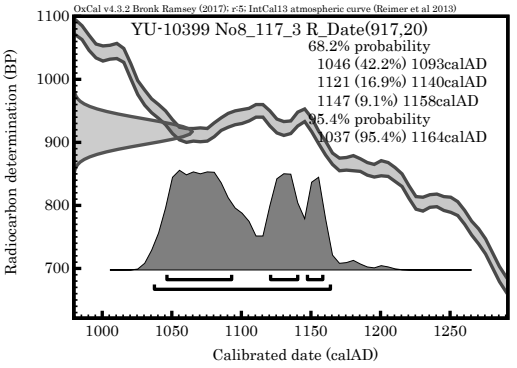
第 75 図　暦年較正年代グラフ 2

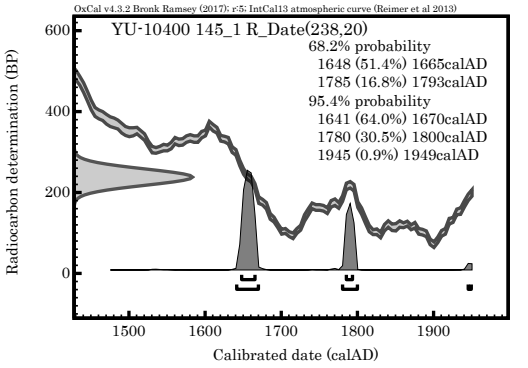


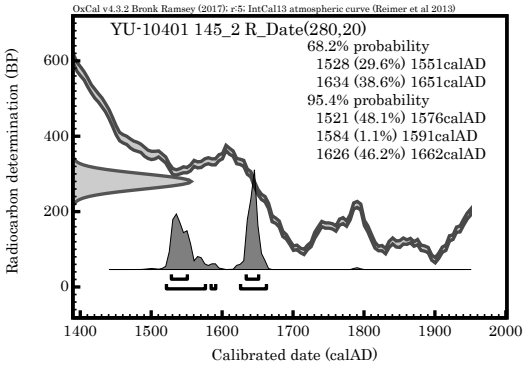


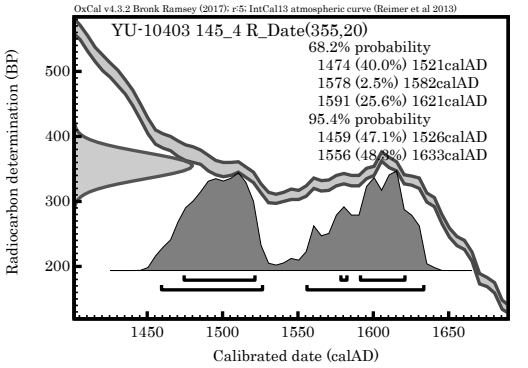




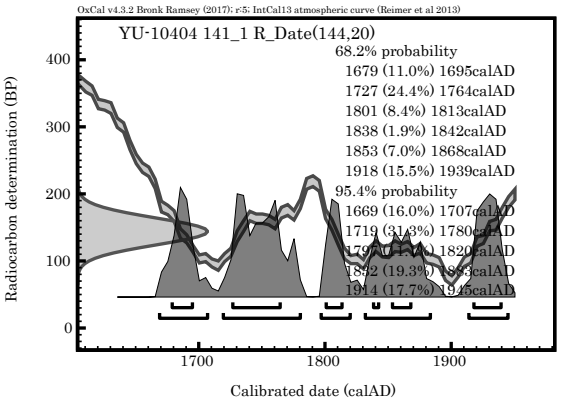


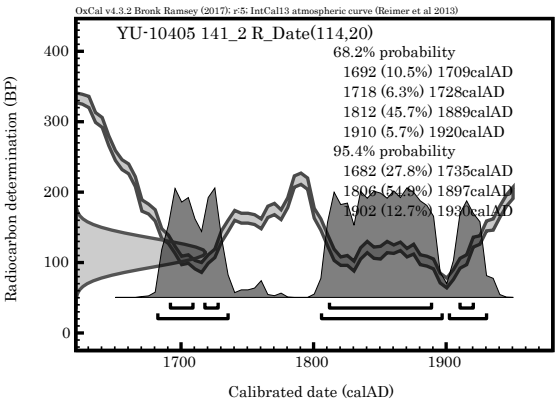




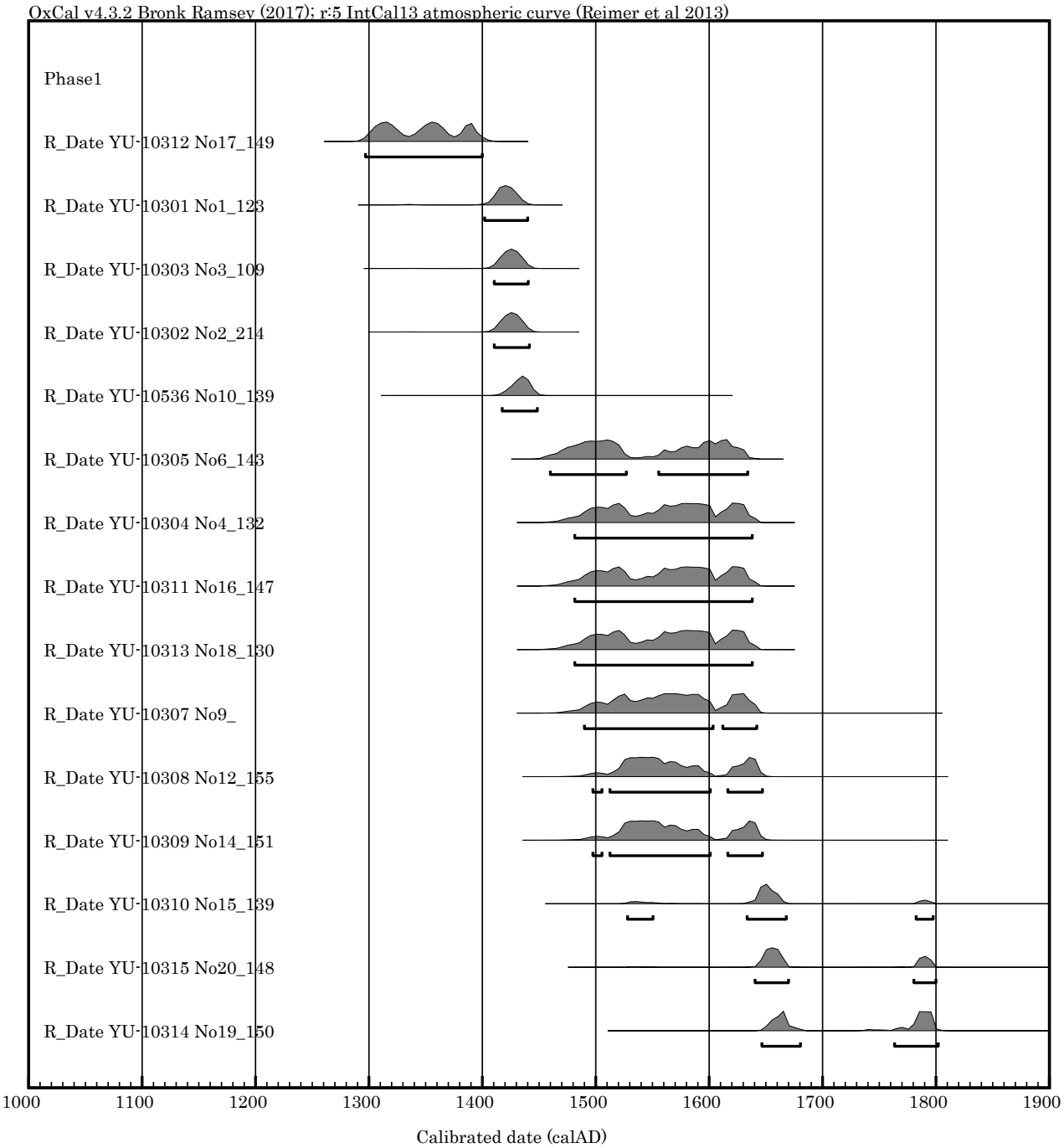


第 76 図　暦年較正年代グラフ３





第 77 図　暦年較正年代グラフ４



第 78 図　暦年較正年代の比較

Ⅵ　ま　と　め

今回の調査は、谷地城跡で行われるはじめての大規模な発掘調査である。調査面積 2200 ㎡から掘立柱建物５棟、ピット 522 基、溝状遺構 28 条、土坑 22 基を検出している。出土遺物は中世から近世の陶磁器や木製品など整理箱で 10 箱ほど出土している。

1　遺構の年代について

文献史上の谷地城の築城時期は、不明な点が多い。谷地城跡を含む一帯の開発の歴史をみると、寒河江庄から北寒河江庄として分割され、1295 年には、鎌倉の円覚寺に当地の五箇郷が寄進されたという記録が残る。14 世紀末頃に中条氏が谷地に入部したとされ、16 世紀中頃、白鳥氏に代わったとされる（河北町誌編纂委員会 1962）。しかし、中条氏の入部の時期や、白鳥氏への代替わりを巡っては、史料が少ない上に不整合な点も多いことから、様々な説が提示されており、一致をみない。

鈴木聖雄氏は、円覚寺の五箇郷を避けて入部した中条氏が､代を重ねるにつれ近隣諸領に侵入していったとし、６代長昌の頃の 1555 ～ 1558 年頃に谷地城の築城に着手したとしている。白鳥氏へは婚姻関係により代わり、城郭の整備を受け継いだとしている（鈴木 1991）。

保角里志氏は、中条氏の存在を示す文章には疑義があり、大江氏系図など近隣地域の他の史料にも見えないことから「存在そのものが疑われる」としている。白鳥氏に関しては、伊達氏の最上進攻に関わって谷地に入部したものとし、その時期を 1504 ～ 1528 年頃においている（保角 2019）。

谷地城の築城時期については、1710 年に当該地の庄屋である工藤弥次右衛門の記した「谷地城之覚」には、127 年以前とあり、逆算すると 1583 年が当てられる。「以前」とあるので､築城年代の下限として考えられよう。谷地城はこの１年後、最上氏によって落城、以後 1622 年まで継続し、廃城となる。谷地城の起源に関わる研究は、現状の史料では限りがあり、今後の発掘調査に頼るところが大きいといえよう。

調査の結果からは、遺構の重複関係、出土遺物の年代、炭素年代測定結果などから考えて、大きく分ければ５つの時期がみられた。これらを１～５期とし、それぞれの帰属遺構と年代を考えてみたい。

１期は、SD34 溝状遺構で区画されるもので、８～９世紀代が与えられる。SD34 は本体工事区中央から北東方向に伸びる細長い溝状遺構で、他の溝状遺構と明らかに軸が異なる。この遺構の覆土には、植物の繊維が大量に含むものである。この繊維を含む土から炭素年代を測定したところ、764-881calAD（71.1％）との結果が得られている。SD34 からではないが、遺構に伴わない出土遺物の中には、基本土層のⅢ～Ⅳ層中に須恵器や土師器が含まれており､８～９世紀代のものであることから、炭素年代測定の結果とも合致する。建物跡などは検出していないため居住域ではなかったと考えられるが、この時代に一定規模の土地利用があったものと考えられよう。

２期は、SD2 溝状遺構と SD46 溝状遺構で区画されるもので、15 世紀中頃～ 16 世紀中頃を想定している。SD2 は東西方向に、SD46 は南北方向に伸び、これらが作り出す区画が L 字状に調査区内に検出している。この区画は、SD3 のつくる区画と大きく重複しており、両方の区画内にある土坑やピットなど一つひとつに帰属を論じることは難しい。例外的に SK49 は SD3 の区画の外にあることや、炭素年代の測定値が SD2 出土のものと類似することから、この時期に含めてもよいだろう。

溝状遺構同士の重複からは、SD3・30 などに先行するものと判断される。SD46 からの出土遺物はなく、SD2 も多くはないため、遺物から時期を判断するのは難しい。理化学分析では SD2 出土の加工痕のみられないひょうたんと思われる植物遺体と、漆器椀の漆塗膜を用いて炭素年代測定したところ、両者にはほとんど差が見られず、1410-1441calAD（95.4％）という結果を得ている。遺跡全体でみれば、出土する陶磁器片に古瀬戸後期のものなど同時期の遺物が複数みられるため、15 世紀中頃を上限として設定しよう。下限を考えると、SD2 の覆土からＥ２- ｂ類白磁皿の底部（３）が出土していることや、SD3 などに先行すること考えると、16 世紀

中頃が考えられる。

以上のことから２期は、谷地の開発開始を示す時期となろう。これまで 15 世紀代には谷地地区に居館は築かれておらず、中条氏が堀口館（第７図８）に本拠をおいていたとされてきた（河北町誌編纂委員会前掲ほか）。発掘調査においては人名を伝えるものがないため、中条氏の開発によるものかはわからない。また、SD2 や SD46 が谷地城としての区画なのかどうかもわからない。しかし、区画される軸は、後世のものと変わらないため、この時期に谷地の町並みの基礎は既にできていたものと考えられる。これは従来の文献史上で想定されてきた谷地の開発開始時期よりも遡る結果となった。

３期は、大きくは SD3 溝状遺構で区画されるもので、16 世紀中頃～ 17 世紀前半と考える。SD3 は調査区の北側を東西に横断し、エネルギー棟区で南方向に折れる。遺構の配置関係から、この区画内に展開する南北方向の SD30 と東西方向の SD24A・B、SD31A ～ C なども同一時期の区画と考えられる。重複関係からは SD2 などに後続し、SB61 などに先行する。

出土遺物は、SD3 から比較的多くを得ている。陶磁器類で時期判断可能なものをみると、古いものでは古瀬戸後期の皿（19、22）や珠洲の甕類の胴部片（51、52）などがあり、14 ～ 15 世紀後半のものだが、数は少ない。多くなるのは 15 世紀後半～ 16 世紀中頃のもので、貿易陶磁では白磁皿の D 類（２）、青磁碗 B 群（５、10）、青花碗の C 群（11、12、14）などが、国内産のものでは、瀬戸美濃の大窯Ⅰ～Ⅱ期の皿（28、29、32）が複数みられる。これらに続く 16 世紀末～ 17 世紀前半代の国産陶磁器もいくつかあり、唐津の皿（34）や肥前磁器（35、46）などがあるが、これらは覆土の上層や確認面で出土しているものが多い。底面から出土した木製品の炭素年代測定では、不明木製品（132）で 1481-1638calAD(95.4%)、133 ではウィグルマッチ分析を行い、1513-1601calAD(70.6%)、という結果が出ている。類似する測定値は、SD30 や SK17 でも得られている。SD2 などとの重複関係から、上限を 16 世紀の中頃とし、17 世紀の前半には埋没していたと考えられる。このような年代観は、従来考えられてきた谷地城の築城の時期と廃城の時期に整合的な結果といえよう。

４期は、２期や３期の区画溝の上につくられる SB61 ～ 64 などの掘立柱建物が営まれた時期で、17 世紀前半～後半を想定している。重複関係から上限を SD3 などの区画の埋没時に求められ、17 世紀の前半とできよう。SD3 の遺構確認面から出土する遺物は、この時期のものが供給源と思われる。ピットのため、遺物がほとんど出土しておらず、直接的な年代の判断は難しい。炭素年代測定では、同じ建物でも、３期のものと変わらない数字が出るものと、それに後続する数値をもつものとが混在している。後者はピークが分散しがちであるが、17 世紀の後半に高い確率がみられる。遺跡全体で見ると、18 世紀代を示す遺物がほとんどなく、この時代の積極的な土地利用は想定し難い。よって 17 世紀後半以降に建物は廃絶し、田畑等に利用され、近代まで続くものと思われる。

５期は、壁面を曲物で補強した土坑などがいくつかみられるもので、時期は 19 世紀以降のものである。1885 年、調査区の南側に隣接して、近隣の学校を統合した谷地学校が建てられ、その数年後には、「内堀」と字名のついた調査区周辺を埋め立てており、近代に入り開発が進んだ結果と考えられる。SK21、45 で大量の遺物が出土しており、近現代のものと判断できる。

2　遺構の評価

これまでの研究において示された谷地城の主な復元図は、今田案（第 80 図左上）と鈴木案（第 80 図右上）がある。前者は本丸を二の丸の曲輪が途切れながら取り囲むものであり（今田 1941）、これは明治初期の字限図（第 80 図左下）で宅地外として記されている場所や、明治後半期の地形図（第 80 図右下）に田圃として記されている場所を往時の堀跡として考えると見えてくる姿である。加えてこれらの田圃がある場所の小字が「堀」とされていることからも堀跡として推測するに充分な理由だったと思われる。

後者は先行研究を更に発展させて、本丸を中心に三の丸までを構想するものである（鈴木前掲）。その後、山形県内の中世城館を集成した『山形県中世城館遺跡調査報告書』にその図面が掲載されたことから、谷地城の姿として多くの文献や図録に引用されている。

いずれにせよ提示された２つの復元案で、本丸を現在の三社宮付近に置く点は共通しており、二の丸が本丸を取り囲むように区画することもまた共通する。西側の二の丸

堀については、ほとんど同じで、現存する工藤小路と西小路の間を平行して南北に堀や土塁が伸びる姿を想定している。今回の調査区は、この両復元案において二の丸の西堀が縦断する場所にあたることから、調査準備段階から堀跡の調査を想定していた。

しかし、実際に検出したものは、南北方向ではなく、東西方向に伸びるSD2やSD3といった、幅２～４ｍ程度の溝状遺構であった。これらが城館を区画する堀として考えるには、幅が狭く、断面形が薬研になるでもない。旧地表面の高さを勘案しても深さは１ｍに満たないであろう。これを「堀」とするには疑問を覚える。何よりも本丸方向にまっすぐ80mも伸びてしまっては、防御の役には立たないように思える。

ではこれとは別の機能として、水路のような役割を想定できるだろうか。溝状遺構の底面は、調査で検出する掘方の底が、そのまま床面となるのではないものの、底が上がり下がりを繰り返していることや、どちらか一方向に傾く様子もみられないこと。また、SD2やSD46では、溝同士が連結せず、途中で途切れたり、確認面近くまで底面が立ち上がったりしていることを考慮すると、水路としての機能を想定することは難しい。

溝状遺構の具体的な用途はさておき、SD3と同時代と考えられる溝状遺構の多くは、廃城後と考えられる４期以降には検出されていない。このことから、廃城の際にともに埋めたてられたと推測される。つまり、これらの溝状遺構は一般生活用のものではなく、谷地城の一部として機能するものであったと考えられる。SD2やSD46の区画が谷地城としてのものか、それ以前の町割りのものかは、現段階では判断できないが、SD3やそれと同時期の溝状遺構は、主体となる二の丸堀ではないにせよ、谷地城に付随する区画施設と考えたい。調査区内では、溝状遺構が折れ曲がる様子は確認できるものの、それが全体として方形の区画をなすのか、あるいはクランクして終わるのかは判断できない。また、その機能が二の丸内に展開する個別の屋敷地の地境としてのものなのか、これら自体が二の丸堀の補助的な区画をなすものであったのかは、今後の調査の進展に委ねられよう。

本調査によって、従来考えられてきた二の丸の姿は、再考を求められる結果となった。二の丸の存在そのものについては、1600年の合戦の際、二の丸まで押し込まれたものを撃退したとの記述があるため、完全に否定することは難しい。とはいえ、これまでに想定していた谷地城の姿とは異なるものを考えねばならない。明治期の字限図や地図上に残る耕作地や不整形な区画は、谷地城構築時の名残ではなく、廃城後のものであろう。調査区では４期とした17世紀後半以降、開発の痕跡が100年以上途切れているため、この段階で付近は既に田圃化していたと考えられる。二の丸堀は、近世前半段階で埋め立てられ、それに伴い町割りも新しい区画に変わっていたならば、従来の字限図などからの想定には限界がある。よって、本来の二の丸や谷地城全体の姿を明らかにするためには、今後もさらなる発掘調査の積み重ねが必要である。

３　出土遺物について

木　簡

本調査において木簡が１点出土している（130）。木簡はSB62を構成するSP1250から出土した。SP1250は礎盤として根石を用いた柱穴である。遺構の切合も含め、17世紀前半以降のものと考えている。木簡自体も年代を検討するため一部サンプルを取得し、炭素年代測定を行っている。結果はⅤ章に掲載されているが、1481-1638CalAD（95.4％）という結果を得ている。

下部が欠損しており全体的な大きさは不明ながら大きくは変わらないもの思われる。残存値で100×18×4mmほどの小型の板材を用いている。表裏両面に墨書にて記載がされており、２名分の人名が確認できる。

表面　「升取忠左衛門
　　勘□」
裏面　「□□［谷地ヵ］半左衛門分」

「升取」とあるので年貢の収公に関わる木簡だと考えられる。近世的な年貢納入体制が整っていた時期のものであり、炭素年代測定値や遺構の重複関係から考えられる17世紀前半以降という時代観とも矛盾しない。裏面の頭に来る二文字がはっきりとしないものの、「半左衛門」は、調査区周辺の工藤小路村に半左衛門を屋号として伝える旧家がある。

墨書の判読には、佐藤正三郎、鈴木勲、瀧澤潤、田中大輔諸氏の協力を得た。

陶磁器が示すこと

今回出土した遺物の主なものは陶磁器、木製品、石製品、古銭である。縄文土器や古墳時代、奈良・平安時代の土師器、須恵器も出土したが中心となるのは中世に属する遺物群である。その中の陶磁器を中心として遺跡の検討を行う。古いものは 13・14 世紀に該当する珠洲や瓷器系陶器がみられる。ついで、15 世紀になると 13・14 世紀に比べ遺物の量は増加し内容も白磁といった輸入磁器、そして国産陶器である古瀬戸が出土するようになる。いずれも当時としては貴重な品であり、15 世紀段階においてこの地域に有力者が存在したことが示唆される。

16 世紀前半期になると遺物量はさらに増加する、輸入磁器である青磁や青花を始め、瀬戸美濃産の皿や小天目がこれにあたる。16 世紀は山形県内においても群雄が割拠する時期になり、河北地域には白鳥氏が入って来る時期にあたる。これら陶磁器は最上川を利用した酒田湊を介しての搬入品と考えて差し支えないと思われる。なお、16 世紀に遺物の増加がみられると前述したが 16 世紀中葉から末にかけての遺物は前半と比較し減少する。特に瀬戸美濃製品には顕著であり、大窯Ⅲ・Ⅳ段階の遺物が 26 と 240 の 2 点しか確認できない。これは今回の調査区においてなのか谷地城全体においてなのか現時点では判断し得ない。

17 世紀に入ると遺物量は減少する。出土するもののほとんどは肥前産の陶磁器類である。この時点で谷地城を領有していたのは最上氏である。最上氏は 1622（元和８）年に改易され、それに伴い谷地城も廃城となったといわれている。遺物の量はこの事象に関係していると考えられる。

今回出土した 13 ～ 16 世紀に属する陶磁器には相対的にではあるが特徴が存在する。被熱の痕跡と漆継の痕跡である。被熱に関しては火事などの要因が考えられる。その原因が生活の中での出火なのか、兵乱によるものなのかは判断出来ない。今回の調査においてはそういった形跡は認められなかった。

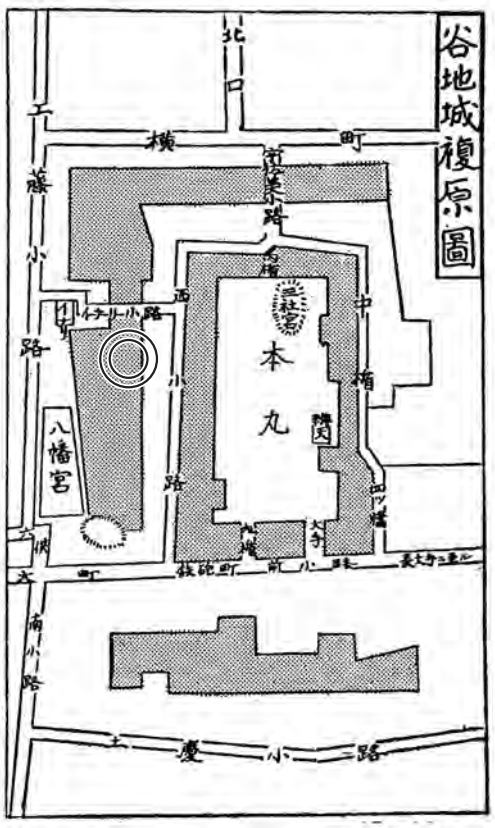
漆継は輸入磁器に特にみられ、古瀬戸や小天目、珠洲焼の甕の破片といった国産陶器にもみられる。当時において貴重品であったことも要素の一つであったと考えられるが物を大事にしていた姿勢が伺われる。

これらの遺物のほとんどは溝跡 SD3 から出土している。他の同規模に近い溝跡と比べても出土量は多い。これは SD3 溝状遺構が機能を停止することと、遺物の廃棄行為の意味が重なった結果と考えることが出来よう。SD3 を埋め立てることが谷地城の機能の一端を消滅させる行為であったと考えられる。覆土中で一番新しい遺物は肥前陶器の皿であり 17 世紀初頭の所産である。検出面においては 17 世紀前半代の遺物が認められることから 17 世紀初頭の段階で埋められたことが理解され、それは 1622 年の廃城時と考えて差し支えないと思われる。

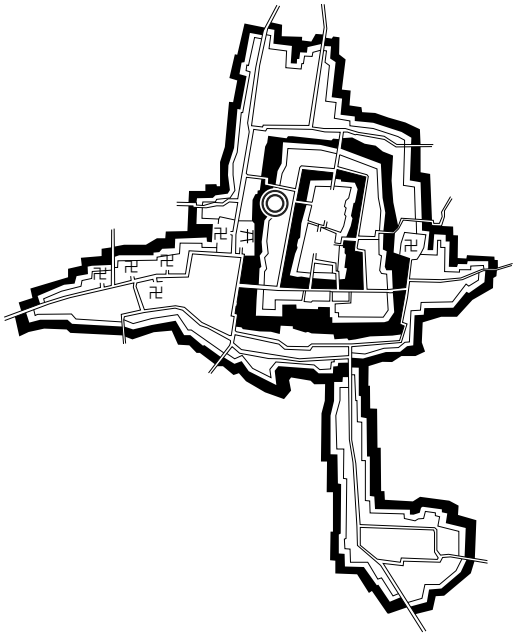
引用文献

今田信一　1941 「谷地城の研究資料篇」『山形県内に於ける古城址の研究』山形県中央図書館編
河北町誌編纂委員会　1962 『河北町の歴史』上巻
森田勉　1982 「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2
上田秀夫　1982 「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2
小野正敏　1982 「15 ～ 16 世紀の染付碗、皿の分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2
鈴木聖雄　1991 「谷地城の構築とその周辺について」『西村山地域史の研究』第９号
鈴木聖雄　1996 「谷地城」『山形県中世城館遺跡調査報告書』第２集（村山地域）山形県教育委員会編
九州近世陶磁学会　2000 『九州陶磁の編年　九州陶磁学会 10 周年記念』
地図資料編纂会編　2001 「谷地」『正式二万分一地形図集成　東日本』 柏書房
藤澤良祐　2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要第 10 輯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
藤澤良祐　2008 『中世瀬戸窯の研究』高志書院
河北町誌編纂委員会　2009 『河北町史資料』第８号　槇久右衛門家文書（中巻）
鈴木勲　2010 「谷地城を調べる―『河北町の歴史』（上巻）までに明らかになったことと、その後―」『西村山の歴史と文化Ⅴ』
藤澤典彦・狭川真一　2017 『石塔調べのコツとツボ－図説　採る撮る測るの三種の実技－』高志書院
保角里志　2019 『最上義光の城郭と合戦』戎光祥出版

第 79 図　遺構検出変遷図

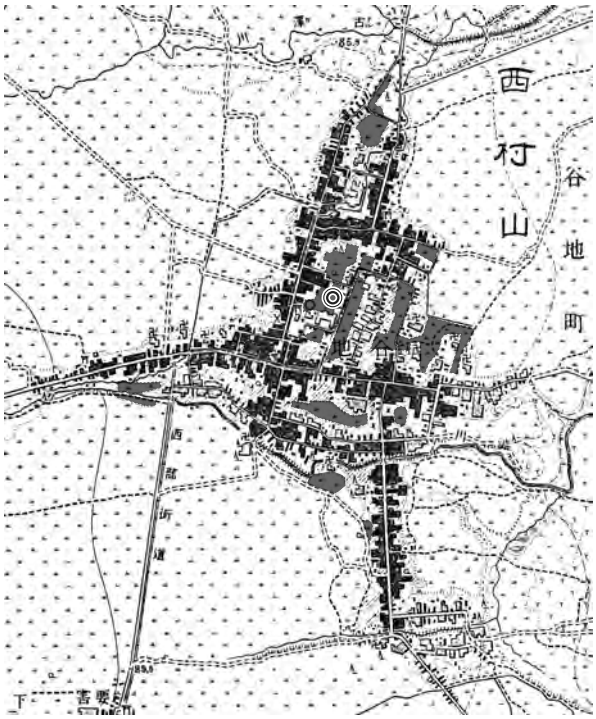


谷地城復元図
（今田　1941）



字限図からの復元縄張図（≒1：25000）
（鈴木 1996 をトレース）

1872 ～ 76 年段階の谷地　（字限図）
（鈴木 2010 をトレース）

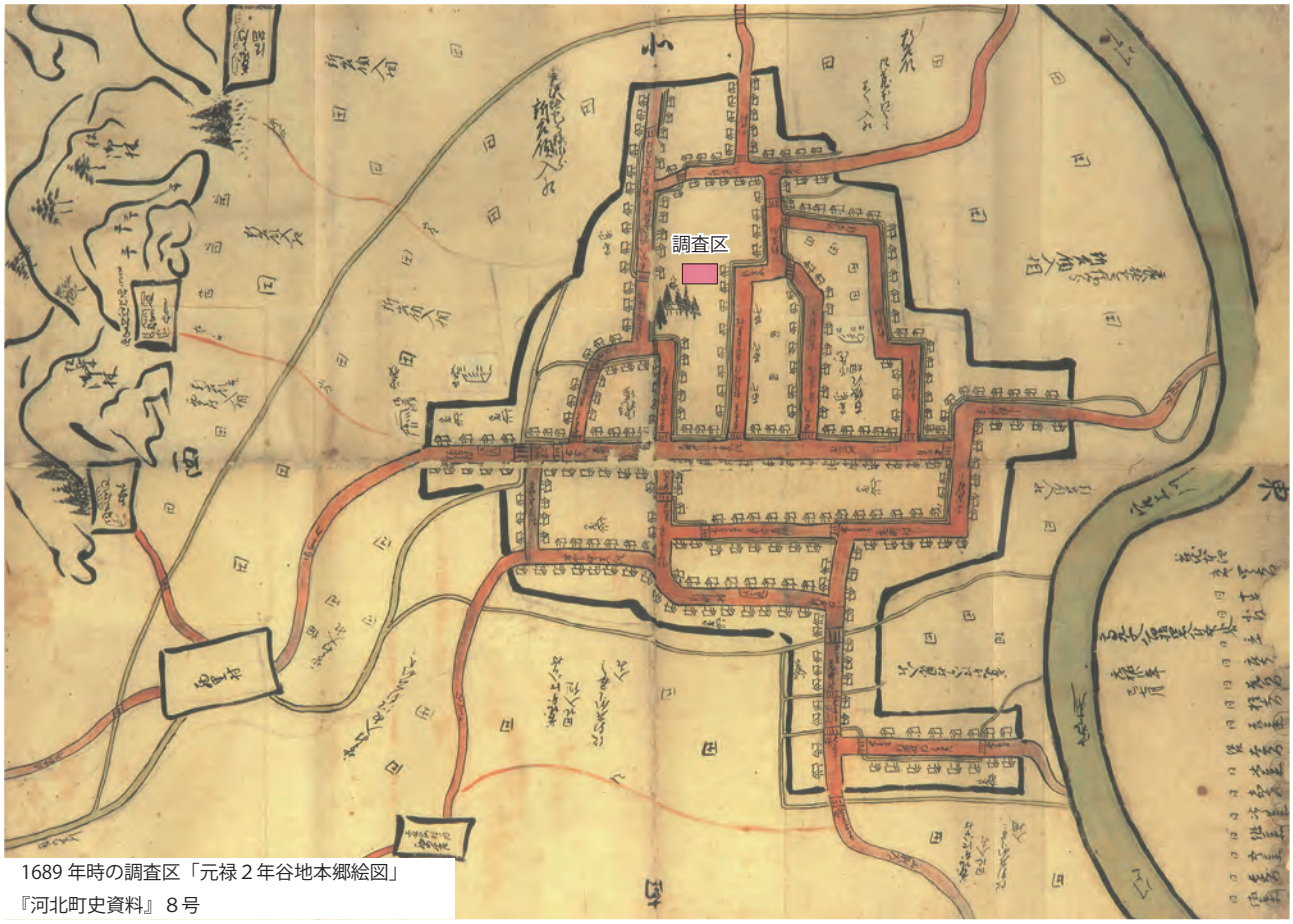


1903 年段階の谷地　（1：25000）
（原図『正式二万分一地形図集成 東日本』）

◎…調査区

第 80 図　谷地城の復元案

写真図版



1689 年時の調査区「元禄２年谷地本郷絵図」
『河北町史資料』８号

1622 年の廃城から、67 年後の谷地郷。本丸跡は、「古城址」と記されており、調査区はその西側にあたる。図面中央に「八幡」と記されている場所が現在の谷地八幡宮であることから、調査区の位置は図のように推定される。

調査区全景（南西から）

調査区全景（南東から）

調査前風景（南東から）

遺構検出状況（南から）

遺構検出状況（南東から）

遺構検出状況（北西から）

遺構検出状況（北東から）

遺構検出状況（北から）

遺構検出作業風景（北東から）

遺構検出作業風景（南東から）

基本土層 SPA-A'（南から）

基本土層 SPB-B'（東から）

基本土層 SPC-C'（南から）

調査区全景（エネルギー棟区）オルソ画像（西から）

調査区全景（本体工事区）オルソ画像（西から）

SD1 溝状遺構断面 a-a′（西から）

SD1 溝状遺構 123 出土状況（北東から）

SD2 溝状遺構 97 出土状況（北東から）

SD2 溝状遺構 205 ～ 208 出土状況（東から）

SD2 溝状遺構 103 出土状況（南から）

SD2 溝状遺構断面 i-i'（西から）

SD2 溝状遺構断面 g-g'（東から）

SD2 溝状遺構断面 a-a' オルソ画像（東から）

SD2 溝状遺構断面 c-c' オルソ画像（東から）

SD2 溝状遺構完掘状況（南東から）

SD2 溝状遺構完掘状況（西から）

SD2 溝状遺構完掘状況（東から）

SD3 溝状遺構 96・132 出土状況（北から）

SD3 溝状遺構 124 出土状況（南から）

SD3 溝状遺構 156 出土状況（西から）

SD3 溝状遺構 98・115 出土状況（北東から）

SD3 溝状遺構調査風景（南西から）

SD3 溝状遺構調査風景（北西から）

SD3 溝状遺構調査風景（南東から）

SD3 溝状遺構断面 b-b' オルソ画像（西から）

SD3 溝状遺構断面 e-e' オルソ画像（東から）

SD3 溝状遺構断面 h-h'（東から）

SD3 溝状遺構断面 c-c'（東から）

SD3 溝状遺構断面 o-o'（東から）

SD3 溝状遺構断面 f-f'（東から）

SD3 溝状遺構完掘状況（西から）

SD3 溝状遺構断面 i-i'（東から）

SD3 溝状遺構断面 a-a'（北から）

SD3 溝状遺構完掘状況（東から）

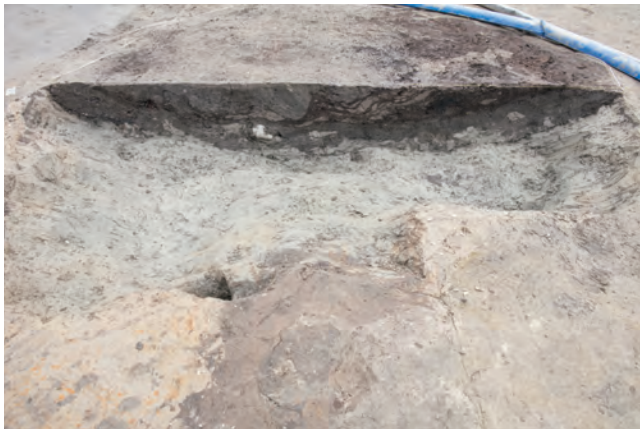
SD24A 溝状遺構完掘状況（東から）

SD24B 溝状遺構完掘状況（西から）

SD24A 溝状遺構完掘状況（東から）

SD4 溝状遺構断面 c-c'（東から）

SD24B 溝状遺構調査風景（南東から）



SK6 土坑断面 b-b'（東から）

SD4・5 溝状遺構調査風景（東から）

SD29・30・35 溝状遺構完掘状況（南東から）

SD31C 溝状遺構完掘状況（北西から）

SD35 溝状遺構完掘状況（東から）

SK32 土坑・SD33 溝状遺構完掘状況（南西から）

SD30 溝状遺構 121 出土状況（南東から）

SD30 溝状遺構 121 出土状況（南東から）

SD30 溝状遺構 121 取り上げ状況（北東から）

SK32 土坑・SD33 溝状遺構断面 a-a' オルソ画像（東から）

SD30 溝状遺構断面 b-b' オルソ画像（東から）

SD31B・C 溝状遺構断面 b-b' オルソ画像（東から）

SD46 溝状遺構作業風景（南東から）

SD46 溝状遺構断面 b-b'（東から）

SD46 溝状遺構完掘状況（南西から）

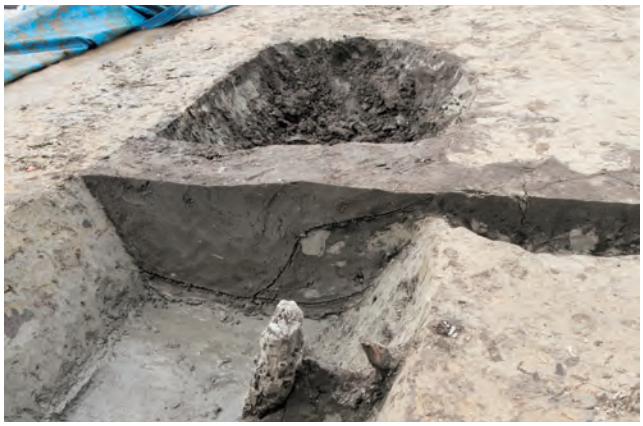
SD46 溝状遺構完掘状況（北から）

SD46・55 溝状遺構合流地点（北東から）

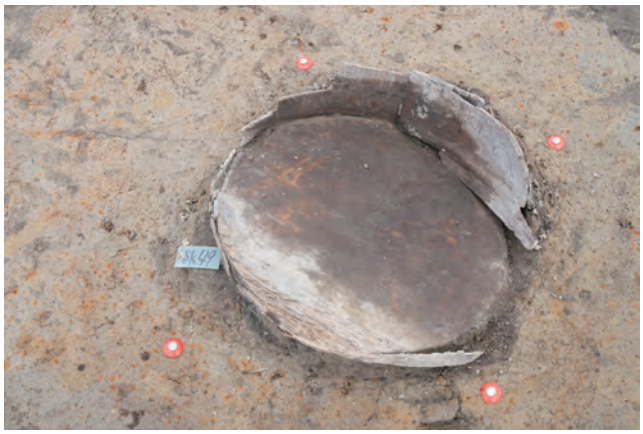
SD55 溝状遺構完掘状況（南東から）

SK14 土坑断面（東から）

SK17 土坑完掘（南東から）



SD43 溝状遺構断面 a-a'（東から）



SK49 埋桶出土状況（南から）

SK17 土坑断面 a-a' オルソ画像（東から）

SD43 土坑断面 a-a' オルソ画像（南から）

SD52 溝状遺構完掘（東から）

SK59 土坑完掘（南から）

SP1009 ～ 1015 ピット検出（東から）

SP1026 ピット完掘（東から）

SP1032 ピット完掘（南から）

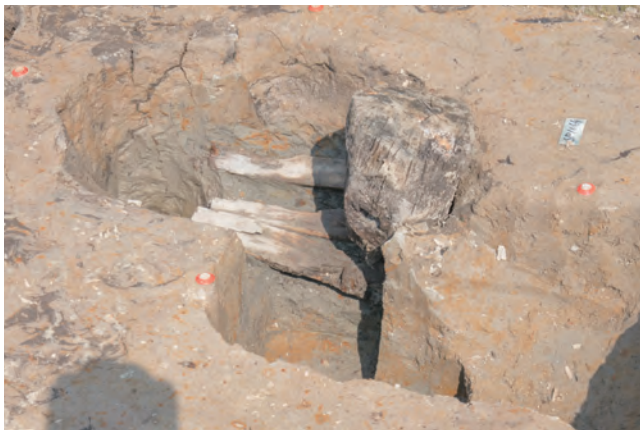
SP1045 ピット完掘（南から）

SP1056 ピット完堀（南から）

SP1058 ピット断割り（南から）

SP1060 ピット完堀（南から）

SP1064 ピット完堀（北から）



SP1064 ピット完堀（西から）

SP1069 ピット完堀（南から）

SP1073 ピット完堀（南から）

SP1084 ピット完堀（東から）

SP1085 ピット完堀（南から）

SP1088 ピット完堀（北から）

SP1111 ピット完堀（東から）

SP1133 ピット完掘（南から）

SP1135 ピット完掘（南から）

SP1138 ピット完掘（東から）

SP1139 ピット完掘（南から）

SP1143 ピット完掘（東から）

SP1145 ピット断面（東から）

SP1150 ピット完掘（南から）

SP1153 ピット完堀（南から）

SP1156 ピット完掘（東から）

SP1157 ピット完掘（東から）

SP1161 ピット完掘（東から）

SP1163 ピット完掘（南から）

SP1169 ピット完掘（東から）

SP1171 ピット完掘（南から）

SP1172 ピット完掘（南から）

SP1173 ピット完掘（東から）

SP1125 ピット完掘（北から）

SP1130 ピット完掘（東から）

SP1174 ピット完掘（南から）

SP1175 ピット完掘（南から）

SP1176 ピット完掘（南から）

SP1178 ピット完掘（東から）

SP1179 ピット完掘（南から）

SP1182 ピット完掘（南から）

SP1186 ピット完掘（南から）

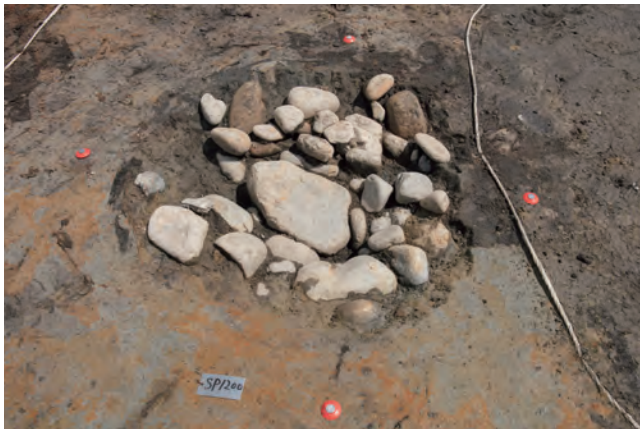
SP1192 ピット完掘（南から）

SP1194 ピット完掘（南から）

SP1195 ピット完掘（南から）

SP1196 ピット完掘（東から）

SP1199 ピット完掘（南から）



SP1200 ピット完掘（南から）

SP1201 ピット完掘（南から）

SP1202 ピット完堀（南から）

SP1204 ピット完掘（東から）

SP1206 ピット完掘（東から）

SP1207 ピット完掘（東から）

SP1208 ピット完掘（南から）

SP1212 ピット完掘（南から）

SP1213 ピット断面（東から）

SP1216 ピット断面（南から）

SP1216 ピット断割り（南から）

SP1217 ピット完掘（南から）

SP1218 ピット断割り（南から）

SP1219・1220 ピット完掘（南から）

SP1222 ピット完掘（東から）

SP1223 ピット断面（東から）

SP1225 ピット完掘（東から）

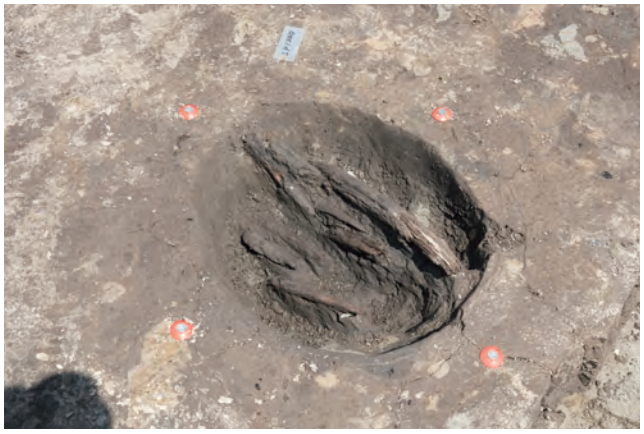
SP1227 ピット断割り（東から）

SP1229 ピット完掘（東から）

SP1229 ピット断割り（南から）

SP1233 ピット完掘（東から）

SP1233 ピット断割り（南から）



SP1240 ピット完掘（南から）

SP1251 ピット完掘（東から）

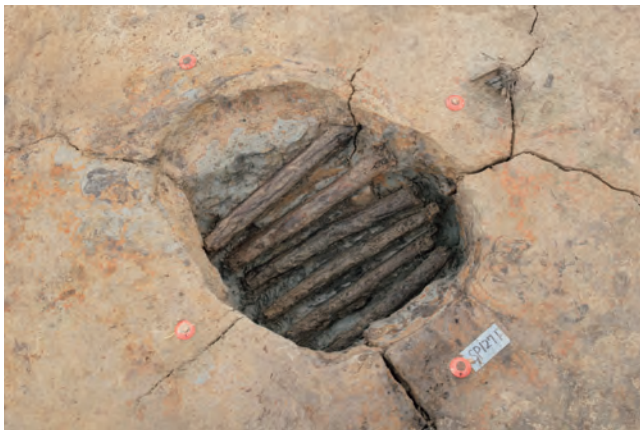
SP1250 ピット完掘（南から）

SP1251 ピット断割り（南から）

SP1252 ピット完掘（東から）

SP1253 ピット完掘（南から）

SP1257 ピット完掘（南から）

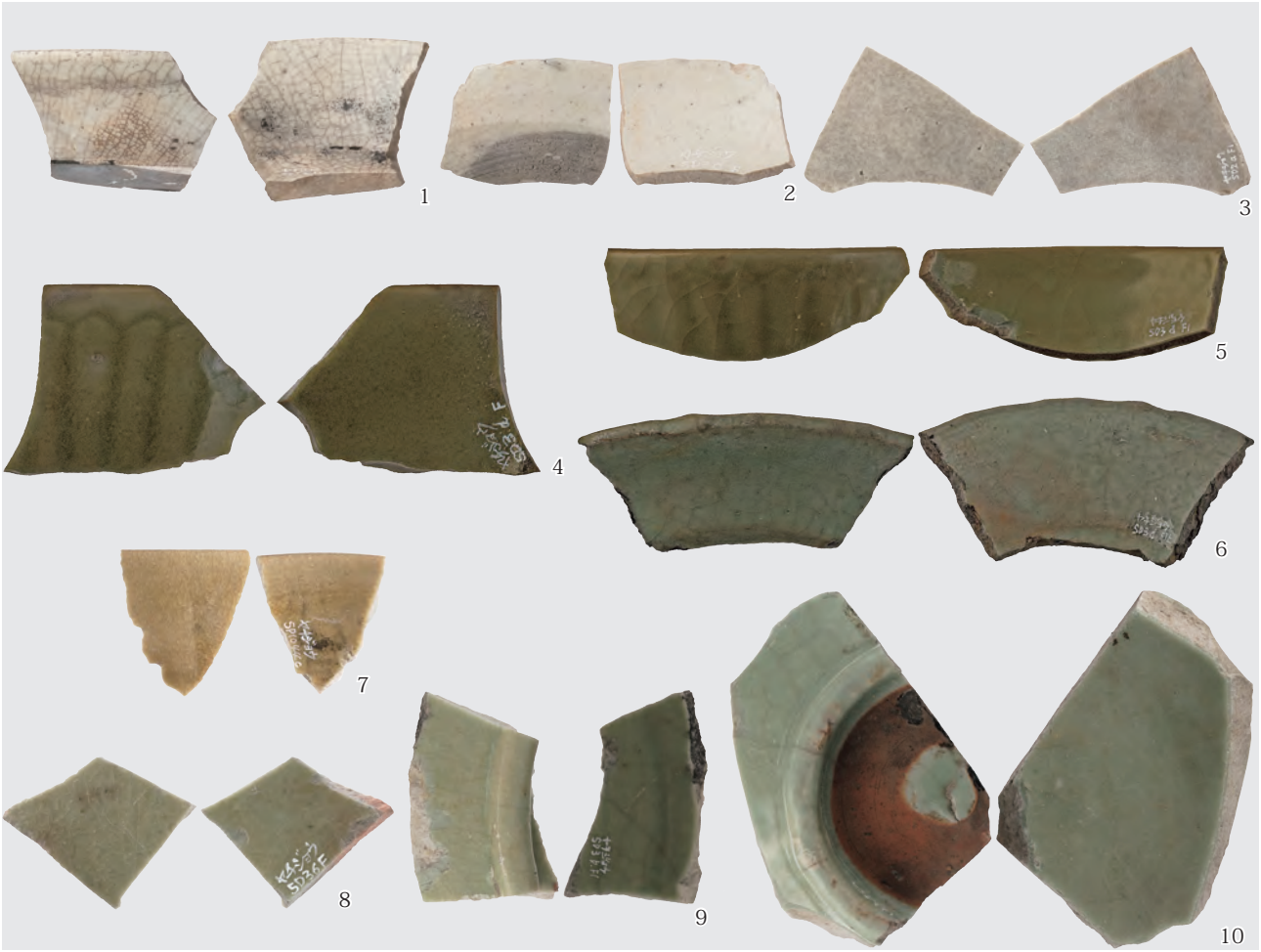

SP1271 ピット完掘（南から）

SP1272 ピット完掘（南から）

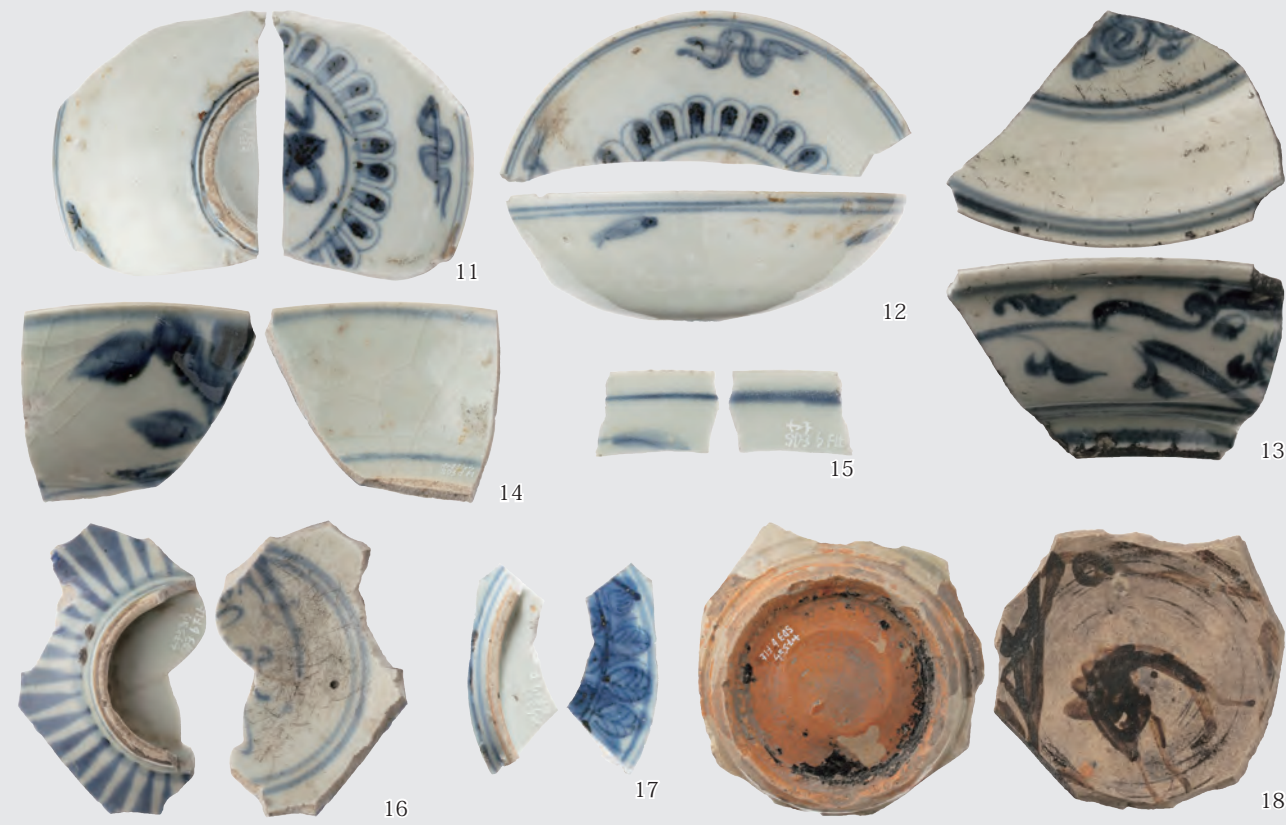
ピット集中区１調査風景（北西から）

ピット集中区６調査風景（東から）

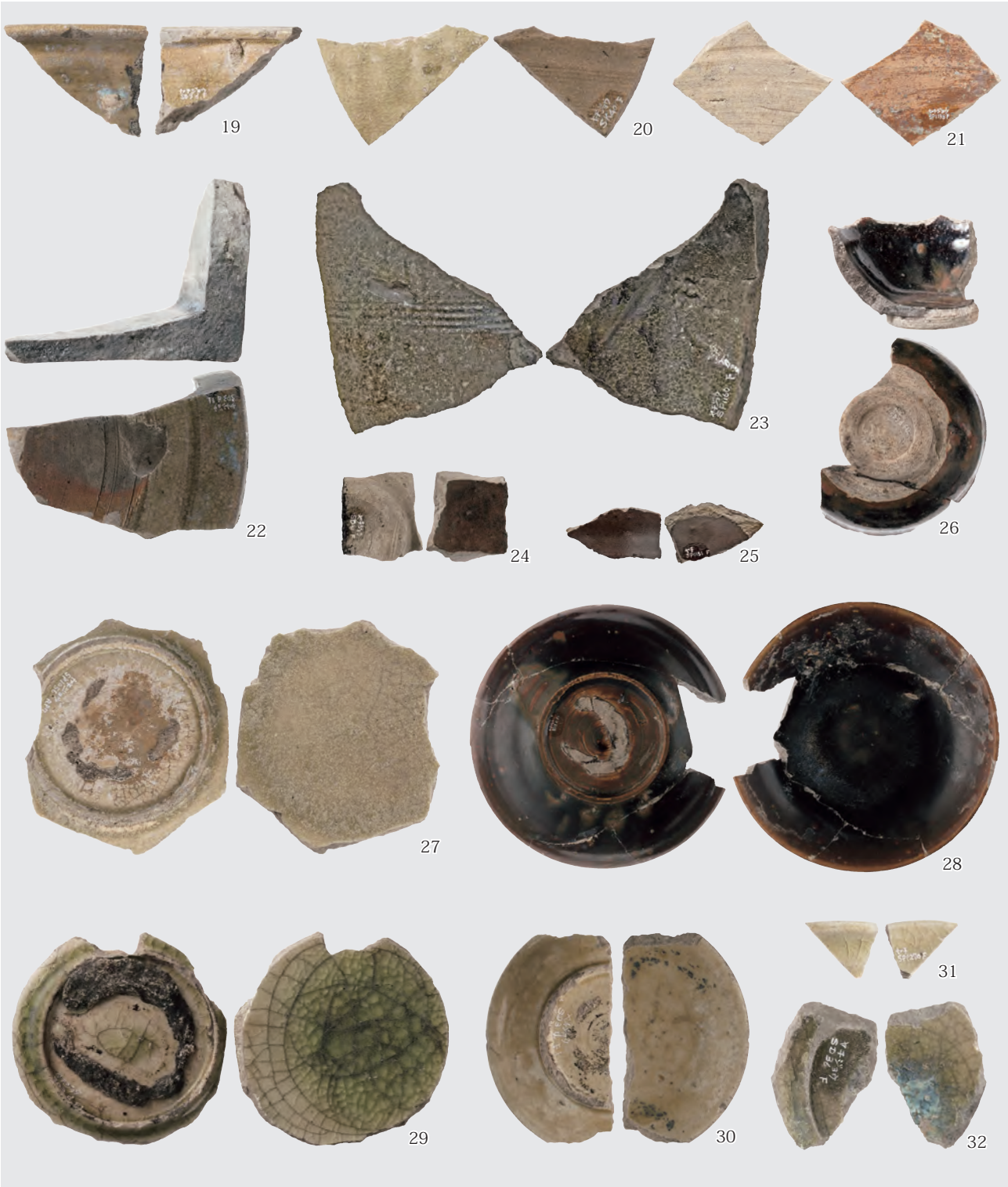
現地説明会風景



輸入磁器：白磁・青磁



輸入磁器：青花



26: 立面

28: 立面

30: 立面

古瀬戸・瀬戸美濃

34: 立面

36: 立面

49: 立面

35: 立面

37: 立面

肥前陶磁器・瀬戸磁器

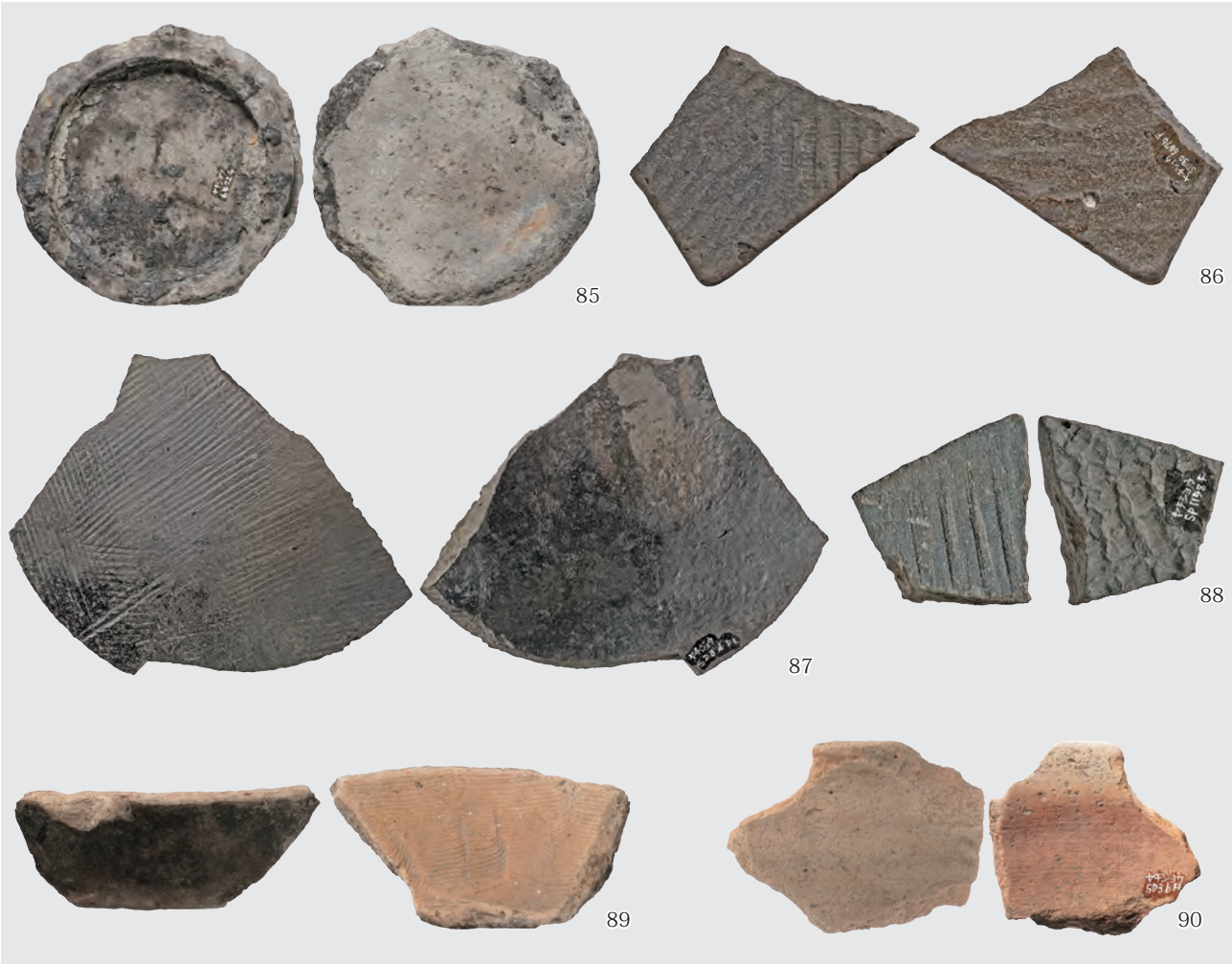
61: 立面

62: 立面

珠洲・越前・瓷器系陶器

瓦質土器・産地不明の陶磁器

縄文土器・土師器



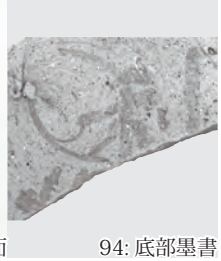
須恵器・土師器

91: 立面

92: 立面

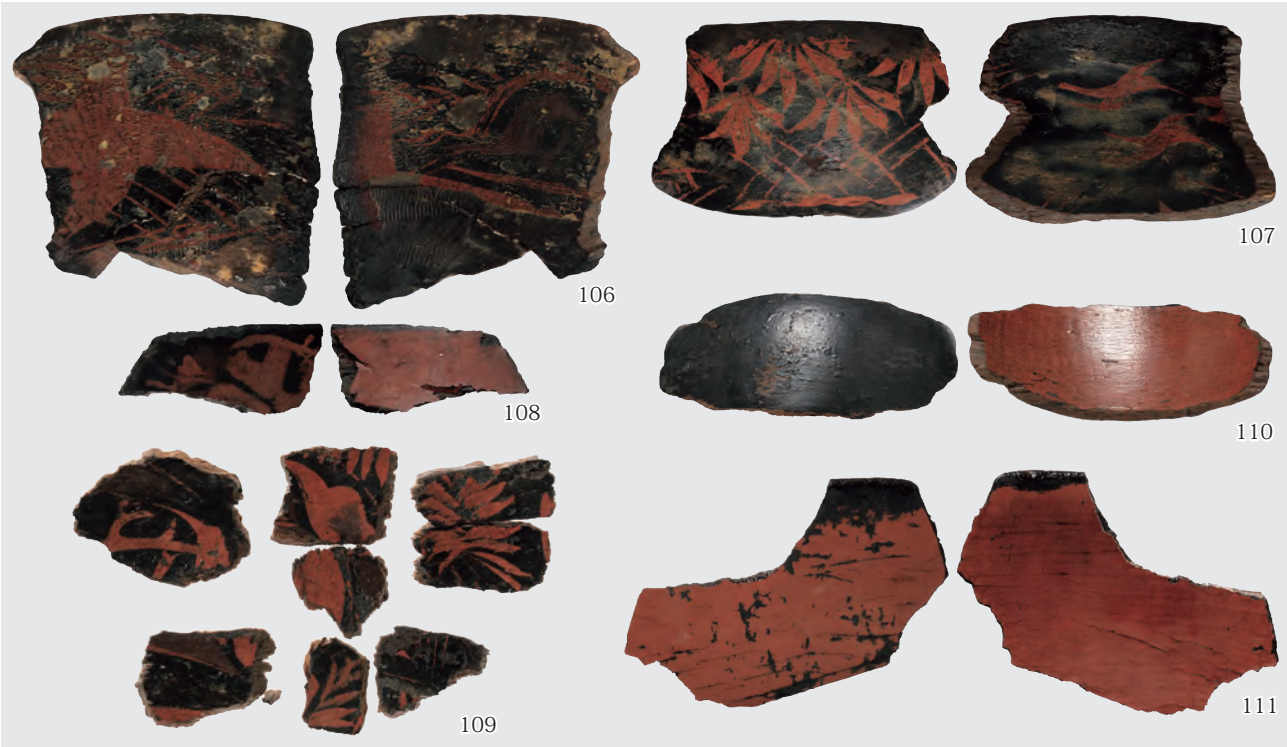
93: 立面

94: 立面


94: 底部墨書

87: 立面

漆器椀・皿（絵付け）



漆器破片（絵付け）

95: 立面

96: 立面

97: 立面

98: 立面

99: 立面

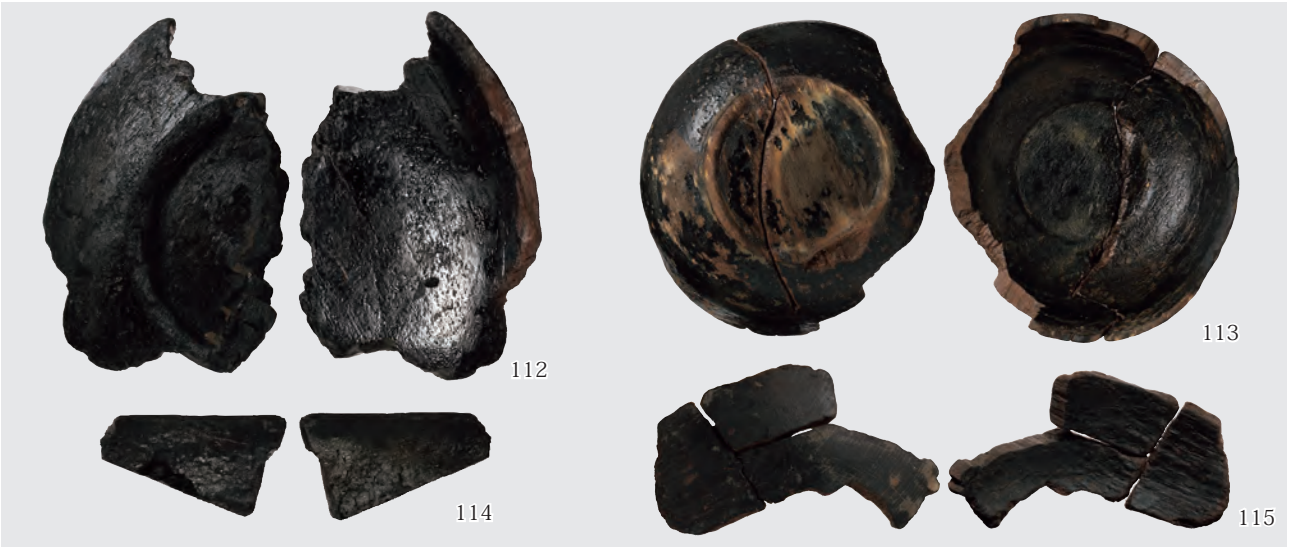
100: 立面

101: 立面

102: 立面

103: 立面

104: 立面



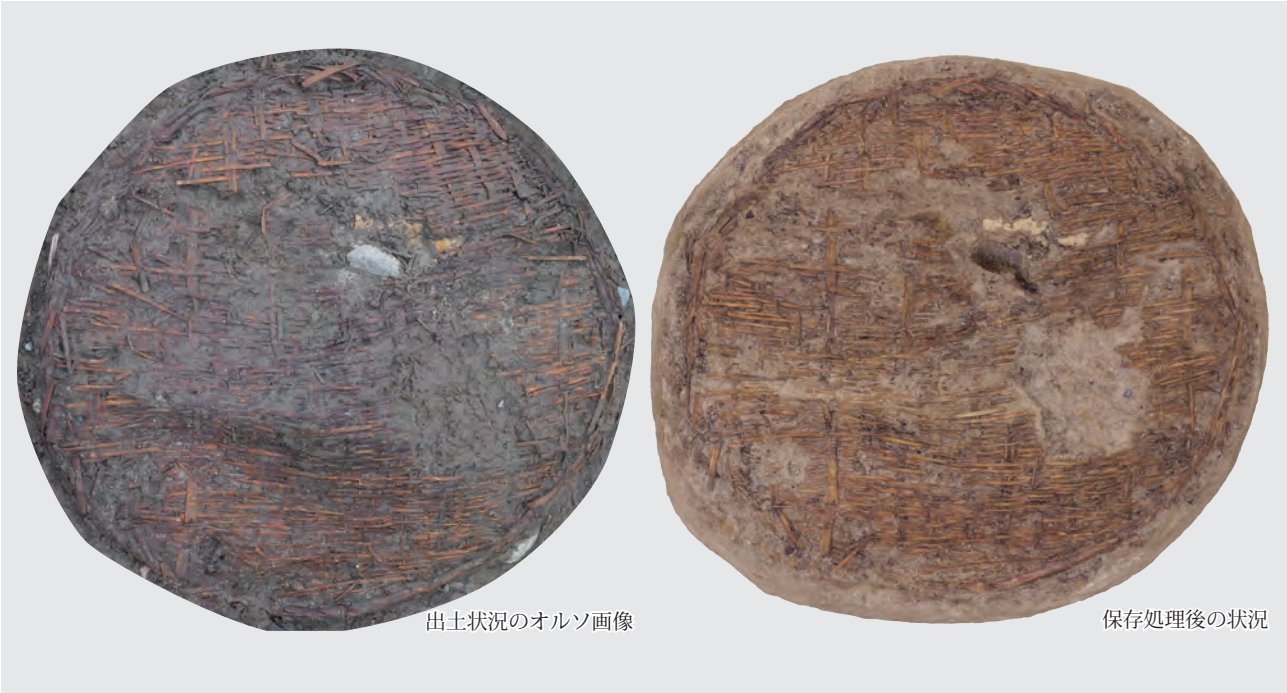
漆器椀（黒漆）

112: 立面

113: 立面

木椀・曲物類

116: 立面



121：盆笊

122：SK49 出土遺物

木製品：下駄・横櫛

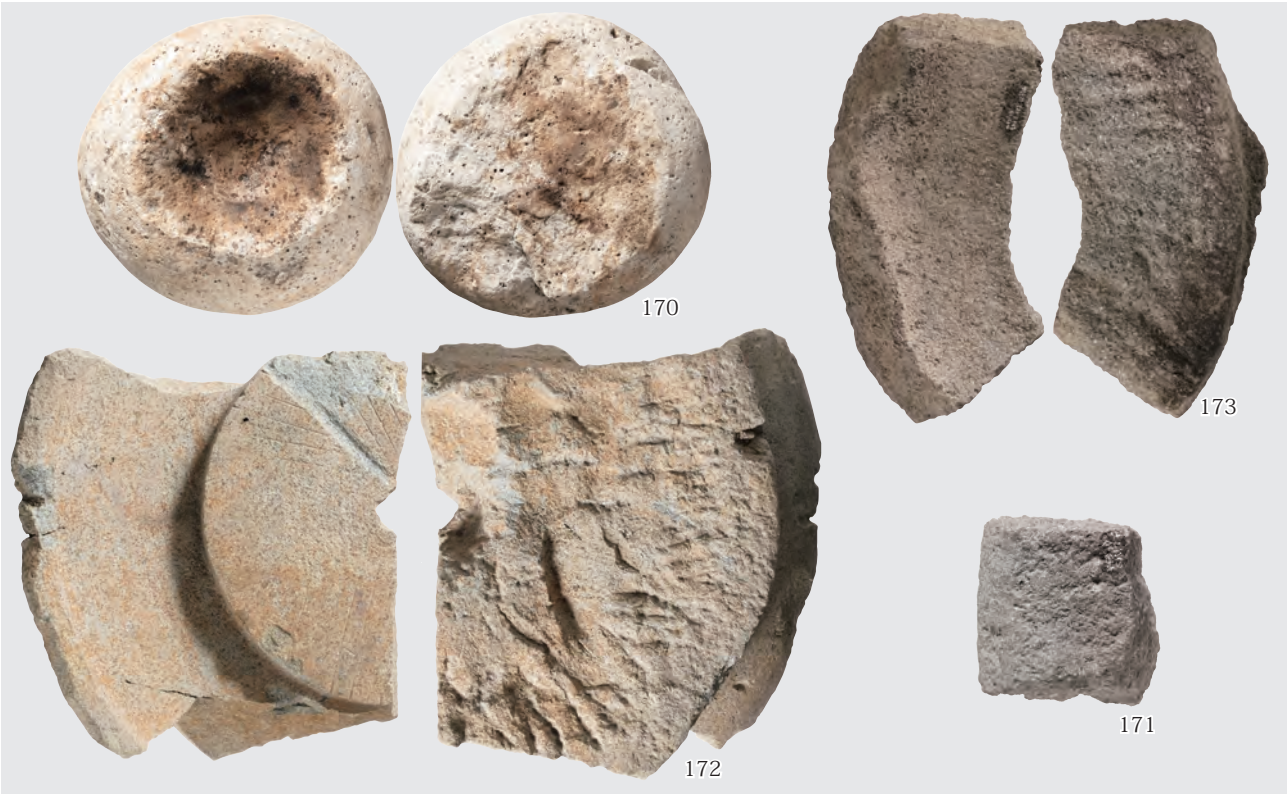
木製品 : 木簡・木蓋・串・用途不明品等

木製品 : 柱材・杭・枠木

木製品 : 建築部材

木製品 : 礎盤に使用された枝材

石製品：石塔・硯・砥石・磨石・凹石



石製品 : 凹石・茶臼・石鉢

金属製品 : 古銭

金属製品：古銭・鉄滓

自然遺物

報告書抄録

ふ り が な	やちじょうあとはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	谷地城跡跡発掘調査報告書
副　書　名	
巻　　次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 241 集
編 著 者 名	天本昌希　渡辺和行
編 集 機 関	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒 999-3246　山形県上山市中山字壁屋敷 5608 番地　ＴＥＬ　023-672-5301
発行年月日	2020 年 3 月 27 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
やちじょうあと 谷地城跡	やまがたけん 山形県 にしむらやまぐん 西村山郡 かほくちょうやち 河北町谷地 あざやち 字谷地	321	051	38°　25′　35″	140°　18′　52″	20190507 ～ 20190816	2,200	河北町役場 新庁舎建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
やちじょうあと 谷地城跡	城館跡	中世	掘立柱建物　5 溝状遺構 土坑 ピット	輸入陶磁器 古瀬戸 瀬戸美濃 肥前陶器 珠洲焼 瓦質土器 漆器 古銭	（文化財認定箱数：10）
		近世		肥前陶磁器 瓦質土器	

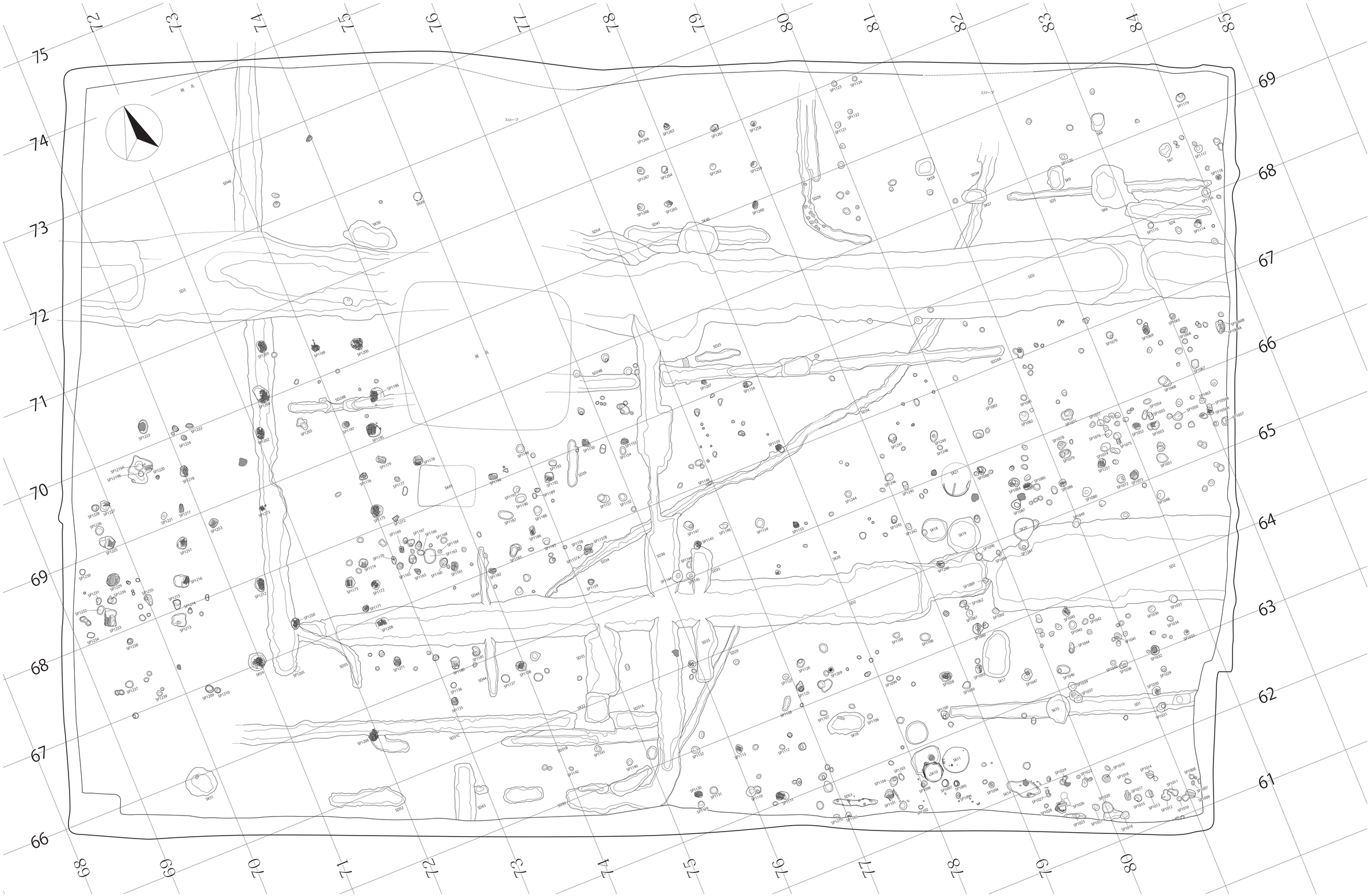
要　　約	調査区は谷地城の二の丸に位置する。これまでの研究で想定されていた二の丸堀は検出されず、溝状遺構による区画と多数のピットがみられた。区画には時期差があり、SD3 溝状遺構によるものは、従来考えられてきた 16 世紀中頃～ 17 世紀前半という谷地城の時期と整合的である。SD2 溝状遺構によるものは、それよりも古いものであり、これまでの想定よりも古くからこの地に開発が及んでいたことを示唆する。ピットの底面には礎盤として樹皮付きの枝や部材を複数並べているものが多くみられた。

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 241 集

谷地城跡遺跡発掘調査報告書

2020 年 3 月 27 日発行

発行　公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒 999 - 3246　山形県上山市中山字壁屋敷 5608 番地
電話　023-672-5301
印刷　田宮印刷株式会社
〒 990-2251　山形県山形市立谷川三丁目 1410 番地の 1
電話　023 - 686 - 6111



付図　谷地城跡遺構配置図　1：80

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第241集
谷地城跡発掘調査報告書
2020年3月27日
公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

このPDFデータは下記の報告書を底本として作成しました。
閲覧を目的としていますので、詳細な写真や図面が必要な場合は、底本を参照して下さい。
底本は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター、山形県内の市町村教育委員会、図書館、各都道府県の埋蔵文化財センター、考古学を教える大学、国立国会図書館等に所蔵されています。
所蔵状況や利用方法は、直接各施設にお問い合わせ下さい。

書名：谷地城跡発掘調査報告書
発行：公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
〒999-3246
山形県上山市中山字壁屋敷5608番地
電話:023-672-5301
URL:http://www.yamagatamaibun.or.jp/
mail:yac@yamagatamaibun.or.jp
電子版作成日：2020年3月31日